
罪断のセクレイジュ

粕亜 岬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪断のセクレイジュ

【Nコード】

N0731H

【作者名】

粕亜 岬

【あらすじ】

九の日を経て魂は昇華する。クリスマスを目前に控えたある日、彼らの前に現れたのは一つの【時計】だった。それは、たった一人の生き残りを決める死神の試練、【デイヴィナ・マズルカ】の開催を告げる合図だった。物言う剣【ブリスゲーデ】という力に翻弄され、十二人の契約者はそれぞれの罪と向き合って行く。その先に見る、彼らの答えとは？魂を刻むSFファンタジー、開催！それは、咎人達の舞う喜劇。4/10：粕亜「そしてこの更新頻度である」

プロローグ(1)

日常とは単調なものだ。言ってしまうえば、酷く大規模なルーチンワーク。だからこそ、きつと今俺がいるこれは日常なのだろう。

動いているのか、止まっているのか、進んでいるのか……よく分からない時間の流れ。上に進んでも進んでも、どこか見たことある景色。そんな螺旋階段が俺を纏う気だるい日常だった。

生きている意味はあるのか。今歩いているこの道を進む価値はあるのか。

例えば、この道を寿命の果てまで歩いてきたとする。その道は、果たして俺のそれなのだろうか。俺だけのものだろうか。誰か歩んでいた道ではないのか。

十割が同じだとは言わない。けれど、少なからず五割は“被っている”だろう。言わば既視感というおぞましい感覚が背筋を這い廻る。

人生は、その人を主人公とした物語だとよく例えられている。けれどそれは、必ず何かのオマージュがあるだろう。道を歩む登場人物の名前が違っただけ。道がある土地の名前が違っただけ。傍目に、一見、外観が違っただけで概観として、本質としてそれは同義。

意味はあるのか。意義はあるのか。価値はあるのか。道はあるのか。

そんなことを俺はいつも頭の片隅に置いてある。いや、置かれていた。視界にこびり付いた粘膜のようにいつも思考の端に存在していた。勿論そんなことを考えるやつはあまりいないだろう。だから俺は少し他人とは恐らく変わっている。分かっている、それを拭う事も、解消する事も出来なかった。

恐らく、これからもきつと叶わない。

だから、早くこの日常を破壊して欲しかった。フィルムで見せられた未来に、レールを敷かれた形式ばった細い通路　そんなもの

を、出来れば木っ端微塵に。元が分からなければ判らないほど良い。そう……だから、俺は常に俺を楽しませてくれる存在を待っていた。

「ねえ、麗夜君。この懐中時計、何なの？」

うん？ と返事し目を向ける。内心反吐が出そうだがそれは顔には決して出さない。

ネイルアートが施された真つ赤な爪で、ポケットから覗いている銀のものを指差されていた。それは先から鎖が伸びていて、ズボンのベルト穴にその鎖の端が引つ掛かっている。

指で差された物を取り出す為、無造作に鎖を引くと特に抵抗なく銀色のそれは顔を出した。銀色の光沢を放った薄い球状のものは、紛れもない懐中時計だ。

「これか？ これな……俺も良く分からん」

「何それ！ 超ウケる！」

何て真つ赤な爪で口を隠して、目の前の女子は大声で笑っている。それを横目に流し、視線を懐中時計に落とす。何も装飾のない、武骨なモノ。装飾と言えるのは、放つ光沢だけだろう。

鎖と繋がっている上部、それと反対側の下部にあるスイッチを奥にずらせば、我慢しきれなかったように音を立てて懐中時計の蓋は空いた。

「ほら……時間がやたらずれてるんだよ。ていうか、動かねえし、文字盤も描かれてないんだけどさ。日付はずっと十日だしよ……」

そう、この懐中時計は全く動かない。二つの長短の針は本来なら

ば12の数字がある場所を、数字の書かれていない少し長いメモリを差しているだけ。

また、中心より僅か横にある白い土台が斬り抜かれたそこには、10という数字。勿論、今日は15日であるのだから間違えていることは当然であり、直そうと努力は朝に試みた。しかし何処にも時間変更のスイッチは見当たらなかった。

「ふう〜ん……不良品なんじゃない？ 何も書いてないし。時計じゃないって、それ」

「ああ、まあそうなのかも知れないんだけど……」

「けど？」

「……いや、何でもないよ」

時計じゃない、その言葉が少し引つかかったが被りを振り、目の前の女子に笑顔を見せる。相手の目を視界の真ん中に置いて。

すると相手は一瞬目を逸らし、瞬きしてから俺の方に顔を戻した。

「そ、そうなの？ なら良いけどさ……あ、そろそろ時間じゃん！
じゃ、私教室に戻るね！」

じゃあね、と手を振りつつ教室の扉に向かう、名前すらろくに覚えていない女子の背中を椅子に座りながら見送る。

「言える訳ないだろ。朝、家に出て気づいたら“既に在った”なんて」

一人、呟きを洩らしていた。

そうしてやがて教師が授業をしに訪れた。気になる時計は一旦思考の隅に追いやり、机上に勉強道具を広げていく。

今日は少し気になることがあるというだけで、相も変わらず退屈なまま授業は進んでいった。既に分かり切っている数式をずらずら黒板に書き続けるという退屈な時間は終わった。

一時間という長い苦痛な時間の間、俺は何度も欠伸をしそうになったがそれを噛み殺した。何度もいつその事ふけてやるうかと思っただが、その衝動を抑えつけた。だから、俺の仮面は健在である。一度伸びをして、首を鳴らしてからどうするかということを考える。

「ねえ、麗夜君は今日購買なの？」

首を鳴らしていると、隣の女子が顔を覗きこんで来るように話しかけてきた。

内心、面倒臭いと思いつつも、

「ああ。今日は弁当作り忘れちゃってさ」

微笑みを携えて言葉を返した。俺の笑みに釣られたのか、目の前の女子も笑った。少し八重歯の目立つ女の子だった。

「珍しいね。麗夜君もそういうことあるんだ」

「そりゃあるさ。俺を何だと思ってるんだよ？」

「え？ んん……完璧な人？」

と笑いながら言う。

その言葉に俺はほくそ笑む　　が、それを顔に出すことなど当然しない。そんなものは誰にも見えない場所で一人すれば良い。せっかく“積み上げて”来たものをわざわざ崩すなんて愚者のすることだ。

「何だよそれは。有り得ねえって！」

「いやいや、麗夜君はミスなんかしなさそうだし」

「ないから！　ないって！　……っと、まあ、じゃあ買ってくるかな。ゴメンね」

と、顔の前で手を立てながら席を立つ。

高く上がる俺の顔を、僅かに上気した顔で目の前の女子は追ってきていた。その顔を見て、もう一度許しを請う意味の笑みを作る。

「あ……う、うん。そうだね、売り切れちゃうもんね。行ってらっしゃい」

という声に俺は後ろのポケットに財布が入っていることを確認しつつ、行ってきますと笑顔で返す。ひらひらと揺れる手の平に見送られ、俺は教室を出た。

「あー……………」

目の前に出来ている人だかりにうんざりする。紺色のブレザーに

身を包んだ生徒が蠢くその様子は、まさに嵐上の海だろう。そこに毬藻のような黒い物体である頭が漂っている感じ。

わざわざこんな中に突っ込むというのは本当に頂けない。あの荒波に飛び込んで為すがままにされれば俺の体は揉みくちやにされ、制服が皺になり、左右非対称アシメに決まっている髪型も乱れに乱れてしまっただろう。かと言って波を強引に描き分けて闘牛の如く突き進むのも性に合わないし、柄じゃないし、キャラじゃない。

どうするか、何てその人混みから一線置いて、頭をボリボリと掻いていると、前から茶髪の小さい少年がやって来た。

人混みに目を絞りながら向けている少年は徐々に回り込みながらこっちへと近づいてくる。逃げるか、逃げないか　という選択肢を思考の中で繰り広げていると、視界の端に俺を捉えたのか、急に目をこちらに向けて手をぶんぶん振って来た。時既に遅し。

小さく溜息を吐く。

「麗夜先輩!!」

「おう。遼太……」

手を振りながら近づいてくる“それ”を見て、もう一度誰にも見つかからない様に溜息を漏らした。体面上、片手をあげて応えることにする。

「先輩もですか？　珍しいですね」

「まあな……」

それはもうさっき話したんだよ、と心の中だけで突っ込みを入れる。

そんなことを知ってか知らずか、遼太は俺の横顔と人混みを、俺

より頭一つ小さい位置にある頭を振って見比べている。

「行かないんですか？ 売り切れますよ？」

「いや、めんどくせえんだよ……分かるだろ」

俺の顔見りゃ、と三度目の溜息を吐く。いかん、隠しきれなかった。

が、その俺の様子を見ると、遼太は急にきらきらした目をこちらに向けてきた。全く気にしていないようで何よりだ。

「なら、僕が買ってきますよー！」

「え、マジ？」

「マジですー！」

「あ、じゃ、頼むわ」

「はいっー！」

何て兵隊のように元気の良い声を出して人混みの中に猛進していく。まるでシヨベルカーのように人混みを切り裂いて行く力はあの小さい身体の何処にあるというのやら。これはきつとこの学園の七不思議に近いものがあると思う。

しかし、と心の中で前置きをして、遼太の人混みへと駆けていく様を思い出す。そのお尻に尻尾があるのなら、物凄い勢いで振っていただろう。

「まさに、犬だな」

誰にも聞こえない様に俺は呟いた。

「で、何故俺がお前と食わなきゃならないんだ？」

ベンチの横に三つほど菓子パンを並べながら俺は言う。

「良いじゃないですかぁ。一緒に食べましょうよ。僕、麗夜先輩と食べたいんですよ！」

灰の細い縦ストライプ模様のズボンの上に、コンビニで売っているような購買弁当を置きながら遼太は言う。

にこにこにこにこ。こっちの気など一切知らず、そんな目を向け続けている。

「俺は別に……。まあ、良いか」

どうせなら女の子と食べたかったが仕方がない。遼太は脚元へと擦り寄せられたら蹴つても離れることはないだろう。そのぐらいしつこい。だから諦める。

まあ、たまには良いさ。身を震わすような寒さの中、枯れている桜の木を眺めながら、男と飯を食うというのも。

「……良い筈ねえだろ」

「え？ 何ですか？」

「いや、もう良い……色々な意味で既に諦めた」

ほうですか、なんて口いっぱい米を放りこみながら言う遼太の言葉はどうかニユアンスで理解出来た。理解出来たものの、正直止めて欲しいという気持ちは強い。

と、遼太の腰に見慣れないものがあることに気づく。キーホルダー……だろうか。売れ筋のよく電車で見掛けるような、携帯ゲーム機の形をしたもの。

まさかとは思うが………高校にもなってそんなものを身に付けているのだろうか。この犬っころは。

「遼太……これ、お前の趣味なのか？」

「え、あ、これですか？ あー、えーとですねー……」

もぐもぐしながら視線をあちこちに向けた拳句出てきた答えは、

「内緒です！」

何ていうお粗末なもの。満面の笑みでそう返されては追及、肅正なんていう気はもはや一瞬で沈静化するというもの。

そうかよ、とぼやいて俺は菓子パンを齧るのを再開した。

片肩に引っかかっている学校指定のサブバッグが落ちない様に配慮しつつ、黒い革の靴を履いていく。

こんな時は座って履くのが一番楽なのだが、そんなことは決していない。……理由など単純だ。ださい。

立ち上がり、玄関の扉へと向かって行く。玄関を抜け数歩歩けば、携帯を使っても良いという領域になるのだが、俺はしない。基本的

に校内での携帯電話の使用は控えるべきなのだ。だから、俺は校舎を出るまで開くことはない。

片目に掛かった髪が吹く風に靡く中、歩いていると隣に人影が並んで来た。視線だけを横に動かしてその人物を見れば、女子であることさえ確認すればそれが誰かなんていうことは一瞬で分かった。

サブバッグを両手で前に抱え、忍び寄る様な自然さで俺の隣に並ぶ女生徒など、俺の知る限り一人しかいない。

「……………」

「……………」

敢えて何も言わずに黙って歩いているが、何も相手は話しかけてくる気配がない。これは何かの罰ゲームなのだろうか。微妙に後ろに視線をやらないと見えない位置で歩き、かと言って気配はバレバシな訳で。

本来なら向こうから俺に声を掛けて来るのが筋な筈だが……俺の一般論が間違っているのだろうか。いやまあ、こちらから話しかけるのも当然ありだが、普通にしていては女生徒の姿は見えないのだから……わざわざ後ろに振り向いて話しかけなくてはいけない。……それは何か、負けた気がしないか？

「……………」

「……………」

分かった。負けだ。

「何だ？ 汐織しほし」

限界だった。

「え？」

「いや、お前……」

だって言うのに当の本人は疑問の顔を浮かべるだけであった。僅かに傾げた首に従って、短いツインテールが揺れている。

「……何でついて来てんの？」

「え、一緒に帰るからだよ？」

「だったら……そう言ってくれないか？」

「あ、ああ、そうだね。麗ちゃん、一緒に帰ろう？」

「……………」

「あれ？ ……どうしたの？ 麗ちゃん」

頭が痛くなってきた。

「……………まあ良いけどな、慣れてるから。でも今日は俺は」

と声を捲くし立て上げた瞬間に俺のポケットから震動が伝わる。小刻みな振動のパターンから判断するに、着信である。

だから会話を中断し、急いで校門の外へと駆け出す。そのまま学校から見えない角度まで走り、ポケットから取り出せば、画面に映るのは昨日知り合ったばかりの女の名前。

「あ、もしもし？ 亜美ちゃん？ うん、ごめん え？ マジ！
？ 何でもう来てるの？ 俺まだ学校から出たばっか サボ
っちゃダメでしょ！」

と、電話越しのテンションに合わせて笑いながら喋る。既に後ろでは笑い声と共に歌い声が聞こえている。甲高い声が上がっている所を聴くと、既に酒を飲んでいるのかも知れない。そういう連中だから、仕方のない事なのかも知れないが。

「え、うん、今向かってるよ。急いでる急いでる。めっちゃ急いでる！」

声に急かされるように足のペースを上げる。無論向かう先は俺のマンションだ。まさか制服で女の子に会う訳にはいくまい。ましてや酒を飲んでいるグループなのだから。

我が家自体は俺が通っている明柴学園めいさいから徒歩で五分強という、遅刻はまずしないであろうという立地条件の場所にあった。また、俺の通っている学園は比較的この街の中心に位置している。その為、周りにはオフィスビルやら高級マンションやらの高層ビルが整然と並んでいる。……ということは従って、俺のマンションはそのビル群の中に含まれるのだ。俺の部屋に招いた子は、大抵その絶景に感激していた。

赤い絨毯を踏みしめ、ドアノブの穴に鍵を差し込み、解錠する。家に入らなくてはならないのだから、鍵を開けるのは当然だ。だが、隣にいる存在が気になる。俺がロビーのセキュリティを開ける時に便乗してそのまま入り込んで来た人間。

「どうしてお前は俺の部屋の前までやってくる」

それは汐織だ。

問いかけられている本人はその答えには何も返さないくせに、

「麗ちゃん。ちゃんと掃除してる？ ご飯食べてる？ ダメだよ？
めんどくさいからってカップラーメンばっかの生活じゃ」

ついさつき鍵を開けた、僅かに開いた扉から汐織は中を覗きながらそんなことを言ってきた。

見えにくいのか、つま先立ちをしたりと頻りに上下に頭を動かしている。

「食ってねえよ……あんな安っぽいもの……」

汐織を押し退け、自分だけ扉の中へと滑りこむ。

たたらを踏みながらも、扉の奥へと姿を隠す俺に尚食ってかかってきた。

「嘘だ。麗ちゃん、前に来たとき筆筒の中に一杯入れてたでしょ？」

「ど、どうしてそれを……って、ああもう、良いよ。帰れ。十分一緒に帰っただろ。じゃあな、俺はこれから用事があるだよ。もう二度と来んなよ」

と、扉を煩い音がするほど強く締める。　　が、言わなくてはならない事を思い出し、閉じたばかりの扉を再び開ける。まだ汐織は変わらず立っており、急に開いた扉に驚いていた。

だがそんなことは構わず、

「俺がカップラーメン食ってたのは内緒だからな」

とだけ告げて再び閉める。何か汐織が言っていたような気もするが、正直どうでも良いので聞き流した。

……これから急いでシャワーを浴びて、服を着替えて、髪型を整えなくてはいけない。急いで終わったとしても三十分は見ておいた方が良く。これから行くところはカラオケだが……まあ当然のように夜中まで続くのだろう。だから時間が迫るといふ事は考えられない。

などと考えながら制服をハンガーに掛けていると、またも携帯が震えた。今度はメールである。サブディスプレイを見れば、またも女の名前。しかし先程とは違う。昨日知りあったばかりだという事は合っているが。用件は見なくても分かっている。要は急げという事だ。

だから俺はその予定通り、ペースを上げて準備に掛かることにした。

「……まあ、こんなもんだろ」

鏡の前で組み合わせた、黒のテラードに灰色のシャツ、デザインポケットの青いジーンズ、あとはブーツを履くだけだ。無難すぎる組み合わせだが、俺の顔や体型から見て合っている筈だ。それと、これから向かう場所も。

それを確認し終われば、次の行動に移る。黒地の服である為、埃が目立つと非常に格好悪い。だから鏡と肉眼とを使ってざっと確認する。

「……大丈夫だな」

日頃から管理はしてあるから大丈夫の筈だが、一応念の為。そういう所を細かく見られて、男というものが下がるといふ事はよくある。

最後に右目に掛かった髪を手ですいて、暗い赤のチェック柄のマフラーを巻く。身体の前方に長くぶら下がったそれは、防寒着よりファッションとしての意味を大きく成す。

「よし……行くか」

確か今日は合計で六人の筈だ。無論、全員女の子。ああ、けれど確か一人いなくなっただけか。それで元々知っている奴が二人で、知らない奴が三人ということだった筈だが、今は三対一の比重となっている。何故かその知り合いが誰なのかは俺に教えられない。サプライズだとか訳の分からないことを言っているが、まあ気にしないことにした。こういうのは乗せられている方が、乗せる側としては楽しい筈だから。

黒のシューズを丁寧に履き、玄関を出ると、

「お前……何でまだいるんだ？」

赤い絨毯の上に膝を折って腰を下ろしていたのは汐織だった。あれからずっと待っていたのだろうか。

扉を閉めてからゆうに二十分は経っている。廊下にも空調が効いている言えども、少し寒かったのかポケットの中へ手を入れていた。

「あ、麗ちゃん。何でって、だって……私も行くんだよ？ そのカラオケ屋さんに」

「え、あ、お前なの？ …… あ、じゃあもしかしてキャンセルしたって奴は」

「理香ちゃん」

「あ、そう、成程。喜多山^{きたやま}ね…… ああ、喜多山繋がりか…… なるほど」

喜多山理香。端的に表現するならば…… 遊び人だ。夜遅くまでライヴに行くわ、無免許でバイク乗り回すわという人物だ。だから、至って普通の、むしろ真面目な生徒である汐織と仲良くしているのが正直俺には理解出来ない。まあ、いわゆるでこぼこコンビという奴なのかも知れないが。

「だったらお前そう言えば…… いや、何でもない。…… まあ、じゃあ、行くかな」

「うん」

と言って立ち上がる汐織。

「ああ、そうか。お前も来るんだっけ」

「そっだよ」

と俺の隣に掛けて来る。

はあ、と溜息を吐いて歩き出す。あまり汐織はそっという場所は似合わないから、なんだか、拍子抜けしてしまった。

プロローグ(2)

「……どう？ 美味しい？」

そう言っただけで彼女は不安げに僕の顔色を窺ってくる。勿論、美味しいはずがない。彼女が作ってくれたお弁当は、正にカオスだ。

だが、そこがいい。 。 こういうのはなんていうか、定番だ。王道とも言えるだろう。つまり彼女の料理が美味しかったら、それはそれで美味しくない展開なのだ。

勿論まずいとは言わない。言えようはずもない。だから僕は曖昧な笑顔を選択する。彼女はそれを好意的に解釈し、もっと食べると料理を勧めてくる。

当然我慢して食べるしかない。青空の下、どこだかわからない広々とした草原に僕は座っている。かわいいうさぎのプリントされたビニールシートの上、二人きりでピクニックを楽しんでいる。

彼女が箸に玉子焼き のようなものを、ぶっさして突き出してくる。一瞬目を狙った攻撃のようにも見えた。どちらにせよそれは驚異的殺傷能力を秘めた味付けのお料理である。仮にこんなものが出回ったりしたならば、そこから中で死傷者が多発しニュースで大々的に取り上げられる事だろう。

そんな食べれば死に直結するような味付けの料理がどんなものなのかは判らないが、とにかくそれを口に運ぶ。とんでもない味で僕が悶える。彼女は心配そうに僕を見下ろす。

「黒斗くろとー！！ 居るんだろー？ おーい！！」

彼女が太陽を背に僕を見下ろしている。綺麗な一枚絵だ。このグラフィックのクオリティの高さには定評がある。足元に転がって

る料理の一つ一つまで細かく書き込まれているのだから素晴らしい。

「……もしかして、まずかった？ ごめんね……無理させて……」

泣き出しそうな顔で彼女が僕を見ている。このCGが見たいからこそ我慢して食うのだ。我慢して食わないとこのCGは見られないんだ。そういうフラグなんだ。

「おい、シカトすんじゃないよコラー！！ 勝手に入るぞー！！」

このCGをコンプリートするためにわざわざ二週目に入った僕だが……なにやら外野が五月蠅い。ヘッドフォンを外して背もたれに深く体重を預ける。

背後、部屋の扉を叩く音が聞こえる。小さく溜息を漏らしてもう一度“彼女” つまり、ディスプレイに表示されたエロゲーのヒロインに視線を向ける。屈んでいるからパンツが見えている。しましま模様、所謂“しまパン”というヤツだった。

ヘッドフォンを首からかけたまま立ち上がる。せつかく人がエロゲーに没頭していたっていうのになんて非常識な来客なんだ。まあ、僕の部屋にわざわざやってくるような変人はごく限られているわけだけだ。

「……めんどくさいなあ」

でもこのままシカトを決め込んでいると恐らく部屋に強行突入してくるだろう。そうなると本当に厄介だ。それだけは勘弁してほしい。僕は自分の部屋に自分以外誰も入れたくないんだ。見られるのだって嫌だ。自分以外の人が入った部屋なんて、それはもう僕の部屋じゃない。

仕方がなくヘッドフォンをキーボードの上に放り投げる。締め切っていたカーテンを開く。窓の向こうから斜陽が差し込み、時間が既に夕方になっていている事に気付く。

冬場は日が落ちるのが早い。まるで世界が時を急かしているみたいだと思う。振り返り、扉へ向かう。内側からかかっている鍵を開き、外で待っているであろう人物に声を投げかけた。

「うるさいよ、朋希……」

「お！ やあつと出てきやがったな〜！ お前なあ、学校サボって引き籠もってんじゃないよ」

「……うるさいなあ。別に、君には関係ないじゃないか。僕はその……なんていうか、忙しいんだよ」

頭を掻きながらそう言い訳する。勿論それが言い訳になっていない事は承知の事だ。何せ僕が忙しいわけが無い。暇な高校二年生、今日だって部屋に引き籠もってずっとゲームしてたくらいだ。

昨日の夜から朝までつい徹夜でエロゲーをやってしまった、そのまま学校に行くのがダルくなってしまったんだ。でも別に今に始まった事じゃない。僕はたまにそうやって何となく学校をサボる。僕が居なくても世界は回る。学校だって普通に始まって終わる。だから僕なんて居なくてもいい。

「お前の言う忙しいうちに入んねーの。俺の忙しさつたらないぜ？ 毎日バイトバイト、クリスマスまでバイト三昧決定済みってマジ泣ける」

そう語る目の前の人物によやく視線を向ける。何となく人の目を見るのは苦手だ。見れば見るほど他人と言うやつは胡散臭いし。

綺堂 朋希 。端的に言えば、僕の幼馴染。女の子だったから良かったけど……まあ、女の子だったら女の子だったでめんどろくさいから別にいい。男くらいで丁度良い。

僕らの通う高校 伊雑いざわ高校の学生服を着用し、赤い特徴的な髪を揺らして微笑んでいる。頭が赤い……DON……一見不良にしか見えない彼は何故かこうしてやたらと僕に構う。

それは多分僕らの過去に起因している。とにかく彼は鬱陶しいタイプの幼馴染だった。僕はエロゲーでもやたらと世話焼きな年上お姉さん幼馴染とかは苦手なのだ。ましてやこんなヤツ得意なわけが無い。

彼は色々あって、貧乏学生をやっている。だから殆ど毎日のようにバイトをしていて、その種類も様々だ。お陰で交友関係も広く、しかも忙しいのにたまにこうしてうちに来るのだから義理堅いというか諦めが悪いというかなんというか……。

「それで、何か用？」

「いきなりそう邪険にすんなよ……。幼馴染の様子を見に来てやったんだろが。生存確認だよ、生存確認」

「人間そう簡単には死なない物だよ。それより朋希、バイトがあるんじゃないの？」

「いや、今日は何故か休みだ。こんな生活しているとちょっとした暇を持って余すのも苦痛なんだよ」

「だからって僕のところへ暇つぶしに来ないでよ……」

全く悪びれた様子も無く笑う朋希。まあ、そろそろ少し体を動かしたいと思っていた所ではある。椅子の上に十数時間座りっぱなし

だったわけで。

部屋の中では未だにディスプレイの中でヒロインが僕を……厳密には僕がクリックするのを待っているわけだけど、まあ放置してもいいだろう。セーブは……いつしたのか判らないけど。

「……それで？ どこか行くの？」

「お、珍しくノリいいな」

「ぶつちやけお腹すいた。昨日から何も食べてないんだ」

「だろうな。そんな顔してるぜ？ 後、目の下なんとかしろよ」

多分酷い事になってるんだろうけど鏡を見ていないから判らない。出かけるのならば流石に身支度位するべきだろうか。

「……ちょっと待ってて」

「急げよ！」

そこは「ごゆっくり」って言うべきところだと思っけど……まあ、彼にそんな気遣いは求めないからいい。

部屋に戻り、白いハイネックのセーターに袖を通す。シャワーは……ああ、確か昨日の夜に浴びた気がする。よく、覚えていないけど……まあ、大丈夫だろう。

髪型はどうなってるんだろうか。まあ、特に拘ってないからどうでもいいんだけど、寝癖くらいどうにかするべきだろう。仕方が無くユニットバスの手前、洗面台の前に立つ。

髪の毛は案の定ぼさぼさになっていた。でもこれ、そう簡単には直りそうもない。少し櫛で抵抗してみたけれどどうも無駄な努力に

終わる予感がしてならない。

「……………うん？」

そうして視線を向けたのは鏡の中の自分、その胸元だった。じつとそこを見る。鏡の中に僕がいる。鏡の中に居る僕の首から“何か”が提げられている。

「うわっ！？」

流石に驚いた。それは何か、瓶のようなネックレスだった。首から提げられた小瓶、白銀の装飾が施されたその中には　まるで“炎”みたいに輝く光が灯っている。

そつと触れてみるが、熱さを感じない。何か特殊な電球とかなのだろうか。良く判らないけど……………さつきセーターを着たのにその上に提げているというのはどういう事なんだろう。

つまりセーターより後に提げたことになるんだけど、こんなもの見覚えはない。手にとってじつと見詰めてみる。全くそれが何なのか判らない。炎を閉じ込めた瓶……………？　お香、とか……………？

リラグゼーショングッズのような気もするけれど、正体不明なので諦める事にした。背後からは朋希が呼んでいる。僕は首からそれを提げたまま部屋を後にした。

「ん？　なんだそれ？」

案の定部屋を出て鍵をかけている間に朋希はそれに気付いてしまった。自分でも良く判らない物……………見覚えも無い。でも何となくはずしておいては来なかった物。

勿論急いでいたというのものもある。でも別に外す気になれば外せばはずだ。それをご丁寧に着用してくるということは、思いのほか僕

はこれが気に入ったのかもしれない。

「カツコイイじゃん。何これ？」

「なんだっていいだろ」

「ふ〜ん……？ ま、いいけどな。お前はもうちょっと外見に気を
使うべきだし、俺としては嬉しいぜ」

本当に余計なお世話だ。外出する時は基本的に制服なんだから、
私服なんてどうでもいいと思うけど。休日は部屋から出ないし。

夕暮れの空の下、僕らは肩を並べて歩く。見渡す景色の向こうに
は海が広がっている。ここ伊雑町は本当に田舎という感じの町で、
引越してきて数年経つ今でも時々知らなかった一面を見せてくれ
る。

例えば夕日が照らし出す水面とか。雲を切り裂いたような茜色と
か。町に降り注ぐ様々な景色が清しく、何となく外に出てよかつ
たなあと思う。

歩きながら両腕を広げて背筋を伸ばす。物凄い勢いで全身の骨が
音を鳴らした。隣で朋希がちよつと引いた視線で僕を見ていた。

海と山に囲まれた町、伊雑。しかし今この町は急激な成長の
途中にある。街の中心部にはどんどんビルが増えて、観光客も年々
増えている。

それというのも、水平線上に見える巨大な海上都市の所為なのだ。
海沿いの道を歩いているとそれがここからでも良く見える。

神貴^{かんぬい}アクアポリス。次世代型の海上都市。所謂未来の可能性。
SF的な世界の実現への一歩……。あの町へ向かうにはどうしても

伊籬町を経由する。だからこの町は栄える。だからこの町は発展する。

僕が引っ越してきたのも、丁度アクアポリスで話題になっていた頃だった。別に狙ったわけじゃない。でもまあ、偶然にもそういう場所に住む事になってしまったのだ。

「でっけ〜よなあ。アクアポリスは」

朋希がそんな事を呟いた。ろくに舗装もされていないような下り坂、小石を蹴りながら。

「そうだね」

僕らにしてみれば、あそこはまるで遠い国みたいだ。住んでみるとは思わないけど、でも、とても遠い。文字通り、遠いんだ。

僕の住んでいるボロアパートの家賃とは比べ物にならないような超高級物件が乱立しているまさに異世界。あんな所に住んでいる人はさぞかし人生を謳歌している事だろう。リア充乙。

ふと視線を朋希に向ける。彼はどこか寂しげな表情でアクアポリスを眺めていた。その気持ちは察するに余る。僕だつてそうだ。あの町には……きっとどうしようもない事が沢山あるから。

「元気にしてるかな」

あえて名前は言わなかった。それでも彼は判ってくれた。小さく肩を竦め、それから首を横に振る。

「そんなに会いに行けるわけじゃねえしな。それに、詳しい事は俺にもわかんねえよ。なんつーか、ほら……。俺は嫌われてっからさ」

勿論それは、“彼女”にはない。“彼女の両親”になのだろう。彼の事情は色々複雑だ。勿論、僕だって他人事じゃあないけれど。「でもま、そのために引越してきたんだ。きっといい方向に向かってくるさ」

「楽観的だなあ」

「世の中そうでもなきゃやってらんねーぜ！」

冗談交じりにそう笑う朋希。彼はいつでも明るい。それはすごい事だと思う。でもだからってそれで僕を振り回さないでほしい。別に僕はそれに憧れたりしないんだから。

町の方まで行けば食事をする店は幾らでもあるだろう。今日は何を食べようか……そんな事を考える。財布の中身と相談しなければいけないけれど、たまには美味しいものが食べたい。

「朋希、何食べるの？」

「ん？ そうだな……金ねーからなあ。牛丼とか？」

「……………君、いつつも牛丼だよな」

うん、まあ……………いいんだけどね。

財布を閉じて溜息を漏らす。まあ、食べられればなんでもいいか。そんな事を考えながら僕は海を眺めながら歩く……………。

「お前ってさあ、前から思ってたけど主婦とか向いてんじゃねえか」

そんな言葉を漏らし、朋希は僕が買い物籠に入れた牛肉を手にとつて眺める。

牛丼を食べ終えた僕らはそのままの足でスーパーマーケットにやってきていた。いくら急成長を遂げている町とは言えども、僕の住む海沿いの一帯はド田舎もいところである。まあその分アパートの家賃は鬼のように安いわけだけれど。

とにかく不便なので、買い物は結構纏めてしてしまう事が多い。ただその買い物をするようにも町まで下りてこななければならない。だからこうして都合の合う時についてに買い物しておかないと、後で面倒な事になる。

僕は殆どの場合自炊で食事は済ませている。理由は二つ。一つ、家から出なくて住むから。二つ、美味しい料理が食べたいから。勿論プロが作った物に匹敵する腕前だなんて自惚れるつもりはない。でも、そこらへんの女性よりは料理が上手い自信はある。

貴方にとって料理とは？ 退屈な日常を彩る大切な色彩です。はい、そんな答えをどこかの誰かが言っていた気がする。同意はしない。でもまあ判らなくも無い。

別にお金には困っていない。僕は周りの同年代の人たちと比べて遥かにお金を使わない。服も朋希に貰ったりしているし……ゲームは結構買うけど、中古とかで上手くやってるし、新作も速攻クリアして売り払えばそんなにお金はかからない。

だから毎日外食でも別に困らないんだけど、やっぱりここは自炊に限る。部屋から出る気力が無い時は部屋の中で料理を作れると本当に都合が良いのだ。

とりあえず一週間分くらい買いためしなれば。毎日夕飯の食材を買いに来る主婦の皆様には本当に頭が下がります。朋希が勝手にお菓子を籠に入れているのを見て溜息を漏らす。

「君は子供か……」

「恵まれない綺堂朋希君に是非お慈悲を！ な、荷物持つからよ！」

「……………しょうがないなあ」

まあ実際荷物を持ってもらえるのならばポテトチップスくらい大目に見てやってもいい。一週間分の食料ともなれば結構な量になるし。

やたらチープなアレンジのJ・POPが流れる店内をぐるりと順番に巡り、レジで会計を済ませて店を出る。ビニール袋に詰められた食材を両手に抱え、朋希は苦笑いをしながら歩いていた。

「お前、こんなに食うの……………？」

「こんなについていうか、きちんと三食摂るならこれくらいの食材は必要になるでしょ」

「そうか……………？ 俺は【肉】！ 【米】！ だけで終わるけど……………」

「君は料理を何も判ってないよ」

まあそんな事を朋希に言ったところで無駄なんだろうけど。

「なあ、今度夕飯作りに来てくれよ」

「だが断る。僕の最も好きな事の一つは、幼馴染のお願いに対してNOと答える事だ」

「なんだそれ……………」

「……わかんなきゃいいよ」

夕日はすっかり沈んで世界は暗闇に包まれている。流石に朋希に家まで来てもらうわけには行かないので、分かれ道のところでビール袋を預かった。

「それじゃまた今度な」

「うん」

「死ぬなよ！」

「死なないよ」

手を振り去って行く後姿を見送り、重たい荷物を持ち直す。でも確かに彼の言う通り、少しばかり買いきたかもしれない。

空を見上げる。伊雑の空は本当に綺麗だ。でもやがてこの景色は街の明かりに掻き消されてしまうのだろう。

部屋に戻ってもエロゲーしか特にする事が無い。手持ちのゲームは大体やってしまったし、あのゲームもコンプリートするまでにその時間はかからないだろう。

「……退屈、だな」

ゆっくりと歩き出す。静かに目を瞑り、再び開く。

この毎日は永遠に続いて行く。人はちよつとやそつとじゃ死なないから。だから死なない限り続いて行く。永遠にこの日々が。

それが誰にでも与えられる平等な物だと信じていた。でもそれが本当はとても幸せな事だったのだと僕は後に知る事になる。

胸から提げたネックレス。小さな瓶の中、炎のような輝きがゆら

ゆらと闇の中で輝いていた。

プロローグ(3)

「しかし日が変わる前に終わるとは思わなかったな」

「そうだね。皆、用事あるって言ってたしねえ……」

もたもたと財布を仕舞いながら、汐織は俺の咳きを拾った。黒い空に覆われた静かな街に、微風そよかぜの様な汐織の声が耳に届く。……正直、汐織がこの時間まで付き合っていることがまず本気で驚いたのだが、まあ何も言わないことにする。

……音に関して、とても静かな夜だ。先程自分たちがいた空間のざわめきとはまるで別世界。

結局最後まで残ったメンバーは俺と汐織。当然この二人で歌うなどする気は毛頭なかったので俺と汐織以外の最後の一人が帰ると言い出した時点で俺も切り上げることにした。皆が皆、トイレに立った後に帰宅を口にするということは、まあ、男の所に行くんだろうな。今日集まった女達は全てが彼氏持ちだったのか、或いはただのセフレからの呼び出しか。……まあどちらにせよ、今日は外したことに変わりはない。

ポケットから取り出し、携帯を開けばメールが三通。宛先を見れば、今日いた女の名前。何となく、それを開いて読む気も起きず、ポケットに仕舞い直す。

一度、溜息を吐いた。マフラーに沈めた口から、白い水蒸気が立ち昇る。

……何だろう。この気持ちは。……そう、空しい。俺は、飽きているんだ。この日常に。学園では優等生を気取り、外見を磨き、夜は女を引っ掛けるために街へと興じる。何をすることも順風満帆に物事は進んでいく。淡々と、淡々と、俺が殆どが思い描いた通りに。

この世界は一体何なんだろう。何故俺は苦勞というものをろくに

しない。文武両道、容姿端麗、財産は腐るほどある。世界は、俺を中心に回っていると言っても言うのか。

一時期は、確かに女というものにはまった時期もあった。餓鬼だった俺は、性交の昂りに虜になっていたということ。……けれど、今となつてはそんなことをしようなんていう気は起こらなかった。所詮そんな衝動は、遙か数年前の過去。

結局、初めて得られた時の俺にとって、興奮は“非”日常であつただけ。単調な形状だった日常という波に、イレギュラーな高波が発生した。俺はそれに身震いした。……けれど今はその高波すら“日常”になつてしまったということだ。俗な表現をすれば、早くも俺は飽きてしまったのだろう。自分の容姿にも、自分の才能にも、自分の人生にすら。

「あゝ……枯れたのかねえ……」

「え？ あ、うん、そうだね。もう殆ど枯れちゃったよねえ……」

「……」

「……え、何？ 私変なこと言った？」

「……いや」

多分、汐織は木についていったのだろう。季節は冬だ。もう殆どの木は枯れている。……それと同じように俺は枯れたのだろうか。性欲だけでなく、生きる源も。

閑静な空気に包まれた神貴アクアポリスという街を、俺と汐織でとぼとぼ歩く。

静かなのは音だけ。ビルに囲まれた道。俺達を囲む高層ビルたちは、その壁にランプや作り物の木のロープを巻きたくっている。ち

かちかと光る赤や緑や黄色で、視界は溢れんばかりの光に包まれていた。まるで、カーニバルのようだ。

もう直ぐ日を跨ごうとしている今では、昼間には休みなくあざとい宣伝が流れている電光版も、ただ闇を映しているだけ。その変わりに、昼間に出張れなかつたネオンたちが息を吹き返している。

命がないのに色鮮やか。なんとも奇妙な空間に、俺達は包まれている。

「……そうか、もう少しでクリスマスだもんな」

「うん……」

クリスマスといえば、恋人と過ごすというのが定番だろう。夜に待ち合わせ、少し高いレストランで優雅に食事を済ませた後は、ホテルへと行くわけだ。……ああ、確かに俺も去年まではそうしていたさ。

今、俺には特定の女を作ってはいない。当然、作ろうと思えば幾らでも作れるのだが……何故か作ろうとは思わなかつた。きつと、俺は自分を試していたんだと思う。その日、一体何人の女から誘われるのかということ。過去形。

そうだ。今、煌びやかなネオンの間を歩いている俺にはもはやそんな気はない。正直、クリスマスなんてどうでもいい。もはや、全てがどうでもいい。だから、誰か俺の世界を壊してくれ。

ふと、腰の重みに意識が集中する。携帯でも、財布でもなくあの正体不明の懐中の銀時計。何故か、捨てるという選択肢すら浮かばなかつた奇妙な時計。取り出せば、夜の街でもイルミネーションを反射させ、怪しく光り、存在感を訴えかけてくる。覗きこめば映る自分の姿。蓋を開けば、文字盤のない奇妙なアナログ盤。何も変わらない、おかしなままこの銀時計は 否。

「日付が……変わりかけてる？」

今朝見た時は10の数字が顔を覗かせていた筈なのに、それは既に上へと移動していた。既に半分以上は見えない。変わりに、下からは9の数字がやって来ている。

何を意味しているのか。そんなことを考えていると　不意に気配を感じて空を見上げる。雲覆う空の下、電光掲示板が視界に横切った。ただ真つ黒な画面を映しているそれは　何故か一斉に白さが灯った。視界に埋まる全ての電光掲示板に光が灯る。

思わずその不気味な、壮観な出来事に一歩後ずさる。冷汗が背筋に垂れるのを感じた。何かが起きている。そんな予感が背筋から離れない。

俺の心臓はドクドクと、高鳴る鼓動を刻んでいる。胸が苦しい。何かに、俺の心は期待している。

「一体、これは……」

「……どうしたの？　麗ちゃん」

俺の様子を、視界の外では汐織が怪訝そうに俺を見つめていた。

「……んあ」

口元から涎が垂れている事に気付いてゆっくりと顔を上げた。

既に部屋の中は真つ暗闇に包まれている。勿論帰って来た時には既に暗かったわけだけど、今は更になんというか……闇って感じだ。ディスプレイ上ではベッドの上に横たわった女の子が僕を見ている。その画面の右下に、時計に視線を向ける。一応時間は合ってい

るはず。ということはおあ。もう今日が終わるって事だ。

日付変更の瞬間を目前に僕は小さく欠伸を浮かべた。記憶がどうにも曖昧だ。確か牛丼マンと牛丼を食べに行つて、買い物をして帰つて来てどうしたっけ。

なんでエロシーン目前でこのエロゲーは停止しているんだろうか。ぼんやりと女の子を見詰める。下着姿のままベッドの上で僕を待っている。でもなんというか……ああ、まあいいや。なんでも。

現実世界じゃ在り得ない話。もし在り得たとしても絶対にお断りだ。どこの誰とも判らない、自分自身とは何の関係も無いどっかの他人と一緒に寝るとか。

「……気持ち悪い」

ディスプレイの中の女の子には実体が無い。温もりも無ければ優しさもない。でもそこには何も無いからこそ見つける事が出来るものがある。

彼女達は絶対に裏切らない。ゲームの中、決められたシナリオを何度も繰り返し返すだけだ。それは僕をとて安心させる。フラグとゲームスイッチにだけ左右され、イベントをこなすだけの人生。最初から勝利が決まっている戦いほど恐ろしくない物も無い。

だから毎日決められた通りに動くのならどれだけいいだろう。毎日毎日ありもしない幻想に怯える必要もない。思った事が思い通りに成るなんて在り得ない。だって僕は どうしようもないくらい、駄目な人間だから。

ゆっくりと立ち上がる。闇の中、ディスプレイの他にもう一つ僕を照らし出している物があつた。首から提げたネックレス。夕方に見た時よりそこから放たれる光は強くなっているように思う。

まるでゆらゆらと揺れる炎のような輝き……。でも別に熱くないし、害も無い。首からゆっくりと外して手に取り、パソコンデスクの片隅に転がす。

「不安定だ」

自分の顔に片手を当てながら呟く言葉。ゆらゆらと動く炎の形を見ているとまるで自分を見ているみたいで気分が悪くなる。ああ、なんで僕はこんなに駄目なんだろう。

もっと落ち着きたい。安定したい。でも無理なんだ。世界が安定してないんだ。この世の全てが僕を裏切っている。この世界の全てが僕の思う事を覗き込み、そうなるまいと一生懸命に理想から遠ざける。

僕はそれを信じて一生懸命に走るんだ。泣きじゃくりながら走るんだ。でも決して追いつけないんだ。判っているんだ。そんな幻想ばかり夢見るんだ。でもそんなの、どうしようもないじゃないか。歯軋りする。もう嫌だ。うんざりなんだ。なんで世界はこんなに不安定なんだよ。決まった事だけ起これよ。誰か人生にルートを定めてよ。そしたら僕は傷つかない道を選べるのに。

「……アイリ」

画面の中、金髪の女の子がこっちを見ている。金髪の外国人の癖に日本語ペラッペラの現実的には在り得ない美少女が僕を潤んだ瞳で見ている。

熱に浮かされたような表情。汗ばんだ白い素肌。前髪の合間から覗く視線。どうしてエロゲーのヒロインはこう安定して可愛いんだろう。安定してエロいんだろう。判ってる。それは王道を押さえているからだ。このアイリも無口っ子、金髪ロリ等のツボを抑えているからこそこんなにも可愛いんだ。

全ての人間がこうで全ての世界がこうだったらいい。僕はただ選ぶだけでいい。そうしたら僕は最強で最高でありとあらゆる現実を踏破出来るのに。

「……………」

立ち上がる。なんだかもう何も考えたなくなつた。真つ暗な闇の中、明日はどのようなか考える。ああ、面倒くさい。明日も学校をさぼってしまいたい。

学校は怖い。すごく安定しない。どうしたって人が多いと不確定要素が発生する。それが怖い。恐ろしい。ああ、怖いさ。その何が悪いって言うんだ。

闇の中、ベッドに歩み寄り手探りでティッシュの箱を手取る。それを片手にパソコンデスクの前に戻る。

マウスを操作してゲームをオートモードに切り替える。もうクリックするのも面倒くさい。ティッシュを片手に僕は目を瞑り、深々と溜息を漏らした。

二つの街を見下ろす場所に、一つの黒い影があつた。

神貴アクアポリスと伊薙町……。この二つを結ぶ【ユピアブリッジ】と呼ばれる橋がある。その二つの街の中間地点、二つの境界線でもある場所にその時計塔はあつた。

二つの町に同じ時を告げる時計塔。その頂点に立つ男は二つの街を見下ろしながら口元にゆっくりと笑みを浮かべる。

片や海上の楽園。片や変革の都市。その二つの街を見下ろす場所で黒衣をはためかせ、男は手元に一つの時計を輝かせる。

それは美しく、そして一つだけではない。男は全身から様々な種類の時計を掲げ、そして両手を広げて目を瞑る。

彼が自身に役目を負わせる為の刹那。彼が彼らに、彼女らに役目を負わせる為の刹那。男はゆっくりと、両目を開いて口を開いた。

「この声が聞こえますか？」

それは、この物語の始まりを告げる声。

「我が呼び声を受ける者よ。そして我が姿をその目に映す者よ。おめでとうございます。貴方達【十二人】は、【神の試練】に選ばれたのです」

街中の至る所で異変が起きようとしていた。神貴と伊籬、二つの町……それぞれの選ばれし者は自らの手にした“それ”を見詰める。“それ”は彼らの手の中に既にあつた。気付かぬ内にあつた。“それ”を“それ”と気付くよりも早く、思うよりも早く、体も心もそれを受け入れていた。

だから手放す事も無くこの時この瞬間、一日が終わりまた始まる生と死との狭間の時、誰もが目覚め、そしてそれを握り締めていた。「恐れる事は何ありません。むしろ誇りなさい。貴方達は神の手により選ばれた。貴方達はとんでもない幸運の上に居る。貴方達は契約を済ませた。最早降りる事は出来ないゲームの上、貴方達は我らが神の掌の上に置かれたのです」

ネオンの光の下、頭上を見上げる麗夜が目を見開く。その視線の先、街中に溢れた街頭モニターには黒装束の一人の男の姿が映し出されている。

視線を反らす事は出来なかった。麗夜の視線は完全にその男に釘付けになっていた。絶対に在り得ない、正真正銘掛け値なしの“非日常”が、目の前に広がっている。

「麗ちゃん？」

傍らに立つ少女に視線を向ける。彼女には何の異常もない。この街中に響き渡っている男の声も。この街中に伝わっている男の姿も。まるでそう、全てが。

「見えて、ないのか？」

薄暗い部屋の中、ディスプレイに映し出された男の姿を黒斗はじつと見詰めていた。空いた口が塞がらず、そのまま呆けたような表情で画面を覗き込む。

つい先ほどまでそこで裸になろうとしていた美少女の姿は影も形も無い。その代わりに現れた目の前の男は、どうみても余りにも胡散臭く、馬鹿げた事を言っているようにしか思えなかった。

だというのに何故だろうか。胸の奥から熱い物が込み上げてくる。まるで何かが始まるような。止まっていた時が動き出すかのよう。な。そんな錯覚を覚える。

「これ、って……？」

握り締めたのは炎を宿したネックレス。

じつと見詰めるその視線の先には銀色の懐中時計。

二人の少年の見詰める先、手放す事の出来ない、どうしても視線を反らす事が出来ない、たった一つ掛け替えの無い物が光を放っている。

「己の罪を証明する為に」

炎のネックレスから熱い輝きが溢れてくる。

「己の業を救う為に」

銀色の懐中時計から、眩い光が溢れてくる。

「さあ、舞踊るのです！ 賽は投げられた　！　私はここに、
【デイヴィナ・マズルカ】の開催を宣言する　！　」

黒衣の男が両手を広げ、声高らかに叫ぶ。二つの街の二人の少年、
その目前に輝きが収束する。

それは、真紅の獄光。それは、白銀の極光。

“ 僕の目の前には　。　”

“ 俺の目の前には　。　”

“ 眩い光を纏った、一人の少女が立っていた　。　”

罪断のセクレイジユ

それは、咎人達の舞う喜劇　。

プロローグ(3) (後書き)

粕亜「それはともかく、三話終わったから後書き対談コーナーしようか」

御岬「あゝ、いいね」

粕亜「今から開始」

御岬「まった」

粕亜「またない」

御岬「記録するのは」「の中というところで……待てwwwwwwww」

粕亜「またない!!!」

御岬「そうかよwwwwwwww」

粕亜「うん!!!」

御岬「何このノリ」

粕亜「僕はわりといつもこうだよ。結構ワガママだよ」

御岬「まあこれの始まりからもう急だったしな。いきなり言ってきて、やんないの? だし」

粕亜「えゝそんなわけで罪断のセクレイジュ後書き対談コーナーで

す。粕亜です。あ、カギカッコつけるか。あとで編集する時めんどくさいし」

御岬「御岬です。この名前打つのがめんどくさいし……ちょっとまてwwwやり直そう、さすがにwww」

粕亜「やだ！……！」

御岬「………もつやだこの人」

粕亜「えー本日は罪断のセクレイジユをお読みいただきまことにありがとうございます」

御岬「ありがとうございました」

粕亜「ではまた次回」

御岬「はええええよwww」

粕亜「他にいう事ないと思うんだ」

御岬「……キモオタを執筆した感想を一言。粕亜っち」

粕亜「キモオタじゃないよ。自宅警備員だよ」

御岬「いや、学生でしょ？ 辛うじて」

粕亜「じゃあ地域警備員」

御岬「それは仕事になってるじゃねえかwwwwww」

粕亜「なお、プロローグの（１）が御岬、（２）が粕亜、（３）は
合作になっております!!」

御岬「ですね。でも（３）の最後の開催宣言は粕亜殿ですよ」

粕亜「そして次からは麗夜編」御岬、黒斗編」粕亜になります」

御岬「はい。僕はあのウザイケメンを書かなきゃならんわけですよ、
ええ」

粕亜「リア充乙（笑）」

御岬「オタクとか引くわ」笑い」

粕亜「その誤字はそのまま使うからね」

御岬「……………ドSです、奴は」

粕亜「それではまた来週！ さようならー！ さようならー！！
さようならー……………!!」（フェードアウト）」

御岬「次もよろしくー!!」

一日目：契約（1）

「うーん……」

気付けばカーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。どうやらもう既に朝になっていたらしい。

なんだか久しぶりにゆっくりと眠った気がする。そもそもベッドを使うのが何日ぶりだろうか。ここのところずっとパソコンの前で寝ていた気がする。

それがまた兎に角寒いのだ。今日は本当に暖かく眠る事が出来た。こんなに気持ちよく、清しい目覚めを迎える事が出来るのならは今度からベッドで寝るように気をつけようか。

ゆっくりと身体を起こし、身体を伸ばす。ゆっくりと身体が覚醒して行く。久しぶりに感じる、心地よい目覚め……。カーテンを開いてもっと沢山の朝日を浴びたい……。そんなとっても健康的な事を考えた。

ベッドから降り、部屋の中を歩いて窓辺を目指す。ゆっくりと一歩一歩を踏み出す。まだ眠たい目を擦りながら。そうして右足、左足と交互に前に出し……。次の瞬間だった。

ぐっつ。

なにやら柔らかいものを踏みつけた。感触的にいうと……。こう、猫ふんじやっただけ猫ふんじやっただけみたいな感じだ。

この、「何か踏んじやっただけ」って形容し難い気まずさがあるよね。こう、道端に転がってる……。アレとか。室内でもそうだ。ナメクジとか踏んだらこんな気分になる。猫でも犬でもそうだ。兎に角僕はなんともいえない気分です元へと視線を向けた。

ゆっくりと、恐る恐る足を上げる。足元に転がっている何かに視線を向ける。それが何なのか、僕は一瞬理解出来なかった。

「むにゃむにゃ……」

足元に転がっていた物。それは女の子だった。体格的に小学生くらいだろうか。どんなにお世辞を言っても中学生にしか見えない。兎に角ちっこい女の子だった。いや、小学生だよっぱり。無理だ、中学生は。

炎みたいに真っ赤な髪をツインテールに括っている。服装は……なんだか形容し難い。修道服……のようなもの、だ。あくまでも“修道服のようなもの”。真っ白い純白のドレスにも見える。少女はとても端正な顔立ちをしていたが。口元から盛大に涎が垂れていた。

「……………ふー」

額に手を当てて後退する。ベッドの上に腰掛け、両手で顔を覆う。何も見なかった。ああ、何も見なかった。僕は何も、見なかった。

ゆっくりと自分に言い聞かせる。頭がどうにかなりそうだった。お持ち帰りとかそんなチャチなもんじゃねえ。もっと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ……。

そーっと指と指の間から少女を見る。やっぱり寝ている。寝ている美少女だ。こ、怖い……。こんなに正体不明の存在が自分の部屋の中に居るなんて、怖すぎる。

僕に言わせればこいつはエイリアンとかプレデターとかそんな類の存在だ。ターミネーターでもいい。とにかく異質すぎる。部屋に誰か居るだけでも怖いのに、こんなわけの判らない生き物。女の子の形をした何か”がいるなんて、恐怖以外の何者でもない。

やばい、頭がどうにかなりそう。思い出せ、思い出さずんだ……
なんでこうなった？ 僕が何をしたっていうんだ。画面からアイリが出てきてくれた？ 違う、アイリはこんな馬鹿面で寝たりしない。そもそもそんなエロゲーみたいな展開があつてたまるか。いや待てよ？ そうか、そうなんだ。僕の頭がぶっ壊れたんだ。いよいよエロゲーと現実との区別が付かなくなつたんだ。そうに違いない。

「アハハ、なあんだそんな事か」

成る程つまりこれはエロゲーのワンシーンであつてここも実際には僕の部屋ではなくてだからこの女の子は所謂エロゲーのヒロインだからつまり十八歳以上つてことで何しても大丈夫ですよつていうあれですかランドセル背負つてるのに十八歳以上だよお兄ちゃんみたいになつたりそういうことでああああああああ……！！！！

「そんなわけあるか……ッ！！」

頭を振り乱す。呼吸が止まりそう。こんなに心乱れるのはいつ以来だろうか。くそう、何で部屋に幼女が！？ 僕が悪いのか！？ 僕が悪いのか！！？

「……お主、さっきからドタバタと一人で五月蠅いのう。もう少し静かに出来んのか？」

動きが停止する。ゆっくりと視線を彼女に向ける。幼女はゆっくりと身体を起こし、眠たげに目を擦りながら小さな口を開けて欠伸をしていた。

こいつ、動くぞ　！？　いや当たり前なんだけど、これはビツクリだ。しかも喋ってるよ。フルボイス版だこれ！　w k t k……するわけないだろ。

幼女は立ち上がり、眠たげな様子で半分だけ瞼を押し上げて僕を見ていた。その視線が恐ろしくて目を反らす。全身から変な汗が出てきた。

「ふああ……良く寝た。お主も昨晚はぐっすりじゃったのう？ どうじゃ、夜に寝て昼に起きる……人間のライフサイクルというものは、それが正しい事。お主のように昼夜逆転を続けていては、出来る事も出来んと言つ物よ」

「……いや、君……え、何？ え？ 何？」

「何故二回言つた？」

「だ、大事な事なので……いや、え？ 誰……？ えっ？ 誰！？」

「やばい、会話が成立する。どうすればいいんだこれ。僕の脳内妄想……？ に、しては……随分しっかりしてるなあ。」

「君は僕の妄想……？」

「……お主わかっておるのか？ それはかなり無礼な問答だぞ……？」

「そ、そうだね、ゴメン……じゃなくて、君はだから、誰？」

「……寝る前の事を完全に忘れておるのか？ まあ良い、何度でも名乗ってやろっ」

幼女は腕を組んだまま僕を押しつけ、ベッドの上に立つ。そうしてようやく僕と同じ視線の高さになったという所だろうか。いや、

まだ彼女のほうが若干小さいか。

腕を組んでいた幼女は片手でビシリと僕を指差し、もう片方の手を腰へ当ててる。真紅の髪を揺らし、少女は声高らかに宣言する。

「我が名は“ダンテ”！！ お主と契約を果たし、共に【デイヴィナ・マズルカ】を生き延びる事になったパートナーにしてお主の【ブリスゲード】じゃ！！」

「おやすみ」

「こらあああつ！！ 何を床の上に転がっておる！？」

「さ、触るな！！ キ ガイだ……！ キチ イが部屋に不法侵入してる！！」

まずダンテって名前が在り得ない。何がダンテ？ どう考えても日本語ペラペラじゃないか。お前の名前がダンテだったら僕はルドルフだっつの。

それになんか……中二病くさい単語が連打されてるし……だめだ。そのうちエターナルフォースブリザードとか言い出すに違いない。

幼女 自称ダンテは腕を組んだままむすつとした表情で僕を見ている。僕はじりじりと距離を開き、後退する。が、部屋そのものが狭いので逃げ場が無い。

恐ろしい事にダンテの立っている僕のベッドの脇に出入り口へと続く扉があるのだ。つまり逃げ出すにはダンテの横を通らねばならない。しかもここは二階だし……窓からも無理。

いや、いけるか？ 二階の高さってどれくらいだっけ？ いやいやいやいや無理無理無理無理明らかに無理二階とか無理足の骨が折れて泣くのがオチだ。ジャッキーだったまに失敗して大怪我してるじゃないか。僕だったら簡単に即死だ。

「お主、本当に昨夜の事を覚えておらんのか？」

「昨夜って……？」

昨日の夜って事だよね。まあ日付変わった後の事は今日の事なんだけどそんな事はどうでもいい。昨日の夜……夜……。そうだ、どうして僕はベッドの上で寝ていたんだ？

そもそもパソコンの前で寝ていた理由が、どうにも夜更かししてゲームしてしまうからだ。つまり、エロゲーしたりネットゲームしたりしているといつの間にか寝ている。寝オチしてしまうのだ。

ふと、パソコンに視線を向ける。常時起動しているはずのパソコンが起動していない。ま、まさか……。

慌ててパソコンの起動スイッチを押す。背後で幼女が何か言っていたがそんなもの知ったことではない。パソコンの起動を待つ間、僕は徐々に昨晚の事を思い出していた。

そうだ、確かこの画面に変な男の顔が映りこんできて……それで、この間にか持っていたネックレスから女の子が飛び出してきたんだ。

文字通り、光がゆっくりと少女を模り、やがて実体を持つ存在になった。ネックレスから出てきたという表現が正しいだろうか。そんな事あるわけがないのに真面目にそんな事を考えている自分がいる。いやそれよりも今はパソコンの方だ。一昨日からずっとぶっ続けでやっていたエロゲー……“魔法少女まじかるくるる”がどうなったのかが気になって仕方が無い。メインヒロインだけどウザい魔法少女くるとは違いサブヒロインのアイリは攻略にやたら時間がかかる上にルート分岐とCGの差分が多くて攻略には時間がかか。

「……何を呆けておる？　おーい？　気は確かか？」

僕はそのまま暫くの間死んだ。

あの変な男が表示されてからパソコンの電源が落ちたんだ。そうに違いない……つまりぶっ続けでやってた……一度もセーブしていなかったデータは……完全に……僕の、およそ四十時間は……完全に……。

「……な、なんだか良く判らぬが元気を出せ。お主すごい顔になっておるぞ……」

「燃え尽きたぜ……真っ白にな……」

「そ、そうなのか？ それで髪の毛が真っ白なのか？」

「そうだけど……そうじゃないよー！ これはその……なんていうか、地毛だよ」

自分の長すぎる前髪を指先に絡めて振り返る。そう、僕の髪の毛は真っ白だ。白髪といわれてしまえばそれまでだが、一応これでも17歳……まだ白髪になるには早すぎる。

理由はまあ色々考えられるけど、実際今自分が白髪だっていう事実が残るだけだ。理由なんて、どうでもいい。ダンテは僕がその話題を嫌っているのを悟ったのか、一歩身を引いて床の上に転がっていた巨大なうさぎのクッションの上に腰掛けた。

「思い出したかのう？ 昨晚の事を」

「……おぼろげにだけど」

「それは良かった。お主がショックで記憶喪失にでもなったのでは

ないかと本気で安堵してしまっただわ」

記憶喪失なんてそう簡単にはならないよ。嫌な記憶は……簡単に消えないんだ。大事な思い出だってそうだ。忘れたくても、忘れられるものじゃない。

「ごめん、正直かなり混乱してる……。君が画面から飛び出してきてエロゲーのヒロインじゃなくて、僕の妄想でもないのなら……君は一体なんなんだ？」

「漸く本題に入れるというものじゃな。うむ、我はその、えろげー？ でもないし、お主の妄想でもない。が、ある意味妄想と言うのは正解でもある。私の存在は言わば空想……非現実の領域に片足を突っ込んだ存在じゃからな」

行き成り何を言っているのかさっぱりわからなかった。

「お主は覚えておるか？ 【死神】の開催宣言を」

「なん……だと……？」

死神？ 死神って……あの死神？ そういえば昨日画面に映りこんだあの変な格好の男……言われてみると死神っぽい外見をしていたかもしれない。

でも、あれが死神だっていうのなら、ダンテはなんなんだ……？ いやそもそも死神ってなんだ。そんなものが普通に在り得るのか？ 普通出てくるか？ 人の家のPCの画面に。

「お主は神の選定によって【デイヴィナ・マズルカ】に参加する契約者の一人として選ばれたのじゃ。口惜しいが死神きよつの言う通り、お

主は奇跡的な確率の下選ばれた奇跡の代弁者と成ったのだ」

「……………【デイヴィナ・マズルカ】？」

「我ら【ブリスゲーデ】と【契約者】が一組になって殺し合う【死神】のゲームの事じゃ。生き残れるのはたった一人のみ……………頼れる物は己と相棒であるブリスゲーデのみ、つまり我だけという事じゃな。うむ、まあ今後よろしく頼むぞ、契約者よ」

僕は椅子から立ち上がった。幼女はうさぎのクッションの上をころころしている。僕はどんな顔をしていただろうか。多分そうだな……………胡散臭い新興宗教の勧誘を受けた一般行人みたいな顔をしていただろう。

何も言わずに無言で額に手を当てる。この子の言っている事の五割も理解出来なかった。一体何を言っているんだろう。だって僕は……………僕は何もしていないじゃないか。

極力目立たないように生きてきた。不確定要素を恐れて誰かに関わらないように心がけてきた。こういうどうしようもないわけのわからない誰にも変えようのない悲惨すぎる現実みたいなものを避けるために今までそうしてきたんじゃないか。

僕の人生の全てをかけて僕は世界から逃げ続けてきたんだ。その長い長い逃避行の果てがこんな結果なら、僕の人生全ては無意味だった事になる。

「……………勘弁してくれよお」

何でこんな変なのと関わる事になっちゃったんだ？ 何でこんな状況に陥ってる？ どうして僕がこんな気持ちにならなきゃいけない？

嫌だ……………。嫌だ嫌だ。ああ、嫌だ。我慢できない。くそう。最悪

だ。なんて最悪なんだ。これ以上ないくらい、最高の悪夢だ　！

「……………ていつてくれ」

「うん？」

幼女が首を傾げる。僕は深く息を吸い込み、大きく叫んだ。

「出て行ってくれえっ！！　僕に関わらないでくれっ！！　意味わかんないんだよっ！　このっ！！　キ　ガイ幼女　ッ！！！！！」

自分でも驚くほど大きな声が出た。ああ、僕はまだこんなに大きな声で喋れたんだ……………そう感心してしまうくらい。

彼女は目を真ん丸くしていた。その表情に少しだけ良心が痛んだ。でも仕方ないんだ。こういう輩には少しきつすぎるくらいのほうがいいんだ。

妄想と現実の区別が付かなくなってるような、こういうキチイさんと関わらないために大切なのはハッキリとした拒絶なんだ。思い切り突き放して、もう二度と世迷言を言わないようにしてやらなきゃ、だめなんだ……………。

「……………そうか。お主は我に消えて欲しいのだな？」

「……………そ、そうだよ。君なんて消えちゃえばいい」

「ならばそうするが良い。お主の意思で　　我を消し去ってみろ」

「意思で……………消す？」

もしかして本当に幻……………？　僕の生み出した妄想なのか？

だったら僕が消えろと念じれば消えるはずだ。彼女の言うとおりだ。僕は目を瞑る。消えろ……消えてしまえと願う。いや、最早それは祈りだった。

神様仏様、どうかこのキチガイ少女を消し去って下さい　！！
心の中でそれを三回唱える。ついでに手まで合わせていた。これで消えなきゃウソだ。神様なんて、いやしない。

「……………いた」

いたのは彼女、ダンテではなかった。いたのは神様……つまり、ダンテは跡形もなく消え去っていた。

「きえ……た……」

我ながら信じられなかった。じゃあ、あの子は僕の妄想だったって事じゃないか。はは……なんだ、怖がる事なんか何もなかった。僕は正常に戻ったんだ。

深く深く溜息をつく。両足の力が抜けてその場にへたりこんだ。それでも気持ちちは安らかだった。ああ、酷い夢を見た後のような気分だ。本当に、どうしようもない。

『ほつら、消せたじやろう？　それこそお主が我の契約者である証だ』

背筋が凍りついた。

背後から聞こえてきた声にゆっくりと振り返る。声は、どこから聞こえた……？　判っている。机の上に目を向ける。立ち上がり、それを手に取る。

燃えるような炎を灯したネックレス。いつの間にか身に着けていた物。いつの間にか身に着けていた。なのに疑問にも思わな

かった物。

その炎の揺らめきは昨日よりも増しているように見えた。握り締める掌は決して熱くは無い。なのにこの炎には……どこか神秘的な“熱”を感じる。

『何度でも言うぞ、小僧。我が名はダンテ。お主が契約した【ブリスゲーデ】じゃ』

「……なん……なんだ」

『お主ももう理解しておるのではないか？ ただ目の前にある現実を受け入れるだけで良い。【死神】に選ばれた以上、お主はもうこの運命から逃れる事は出来ない。お主には意地でも最強の契約者になって貰わねば困るのだ。我の 願いを叶える為にな』

「ちょっと待ってくれ……何が、なんだか……」

『端的に言うぞ。このネックレスは【時計】じゃ。契約者には【時計】が配られる。それは【ブリスゲーデ】の容器でもある。お主にはこの炎が見えるじやろう？ これは お主の残りの寿命じゃ。お主の寿命は残り九日間……死神のゲームで生き残る以外に生存する術は無く、逃げる術も無い。何か質問はあるか？』

とんでもないことを一気に言い切ってネックレスはそう締めた。でも僕は何も言えなかった。理解が追いつかない……のではない。その逆だ。理解しようとして、そして出来てしまった。何故だろう、それがウソじゃないと思える。僕はその妄想的な中二病的などうしようもないくだらない話を、心のどこかで信じている？

「僕は……死ぬの？」

『ああ、死ぬ。このまま行けば絶対に九日目には死んでいる。お主の寿命は今凄まじい勢いで圧縮され消費されているのじゃ』

「死ぬ、って……僕何してないのに……？　なんでその、死神のゲームって奴に参加しなきゃならないの……？」

『理由はお主が一番良く判っているはずじゃ』

「難だよそれ……。判るわけないだろ……っ」

ネットレスに向かって話しかけている自分……でも今は自分を客観的に見る事が出来ない。完全に混乱している。僕は……どうなっちゃうんだろう。

死神のゲーム……九日目には死ぬ？　この炎が僕の残り寿命……？　なんだそれ……。なんだそれ……！

ネットレスを振り上げる。それを放り投げようとする。けれど握り締めてしまつて放す事が出来ない。それは別に不思議な力が働いているわけじゃない。僕が自分の意思で投げないんだ。そつだ、投げられない……。

「……学校に行かなくちゃ」

『ちゃんと我を首から提げて行くんじゃぞ』

握り締めたネットレスを睨みつける。でも、こいつの言う通り。言う通りなんだ……。

悔しいけど、訳が判らないから……だからこそこれを手放しちゃいけないんだ。本当に怖いのは何も判らないのに放置し続ける事だ。そつする事で何の予測も対策も出来ず、不意打ちを喰らうようにイ

レギュラー要素に飲み込まれる。

僕は毎日毎日一生懸命それを排除してきた。自分の事も周りの事もじっと見詰めてきた。だから判るんだ。ここでこいつを投げ出したら、きつともっと“ろくでもない事”になるって。

ネックレスから聞こえるダンテの声に思わず歯軋りする。彼女の言う通りだ。そして彼女は僕が彼女を投げ捨てない事を判っているんだ。あからさまな人を見透かすような言葉……でもその予測を裏切れない自分の方がもっと恨めしい。

制服に袖を通し、ダンテを首から提げて学ランの中に入れる。こんなのぶらぶらさせながら歩いていたら目だつて仕方が無い。昨日ならいざ知れず、こうなつてしまつた以上は誰にも見られない方がいい……そんな気がした。

ダンテを首から提げたまま学校に向かう間僕は終始無言だつた。ダンテも僕に話しかけてくる事はなかつたし、話しかけてきたとしても無視を決め込むつもりだつた。

くそう。くそう、くそうくそうくそう、くそう……。最悪だ。最悪だ。最悪だ。最悪すぎる。最低最悪だ。僕の日常が……辛うじて通学と言うプロセスで繋がっている。部屋に籠っていたら気がおかしくなる所だつた。こんな所で学生と言つ身分に感謝するなんて……。

だけど僕は直ぐに部屋から出た事を後悔することになった。通学路を歩いていると、前方に人だかりが出来ているのが見えた。なんだか酷く嫌な予感がした。ダンテは黙っていたけれど、そこに行くように急かしているような気がした。

思わず息を呑む。何故だか判らないけれど妙な汗がたらたらと垂れていた。もう冬だつて言うのに何でこんなに暑いんだろう。まだ少し歩いただけだつて言うのに何でこんなに足が震えるんだろう。

ゆっくりと、人ごみを掻き分けて行く。その先にあつた景色を見て僕は驚く事はなかつた。ただその余りにも非現実的な情景にただ、黙り込んでいた。

慌てて引かれたとしか思えない規制線。黄色いテープの張り巡らされたその向こう側　コンビ二エンスストアの駐車場あたり。黒いアスファルトは明らかに変色を遂げていた。

駐車場のアスファルトより一段高く作られたレンガ敷きのエリア。その縫い目を伝うようにして流れたであろう赤い雫の跡　。窓硝子に飛び散ってこびり付いたどうしようもなく避けられない、“そう”としか認識しようが無い液体……。

「ああ……」

何がどうなればこんな事になるんだろう。こんな……大量虐殺の跡みたいな景色に……。

『言っただろう？　逃げる術は無いと』

そう語るダンテの声も今の僕には届きそうにも無かった。僕はただ逃げるようにその場を後にし、学校へと続く坂道を駆け上って行った……。

一日目：契約（2）

遡る事半日。深夜零時、【デイヴィナ・マズルカ】開催宣言直後。

伊薙町にまだ三つしかないコンビニエンスストアの一つ、その駐車場では世にも恐ろしい光景が広がっていた。

彼らは別段何かこれといって特別な事をしたわけではない。ただ、夜遅くまで友人と遊び、その楽しい気持ちで解散してしまう事を惜しみ、コンビニの駐車場で長話をしていただけの事。

それはありふれたシチュエーション。決して特別な事ではない。しかし今彼らは特別な状況下にある。駐車場に立った一人の少年が手にした【剣】が、彼らをあつさりとなり伏せてしまったから。

生き残りなど一人も居なかった。一瞬の事、田舎の深夜という事もあり目撃者さえ存在しない。店内にコンビニの店員はいたが、音も無い一瞬の出来事故にそれに気づいたのは数時間後という有様だった。

剣を手にした少年は悠々とした態度でその場を後にする。彼が手にした剣は非常に奇妙な物だった。作り物の模擬刀等とは決定的に存在を異とする物。それは、血液を浴びる事を喜ぶように刀身に刻まれた紋章を輝かせていた。その様はまるで剣そのものが呼吸を刻んでいるかのよう。

物騒な得物を片手に男は深夜を闊歩する。真夜中、日付が変わったというのに町をうろついている人間を目に付く限り片っ端から斬り伏せて歩いた。そこに特に大きな理由は無かった。強いて理由を挙げるのなら、それはそう、憂さ晴らしのような物。

元々、死ねばいいと思っていた。そして殺せる力を手に入れた。だから殺した。他の何よりも早く。優先順位など知った事ではない。今はただ、視界を遮る不快を遮断したい。

「 待て」

ふと、背後から声が聞こえて振り返る。男の視線の先、海に面した坂道の上、一人の女が立っていた。

真夜中の冷たい月の下、そのシルエットは長い髪を風に靡かせながら少年を見下ろしている。少年は手にした剣から滴る血を舐め、じっと女を見やる。

黒いダークスーツを着用したそのラインは細く、凛とした張りのある声でも女性だと判断出来る。暗闇を纏うような女が一步前に出る。腰から括った奇妙な形をした時計が揺れる。

「お前が【契約者】という奴か。ここまで歩きながら辻斬りでもしてきたつもりか？ 死と血が点々と、お前の足取りを簡単に教えてくれた」

「 だったらどうすると言っんだい？」

少年 卓羽 さかばね 王は口元に冷たい笑みを浮かべながら顔を上げる。女は月を背にし、表情は見て取る事は出来なかった。しかしその突き刺すような鋭い視線 魂を鷲づかみにするような酷い威圧感。王の胸を貫く。

女が腕を振るう。その手の中、光が収束する。まるで月光を集めたかのような美しい輝き。決して何かを消すものではなく。しかし闇夜の中で確かに煌く……一振りの太刀。

それは王の手にする剣と同質の存在。そして全く異質の存在。血を吸い輝きを増す王の剣、そして月明かりの下静かに煌く彼女の剣は本質を同じとする物。しかし絶対に相容れぬ 戦うべき存在。

「人を殺したのだ」

女は剣を片手に構える。その仕草はどこか洗礼されていて素人には思えない。構えた刀身をゆっくりと傾け、月明かりを弾く。

「自分も殺される覚悟くらい、出来ているんだらう？」

その台詞を最後まできちんと聞かず、王は駆け出していた。その加速は人間の物とは思えない。足音を高らかに響かせ、王は低い姿勢から一気に女へと詰め寄る。

下段から振り上げる刃。瞬間、刀身の先が大地を削る。激しい圧力で放たれた剣の一撃を物語るかのようにアスファルトで火花が散る。その明かりに照らされ刹那。女の表情を知る事が出来た。

女は笑ってはいなかった。泣いてもいなかったし、怒ってもいなかった。ただ単純に、そう。文字通りの“朝飯前”。彼女にとって“それ”は。決して特別な事ではなく。“剣を振り上げて振り下ろす”という動作が。まるで当たり前のよう。

王の背筋にぞくりとした悪寒が走る。攻撃を急停止し、一瞬で防御の姿勢へと移行する。仮に火花が散って彼女の表情が見えなければそうは出来なかった。故にそれは偶然の産物……運勢が齎した加護。

太刀が振り下ろされる。片手で揮われた剣は空を斬り、王はそれを持っていた剣で何とか防ぐ。太刀の一撃はお世辞にも強力な威力と持っているとは言えなかった。圧倒的にパワーが不足している。だが 王は後退する。

後方へと跳躍すると、下り坂故にまるで一瞬宙を舞うように錯覚する。ふわりと大地へと降り、両足をしっかりと着いて大地を滑る。再び坂の上下で対峙した二つの影。王は未だに女に畏怖を覚えていた。

何故後退した？ 単純な事だ。“女の攻撃が見えなかった”

のだ。何となく来るかもしれない。ここかもしれない。そんなあてずっぽう、“勘”で防御をし、それがたまたま当たった。だから生きている。まだ生きている。しかし次は防げるか。王の今の能力ならばそれを完全に見切る事は出来ずとも目で追う事は出来るはずだった。しかし自分がどこまでの能力を持っているのか王は理解していない。それもそのはず、彼はつい数時間前までただの一般人だったのだから。

『王、だ、大丈夫……？ あの人……こ、怖いよ……』

「五月蠅いぞ、アルビノ……！ 少し黙ってる！」

『でもお……』

【剣】から聞こえる声に王は苛立ちながら眉を潜める。この剣を手にした瞬間から王の身体能力は人のそれを完全に凌駕した。五感の全てが研ぎ澄まされ、まるで別人に生まれ変わったかのような清しい気分だった。

しかし元々の感覚はあくまでも王本人の物でしかない。王は王なのだ。彼は今まで剣など手にした事もなく、こんな風に身体を動かしたわけではない。

全てが不確定なのだ。そして仮に何かをして、“やっぱり出来ませんでした”では済まないのだ。失敗すれば死。女は先ほどの攻撃、手加減などしているようには見えなかった。

「来ないのならばこちらから行くぞ」

声が投げかけられた。次の瞬間、数メートル先に立っていたはずの女が目の前で剣を振り上げていた。

息も出来ぬような一瞬の出来事に思わず後退する。女が振り下ろ

した剣は軽い。だが 受けたと思った次の瞬間には既に次の攻撃が繰り出されている。

まるで女の腕と剣が何本もあるかのような錯覚。一瞬の打ち込みで何故こんなにも衝撃が走るのか。壬は懸命にそれを防御し続けていた。反撃に移れる気配は 全く無い。

甲高い金属音が鳴り響く。何度も何度も刃を打ち合う、独特の音色だ。女の表情には何の揺らぎも無い。剣を握る手に汗さえ掻いていない。壬はその事実には気圧されていく。

『壬、大丈夫だよ！ 壬ならやれるよう……！ こ、この人……早いだけだもんっ！！』

「判ってる……！ こんな軽い剣、力で押し返してやるさっ……！」

と、踏み込んで大きく振り被った剣の一撃。しかしそれは思い切り空振り、空しく風を切る。女はどこへ？ 目だけで追うそのシルエットは壬の頭上を跳躍して跳び越え、大きく距離を離していた。

背後に回りこんでいた女を追うように振り替える。しかしその時には既に女は太刀を構えていた。だが おかしい。妙だ。それは届くはずがない。

両者の間合いは軽く見積もっても5メートルは開いている。勿論壬の剣は届かない。女の剣とてそれほどの長さはない 構えたところで剣は繰り出せない。そのはずだ。ならばどうして こんなに嫌な予感がするのか。

『壬、防いでっ！』

剣の叫び声。弾かれるようにして壬は剣を構える。

「天あまの 叢雲むらくもッ！！」

女が剣を空振った。しかし次の刹那、目には見えない斬撃の様な物が飛来する。壬はそれを剣で防いだつもりだった。しかし壬の体には巨大な切り傷がつけられ、次の瞬間血飛沫が上がる。

何故？ 何が起きた？ 考えが追いつかない。はつきりと判る事は一つだけ。壬は斬られたのだ。5メートル離れた距離から、女が片手で揮った一撃で。

『壬ッ！！』

剣の音がする。壬はよろけながらも何とか立ち続けた。しかしその前方。女は既に第二撃の準備を終え、壬を鋭く見据えて居た。

「よお、黒斗！ 珍しいな、こんなに早く教室に居るなんてよ」

明るい声でゆっくりと顔を上げる。つい先ほどまでの僕はきつと酷い状態だった。かなり早い段階で登校し、教室へと駆け込み、そのまま机に突つ伏して震えていたんだから。

でも、朋希の声を聞いたら少しだけ気分が紛れた気がした。なんだかんだで僕、こいつの事が好きなのかな……。ていうかなんで君、朝っぱらからそんな元気いいの？

「おはよう……」

「うお、すげえローテンションだな……。どうした？ 顔色悪いな。いや、顔色が悪いのはいつもの事か！」

なにやらちよつと失礼な事を言われている気がする。でもまあ、もう随分と長い間僕の顔色は悪いままの気がするし、あながち間違っていないと思うからいいんだけど。

学ランの中に引つ込めたネックレスはまだきちんと感じ取る事が出来る。それどころか身につけたらその熱さみたいなものもつと身近に感じられるようになった。別にそれで困る事は無いんだけど……なんだか嫌だ。

コンビニでのあれはなんだったんだろうか。何かの事件なのは間違いない。でもそれって僕には関係ないよね？ そう信じたい……信じてる。関係なんて、あつてたまるか。

ダンテがあんなタイミングで変なこと言うからそれっぽく聞こえるんだよ。なんでフラグ立てるんだよお……。そんなイベントじゃないよお。バットエンド直行便じゃないかあ……。

「おい、大丈夫か？ 前から危ない奴だとは思っちゃいたが、今日は輪にかけて危ないぞ……？ 具合悪いんなら保健室にでも行くか？」

「睡眠時間はバツチりだから遠慮しとくよ」

「ほんとかよ？ 何時間寝たんだ？」

「七時間くらい。なんだよもう、うるさいなあ……大丈夫だって言ってるじゃないか」

「そうか。本当にやばくなったら言えよ？ 家に帰るなら、送ってやるからよ」

そう言って朋希は自分の席へと移動していった。多分具合の悪い僕にあんまり話しかけないほうがいいという配慮なのだろう。彼は

いつもそういう細かい気配りが出来る人間だ。だからクラスでも上手くやってる。

でも僕はその朋希の気遣いみたいなものが嫌で仕方がなかった。同い年の癖に、朋希はどこか僕よりずっと大人びている気がする。朋希の事はずっと前から知っている幼馴染だけど……やっぱり下に守るべき人間が居るとああなるんだろうか。

僕らは同じ孤児院の出身だ。それで、暫くの間一緒の部屋で暮らしていた。それからお互い別々の家庭に引き取られて……この町で奇跡的に再会を果たした。

朋希は全然変わってなかった。でも朋希に言わせれば僕は十分変わったらしい。それでもこうして心配してくれるんだから間違いない。良いやつなんだろうと思う。

彼が伊雑町に住んでいる理由は複雑だ。本当ならばアクアポリスに住みたいんだろうけど……世の中そう上手くはいかない。運動神経が良くて運動部からも良く勧誘されていたけれど、あんまり断るものだから最近諦めたのかパツタリそんな場面に出くわさなくなった。

朋希も本当は部活とかしたいんだろうと思う。でも彼はバイトで忙しいから出来ないんだ。僕が部屋でエロゲーしている間、クラスの皆が部活したり遊んだりしている間、あいつはずっとバイトしている。それはちょっと凄いことだと思う。申し訳なくも思う。

でも僕にしてやれることなんてないんだ。以前僕も少しバイト手伝おうかなんて事を言った事もあった。勿論気紛れだ。本気じゃなかった。でもその時彼は本気でそれを断って、『余計な気遣いはするな』と随分怒ったものだ。

「……はあ」

でも今は朋希の事情より自分の事情だよ。この状況、一体どうすればいいんだろう。

結局名案は浮かばないまま時間が過ぎて行く。ダンテを捨てるわけにも行かないし……救いなのは授業中もずっとダンテはだんまりだったって事くらいか……。

一日が経つのは本当に早かった。別にそれは今に始まった事じゃなくて、ずっと前からそうだったけど。窓の向こうに見える晴れた空を流れて行く雲……。鳥の囀り。ノートをペンが走る音。ぼんやりとそれらを眺める。

ああ、世界が安定している……。そう実感する時、僕は心底落ち着いた気持ちになる。だから学校はそんなに嫌いじゃない。決まった事をしている分には学校は素晴らしいところなんだ。こんなにきちりと毎日毎日ローテーションのように繰り返す場所ってそうそうないだろうし。

でも学校が嫌なのはやっぱり人が多い事だ。人が多ければ多いほど複雑にフラグが乱立し、いつ地雷を踏むかわからなくなる。ああ、教室に僕一人だけで授業し続けたいよ……。

結局あつという間に昼休みになってしまった。といっても僕は朝弁当を作ってこなかったしコンビニにも寄れなかったし……あんなコンビニ金輪際絶対寄らないけど……。

休み時間独特のざわざわした空気の中僕は肩身の狭い思いで椅子の上でじつと縮こまっていた。本当に怖い……。一步動けば誰かの人生に巻き込まれるよう。危なすぎるよう……。

『おい、ちよつといいか？』

「わあああああつ!?!?」

思わず飛び跳ねて絶叫してしまった。ざわめきがピタリと停止し、クラス全体からのイタ〜イ視線が僕に突き刺さる。

そりゃ、だって、いきなり学ランの中から声が聞こえてきたらそうなるよ。慌てて僕は教室を飛び出し、一気に階段を駆け上がった。

そのまま屋上まで飛び出して周囲を見渡す。伊雑高校の屋上は一般開放されている。だから休み時間にはこうして人がやってくるし放課後になれば吹奏楽部がここで練習してたりする……そんなことはどうでもいい！ 僕は慌ててあまり人のやってこない貯水タンクの裏側に回りこみ、そこに腰を落とした。

「きゅ、急に話しかけないでよ……！ あと教室の中で声出さないですよ！！ 僕が変な人だと思われるじゃないかあ！」

『うむ、その事なら案ずる事は無い。お主、もう最初っから充分変な人じゃ』

うるさいなあああああ……。そんな事言われなくたってわかってるってば……。くっそう。

『幾つか言っておくべき事がある。まず、今朝の事件はお主以外の契約者の仕業と見て間違いないじゃろうな』

「その……僕以外っていうと……？」

『ええい、本当に面倒くさい奴じゃなあ……。良いか？ 【ディヴィナ・マズルカ】には十二人の参加者がいる。つまりお主以外に十人、お主と同じ状況になっておる者がいるのじゃ』

「なんて可愛そうな人たちなんだ……。同情するよ……」

『同情しているような余裕はないぞ。【ディヴィナ・マズルカ】は死神が開催する命を賭けたゲーム……。つまり、十二人の契約者の【殺し合い】なのだ』

「……」

今、なんて言った……？ 死神のゲーム……は、殺し合い……？
僕以外にも十一人もこんな目にあってる人が居る……？ それと
殺しあえって言うのか？

『お主の寿命は残り今日含め九日間しか残っておらぬ。これはゲームの開催期間が九日間である事に由来するが、それ以前にお主の【寿命】は既にそれしか残っておらぬのじゃ』

「なんでぞ……」

『死神のゲームから逃れられない為のルールの一つだと考えて貰って構わん。つまりお主は戦おうが戦うまいが、どっちにせよ九日後にはくたばっているという訳じゃ』

さ、最悪だ……。最悪すぎて何も考えられない……。なのにダンテは次から次へと捲くし立てる。

『今朝の事件はまあ……殺されたのは契約者ではなさそうじゃな。契約者同士なら、いくら開催直後と言えどもそう簡単に決着は着くまい。決着していたとすれば、それは余程契約者同士の実力に差があつたんじやろう。まあどうせ死んだのは一般人じやろうから油断は禁物だ』

「どうせ死んだのは一般人って……そんな。殺し合いは十二人でするって言ったじゃないか！」

『うむ。じゃがしかし、寿命は今この瞬間も減り続けておる。更に昨晚のように【ブリスゲーデ】を実体化させておけば寿命の消費は

更に加速する。これでは九日間も持たない。故に一般人をゲーデで殺し、その寿命を奪って 』

「ちよ……っ！！ まま、待った！！ 今すぐく大事な事サラっといつたよね！？ 何！？ 君を实体化させておくと僕の寿命が減るの！？」

『う？ そっじゃが？』

マジかよおおおおお！？ 一晚中实体化させたままだったじゃないかよおおおおっ！？ どうなってるの！？ 僕の残り寿命今どうなってるの！？

こんなネックレス見ても時間わかんないよおお！！ 炎の大きさで時間の経過を測るとかそんなプロフェッショナルな人とかトレジャーハンターとかじゃなきゃ出来ないような事一般人のキモオタにさせないでよ！！ ぜんっぜんわかんない！！ せめて一時間単位でいいからわかるようにしてよ時計じゃないよこんなのもうっ！！！！

『大丈夫か？ ぬし、時々変になるのう』

「変なのは君だよ！？ 君の所為なんだよ！！」

『ぬははっ！ 照れるのう』

っざっけんじゃねえよっ！！ このっ！！ このっ！！

『ちなみにゲーデの実体化を【イディアライズ】と呼ぶ。まあ、念じるだけでも出来る事じゃから一々叫んだりせずとも良い』

「誰がつ！ 叫ぶかつ！！」

「お主じゅーぶん叫んでおるぞ？」

だからそれは君が……ああああ話が進まないいいいいいい
！！！！

「兎に角ゲーデを^{イデアライズ}実体化させる事で契約者はその恩恵を得る事が出来る。ゲーデの力を使えば、一般人の虐殺など造作も無い事じゃ」

「……それじゃあ、僕以外の契約者があのコンビニの事件を起こしたって事……？」

「開催直後に行き成り喜び勇んで他の契約者や一般人に襲い掛かる奴も少なくなかるう？」

「ってことは……殺人鬼に僕も狙われるって事……？」

「おお、その通りじゃ。お主にそれを伝えようと思つてのう。我も中々親切なゲーデじゃろう？」

僕は無言で立ち上がった。もうダンテの話は聞かない事にした。

コンビニの事件がゲーデの契約者の仕業で、そのゲーデの契約者の一人である僕は命を狙われる……？ しかもあと九日間の間に寿命で死ぬ？ まるでリアリティがなくてどんな顔をすればいいのか判らない。

そうだ、だって実際僕はコンビニ事件で人が死ぬところを見たわけじゃない。もしかしたら最近流行りのアクセルとブレーキを踏み間違えた老人がたむろしていた若者の群れに突っ込んでハレルーヤって事になっただけかも知れない。

それにそもそもこのゲーデってやつは僕だけの妄想なのかもしれない。こんな中二病設定、考え付く方がどうかしてると思うけど……。大体、九日間で死ぬとか意味わかんないよ。だって僕はこんなにも健康じゃないか。

『どこに行くのじゃ？』

「……家に帰るんだよ」

屋上から戻り階段をゆっくりと下りる。自分の教室に入って荷物を纏めて鞆を背負う。戻ってきた僕をクラスメイトが危ないものを見るような目で見ていたけれど無視する。

学校を出てやたらと起伏の激しい道を歩く。ダンテがずっと何か喚いていたけれどガン無視した。そのまま部屋に戻り、扉に鍵をかけて鞆を放り投げてついでにダンテもベッドの上に放り投げて更にダンテの上に布団と枕とうさぎのクッションを乗せて封殺する。

そうしてPCの電源をつけてディスプレイの前に腰掛ける。ヘッドフォンも念のためにつけた。これでもう完全に妄想とはおさらばさようなら、猟奇的世界。ただいま、エロゲー世界。

「そんなの信じない……。僕は信じない……」

一生懸命そう自分に言い聞かせる。そうだ、危ない事なんて何もない。このまま部屋に引き籠もってればいいだけの話じゃないか。

このままずっとエロゲーかなんかやって……。クリアしたRPGでもやり直して……。そうだ、格ゲーのコンボを研究したっていい。時間を潰しまくってそれで 九日間過ぎれば判るじゃないか。こんな全部、ただの妄想だったって事が。なのにどうして。

「どうしてこんなに……。怖いんだ……。っ」

体の震えが止まらなかった。マウスを握る手がガチガチ震えていく。

僕は……怖い。怖いんだ……。信じたくないんだ……。死にたくない……当たり前じゃないか、そんなの。

「誰か……助けてよ……っ」

呟いた声を掻き消すようにエロゲーのOPがやたらと耳障りに流れてくる。

僕は目を瞑り、頭を抱えてしばらく泣いた。部屋に引き籠もっていればそれで助かる……そう自分に言い聞かせながら。

一日目：契約（3）

「いい子で待っててね、黒斗」

そう言って部屋を出て行く母親を見送り、僕は戸締りを済ませる。

夢を見ていた。それが夢だと僕にはハッキリわかった。何故ならば夢の中の僕はまだ十歳にも満たない子供だったのだから。

一人小さな体で部屋に戻る。そうして暗い部屋の中でテレビを見ていた。一人座り込んで部屋の隅、ずっとアニメのDVDを見ていた。

何度も何度も繰り返ししてみたDVD。その内容も、キャラクターの台詞も、一字一句忘れず覚えていた。でも、僕はそれを忘れたかった。忘れたかったから忘れようとした。一生懸命なかつた事しようとした。

でも、忘れられなかつた。毎日のように繰り返すその時間は気付けば僕という存在の中に深く刻み込まれて漱ぐ事の出来ない物になっていた。

だから僕は今でも部屋の中、一人でアニメを見続けている。夢だとわかっていても……何度でも繰り返ししてしまう。それが仕方の無い事だとは思わない。でも、僕にはどうにも出来ないんだ。

平凡な日常に突如として現れる変化はそれまでの積み重ねを一瞬にして全て台無しにしてしまう。だから僕は自分の人生がアニメのDVDみたいに繰り返しして行くものであれば良いのにと願う。

夢が終わりを告げるのはいつだって突然だ。扉を叩く音が聞こえてくる。トントン、トントン。それは次第に強くなって、僕の意識を覚醒させるみたいに。

「ッ」

目が、覚める……。

嫌な汗を掻いていた。いつもそうだ。同じ夢を見て、同じ汗を掻いている……。でもそれは僕が夢から目覚める事が出来たと言う証拠でもある。もう、あの部屋に居なくても良い……。その事実にはつとめる。

少し、パソコンの前で寝ていたらしい。ちょっと泣いたから、疲れたのかも知れない。そのまま眠ってしまったのだと思う。振り返ってベッドをみると……。ダンテが封印されていた。毛布やらクッションやらに押しつぶされ、ダンテは封殺されている。

まあ、そうなるようにしたから当然なんだけど……。少しだけ悪い事をしたような気がする。あんなんでも、女の子だし……。しかも幼女だ。うさぎのクッションで封殺は……。少し、やりすぎだっただろうか。

「……ダンテ」

小さく名前を呼ぶ。余りに小さすぎて聞こえなかったのかもしれない。僕は何となく寂しくなって　ダンテの声が聞きたくなって、うさぎのクッションに手をかけた……。その時。

突然、部屋の扉をノックする音が聞こえた。思わず背筋をぴんと張ってしまふ。首がまるで錆付いたみたいに良く曲がらない。振り返って扉を見やる。ああ　おかしい。

僕の部屋に訪ねて来る人は僕が知っている限り二人しかいない。でも……。こんな時間に訪ねて来るだろうか？　時計に目をやる。時刻は午後　七時過ぎ。

思わず息を呑む。新聞の勧誘……。？　なら、断れば済む話だ。いや、そもそも部屋は真っ暗なんだ……。居留守を使えばいい。誰も居ないと判れば居なくなるはずだ。

気付けば自然と僕は息を殺していた。勿論ここに居る事を悟らせない為だ。早くどこかへ行って欲しい……。ほうっしておいて貰いたいだけなんだ。なのに扉を叩く音は鳴り止まない。思わず僕は両手を耳に当てた。

早く……。早くいなくなつてほしい。そうしてああ、ただの新聞屋だったんだつて安心させて欲しい。だつておかしいじゃないか……。朋希なら……。もうとつくに僕に声をかけているはずなんだ。

おーい、生きてるかーとかなんとか言つて……。そうしなきゃ僕が出てこないつて知ってるから。なのになんで扉の前の誰かは居なくならないんだ。なんで呼びかけてこないんだ？　なんでいつまでもいつまでも、ドアなんかノックしてるんだよ　！？

「はあ……。はあ……。っ」

おかしい……。いつまでいるつもりなんだ？　時計に視線をやる。さつき時計を見た時から五分くらいしか経ってない。もう一時間はここにいるような気分だ。

最悪だ……。さつさとどっかいけよお……。僕は部屋から出たくないんだよお……。くそ、くそくそくそくそくそおっ！！　なんだよっ！！　なんなんだよおっ！！

「ダンテ……。ねえダンテったら……。っ！！」

クッションをどかし、ネックレスを手に取る。ダンテに一生懸命に呼びかけるのに、ダンテは一向に伝えてくれる気配もない。

なんなんだよこいつ！　いらぬ時は喋り出すくせに、いざとなるとうんともすんとも言わないじゃないか！　それともなんだ……。何か僕が間違つてるのか？　ダンテを呼ぶには何か儀式が必要とか……。例えばこう、鶏の血を生贄に捧げるとか……。

駄目だ、ノックの音が無視できない。くそっ、顔を出して一言文

句を言つて……それでいいじゃないか。どうせしつこい新聞屋だから宗教勧誘だかなんだ。そうに決まつてる。だつて僕はここから一步も出てないんだぞ。学校にちよつと行つて、しかも早退したただけなんだ。なのになんでここがわかるんだよ……そんなわけないじゃないか。あるわけないよ 殺人鬼なんて ！！

ゆつくりと扉に向かつて進む。ドアノブを握り締める。真冬のドアノブはとても冷えている。なのに自分の手の熱でどんどん熱くなっている気がする。もう一度、息を殺して深呼吸する。鍵はかかっている。わかるはずない。殺人鬼はずない。

コンビニの景色が脳裏を過ぎる。開ける 開けてしまえ！ それで全部楽になる……くだらない妄想だつて気付く。開ける。開ける、開ける、開ける ！

ガチャ。

扉はあつけなく開いた。余りにもあつけなく。だから僕は多分間抜けな顔で来客を見ていたのだと思う。

そこに立っていたのは長身の女性だった。長い黒髪を背後で括り、ポニーテールにしている。凜とした視線、細身の体躯 更に服装がダークスーツという事もあり、なんだか男性のような力強ささえ感じる。

けれど、やつぱり女性だ。胸が思い切り自己主張している。しなやかな指も、艶やかな唇も、彼女が女性である事を示している。兎に角女性 スーツの女性がそこに立っていた。

「あ……の……」

人違いじゃないですか？ そう言おうと思った。こんな人知り合いなにかじゃない。僕の部屋にやってくる事は見当違いというやつだ。全く無関係な世界のお人のように見える。しかし彼女は僕の言

葉を遮り言った。

「お前……ではない、か」

「は……？」

意味が判らなかつた。それは……やっぱり人違いだったって事？
だとしたら納得だ。僕は違う。この人が探しているであろう人と、僕は全く関係ないはず。

なのに彼女は暫くの間口元に手をやり、僕をじつと見詰めて黙り込んでいた。それは何かを思慮しているように見える。なんだか観察されているようで酷く居心地が悪く……僕は視線を反らして前髪に手をやる。

「あの……人違いなら、僕はこれで……」

「君は命を狙われているのか？」

「へっ？」

思い切り素っ頓狂な声を上げてしまった。急にこの人は何を言い出すんだろう。思わずどきりとしてしまった。まるで僕の考えを見透かされたみたいなきがしたから。

でも本人はいたってマジといった感じである。真剣な表情で、嘘がつけなくなるような誠実な瞳で僕を見詰めている。何故か釘付けにされたように視線を反らす事が出来ず、生唾を飲み込んだ。

「自己紹介が遅れたな。私は九頭龍 斬子……。【デイヴィナ・マズルカ】の参加者だ……といえは通じるか？」

「デイヴィナ」

なんだっけその単語。なんか最近聞いたような気がする。ああ、デイヴィナ・マズルカ。十二人の契約者の、殺し合い、の。

「う……わああああああっ!？」

絶叫しながら扉を閉める。慌てて鍵をかけて纏れそうになる足で懸命にベッドまで引き返した。ダンテを拾い上げ、握り締めたまま周囲を見渡す。

逃げなきゃ……。逃げなきゃ殺される……。どうやって僕の居場所を知ったのかは知らないけれど兎に角あれが殺人鬼なんだ！
！ それで、僕を狙ってここにやってきたんだ……。デイヴィナなんたら参加者だから、そんな理由で僕を殺す為に　！！

嫌だ、死にたくない……。痛い思いはしたくない……。誰だっけそうじゃないか。僕は強くない……。弱いんだ。僕は弱いんだっ!!
命なんて絶対に賭けたくない。でも、どうしたらここを脱出出来る……。ここ、二階なんだよ……。落ちたら怪我するかもしれない……。どうすればいいの……？

『ふわああああ……。ああ、良く寝た……。ん？ なんじゃ？ 何を慌てておる?』

「何をあわて……。君、ね……。っ!？ 寝てたのおっ!？」

『うむ。それよりもぬし、クッションで押しつぶすとは酷いではないか！ 感覚がないから良いものを、あるものならギュウギュウにされてとつても苦しいだろう!』

「それどころじゃないんだよ今はっ!! 部屋の前に、【デイヴィ

ナ・マズルカ】の参加者が来てるんだ！！ 契約者が来てるんだよっ！！」

『本当か？ ふーむ……。まだ見つかるには余りにも早すぎるな。となると、探知系の特殊能力を持つゲーデの使い手か』

「そんなのはどうでもいいよっ！！ ねえ、どうしたらいいの！？ 君、僕のパートナーなんでしょ！？ 契約とかしたんでしょ！？ だったら助けてよっ！！ 死にたくないんだよ、僕はっ！！！！」

思い返せば恐ろしい顔つきをしていた。何が凜とした瞳だよ。あんなの快樂殺人者特有の若干やばい目つきじゃないか。きっとあの黒い服も返り血を目立たなくする為のものなんだ。くそう、くそうくそうくそうっ！！ 女なのになんであんなに背高いんだよ……。怖いじゃないかあ……。っ！！

『とりあえず落ち着け。説明している時間が惜しい。とりあえずそうじゃな。窓から飛び降りろ』

「飛び降りろって……」

窓辺に駆け寄る。迷っている時間が無いのはわかる。カーテンを開いた瞬間、明るい月明かりが差し込んでくる。ベランダから下まで何メートルくらいあるだろう……。？ 2メートル？ それとも3メートル……？

無理だ……。足の骨が折れる……。ジャッキーだつて怪我するつて言っただじゃないか……。僕みたいな運動オンチのヘタレなキモオタがこんなところから飛び降りたら打ち所が悪くて首とかおかしな方向にグロく捻じ曲がって死んじゃうよ……。

『大丈夫じゃ、どうせ二階から飛び降りたくらいじゃなんともあるまい』

「な、なんともあつたらどうするのさ……」

『ええい、モタモタするな！ 良いから黙って言う通りにしろ！』

「くそ……っ！！ 足が折れたら訴えてやるからなあっ！！ くそ、くそ、くそおおおっ！！！！」

目を瞑る。足が震える。二階から一階に降りるだけ。子供の頃は馬鹿みたいにやったじゃないか。昔は平気だったじゃないか。なんでそれだけの事でこんなにも恐ろしい……？ なんでこんなにも、死にたくないんだ。

ネックレスを首から提げる。僕はもう涙目だった。鼻を嚙りながら窓の縁に片足をかける。その瞬間、背後であの女が扉を蹴破ってこちらを見詰めているのが見えた。

それが後押しになり、僕はそのまま二階から一階へと飛び降りていた。ふわりと重力の中に放り投げられる感触。気持ちが悪い。ジェットコースターだって余裕で吐くのに。なんでこんな、シートベルトもないような　　ッ！！！！！！

「っつっ！！」

二階から一階へと降りる。幸い着地したのは芝生の上だったからそんなに足は痛くなかった。立ち止まっている暇は無い……そのまま転がるようにして僕は駆け出した。

アパートの敷地から飛び出し、海沿いの坂道を走っていく。外灯も所々にしかなくて、しかも半分くらい壊れているようなどうしよ

うもない薄暗闇の中、海の方こうでキラキラ輝いているアクアポリスのネオンを背景に坂道を下り続ける。

足が縛れる……。裸足で走るから、足が痛い……。なんでこんなにジャリジャリしてるんだよこの道路　　！！

「国土……交通しょおおおおおおっ！！！！」

『それは呪文か何か？』

「ダンテえっ！！　どうすればっ！！　どうすればっ！？」

『ん、早いな……。もう追いついてきおったぞ』

「え……？」

振り返るともうすぐ傍までさっきの女が近づいてきていた。足の速さが　尋常じゃない。オリンピックメダリストも目玉が飛び出るような速さで猛追してくる。追いつかれるまであと何秒も必要ない。なんであんなに　足が速い！？

そして気付く。女が手にしていた物　それは太刀だった。たち。太刀。太刀　冗談じゃない。なんで刀剣持ち歩いてんだよ！？　おかしいだろ！　おかしいだろおおっ！！

「警察つっつっつっつっつっ！！！！」

『詠唱には遅すぎる……！！　来るぞっ！！』

意を決して振り返る。そこでは既に女が刀を振り上げていた。駄目だ、死ぬ……。これはどう考えても死亡フラグ成立だ……。鬱ゲー乙……。そんなレビューをかかれるような……。あからさまな死亡フラ

グ多発ゲーム。

僕は、どうなる？ 振りかざされた刃物が本物だっという確信がある。僕はこのまま肩から袈裟に切られて呼吸もままならないままのた打ち回り、死んでしまっつて確信がある。まるで一度クリアしたルートをもう一度通っていると思うくらい…… 確実な未来がある。嫌だ。死にたくない。終わりにたくない。こんなの嫌だ。痛いのは嫌だ。苦しいのは嫌だ。怖いのは嫌だ。辛いのは嫌だ。死ぬのは嫌だ。死ぬのは、嫌だ　！！

コンビニの景色になんかたりたくない。噂話の中心になんかたりたくない。誰かの思い出になんかたりたくない。だから　誰でもいい。この際神様でも死神でも構わない。僕を助けて…… 僕を生かして……！！

『目を開け、契約者！！ 死にたくないのならば足掻け！！ 誰の為でもなく、お主自身の為に　ッ！！』

思考の合間は一秒足らず。ならばこの胸の輝きが放たれたのは何秒足らず？

燃え盛るような紅蓮の炎が身体を覆いつくして行く。僕の目の前、女が振り下ろした剣は何かに防がれていた。眩い輝きの果て、僕は自らが手にしていた力の形を知る。

それは、美しすぎる純白の盾　。
それは、大きすぎる無骨な刃　。
それは、煉獄の炎を体現したような、胸の熱さを誘発するような巨大な“剣”　。

「……………【ブリスゲード】……………」

思わず口にした言葉。そう、彼女は自らをそう呼んでいた。【ブ

リスゲーデ」……それは、僕が契約したモノの名前。僕が契約したモノ……それは、赤い髪の変な格好をした女の子。それは、紅蓮の炎を纏った、白銀の剣。

ブリスゲーデ。僕はその言葉の意味を理解する。それは僕の手中で重さも感じさせないままに女の太刀を防いでいた。呆気にとられながらも僕は剣を体ごと前に突き出し、女の剣を弾き返した。

そんなに力を込めたつもりはなかった。姿勢も無様だったろう。でも、女はあっけなく吹っ飛ばされた。空中に浮かされ、慌てた様子で着地の姿勢を整える。女は片膝を付きながら大地をすべり、漸く勢いを殺して立ち上がった。

「え……？ え？」

まるで車か何かには跳ね飛ばされたみたいだった。でも、それはおかしい。僕は軽く押し返したただけだ。やめて欲しかったから衝いただけだ。それにもし仮にそんな衝撃でぶっ飛ばされたら、あんな風に平然と立ち上げられるはずがない。

「そついえば、名を訊くのをおつたな」

剣から声が聞こえてくる。それはもうなんだか馴染んでしまったダンテの声だった。

『我が名はダンテ……。契約者よ。ぬしの名前を訊かせてくれんか？』

「僕は……」

剣を構える。重さは感じない。それどころか全身が驚くほど軽い。今なら体育だって“5”が取れる自信がある。不覚深呼吸し、それ

から女を見据えたまま震える声で答えた。

「黒斗……。朝霞あさか 黒斗くろと」

『ほう。では黒斗……我らは漸くスタートラインに立ったというわけじゃな。ま、今後ともよろしく頼むぞ』

「今はそんな事言ってる場合じゃないんじゃないっ！っ！」

『いや どうもあちらは既に戦うつもりは無いようじゃ』

ダンテの声に女を見詰める。女は既に刀を降ろしていた。そうして先ほどの猛ダッシュとは異なり、ゆっくりと歩いてくる。その動作に敵意のようなものは感じ取れなかった。

いや、でも信用出来ない。行き成り不意打ちを仕掛けてくる可能性もある。構えは解かない。不確定要素と対峙する時は より安全な選択をする。

女は剣を片手に僕の前に立っていた。この大剣 【ダンテ】のリーチはせいぜい2メートルくらいだろうか。いや、僕の腕の長さがあるからもうちょっと行くだろう。兎に角、女が近づいてきた間合いはダンテの射程距離よりギリギリ外側……僕に襲い掛かられても回避出来る距離だった。

「行き成り斬りかかってすまなかった。だが、他に確かめる方法も無かった上に……我々には時間が無い。多少の無茶には目を瞑って貰いたい」

「……………多少の……？ それで僕は死に掛けたのに……？」

「だがお前 いや、君も随分と強く私を打っただろう？ お互い

異能の存在と成ったのだ。そのくらいの事は大目に見てくれ」

納得はいかなかった。でも、話を聞くことにした。この人のいう事は……全くの嘘っぱちでもただの言い訳でもない。客観的な事実を述べているだけだ。

僕は確かに今、手加減が出来る気がしない。思い切り剣を振り下ろしたらどういふ事になるのかもわからないんだ。出来るはずも無い……。彼女も契約者ならば、力を手に入れたのはどんなに早くても昨晚……。慣れているはずも無い。

「単刀直入に今日私がここに現れた理由を話そう。一つ目……君の正体が昨日の連続殺人犯か確かめる為。二つ目……君が連続殺人犯に狙われているかもしれないという情報入手した為」

「え……？ ちょ……？」

「一まずは刃を収めて話をしよう。【ブリスゲーデ】を剣の状態にしておけばその分寿命が減る……。お互い、短い残りの人生だ。有効に活用すべきだろう」

「あ……」

そうだ、すっかり忘れていた。消し方は教わっていなかったけれど ダンテが消えるように念じると剣は瞬きの合間に消えてしまった。彼女の方へと視線を向けると、彼女もまた刀を既に消滅させていた。

剣を消しあつたという事もあり、少しは安心して近づく事が出来る。僕らはお互いに歩みを進め、お互いの距離を１メートルほどまで絞った。

「改めて名乗ろう。私は九頭龍 斬子……。君と同じく【デイヴィナ・マズルカ】の契約者として選定された一人だ」

「……朝霞 黒斗」

「……そう、構えないで欲しいな。別に私は君を取って食おうとしているわけではないんだ。ただ、この死神のゲームに巻き込まれた人間として……その秩序を守りたいだけだ」

そう語る九頭龍……？ さんの、表情はどこか浮かないようだった。でもその理由は何となく判った。話の流れから推測するに……例のコンビ二殺人事件。あれをやったのは、僕らと同じ【ブリスゲーデ】を持つ契約者なんだ……。

そして彼女は殺人犯を探している。つまり彼女の言うゲームの秩序っていうのは、部外者の殺傷を阻止する事……？ でもどうしてそんな……。僕らは殺しあわなきゃいけない……そういうルールなんじゃないの？

だったらどつちみち誰かを殺す事になるんだ。なのに関係ない人は殺さないなんてそんなのはただの偽善じゃないか。この人の言いたい事は判るけど……。いや、何か理由があるのかもしれない。話は最後まで聞こう。

「君のゲーデから話は既に聞いているかもしれないが、このゲームは一人しか生き残る事が出来ない。そしてゲーデを使用し、人間の領域を踏破する能力を行使することにより、私たちの寿命は減って行く。次から次に、な」

彼女は腰から下げた何やら胡散臭い骨董品のような時計を手に取り見せてくれた。どうやらあれが彼女の時計らしい。和風な作り、針が指し示すのは漢数字の一から十二だ。

僕の時計は……本当にろくにあてにならない。ああいう形の時計だったらどれだけわかりやすいだろう……。なんとなくダントを恨めしく思う。

「だが矛盾が生じる。このゲームの開催期間は九日間……。だが、力を使えば使うほど九日間生き残る事は出来なくなる」

言われて見ればその通りだ。生きる為にゲーデを使い、でもその所為で寿命が減ってしまつてくたばつちやつたら意味が無いじゃないか。矛盾してる……。戦えば良いのか、戦わない方が良いのか……。

「故に寿命を補給するルールが存在する。知らないのなら 自分のゲーデに訊くといい」

あまり自分の口からは説明したくない……。そんな雰囲気バリバリに感じられた。嫌な予感がする。いや、もう随分前から……。良い予感なんてひとつもないけど。

「兎に角、暫く家から出歩くのは控えた方が良い。私から言える事はそれだけだ」

「……………」

「君にも忠告しておく。私利私欲の為に人を殺すような行いだけはするな。そんな事をして、得られる物など何も無い」

そう告げて彼女は踵を返す。僕に背を向けた次の瞬間、彼女は闇の中へと走り去ってしまった。何となくこれから……。その、殺人鬼を探しに行くんだらうと思った。

僕は暫くその場に立ち尽くしていた。他に何もいえそうな事はな

かった。あの人はきつと僕らの知らない所でこれからも頑張るんだろ。それは良いことだ。でも……絶対に真似はしたくない。

部屋から出るな……ああ、その通りだ。忠告ありがとう。でも、君は僕の部屋まで来たじゃないか……。僕は君を……殺すべきだったんだ……。

額に片手を当てる。居場所が知られてる。たった一人しか生き残れない戦いの、その参加者に……。絶体絶命じゃないか。最悪だ。どうしようもない。僕は どうすればいい？

『さて、これからどうする？』

ダンテがネックレスからそう語りかけてくる。僕は齒を食いしぱり、手を握り締め、目をきつく瞑った。そんな事言われたって……。僕にはそんなの、決められないのに。

「 汐織。ここからはお前一人で帰れ」

目の前にいる“普通なら見えない筈の”女性を見つめながら言う。肩から吊るした白いワンピースのみを羽織った、光を纏う麗しい女性。砂金のように流麗な長髪を風に靡かせ、佇んでいた。閉じられた瞳に被さる睫毛は長く美しく、鼻、唇、どれをとっても非を打てない。まるで。

女は自分の胸の前で腕を組み、目を閉じ、まるで祈っているかのように俺に僅か頭を垂れている。

「え、どうしたの？ 麗ちゃん。何か、麗ちゃん……変だよ？」

「良いから！ 帰れ」

怒気を込めた、脅しを為す声で持つて汐織へと訴えかける。汐織が俺の様子を見てうろたえていることなど声色だけで十分に分かる。だが昂りは収まらない。そんなことには気は回らない。

謎のフードの男、銀時計、目の前の女。それらは正しく俺の日常を壊して回る蹂躪者だ。

「……分かった。……じゃあね、麗ちゃん」

横目で、何度か振り返った汐織が立ち去るのを確認し、再び目の前の女へと向き直る。

見れば女は既に顔を上げ、俺の顔を見据えていた。エメラルドのような緑の瞳に俺の姿が映り込んでいる。

見れば見るほど、不思議な空気を纏った存在だった。容姿その物

は人間と瓜二つだというのに、目の前の女はとても神秘的。

そうまるで　女神のようではないか。

質素な格好に身を包んだ、慈愛に満ちたどんな人間も愛する存在。そんなことを、俺は勝手に感じていた。

「　私が、貴方の剣となり楯となる　【ブリスゲード】です。どうか、共に……」

「ブリス、ゲード　」

復唱する言葉に頷きで返し、手の平を空に差し出してくる。それは服従の証、主へ傳かすく意思表示。

細くて、白い綺麗な指を俺に向けている。それを迷いなく取ると女は、手の甲に口づけをしてきた。

甲に聖餐な感触が廻ると、やがて女はゆっくりと唇を俺の手から離した。それと同時に、握っていた手も離す。

開いた瞳を、俺に真っ直ぐ向けてきた。

「名を」

「……姫桜麗夜」

「私は、クレインクライン。　私が貴方を、お護りします」

途端に、ガラスが割れたような音がした。

クレインクラインの胸の中心に輪郭の淡い光の珠が現れた。直後にそれは強烈な光を放出する。クレインクラインだけでなく、俺までも包み込む光量。街を包むイルミネーションよりもさらに輝くそれは、まるで夜に浮かぶ太陽のよう。　。　やがて、光が収束する。

開けた視界に自分の手を見れば、握られた物はひと振りの剣。それは銀色の片刃が背を反り、その先端と柄が赤い筒で結ばれている奇妙なショートソードだった。

握ったその手に不思議と重みは感じず、まるで腕の延長のように不思議と馴染む。

一度、地面に向けて振り下ろした。確める為に、“腕”の動作を。刃の軌跡はイルミネーションを反射させ、まるで虹色であるかのような軌跡を描く。

耳には、自身の鼓動が響いていた。高鳴る鼓動を深呼吸で押さえつける。

そうだ。遂に 遂に壊れたんだ、俺の日常が。不確定要素、未知数、想像不可能な現実がやってきた。

間、彼女は剣の姿となっても語りかけていた。事のあらまし、この残酷なゲームのルールだと言ったもの。

何処か嘆くように沈んだ声で語る彼女とは逆に、俺は口の端が上がっているのを自覚していた。

まさに俺は【デイヴィナ・マズルカ】という遊戯ゲームの当事者。俺がこの物語の主人公。誰も邪魔はさせない。そして【デイヴィナ・マズルカ】は 俺が必ず勝ち残る。

睨む眼光、その奥、視界の遠く。ビルの電光掲示板の下、佇む男は奇怪な闇に紛れるような深い黒に施された大剣 形状としてツヴァイハンターを手に持った男がいた。

スーツに身を包み、剣先を地面へと付けている様は奇妙その物。日常と溶け込んでいない非、日常。

【デイヴィナ・マズルカ】の参加者は【ブリスゲーデ】という剣を所持するという。俺と同じ、この剣を持っている。彼女は言っている。参加者は殺し合ってしまうもの。

「 なら、あそこにいるアイツは……俺が斬っちゃっても良いんだよね? 」

麗夜は夜を駆けた。街中を照らすイルミネーションの中、彼の携えた銀の刃は色彩豊かな反射を施し、まるで色鮮やかな線の軌跡を残して空間を移動していく。

その速度はまさに人外。獣ですら、追えるのだろうか。

剣を後ろ手に駆けるその様は、まるで血に飢え目を光らせる黒豹のよう。それを見る者は皆、身を震わすだろう。

「ハハツ！　すげえ、すげえ、すげえよッ！！！」

だが、驚きを隠せないのは本人も同じ。まるで自分の躰ではないかのように軽い躰。足の踏み込み、重心移動、地の蹴り方。何もかもが一新された麗夜の動きは、戦中の歴戦者のような身のこなしを持って、スーツの男へと近づいていく。

剣を見下ろし我を失っていたスーツの男　沖田竜次は弾丸の駆けてくる少年の姿に気づき、驚きに朦朧とした眼で麗夜を捕らえた。絶望と恐怖と、混乱に満たされた彼の心は冷静に事態へと対処が出来ない。

『お前、殺されるぞ！　早く俺を構えろ！』

何処からともなく響く声。それは紛れもなく竜次の持つツヴァイハンターから聴こえてくる。その声にまた竜次は狼狽し、顔を少年と剣に振り続けるが、

『莫迦かッ！　お前は！　死にたいのか！？』

数十メートル以上あった麗夜と竜次との彼我の距離は何処へ。既

に十メートル圏内へと、麗夜は一息で辿り着いていた。麗夜が片手で剣を振り下ろし、竜次の身を切り裂くのはもはや数瞬後の現実だ。ゲーデから発せられた“死”という恐怖のワードに、またも竜次は思考を混沌とさせる。ありとあらゆる思考と感情に埋め尽くされ、竜次が取った行動は

「俺は 死にたくないッ!!」

生命としての防衛本能。俯いていた竜次は、丁度辿り着き振り下ろした麗夜のゲーデへ目掛けてツヴァイハンターを独楽のように回転させた。

服の裾を柵引かせ勢いよく振り下ろされた麗夜の剣と、自身を中心軸として遠心力を伴って回された竜次のツヴァイハンターは、火花を撃ち爆ぜて接触する ！

二人はその衝撃に息を呑む。麗夜は剣を弾かれ、竜次は勢いを殺されその巨大な剣は停滞した。

「まだだッ ！」

弾かれた剣をもう一度、今度は両手を沿え、更に力を込めて振り下ろす。しかし銀の弧を描いた麗夜の剣は、躰の前で構えたツヴァイハンターに阻まれる。

鏝迫り合い。両者はそのまま刃と刃を甲高い音を響かせて押し付け合う が。

「駄目です！ 退いて下さい！ レイヤ！」

「そのまま弾け！ 竜次！」

その二つの声により状況は一変。竜次はツヴァイハンターを麗夜

の体へと押し出した。

「えっ　？」

それだけで、いとも簡単に麗夜の剣は浮いてしまう。麗夜が相手の剣にへばり付かない奇妙な感覚、まるで玩具の様に存在が軽いと錯覚した直後に、鏑迫り合いという状況はなくなっていた。

イルミネーションを受けて光る竜次の刃を見て、麗夜は背筋に寒気を走らせる。それは今まで麗夜が生きてきて感じたことのない、死というものを予感した虫の知らせ。

背に走る雲の様な悪寒を押し退けて、麗夜はその場から飛び退いた。実に一メートル以上、後ろ向きで後退した　直後に。嵐の様な轟音を鳴らしながら、竜次のツヴァイハンターは空気を両断した前に流れた麗夜のマフラーが断ち切られる。……後退が遅ければ、麗夜自身がああなっていたということ。

「……………」

その事実にも、麗夜は一筋汗を流した。背中にはまた蜘蛛が這っている。だけどそう、感じるのは悪寒だけではなく　性感にも似た昂り。その蜘蛛も、悪くない。

「　ははっ」

麗夜の口から笑い声が漏れる。何という非日常。何という非現実。これだ。これだ。これだこれだこれだこれだこれだこれだ！　これだ！　俺が求めていたのは。

さあもう一度、と剣先を竜次に麗夜は向けると、

「ひ、ひいいいいい！」

と、相手は腰を折りながら走り去って行ってしまふ。手放したツヴァイハンターは霧のように胡散して中空に消え失せていた。

「　　ッ！　　待て、てめえ！」

剣を鳴らしながら、麗夜は重心を前へと追撃する為に傾ける。

麗夜としては逃がす手はなかった。【デイヴィナ・マズルカ】という恍惚に至るような愉しい遊戯ゲームが始まって初めて見つけた“獲物”だ。昂りを消化させると、ココロが訴えてくる。折角手に入れたこの力を使いたくて仕様がないうのに　　何故か、麗夜の視界は霞んだ。足が固まった。……固まる、というよりは足が無い感覚。脳が指令を出しているのに足に神経を通して伝達しない。剣を握る握力も既がない。何だか、麗夜は骨抜きにされているような、そんな錯覚を覚えていた。

その体全域の脱力に抵抗出来ず、麗夜は前のめりに倒れてしまふ。腹から無様に、受け身など一切取らずに。強い衝撃を、麗夜は体接受了。

朦朧とした意識の中、麗夜はコンクリートの冷たさを感じる。だがその感覚も直ぐに失せ、麗夜の手から剣が零れ落ちた。

『　　レイヤ！？　　レイヤ！？　　』

感覚すら消えゆく自身の中、麗夜は確かに宝石の様な澄んだ声を、何度も聴いていた。

「　　へえ……【ブリスゲーデ】に【デイヴィナ・マズルカ】……か」

「……うん」

まるで高級ホテルの如き豪華な内装、そんな部屋の中、下着が見えるような短い赤のスカートを履いた女性は、またも装飾を施された広いベッドに腰掛けていた。足を組み、その上に肘を立てて目の前にいる人物を見据えている。

その前にいる人物というのは、人物の背の低い容姿も相まって、ある意味で部屋へと妙に馴染んでいる服装をしていた。

フリルのついた丈の長い黒を基調としたドレスを身に纏い、頭には同じデザインのカチューシャを付けている。

人間にしか見えないけれど人間ではない。そんな境界存在。純と非の日常の中間点。

そしてドレスの彼女は、ベッドに座る女性が向けてくる目に困ったように、幾度となく視線を泳がせていた。

ミニスカートの女性は数分前、ベッドに寝転がり、並んで買わなければ手に入らない少数売買の高級ショートケーキを頬張りながらテレビでドラマを見ていた。だが突然、キス間近の美男美女は黒いフードの男に変わってしまった。

怒りに震えながらリモコンを操作している所、手首に見知らぬブレレット型の時計が付いていることに気づく。そしてその直後に、そこから見知らぬ女性が出てきて、今に至るといふ訳だった。

そんな摩訶不思議な状況が起きたというのにうろたえる様子が殆どなかったのは、肝が据わっていた故か。それとも。

顎に手を当てながら数秒。女性の口元は不意に歪む。

「……良いじゃない」

「え？」

驚いたように黒ドレスの女性は顔を上げる。

予想外の言葉だった。黒い装束に包まれた謎の男に告げられただけで、日常に突然現れた自分と、そして自分が話した内容だけで目の前の女性は納得し、受け入れてしまったのだ。もはや、微笑すら携えて。

何故こうも自然でいられるのか。女性は恐らく“前”と“後”では何も変わっていないのだろう。強い、ただそれだけなのだろうか。

「面白そうね。喜んで招待させてもらおうわ」

あろうことか、スカートの女性は今はもう誰も映っていない液晶テレビに向かって言葉を投げかけた。

言葉とともに表情に表れている笑みには、とても妖艶なものが伴っていた。意志の強さ、芯の強さ、自身の強さ。そんなものをその笑顔から感じることは容易であった。

宣戦布告。参加者だけではなく、先程の“主催者”にすら向けた挑発の意。それは彼女の“気”の強さというものを、強く、ドレスの女性は感じていた。

さて、と彼女は目をテレビから外し、正座しているドレスの女性へと目を向けた。

「……それじゃ、自己紹介しようか？」

なんて、晴れやかな笑顔で首を少し傾けながら言う。少し前に体を傾けて、

「私は神貴澄華^{かんぬいすみか}。貴方は？」

「わ、私は……ティルヴィング」

「そう、じゃあ……そうね、ティルね。よろしく、ティル」

眩しい太陽のような笑顔で差し出された握手に、戸惑いながらもテイルは応じる。が、

「あれ？」

二人は握手は擦れ違ってしまった。不透明でも、足が無いわけでもない。まるで人間ののように体がある、と見えるのにそれは触れなかった。手が通り過ぎた時、空気の変化すら感じない。

その状況は誰が何を言わなくとも、現実にはいない非現実 だが現実にある境界の存在だということを如実に語っていた。

「あ！ す、すみません。……【イデアライズ実体化】していないので、触れられないのでした……」

正座した股の間に両手を入れて、テイルは俯いてしまう。

本来なら、何も知らない【契約者】を「ブリスゲーデ」であるテイルが導かなくてはならないのだが、如何せん上手く行っていない。テイルはもはや【契約者】にリードされる始末。それも人前に出るのが苦手というテイルの性分に他ならなかった。

そんなテイルを見て、澄華は微笑んだ。

「よろしく、テイル」

「よ、よろしくお願いします……スミカ」

「ちゃんと、説明してもらおうよ？」

手を交わす挨拶の代わりに、笑顔を交える挨拶を二人は終えた。

肩で呼吸をする青年が夜の街にいた。

ゴミの散らばる異臭を放つ裏路地で、汚れなど気にせずにはズツのまま壁へと背をもたれ、肩を上下する男　竜次がいた。

竜次の思考はぐちゃぐちゃにかき混ぜられていた。

絶望に身を沈めていた時、不意に表示されたあの電光掲示板。街中のモニターが一斉に点くその様は、まさに不気味だとしか表現できない。

現れた奇怪なフードの男、奇怪な言葉、奇怪な声。そして　奇怪な少年。

何もかもが竜次の思考を凌駕し、飲み込んでいく。落ち着いて考えてなどいられる状況じゃなかった。

もはや息をすることも困難なほど。それは先程まで少年から必死に逃走していたからだけではなく、想像を上回る現実に関体がついていけないだけ。

「何なんだよ……アイツはあ！」

足元の缶を感情に任せて踏みつける。アルミで出来たその缶は、踏まれた竜次の足に殆ど抵抗なく形状を変化させた。路地裏に、その踏みつける音だけが煩く響き渡った。

まるでただをこねる子供の様に、その感に鬱憤をぶつける。その姿を見かねてか、竜次の付ける革ベルトの腕時計から溜息の様な音が漏れた。

『だから【デイヴィナ・マズルカ】の参加者だって。お前の命を狙いに来たんだよ。【死神】が言っていただろう？　生き残りを賭けて俺“達”は闘か』

「なんでだよッ!? 意味がわからないんだよ! 何で俺がそんなものに巻き込まれなくちゃいけない!? どうして俺なんだ!? 罪なんて、もっと他の奴の方があろう……」

またも、竜次は癩癩を起こした。再び足を地面に何度も叩きつける。何度も何度も。先程踏んだ缶は竜次の足の型にしっかりと嵌ってしまっている為、足を動かす度にそれも共に上下し、地面に叩きつけられ煩い音を響かせる。

他の奴 そう、それは嘗ての上司とか。

脂の乗った憎たらしい顔が竜次の脳裏に過る。それは思い出せば出すほど、死にたくなり、同時にそいつを殺したくなる。

「もう、最悪だよ……。会社は首になるし……。訳の分からない殺し合いに巻き込まれるし……。明日から、どうやって生きていけばいいんだよ……」

その言葉は、この状況に於いて酷く滑稽と言えた。

生き残る、とは殺し合いから自分の命が逃れることが、それとも稼げない金の問題をどうにかしなくてはならないということか。どちらにせよ滑稽だ。

定職に就けず、職を転々としていた竜次には貯金というものが殆どなかった。

竜次は社内でも有能とは言えなかった。派遣でも上手くないかない。やっと就けた正社員の椅子も、神貴社のおかげで経営悪化のしわ寄せから辞めさせられることになった。

良い大学に出ても意味がない。幼い頃は、誰も彼もが、努力と言うものは報われるなんて言っていた癖に。そんな言葉が現実になっているとは到底思えない。

そんな矢先に、これだ。一体これは何の罰だ。神は自分を見捨てたのか? そう疑問を投げずには居られなかった。

『 ちげえよ 』

と、竜次の思考全てを一掃する言葉が、時計から聴こえる。

「ちが、う ？」

その言葉に、目を見開き、救いを求めるように竜次は耳を傾ける。何が違うというのだろうか。一体、この現実の何を否定してくれるというのか。

『 神はお前を見捨てたわけじゃねえ。力があるだろ。^{おれ}死にたくなければ 俺を使えばいいだろう？ 』

それは、何かを嗤っているような、嗜虐的な台詞だった。

DAY 1 : Welcome To The Black Parade (2)

【神貴アクアポリス】 それは、海上に浮かぶ人造の楽園。時代と共に不足していく土地問題に伴って創り上げられたもの。

増加する人口により不足する土地、乱立する建造物により不足する土地、だが何より人間が生きていく上で発生する汚物……人工の楽園は、自らが算出していた芥の上にあるものだった。幾ら外見を飾るうとも、幾ら金属で覆い被さるうとも、存在自体が海にとつての穢れであることは変わらない。

スポンサーは神貴重工。造船を主とする重工企業の中では世界屈指である。

神貴社はその圧倒的な財力を持ってほぼ全ての資金を提供し、神貴社 強いては神貴家は、実質的に神貴アクアポリスに於いて地位を獲得していた。

そもそも、言ってしまうえばその浮かぶ土地そのものが神貴社の“製品”なのだ。連なる施設は当たり前如く、役員から何もかもに息が掛かっていると行って良い。

しかし息が掛かっていると云えば、それは姫桜に関しても同じことが言えた。

姫桜社は日本に於ける電気機器複合企業の中核。神貴重工との相互利益の相性は良く、昔から提携をとっていた。

それはこのアクアポリスにも継がれている。大雑把に言えば、土台は神貴重工でその上は姫桜社と言うべきか。

となれば無論、姫桜も地位がある訳だが………どういう訳か俺の祖父は全く興味がないらしく、アクアポリスなど、と鼻で笑うような勢いだつた。だから祖父はこちらには住まず、都会であることに興味が湧いた俺だけがアクアポリスに住むという形になっていた。

父は、知らない。十年来連絡など取ったことがないし、取ろうと思つたこともない。そもそもあいつは。

「……ん？」

不意に、額に何かを感じた。

「うん？」

夢を見ていたらしい。

額に手をやるとタオルが置かれていた。熱を吸い取るために置かれているのである。その濡れたタオルは、既に俺の温度というものをある程度吸っていて、冷たいものとは言えなくなっていた。

瞼を開ければ、俺の視界に覆い被さる白いワンピース。もとい、昨日の女だ。

丁寧な動作で俺の額に乗ったタオルを両手で取っている。そして脇に置いた洗面器にタオルを入れる。言わずもがな、その洗面器には水が張られていた。多分冷えているそれにタオルを浸していた。

タオルを絞りながら女。クレインクラインがこちらを見た。俺が起きたことに気づいたのか、満面の笑みを浮かべた。あの夜見せた笑顔とはまた少し違う、あどけない安堵の笑み。

「良かった……気がつきましたか、レイヤ。どうですか？ 体の具合は。何所か痛むところや気分が悪い……えっと、吐き気がするとか、ありますか？」

「いや、ない……でも、少し頭が痛いな……」

「頭痛ですか！？ えーと、薬、薬……薬箱ってどこにありますか？」

なんて、タオルを持ちながらクレイは部屋を漁っている。見れば、

まだ絞り終わってないのか、タオルに吸われた水が滴っていた。

振りまわしていくうちに次々と飛ぶ水滴。こめかみの血管が破裂しそうだったが、どうにか堪える。

「ああ、いい、いい。薬飲むほどじゃない。それよりそのタオルをどうにかしろ」

「え あ！ 御免なさい。直ぐに絞ります」

パタパタと動き回っていたクレインクラインは、俺が起きた時と同じように正座で座り込み、タオルを絞り始めていた。

「そっぴゃ、まだちゃんと」

クレインクラインに質問をしようと体を起こせば、

「ああ！ 駄目です、寝てて下さい。まだ【魂の行使】に慣れていないんですから」

魂の行使……？ と疑問に思いながらも何故かクレインクラインに抵抗することが出来ず、ベッドへと再び体を沈ませた。

「なあお前……えーと」

「クレインクラインです」

「長い……」

「そ、そうですか……すみません」

しゅんと頂垂れるクレインクライン。 やっぱ長い。

「……どうしたもんかな。 クレイ、ああ、クレイでいいか」

クレインクライン クレイは絞ったタオルを広げ、畳み、身を乗り出して俺の額に乗せ始めた。

その時、当然先程のように覆いかぶさっている為、クレイの体強いて言えば胸の辺りが強調されて俺の視界に広がる。だがそれは視界を覆うことだけで存在感が強調されているのではなく、クレイの胸“自体”が存在感に満ちている。

端的に言おう。デカイ。このサイズは、中々お目に掛かれなだらう。芸能人なんかにはごろごろいるかも知れんが……少なくとも俺の同年代では少数派だということを断言しておきたい。もはや揺れている。

「お前、胸あるんだな」

「……………は？」

途端に動きを止めた。よいしょよいしょと俺の額で作業をしていたそれを止めるということは、動いていた胸が止まるということ。そしたら胸が慣性で“揺れ残る”というのも当然の事柄だ。

だがしかし、動きが良すぎる……。

ああ、そうか。

「ノーブラなんだな」

「な、なな」

顔を赤くしながら驚く じゃあ無いな、恥ずかしい……違う、

怒っているのか。

何とも形容しがたい表情を口と目で作り上げていた。先程までタオルを持っていた両手で自分の胸を隠すと、

「セクハラです！」

何て、クレイは消えてしまった……消えた？

「ちょっと待て」

『え？ 何ですか？』

「うお！ ……え？ 何処にいるんだ？」

「時計ですよ。腰についてる」

うん？ ……ああ、懐中時計か。成程。クレイが出て来た時もそこからだったのだから、自然といえば自然か。文字通りクレイの家みたいなものということだ。

納得……は辛うじてできるものの、有り得ない現実であることには変わりない。

有り得ない日常。そう自分で思い、再び背筋が震えた。

けれどそれは、畏怖という感情によるものではない。怖くもない、不安でもない。ただ、気持ちが昂っている。所謂武者震いいわゆるだろう。

猛る体。振りかぶる刃。命を奪いあう非日常。あの刃を交えた瞬間は、堪らなく心が高揚した。飽きた性感の絶頂よりも、今は余程求めたくなる衝動。

それらを齎したのは女神の様な女。武器に変化する女。俺にとって、非日常は彼女を中心に現れた。

「……つーかお前。そんなセクハラとか言う割には、あの時キスをしたよな。手の甲だけだ」

『そ、そそそれは……その、癖と言いますか、習慣と言いますか……』

「え？ キス魔？」

『ち、違います！』

「まあ、どうでもいいや。俺もキス嫌いじゃねえし」

掛け布団をひっぺがし、良くないです！ と未だ叫び続けている声の出处 腰についた懐中の銀時計を見据える。

何も変化はない、外見は。声はする。

とにかく、これが非日常への布石であったわけだ。きっと捨てることが出来なかったのは、きっとこの結末を察知していたからなのだろう。避けられないから 否。不可能であったわけではない、俺は俺の意思で“避けようと思わなかった”からだ。

そう、だから、俺にとってこの銀時計は今のところ全ての始まりであり、或る意味で到達点だった。

握り締めてみる。

『……何してるんですか？』

苦しい訳ではないらしい。ということは別に感覚があるわけではなく、意識がそこに存在するだけって感じなのか。

視界とか、聴覚とか、まあ気になることはままあるが、思考から追い払おう。自分がそんな状況に陥るなんてことは有り得ないし、何より不毛な疑問だ。

銀時計を一度親指でなぞり、蓋を開け中を見れば

「時間が、進んでる……」

9日の12時より、既に8時間は経過していた。

『それは、レイヤの寿命です』

「……寿命？」

『圧縮された残りの寿命9日を使って、【デイヴィナ・マズルカ】を勝ち残る。あなた方が私達^{ゲーテ}剣と言つ異能を扱える所以はそれにあります。剣 即ち【実体化^{イデアライズ}】には【契約者】の、残りの寿命とも言える【魂】を消費します。長い時間イデアライズを行つていれば、それ相応の時間が減っていく、ということなんです。それが各参加者に配られた時計を模したものに表示されるのです』

「は！？」

ちよつと待て。それは単純にクレイを実体化 つまり物に触れられる状態のことだよな？ に、してる間ってことはだ、さつき看病してた時もイデアライズじゃないのか！？

「今何時だ！？ ってこの銀時計じゃねえ！」

本物の時計！ と、顔を上げ、シツクな掛け時計を見れば 8時。ということとはつまり……俺が気絶したのが日が変わった直後 12時だと考えれば、今の今までイデアライズしていたのなら 8時間ということだが……。

「クレイ。お前ずっと俺を看病していたのか？」

『はいっ！』

「ざっけんなあああああああああああ！！」

『え！？　　え！？』

「莫迦かお前は！？　ずうつと実体化して看病してたら具合良くなつても俺の寿命が縮まるんじゃないか！！」

『あ！』

なんて今気づきましたというような素っ頓狂な声を出していやがる。つまり何か。もう反射的に実体化して俺を看病していたということか。まあ確かに冬場の外おもてに数時間放って置かれるのもあれだけれども、しかし流石に寿命を削られて看病されてたとなると良い気分じゃないぞ……。

「ごめんなさいごめんなさい！　私、必死だったので！　お仕置きは勘弁を！」

胸元が少々開けた白いワンピースを羽織り、金色の長い髪を振って謝っている。何処で覚えたのか　見た目が外人だから　知らないが、ジャパニーズ土下座を何度も繰り返している。足で座っているベッドに頭が着きそうなほど深く何度も。

置かれた足に、手にベッドは沈み、頭を揺らせばベッドが軋んでいる。　ちよつと待て、ベッドが軋む？

「またお前実体化してるんじゃないかねえかよおおおおおおおおお

「おおお！」

「ごめんなさいごめんなさい！」

「良いから戻れええええええええ！」

「は、はいいいいい！」

金髪の外人の姿はいずこかへと　銀時計へと消え去った。既にベッドに干渉する者は俺以外になく、これで寿命を脅かす存在がなくなつたわけだ。

「ああゝ……疲れた」

『……御免なさい』

「いいよ、もう……」

実際、振り回されるのは慣れている。そう、慣れているんだ。まさにすっぱんのようにしつこい、しかも若干天然が入っている幼馴染を知っている為、慣れてはいる。慣れてはいるが、遠慮願いたいのはごく自然の話。

ああ、そうだ。いつも俺について来て、何かと余計な世話をする。こつちもぶん殴るなりして追い返せば良いっちゃあ良いんだが……それが出来ない。何故かはよく分からないが、とある事情が起因しているというは何となく理解している。

それに殴るだけじゃ止まらない気もしないでもない、あのすっぱんは。鍋にして食ってやるつか。そんな気すら起こりかけるしつこさ。

一息溜息を吐くと、不意にインターフォンが鳴った。

「　　チツ、めんどくせえな」

『じゃあ私が　　』

「いい、お前はもう銀時計に居る。良いって言うまで待機だ、待てだ。分かったか？　じゃねえと揉むぞ？」

『は、はい　　はい？　ど、何処を』

「決まってるじゃねえか。まあいい。とにかくお前は俺の許可無しにイディアライズするな。じゃねえと犯す」

『な、なな』

狼狽している声だけのクレイをシカトし、腹を掻きながら玄関口へと急ぐ。

ドアの脇に設置されているインターフォン。それはモニターで、マンションのロビーにいる自分への来客の顔が分かるようになっている。

モニターを繋げ、そのインターフォンを鳴らした主の顔を覗けば

「麗ちゃん？」

鮮明な画面に映っている顔は、かのすっぽん女、白峰しらみね汐織だった。

盛大に溜息が出してしまうのは仕方がない事だった。

『竜次……お前いつまでウジウジしてるんだよ』

「煩い！ 黙れ、ザリチュ」

ザリチュと呼ばれた時計は溜息を吐く。本来なら腕に巻きつけられている筈の革の時計は、敷かれた布団の上に放り投げられていた。投げた張本人である竜次は、未だスーツ姿のまま、部屋の隅で膝を抱え縮こまっていた。

あの戦闘から狭苦しいアパートの一室に帰ってきて、一睡すらしていなかった。帰るなり乱暴にザリチュを放り投げ、今に至る。

竜次の頭には“最悪”という二文字しか廻らなかった。

人生で最大に不運な日。そんなものは間違いなく今日。上司から首の辞令を下された瞬間からもう人生のどん底に近かったのだというのに、よく分からない命を賭けた【デイヴィナ・マズルカ】なんていう漫画みたいなゲームに参加させられた。遂に底へ到達だ。

あの黒い装束の男から話だけを聞かされたのならこんなことは到底信用せず、とつとと職を探し、最悪バイトにでも就かなければ話にならない。

けれど、見せられたものは話だけではなく、目の前に起こった出来事は非現実と否定できない出来事。

いつの間にか持っていた腕時計からは光が溢れ、気づけば自分は巨大な剣を握っていた。加えてその剣は言葉を話す。

そして、同じように異様な剣を握った少年に襲い掛かれた。

あの時感じた剣圧、衝撃、恐怖、そして“死”は紛れもなく現実だ。決して、夢幻ゆめまぼろしなどではないだろう。

自分が巻き込まれたという事実を目を背けられない。誤魔化せない。恐怖は既に、震えとして身体に染み渡っていた。

『だからよ……怖いんだろ？ 死にたくないんだろ？ だったら生

き残ろうぜ。勝ち残ろうぜ？ 俺と一緒によ』

「嫌だよ！ 俺は争うなんてしたくないんだ！ どうしていつも上手くないんだ！ 会社だって首にされるし、千夏にだって逃げられた……もう、嫌だ……」

決して大きいとは言えない、中小クラスの重工企業に、幾つもの会社に蹴られ、ようやく入れた企業だというのに神貴社の影響で首にされる。どうして神貴に吸収併されたからって従業員まで神貴社が関与してくる。部署の人員半数以上が入れ替えとか……あんまりだ。

だけど、その兆しは数年前から見えてはいた。だから、金がなくなるかと悟った恋人である千夏は、とうの昔に竜次の元を離れた。所詮、自分は金をせびる為だけの存在だったということ。竜次に振り撒いた笑顔も、愛しているという言葉も、この部屋で過ごした夜も、全てが嘘っぱち。あっさりと捨てて、他の男へと移ってしまった。

この状況が最悪でなくて何だというのか。家賃の高いアクアポリスに住み続けたせいで、安い自分の月給では貯金すらままならない。かといって、伊雑に引越すのだって金がない。敷金礼金、そんなものを何処から出せっていうんだ。

文字通り最悪。頼れる親族もろくにいない。高齢で竜次を生んだ両親は既に逝去している。

順風満帆などどこ吹く風。ああ、こんなだったら生まれ来てなければ良かったのに。そんな気持ちさえ横切ってしまう。

「最悪だ……」

『……………』

その竜次の様子を見て、ザリチュは憤りを感じていた。自分はこ

の【デイヴィナ・マズルカ】に勝利するつもりで馳せ参じたというのに、当の契約者はどうしようもない腰ぬけ。

不幸という不幸を思い切り身に浴びた存在は、お世辞にも強いとは言えなかった。

だから思わず　　言ってしまった。

『童次、あんまりごちゃごちゃ言ってる　　俺が、お前を喰うぞ』

息を止めながら、童次は腕時計を見る。そこにあるのは腕時計で、声だつてそれから発せられたにすぎない。剣にだつて成つてない。

だつていうのにどうして　　こんなにも、喉元に牙を立てられている錯覚を覚えるんだ。

『……理解したか。良い子だ。分かっただろ？　逃げられないっていうことが。それじゃ力を蓄えに　　人殺しに興じるとしようぜ？』

まるで喉からのような、低い嗤いが、沈んだ部屋に染み渡っていた。

「良いな、お前絶対何も喋るなよ」

『は、はい。え〜と……』

何かをクレイは話そうとしているが、もはやそんなものに耳を傾ける余裕はない。

まずは今着ている破れた服を、洗面器とタオルをどこかへ隠して……後は、ああ、この顎の傷もどうにかしなくてはならない。

ついさっき汐織に、彼女が俺の部屋に訪れても良いと強引に言わされてしまった。あいつは俺が大きな声で怒鳴りつけても平然としているのだ。一度何か目的を持って要求を迫られたら為す術がないことを俺は知っていた。でなければむざむざ今この状況でこの部屋に他人を招き入れる訳がない。喜ぶべきか嘆くべきか、長い付き合いがそう言った“賢明な”判断へと思考が働いてしまう。

おそらくここが上がってくるのは約三分。エレベーターで上がってくるのであれば、高所にあるこの部屋へと辿り着くのはそんなところだろう。

考えながら、ベルトの穴をカチャカチャと音を鳴らしながら破れたスキニーを脱ぎ捨てる。

『わ、わ……。うわぁ……』

「……………」

何か戸惑うように漏れた声、若干トーンの上がった声。思わずじっと、銀時計に目をやってしまう。

「ああ、もう！ 気にしてる場合じゃねえ！」

いちいち何かに反応してくるクレイに反応している暇はない。刻一刻と終わりは近づいてしまっている。

その終わりを、破れた服に傷を負った顔で出迎えた日にはどんな追及が待っているか知れたものではない。それこそすつぽんの本領を發揮してこの部屋に泊まり込む、などと言われかねない。

破れたズボンは色の付いたゴミ袋の中に入れて縛り、台所の臭いゴミ箱に放り込む。

そんなことは断じて拒否したい。ただでさえ学校で付きまわられているのだ。だから変な噂だって流れている。それにこれ以上拍車をかけるような事は避けたい。何で俺があんな地味な女の彼氏と間違わなければならん。意味が分からない。不釣り合いにも程があるだろう。俺に見合うのはもつと。

洗面器を風呂場に戻し、タオルは洗濯機の籠へ。次に薬箱から絆創膏を取り出して自分の顎に張り付けるだけ……ぱこ、と音を鳴らして薬箱を開く。

備え付けられた鏡を見ながら自分の顎へと絆創膏を合わせていると、

『レイヤ。私がいや。』

「いい。お前は何もするな。実体化したら揉む」

聞こえた声に脊髄反射に近い形で俺は返していた。そして、クレイは黙ってしまった。

……少し言いすぎたのやも知れん。反応を見る限り、そういうことに慣れていなさそうだし。いやしかし、かと言って俺から何をする訳でもない。というか、こっちはこっちでいっぱいいいいだ。

既に汐織はこの階に辿り着いている可能性が高いのだ。

かと言って数か所に絆創膏を貼っていたらもう意味がない気がする
ないでもないが……まあ、傷を生で曝け出すよりかはマシだろう。

『……そんなに彼女に心配掛けたくないんですね』

「は？」

『あ、もしかして……彼女さんですか？』

「ちつつつげええええええええええよ！！！」

と叫んだ数瞬後、

「れ、麗ちゃん？」

少し驚いたような汐織の音が玄関の扉の外から聴こえて来た。ド
ア越しに聞こえる少し籠ったような声でも、そこに戸惑いが含まれ
ていることは震えから分かった。

「どうかしたの……麗ちゃん？」

「いや、何でもない！……今開ける」

立ちあがり玄関まで歩いていく。

扉を開ければ、制服に身を包み戸惑った様子の汐織。先ほどのど
うかした、とは当然先程の俺の叫び声についてだろう。十中八九。
いや、だがあれを反射的に否定したくなるのは仕方がないという
もの。何故俺がこいつの男などと勘違いされなければならない。そ
れに昨日今日会ったばかりの奴に。更に言えば人間ですらないない
というのに。屈辱だ、これは最早名誉棄損など通りに通り越した屈

辱に他ならない。

ただでさえ学校あることないこと吹かれて、女が少し寄りにくくなっているんだ。少し親しげに話せば「白峰さんは良いの？ 私なんかと話して」などと直ぐに言ってきやがる。ざけんなど。

或いは「馬に蹴られる」。その度に俺は内心汐織に拳を上げながら冷静に対処しているという不運さ。俺が頭を痛みで抱える日はあいつが居る限り多いという事だ。

「何かあったの？」

「だから何でもないって。ただ電話で少し言い合いをしてただけだ」

「あんな喋り方するってことは……男の子？」

「ん？ あ、ああ。そうだな。とある部分がどデカイ男だな」

な！ という声が腰の辺りから聴こえて来た気がするが無視する。

「で、何でお前は溜息を吐いてるんだ？」

「え？ いや、違うよ今のは」

「ああ、外寒かったのか。まあ、じゃあ……入れよ。とりあえず」

「……………そうするよ」

と、僅かに頼んだパフェの生クリームの量が写真より少ない、みたいな顔をした。何故だか俺は汐織の表情が読み取れない。他の女の子は容易に心内が読めるというのに、汐織だけは別だった。往年の謎だが、別に汐織の心など読みたくもないのでどうでも良い問題

ではあった。

靴を脱ぎ、玄関へと足を踏み入れ、汐織は俺の顔を見上げた。途端に、その両目は口と共に大きく開かれた。

「あ！ 麗ちゃんその顔どうしたの！？」

遅えよ。

口には出さなかったが、心の中で自然とそうつつこみを入れていた。

「いや、まあ……あれだよ。……絡まれたんだよ」

よくある話。色々な女に声を掛けてれば、彼氏持ちの癖に別の男と遊ぶなんてことがざらだ。ホテルに入って股を開くなんてのは、その女にとって日常茶飯事。そうなると当然、その女の素行が良い、なんてことはどんなに言葉を選んでも表現しにくい。

なれば、その女に付いている男というのも柄が悪いことが九割九部九厘なわけで、女を取られたと男が激怒してくることもよくある。それも何故だか群れて。だから割と殴り合いというのに発展することが多いのは嘘ではない。

とは言え、そんな奴らに傷を負わされたなどと嘘でも言うのは身の毛が弥立つほど嫌だが……この際は仕方ない。

「傷見せて、麗ちゃん！」

こいつを騙せるならば、避けられない報いだと受け止める。この程度でこのすっぱん女が納得いくのであれば、まあ、良いだろう。

「別に大丈夫だって……このくらい。ウザってえな……」

傷の部分をぼりぼり搔く。もちろん触れるか触れない程度で、だが。しかしこのジェスチャーというものが一番傷が大丈夫だと伝わると思う。

その証拠に、少しでも汐織の様子が

「消毒はした!? 駄目だよ!? 膿んでたりしたらちゃんと消毒しなくちゃ!」

収まりはしなかった。俺の認識が甘かった様だ。

「やったよ、やった。だいじょうぶ……やった、よな?」

聞くのは当然腰にいるあの女。俺の寿命を削って看病して居やがったクレイに向けて。

だが俺の期待に反し、

『申し訳ありません……レイヤ。濡れたタオルで拭きはしましたが……その、薬箱の場所が分からなく……』

「……」

マジかよ。そついやそつだ。

「……あゝあ

「やっぱりやってないんでしょ!?!」

「あ!?! いや、その……だな」

言いつつ、汐織は鞆を肩に掛けながらずいずい顔を押し出してく

る。もはや息を吐けば届く距離にまで近づいて来ていた。

多分、俺が知っている中でこいつだけだ。俺にこうまで突っかって来る奴は。遠慮なんてものは一切考慮に入れず、周りには“完璧”な人間だと思わせている筈の、俺に。

眉毛をまるで逆“八”の字にしながら、汐織の顔は迫って来ていた。このまま口を押しつけて倒して込んでやるうか、この女は。

「だああああ、もう！ うっせえな！ んじゃてめえがやれ！」

ん？ 自分が言っていることが微妙におかしい気がする。気のせいか。

「うん！ そのつもりだよ！」

やはりおかしい、と気付くのにそう時間はかからなかった。

床に座らされて数分おとなしくしているとはなんとという退屈さ。

それに少しでも動こうものなら「動かないで！」と顎を固定される、なんとという屈辱。

顎の先端、その僅か右、そして右の頬骨と若干右寄りになっている為、汐織は俺の右側に座ってちょんちょん、と綿に染み込ませた赤い液体を塗っている。俺としてはこの消毒液は大っ嫌いなのだ。

何故かと言われれば即答できる、ダサいからだ。何が悲しく傷に赤い装飾を施して出歩かなければならない。しかもそういう時に限って乾かす為に絆創膏張らないで、だ。こんなパンダの赤い版みたく丸いものを描いたまま外おもてに顔を晒すなど首を括りたくなる。

昔っからそうなのだ。俺が少しでも傷をつけていると何故かタイミング良く飛んで来やがる……というか、傷を隠そうともしない俺が悪いのかもしれないが。

けれど、初めからそうだったようには思えない。汐織が世話を焼くようになったのは果たしていつからだろうか。

「…………ツ」

傷が染みるが、断固として声は上げない。これは俺のプライドだ。女に傷の手当をされているだけでも俺としては嫌な絵だというのに、痛さに呻き声を上げるなど…………。

『微笑ましいですねえ…………。それに、レイヤは意地っ張りなんです
ねえ…………』

こめかみの血管に電撃が走った気がした。

クレイの声から、クレイの顔を想像出来、且つにやにや、という擬音が聞こえてきそうでさえあった。

そしてどうも、ゲーデの声は一般人には聞こえないらしい。だからだろう。さっきから何気なしにクレイが一言一言漏らしているのは。というかそうでなくては困るのだが。

『ほら、彼女さんも笑っていますよ』

「な!？」

「麗ちゃん! ……動かないで」

何故か汐織の声には凄味が効いていた。そして、暗闇ならば獲物を追う豹の如く、瞳が煌めいていたかもしれない。

数秒睨みつけるが、開かれた瞳は一向に引く気配がなかった。

「チツ」

クレイに突っ込むことも汐織に反抗することも出来なくなってしまった俺は、不貞腐れながら屈辱に甘んじることしか残されていなかった。

『 澄華。学校とかって、行かないの? 』

「 え? 学校? 」

録画した恋愛ドラマを寝転がりながら見ていた澄華は、テレビの画面から目を外さず応えた。

問うた人物はティルである。澄華の腕に巻かれた細い時計からその声は聴こえる。そんな摩訶不思議な現象に、既に澄華は慣れ切っていた。むしろその順応力にティルの方が戸惑った程だった。

そしてティルの疑問である。当の澄華は足をバタつかせ、チョコを口を含みながらテレビを見ている。それはとても登校を控えている姿には見えない。何せ服装が既に三本ラインのジャージであり、髪も寝癖もぼさぼさだ。更には澄華が受ける講義の始業時間は既に過ぎており、今直ぐに家を出たところで間に合うはずがない。

うん、というティルの言葉にん、と澄華は首を傾げる。

「ぶつちやけさー、意味無いんだよね、大学なんて行っても」

『 え? 何で? 』

「いやだつてさあ、私が幾ら勉強したつて将来の道はもう決まっている訳だしさ」

神貴澄華　その“神貴”という苗字はただの偶然などでは決してなく、その名の通りアクアポリスのスポンサーとなった神貴社社長の実娘である。故に求められる将来の立ち位置は社長の後継ぎである。それは言うまでもないことだった。

幼少のころから金を注ぎ込まれ英才教育を受けた神貴澄華の知識には、既に大学課程で習う必要な学問は存在していた。勉学もせず就職活動もせず、それでは大学へと通う必要性など感じない筈である。

そんな澄華が大学へと通う理由は、単純に自身が社会に出るのを遅れさせるためだった。

実際、澄華は社長業など面倒くさいものだとしか思っていない。学生であるうちは、親の庇護がある為遊び呆けても困ることはない。しっかりと、その教育施設で学ぶことを学んでいればという条件が入るわけだが。しかし、その教育機関で学ぶ必要がない澄華にとっては、本当に只の寄り道であった。

『ふうん……良いね。社長令嬢って』

嫌味ではなく、ティルは素直にそう思った。何より、ティルには嫌味を言うような思考はない。それを既に一晩で澄華は理解しているのか、特に何も気にしていない朗らかな表情で同意した。

「でもメンドイことも多いわよ？　世間体は常に気にしなくちゃならないし……」

と、大学に通うことをサボっている姿が言っても説得力というものが無い。そうティルは思ったが、敢えてそれは口に出さず、曖昧に頷くだけにした。

「お見合いとか言っただけでどこぞの御曹司の写真を大量に渡されるしさ、

パーティーに行つて御偉方に愛想振り撒かなきゃいけないし……」

と、言った途端に澄華の顔は赤くなつてしまった。上と下の唇を噛み、何か恥ずかしさに耐えるようにしていた。

それは別にテレビに映っているドラマで濡れ場がある訳でもなく、何か澄華自身が変な発言をした訳でもない。単に、頭に過ぎつた人物の姿に対して恥ずかしさで赤面しただけだった。

パーティー場で知つた、黒いスーツを着込み正装している容姿端麗な少年の姿。年齢よりも大人びたモデル顔負けの容姿は、企業の大人が混じる中でも引けを取らず、他人を引き付ける……言わば“カリスマ性”というものを感じた。

そんな彼は年老いたやり手の社長の隣に立つていても何ら違和感がなかつた。身のこなし、目配らせは既に落ち着きを払つていた……そんな事実にまた澄華は驚いていた。幾つか年上の自分は、内心、倒れそうなほど緊張していたというのに。

そもそも緊張しているのが当然なのだ。海外へ名を連ねている、誰もが顔を知っている様な著名人に囲まれているのだから。しかしその中でも、彼は“溶け込めていた”。

自然と、周りにその老人の後を継ぐのは彼なのだな、と納得させる雰囲気。オーラとも呼べるものがあつた。

『どうしたの？ 澄華』

「い、いやいや……何でもない何でもない。気にしないで」

テイルには澄華の状況が全く理解できないが、澄華が大丈夫といふのであればそれはきつと何もなくて大丈夫なんだろうなあ、と素直に納得する。

首を縦に二回振つてから、

『それで澄華、これからどうするの?』

ティルは傾げ、訪ねた。

「ん、そうねえ……」

これから それは即ち【デイヴィナ・マズルカ】に於いての今後の行動に他ならない。

既に【デイヴィナ・マズルカ】に関しての説明を聞いた澄華にとっては、もう行動に移せるほどの知識があつた。それでも行動に移さないのは、それなりに考えがある と言えはあり、ないと言えはばない。そんないい加減なものだつた。

「少なくとも、出歩くのは夜で十分でしょう? 人目のある場所であんな剣を振り回して戦う訳にはいかないし、何より出会う筈がないと思うの」

『…………? どうして?』

「だってそうでしょ? 幾ら【デイヴィナ・マズルカ】の参加者になつたとは言つても、それぞれに生活つていうものがあるでしょう。私みたいに学生をやっている身だったり、社会へ出て会社に勤めている人だったり。」

多分、その生活サイクルは中々変えないと思うのよ。人間は変化を嫌う生き物だからね。“自分の命が危ない”程度じゃ、今までの生活を全て放り出すなんてことはしないよ」

日常という決められた半普遍的なサイクル。時間を決められ、歩く道を決められ、やることをある程度決められる そんな、変化のない日々。

それに人間は落ち着きを覚えるものだ。人間は自由というものを求めながら、一定量の束縛を本能的に求めている。表という言葉があるが故に裏があるのと同義で、有限というものがあるから無限というものが存在し、束縛があるが為に自由があるのだ。

そんな矛盾に、人間は生きている。それを端的に澄華は告げている。そして理解していた。

ティルは、澄華の言葉に思わず窮してしまった。テレビから一切視線を外さず言うその姿には、やはり説得力がないはずだが……どうしてかそれはあった。達観した物言いだ、同意できないものではない。むしろ、どこか心に浸透するもの何かがある。

「或いは逆かな。こんなゲームに巻き込まれたからこそ、通常の生活を送っていく。敢えてこれは“ついでの事柄”なんだって。暇な時間だけ散策したり、トレーニングを積んだりしてゲームに参加する。

まあ、意味は違うけど結果は同じよ。多分ね、その生活のサイクル全てをこの【デイヴィナ・マズルカ】に置き換えられる奴がいるとしたら」

ここで初めてテレビから視線を外し、腕時計　　ティルを見やっ
た。

「　　暗に、壊れてることを意味してると思う。そんな奴は余程殺し合いというものを求めていたか、それだけ何かに切羽詰まっているのか、日常に飽きていたのか……どれかだろうね。

そして私はそのどれでもないし、この生活から完全に離れたいとは思わない。だから私は、夜だけ捜索に向く」

『はあ……』

息を漏らしたような返事をテイルはする。それだけしか反論出来なかったのだ。

極論を述べているに過ぎない筈が、それはとても的を射ている。大き過ぎる論理は、細かい論理も含めている。人間は起床就寝と、そのサイクルである初めと終わりすら自分で、或いは外力で定めてしまっているのだから。

「まあ、それにあれでしょ。激化するのは人数が少なくなってきた後半でしょう。そこまで残っている奴らはそれだけ経験を積んで強敵になっているだろうし、何より期限が迫って慌ててしまう。生き残りという席を求めて、群がる虫のように　ね」

澄華は口を歪めた。それはまるで、蟻が餌に群がる様　そんなものを眺めている表情だった。

「　何で白峰先輩と一緒に学校に来てるんですか」

……めんどくさいものが二人も揃っちゃった。そう思わず頭を抱えたくなる。

校門に差し掛かった、生徒がごろごろといる往来で、二人は何故だか睨み合ってしまった。

「別に涼太には関係ないでしょう……?」

「関係ありますよ。僕は麗夜先輩の弟分なんですから」

そんなものにした覚えはねえ。遼太は勝手に俺についてくるだけだろう。

「悪い虫は追い払わなくてはいけないんですよ……僕は」

「悪い虫は自分じゃないのかな……」

俺を挟んで二人の睨み合いは続く。歩きながらでも続く。

正直そろそろ周りの視線が痛くなってきた。……というかお前らのせいで結構俺のイメージ作りに困っている所があるんだが、そこから辺はどう思ってるんだろ。慕っている後輩がいれば俺の人間性が評価されやすくなると思って野放しにしてはいるんだが、如何せん正直ウザいと感じてしまう。たまに昨日の購買みたく役に立つことがあるぐらいか。

汐織に関しては知らん。もうとうの昔に諦めた。このすっぱん女はもう……いいや。色々な意味で。

「……………はあ」

火花散るような目と目に挟まれながら、俺は深く溜息を吐きつつ、不本意ながら三人一緒に校舎へと入っていった。

別に俺は孤高な存在に成りたいとは思わない。孤高とは完璧であるが故に孤独、という意味だ。

しかしそれは矛盾しているのではないかと俺は思う。完璧であるならば、その人物が孤独に陥るなどは考えにくい。

故にそれは俺が求める“完璧”ではない。だから、それは良い。人間に囲まれること自体それは良いのだが……。

「流石にこれはないだろ……」

朝の場面のデジャヴ。俺を挟んでまたも寒空の下昼食だ。今度は
遼ただけではなく、汐織も同席しているのが重要なポイントだ。

朝に引き続き第二ラウンドと言った所か。プロレスやプライドじ
やないのだから止めて欲しい。正直有り得ない。

「……………」

「……………」

加えて無言とか。間が持たないとか止めてくれ。俺は合コンでぶ
っ飛んだことを言っただけを凍らす奴には殺意が沸くんだ。だから喧
嘩腰でも良いから何か喋ってほしいというのが俺の本当のところ。

「……………」

「……………」

けれど俺の願い空しく、箸の音だけが風に揺れる葉の音に混ざる
だけ。

俺は女の子の昼食を断らさせられてここに連れて来られたという
のに、この仕打ちか。意味が分からない。これなら女の子に囲まれ
て楽しく弁当を突き合った方がとても良いだろうに。

「……………はあ」

。またも一人溜息を吐いて、俺は薄い雲に覆われた空を見上げた

猛る衝動。押し寄せる衝動。湧き出る衝動。ある一つの衝動があらゆる形で心を追い詰め、織りなした結果　竜次は一つの行動へと至っていた。

殺人　。正確には、命を奪うというよりは魂を奪う行為。【ブリスゲード】なる虚言と現実の狭間の剣を現実へと引き寄せて、他の生命へと干渉する。

ぶちまけた魂が、まるでプラズマのように光を帯びて、ゲードへと吸収されていた。

既に殺害した人数は四。つい先ほどまで動いていた肉体は、今や腰から両断されていて動かない。棚に置かれていた商品を散らかしながら、血潮を被せながら、肉片が散らばっている。

行為を犯した当の本人は、既に鞆の中へと目的でもあったものを詰め込んで、あとはもう立ち去るだけ。という筈が、未だそれを行わず、コンビニエンスストアの店内でキョロキョロと頭を動かしているだけだった。

「おい、どうした竜次。さつさと行くぞ。食料は手に入れたんだろ?」

「そうだけど……監視カメラを探したいんだ」

「細げえな……お前は」

ザリチュとしては今更関係ないだろう、と思っている。【ブリスゲード】という強大な力を手に入れば、非参加者である人間に負けることはまず考えられない。大抵の近代兵器　爆撃機などは流石に話は別だが　この国の警官が手にしている拳銃などでは余裕を持って殺せる筈。そもそも向こうは基本的に殺そうと発砲はしないのだ。だがこちらは端から殺す気で戦闘に至るのだ。

故に監視カメラで顔が割れて、警察に追われる身となっても、逮捕などという結末に陥るとは考えにくい。それに状況証拠しか揃わないだろう。“殺害道具”という重要なピースは虚実の狭間である【ブリスゲード】なのだから。けれど竜次はそれを恐れている。全く持って、ザリチュには理解できないことだった。

『…………早くしろよ』

「うん、分かってるよ…………」

まだ喰い足りない、とザリチュはうずうずしているというのに契約者はこんなにも臆病だ。

竜次は部屋の隅に設置されていた隠しカメラを発見し、勢いよくそれ目掛けて振り下ろした。両断された黒く小さな機械は音を立てて床へと落ちた。

『おい…………』

「ごめん、待って。次は記録も消しておかないと」

そう言ってレジを両断し、奥の事務室のスペースへと移動していく。【ブリスゲード】を、力を手に入れたというのにこんな行動を取ることは、竜次の細かい性格が起因しているのだろう。或いは臆病か。とにかく、竜次の契約者である【ブリスゲード】の性格と折を為さないのは明白だ。

ザリチュはその行動に舌打ちをするも、仕方なしに何も言わない。そうして数分後。

事務室を斬り手繰った一人の男は、またも夜の街へと姿を消していった。

DAY 1 : Welcome To The Black Parade (3)

粕垂「というわけで一日目が終わりました。粕垂です」

御岬「終わりましたね。御岬です」

粕垂「もう燃え尽きたね」

御岬「……ね。読んでくれた皆さん。よかつたら投稿時間を見てみてください」

粕垂「二人とも休みだったからってさ、こんなに小説一気に書くのはホントないよね」

御岬「もう……何。完全にノリと気合だったよね」

粕垂「ちゅーかさー、対談昨日やったばっかじゃん！！ ネタないじゃん……」

御岬「良いじゃん。書く主人公を一日書いた感想とかで……ちよつと被ってるけどさ。昨日と」

粕垂「とりあえずコンビニ始まったよね」

御岬「始まったねw それぞれの町で一軒ずつやられてるからねw」

粕垂「伊雑町に三件しかない貴重なコンビニが……」

御岬「でもまあ、駐車場だったじゃん？ 確か。なんとか……入れ

ロゲだしね。しかし黒斗の友人関係少ないw」

粕亜「やつは友達が世界に二人くらいしかいないんじゃないかな？」

御岬「そんなもんかw う〜ん……差が激しいねw」

粕亜「でも黒斗より麗夜のほうが余程変態だよ。おっぱいおっぱい連呼するし」

御岬「まあ、基本的に性欲が滾ってた人だから……嘗ては」

粕亜「黒斗はおっぱいが無い方が好きかもしれないからしょうがないね」

御岬「ロリコンは危ないですよ。まさに犯罪予備軍！ その点麗夜は安心だぜ！」

粕亜「でもさ、画面の中の女の子にはあはあしているほうがまだ安全といえば安全だよ。どうせ犯罪を起こす度胸なんてないんだよ。ああいう連中は」

御岬「それはwww 確かに黒斗は絶対ないだろうな……」

粕亜「さてさて、じゃあ逆に反省する点とかは？」

御岬「そうだなあ……う〜ん。剣の描写が足りなかったかなあ、とは思つかも。あと女性へ失礼すぎた。……御免なさい」

粕亜「僕は結構気持ちよく書いたから反省とかはしないなあ」

談をメたいと思います」

御岬「ないですよ〜！ そんなことは〜！ ……………ありがとう〜」
ざいましたあ！（泣）「

粕垂「それでは二日目の最後にまたお会いしましょう〜！ ……さよう
なら〜！」

二日目：最低（１）

所謂二日目の朝。僕は制服を着用し、昨日よりも大分遅く……つまり普段通りの時間に家を出ていた。

あまり出歩かない方がよい　そう、昨晚遭遇した九頭龍　斬子という女の人は言っていた。実際僕はそれに同意するし、家を自主的に出たいとは今でも思わない。

でもそうしなければならぬ理由がある。そうしなきゃいけないんだ。だから仕方がなく学校へ向かう。それ以上も以下もない……。ただ、それだけだ。

九頭龍さんが去った後、僕はとぼとぼ部屋に戻った。蹴破られた扉は勿論そのまま……殆ど立てかけるみたいにして何とか塞いできた。でも大家にはばれるのは時間の問題だ。そうなったら……いや、その事はあまり考えたくない。

兎に角部屋に戻った僕はそのままパソコンの前に座った。エロゲーをする為ではない。インターネットを使う為だ。

九頭龍なんて名字、そうそうあたりに転がっているわけではないだろう。そんなヘンテコな名字、ほいほい沸かされても困るし。だからインターネットで調べれば何か判るんじゃないかと、そう考えたのだ。

今時ネットで調べられない事なんて殆ど無い。専用の本を一冊買うよりも、ざっと調べるのならばネットを利用したほうが便利なくらいだ。ゲームの攻略サイトとかもあるし、漫画も読めるし動画もあるし……ネットとパソコンだけあればなんか他に何もいらぬような気がする。

それは兎も角、僕は九頭龍斬子について情報を調べた。ついでに【ディヴィナ・マズルカ】や【ブリスグーデ】についてもだ。しかし後者の二つについてはろくな情報が得られなかった。正直に言え

ば別にあてにしていなかったから落胆もなかったけど。

まあ、そりゃそうだよ。ネットで調べて判れば苦労しないよ。死神のゲームだとか、殺し合いだとか、寿命が九日だとか……。いや、一日経って……。残り八日か。

くそう、全然自分の残り寿命が判らなくて実感が沸かないよ。なんでこんな判りづらい時計なんだろう……。ダンテのやつ、もう少しくらいシンプルな時計になってくれないじゃないか。なんだよ、他の時計とキャラかぶるから特別なのにとか考えてんだろうか……。

思考が逸れた。兎に角後者、死神のゲームについては良く判らなかった。でも前者 九頭龍斬子については判った事がある。

そもそもネットで調べようなんてバカなことを思いついたのは、その九頭龍という名字に聞き覚えがあったからだ。九頭龍家。そう、伊雑町にはそういう家があるのだ。

何故そんなものを知っているのかというと、それが個人の御宅とは思えないほどの巨大さを誇っているからである。伊雑には裏手に流山ながれやまという山がある。その山全体の8割くらいがこの九頭龍家の敷地だと言われている。

山の大きさがどうかそういうことには詳しくないけど、兎に角正気の沙汰ではない巨大さだ。確かに伊雑は田舎だからやたらと土地を持つている爺さん婆さんなんかも結構居る。だが九頭龍家の敷地はそれらの比ではない。

そもそも家がああの中の中のどの辺りにあるのかさっぱりわからないうし、山の周辺はなんか黒服の男が立っていて迂闊に近づけないし、色々噂の絶えない場所だ。僕は数年前伊雑に引っ越してきたから詳しくはないけれど、伊雑に暮らす人間なら九頭龍家を知らないやつはいない。

で、何故その九頭龍家について聞き覚えがあったのかというと、勿論どこかで噂話を聞いたのもある。あるが やはりTVCMか何かで見たのが大きいだろう。“九頭龍グループ”といえは有名な

巨大企業で、様々なジャンルの子会社を抱える一大グループなのである。

ああ、そりゃまあ聞き覚えがあっても別におかしくは無い。だがその九頭龍グループと関係があるのかどうかは微妙だ。ただ、九頭龍グループの会長は九頭龍 羅閃らせんという爺さんで、そのネーミングセンスと目つきなんかは確かに似ているように思えた。

何はともあれ、九頭龍斬子のご自宅は山の中の九頭龍家だろう。そして彼女は僕の住所を知っている、「ブリスゲーデ」契約者だ。「ブリスゲーデ」契約者は「デイヴィナ・マズルカ」参戦者でもある。「デイヴィナ・マズルカ」で生き残れる契約者はただ一人……つまりだ。

「いつ殺されてもおかしくないって事じゃないか……」

家に居る方が絶対危ないに決まってる。とりあえず何とか部屋を出て、学校に向かうという当たり前をこなす事にした。そうする事で部屋という追い詰められた空間から逃げ場のある屋外や人目のある校舎内などに移動し、襲われる可能性を出来るだけ低く、襲われたとしても逃げられる可能性を出来るだけ高くしておく。

『しかし意外じゃったのう。脅えて部屋から一步も出ないと言い出すかと思っておったが』

「部屋に居るほうがよっぽど怖いよ、ちくしょう……っ」

学校に行くのにはもう一つ理由がある。が、兎に角今は学校に向かう。考えるのはそれからだ。

登校する生徒達の中に紛れて伊雑高校の門の前に立つ。もう随分と昔からあるらしい、由緒正しき私立高校だ。別に新しい事は何も無いし、多分これからも無い。だがそれがいい。

錆付いた柵が閉ざされる前に教室に向かわねばならない。田舎独特の広々とした校庭を横切り、玄関を潜って下駄箱の前に立つ。そこで見知った顔を見つけた。

「朋希」

声をかけると朋希は慌ててこちらを向いた。何やらじっと手に握り締めていた物を見詰めていたように見えたけど。

「お、おう！ おはよう、黒斗」

「……？ 何？ ラブレターでも入ってたとか？」

朋希は明らかに僕の視線から逃げるようにして右手に持っていたものを背後に隠した。それをポケットの中に捻じ込み、何でもなかったような顔をする。でもこいつは物凄く嘘がヘタだ。だから何か隠したなんて別に宣言されなくてもわかる。

「なんだよ……そんな露骨に隠さなくたっていいだろ？ ラブレターの一つや二つ……」

「ら、ラブレターなわけあるかよ。てめー、俺がバイトばかりしてて女の子と遊んでる時間ないの知ってるだろ？ ラブレターもらえるくらいなら、とっくに誰かと付き合ってるぜ」

ま、確かにそれもそうか。普段から口癖みたいに“彼女ホシーツ！！”って言ってるもんね。もしそんなあてがあったら海辺で叫んだりしないか。

「ま、別にいいけど……」

上履きに履き替えてスニーカーを下駄箱に入れる。あー……土足でうるうるできる高校に入りたかったよ。めんどくさいよこれ。

「……く、黒斗。実はさ……」

「なに？」

何やら気まずそうな表情で彼は視線を反らしている。口ごもるというシチュエーション事態が珍しい。まさか僕に告白したりしないよな……。

何となくこつちまで気まずくなって続く言葉を待って身構えてしまふ。二人して正面から見詰めあいながら黙り込んでいると本当にそういうシチュエーションみたいじゃないか……きも。

「早くしてくれる？ さっきから通行の妨げになってるよ、僕ら。出来るだけ目立ちたくないんだよね、僕」

「ああ……。いや、何でもないわ。あー……うん。何でもねえ。何でもねーよ！」

「そ、そう……？ じゃあ教室行くけど……」

「おう、行くか」

明るく笑う朋希だったが、それはなんというか……自分を励ますような、そんな感じだった。俺ファイト！ みたいな……。きも。

そんな気持ち悪い朋希と一緒に教室に向かう。一緒にというか、勝手に歩く僕に朋希が着いてくる感じた。僕は教室に入り、お互いの席に着いた。

昨日よりは大分気分が落ち着いている気がする。ただ胸にしこりのように不安が残っていて思わず溜息が漏れてしまふ。そんな僕にダンテは、

『一先ずは安全地帯という事じゃな』

なんて明るく笑う。まあ確かにここは安全だ。どんなにバカだつて行き成り教室に突っ込んできて刃物振り回したりしないだろうし……いや、そんなやつも全く居ないわけではないんだろうけどさ。

家では結局ろくに眠れなかった。またいつ襲われるかも判らないと言う不安が付きつ切りだったからだ。その緊張感が連続する状況に身体が慣れて、今は少し気が楽なのかもしれない。兎に角眠い……。

そんなわけで授業中「睡眠時間となつてしまった。まあそのつもりで来たからそれでいいんだけど。昼過ぎまでの授業全てを寝て過ごし、体育はサボり、午後はこれからどうするかを考えて過ごした。あつという間に放課後になり……なんだか無為に時間を過ごした気がしてくる。残り八日……しかもダンテのアイデアライズで寿命は更に減っているはず。これはもう、一秒だつて無駄に出来ないんじゃない……。

とはいえ自分から積極的に動いて何かをどうにかできるような気はしない。だつてまだ残り十一人もいるんだ。僕一人動いたところで何も変わらない……。

「ねえダンテ、他の契約者が死んだかどうか判らないの？」

『我はそういう能力のゲーデではないからな。他のゲーデの動きを察知出来るタイプと契約しているのなら、それも可能だろうが』

「そっか……」

昨日の夜は誰かが死んだだろうか……。死んでいたらいい……。そうしたら僕の順番はまだ遠ざかる。

今日も僕以外の誰かが死ねばいい。そうすれば今日もまた僕の順番はやってこない。それがずっと繰り返されれば……。生き残る事が出来るんだろうか。

僕は戦いたくない。それは誰かの命を奪うのが怖いからじゃない。僕は死にたくないんだ。戦いたいわけがない。好き好んで剣なんか振り回すやつは頭どうかしてるよ。そんなヤツは殺人に興味がある頭のネジが数本ぶっ飛んでるキチ○イさんか、自分を勇者だか英雄だかと勘違いしている中二病の偽善者だけだ。

兎に角、危ない事はしたくない。でも、死にたくはない……。ほぅっっておいても八日後には死ぬ……。つまり他の契約者だつて意地になつて八日以内にケリをつけようと動くはずだ。そんな中、僕が生き残れる保障なんてどこにもない……。

ダンテは“探知系のゲードではないから判らない”と言った。探知系のゲードというのがあるんだ。そういう連中は僕の居場所だつて突き止められる……。昨日の九頭龍みたいに。

じゃあ僕はこれから一体どこで寝泊りすればいいんだよ……。くそう、もう本当に訳がわからなくなってきた。どうしようもないじゃないか、そんなの……。

小声ですつとダンテと話していたが、いい案は思いつかなかつた。放課後の教室から次々に生徒たちが消えて行く中、僕はずっと教室から出て言つた朋希を待つていた。学校に来た理由、その一つがいつにある。

部屋に戻りたくないから、朋希の部屋に泊めて貰おうと考えたのだ。あいつの事だから断られる事はまずないだろう。それにいざとなつたら僕を助けてくれるかもしれない……。そういう打算的な考えもある。

しかし朋希は教室を出たきり中々戻つてこなかった。確か、携帯

電話か何かを手にして出て行ったように見えただけ……。鞆は置きっぱなしだからそのまま帰宅するって事はないだろうし。

「仕方ない……。少し探しに行くか」

席を立ち、鞆を肩にかける。擦れ違ったら元も子もないから探索範囲は狭いところで。廊下で通話か何かしているんだろう。そう考えながら廊下に顔を出す。すると案の定、トイレの前辺りで電話をしている朋希を発見した。

アツサリ見つかってしまっただけなんだか拍子抜けだ。邪魔するのもし悪いから、ゆっくりと背後から近づく事にする。朋希は電話に夢中で気付いていなかった。

「そうか。じゃあ、元気になったんだな」

その嬉しそうな言葉だけで誰と電話しているのかが判ってしまった。僕は思わず足を止める。

「いや……。ああ。こっちは何とかやってるさ。お前の兄貴だぜ？
そう簡単にへこたれたりしねえよ。ああ……。ああ、黒斗も元気だよ。
いや、あいつは元気じゃないか。ははっ！」

何他人を勝手にネタにしてるんだ。なんだかむっとしてわざと足音を立ててみる。驚いた様子で振り返った朋希は赤いケータイを片手に目をぱちくりさせる。

「あれ？ お前まだ教室に居たのか？」

「朋希を待ってたんじゃないか」

「俺を！？ お前……珍しい事もあったもんだな……。ああ、あゝ……黒斗だよ。そう……ん？ ああ、そりゃいいけど……ほい」

と、行き成りケータイを差し出す朋希。僕に代われという事なんだろうか。電話している相手はわかりきっているから代わるのは問題ないけど……。

「もしもし？」

とりあえず受け取って声をかける。電話の向こう、消え入りそうな微かな声が耳を打つ。

『黒斗さんですか？ お久しぶりです。深^{みゆ}邑ですけど……わかりますか？』

「そりゃ、わかるよ。いくらなんでもそこまで薄情じゃないし……。久しぶりだね、深^{みゆ}邑」

綺堂 深^{みゆ}邑。つまり、朋希の妹さんだ。透き通るような、甘い声色……。電話越しでも変わらない。どこか儂げな印象を受ける、可愛い声だ。

深^{みゆ}邑こそ朋希が伊雑に引っ越してきた理由でもある。彼女は身体が弱く、昔から入退院を繰り返していた。今は神貴アクアポリスに住んでいて、そこで腕の良い医者にかかっているとかなんとか。

朋希と深^{みゆ}邑は別々の家庭に引き取られた。だから今は離れ離れで暮らしている。二人の新しい両親はお互いにお互いの存在を嫌っていて、二人を引き離そうとしていた。結果、深^{みゆ}邑はそれに逆らっては生きていけず……朋希はそれに逆らって苦労を買って出ている。

二人とも僕の幼馴染である事は変わらない。ただ、僕らは三人とも別の家庭に引き取られた。だからこうして近くに住んでいるのは

本当に凄い偶然なのだ。

『良かった。黒斗さん、少し話さないと私の事忘れちゃいそうだから』

「君はどういう風に見てるんだか」

『兄さんが迷惑かけてませんか？』

「……迷惑……かけてるかも」

「おいっ！！ 深邑に変なこと言うなよ！！」

その兄さんが横で怒ってるがな。

『あ、今日兄さんが久しぶりに様子を見に来るって言うんですけど、黒斗さんもどうですか？』

「え？ 今日？」

それは まずい。深邑に会いに行くななんて滅多にあることじゃないから完全に失念していた。それじゃあ朋希の部屋に泊まれないじゃないか。

困る。それは困る……。でも一緒に行って……。それで深邑がもしも巻き込まれたら……。そんな事知ったことないさ。でも……。

「あ、えっと……遠慮、しとくよ。朋希と……遼太も居るんじゃない？ 三人で何か食べにでも行けば」

『そう……ですか？ ちょっと、残念……』

「……近い内に会いに行くよ。朋希が許可したらただけだね。それじゃ、朋希に代わるよ」

ケータイと朋希に突っ返す。内心僕は穏やかではなかった。でも……朋希はずっと深邑の為に頑張ってきたんだ。どついう風の吹き回しで会いに行くのかわからないけど、二人の再会を邪魔するのはどうかと思う。

別に、二人の心配をしてるわけじゃない。ただ、深邑は身体が弱いんだ。もし襲われたりしたら、きつと足手纏いになる……。そういうのは……いやだから。

「それじゃ、僕はもう帰るよ」

「ああ、駅前で……おい？ 黒斗？ あ、いや、黒斗が帰るって……おいっ？」

背後で朋希が呼んでいたけれど無視して歩き出した。どうすればいいんだろう。僕には行くところがなくなってしまった。こんな事なら、もっと友達を作っておくんだっ……。

『なんじゃ。案外いいところがあるではないか』

「何がさ……」

ダンテが話しかけてくる。今日気付いたけど、多分ダンテの声は他の皆には聞こえていないんだと思う。だから僕は盛大な独り言を漏らしている事になるわけだ。そりゃ変な目で見られるさ。

「別に僕は……」

『皆まで言うな。段々お主という人間がどういうものなのか判ってきたぞ』

「なんだそれ？ 君見たいなのに判ったような顔されたくないよ」

『はっはっは！』

全く、どうしようもないパートナーだ。相棒なら少しくらい僕のために物事を考えてくれたっつていいじゃないか……。

校門を潜り、夕焼けの空の下帰宅する。でも部屋に帰ったら九頭龍が待ち受けているかも知れない……。本当に憂鬱な気分だ。

とりあえず部屋まで戻り、それから考える事にした。坂道を慎重に上り、アパートの様子を電柱の影から窺う。扉は……相変わらずぶっ壊れていた。

そうだ、その問題もあつたんだ。くそう、本当に嫌気が差すよ……。とりあえず部屋まで戻り、中に誰も待ち受けて居ない事を確認してなんとか無事帰宅を果たした。

すぐさま部屋に誰か侵入した形跡がないかを調査する。が、全く変化なし。自分の部屋の中の事なら何でも覚えていて。多少散らかっているように見えても……。例えばテレビのリモコンがマンガの山の後ろにあるとか、そういう事は完全に把握しているんだ。誰かが入って荒らせばそれだけで直ぐに判る。

とりあえず着替えを済ませ、上着を片手に慌てて部屋を飛び出した。部屋でエロゲーやってる様な状況じゃなくなってしまった。自分の家から逃げるように走り去る今の自分の姿を想像して悲しくなる。

『ほう、夜も自分から探索に向かうつもりか？』

「冗談じゃないよ、そんな事絶対にするもんか。でもあの部屋に居たら九頭龍が来るじゃないか」

『ふむ。じゃが、当面あの女とは当たらぬ気がするがのう』

「君の推測にどれだけの価値があるっていうんだ。あいつの態度だつて信じられるところなんて一つもないよ。いつまた襲い掛かってくるか判らない。寝ているところに侵入でもされてみる。そのために出入り口を確保したのかもしれない」

『それは考えすぎじゃろう』

「だから、そんなの君にはわかんないんだろ！？ 探知系能力もない、使えないゲーデのくせにっ！！」

『む？ 使えないとはなんじゃ、使えないとは！！ 言っつけて置くがのう、昨晚だつて我が咄嗟にお主を守らねば……』

「君は僕と契約してるんだから命を守るのは当然なんだよ、ばか！ そんな事程度で一々恩を着せないでよ！」

『ぬぐぐ……』

本当に使えないゲーデで頭にくる。でも今はダンテの無能さを恨んでいる場合じゃない。兎に角移動しまくらなくては。

例えば探知系ゲーデというやつのが「他の契約者の現住所を探索する」というものならばまだいい。でもそんな限定的なシチュエーションよりも、「他の契約者の現在地を探索する」という能力である可能性の方が絶対的に高い。

現住所はどこですかなんてそんなものは電話帳でだって調べられ

る。そりやまあ、契約者がどうかは判らないだろうけど……。兎に角九頭龍は僕の住所だけではなく僕の居場所もわかると考えるべきだ。だが能力は連打出来るものではない。残りの寿命を削ってゲーデの力を使う必要があるからだ。そのルールがある限り、常にこちらの居場所を把握できるわけではない。

故に出来るだけマメに移動をしていれば絶対に見つかからないとも言える。いや訂正しよう、絶対なんて事は在り得ない。偶然に偶然が重なり不幸はやってくるものだ。相手が能力の連打をしてこない事が判っていても僕はこまめに移動する事にする。

明日からはいちいち部屋に戻らず鞆に着替えを入れてトイレで着替えよう。そうすれば必ず部屋に一度戻るといふ絶対的なサイクルを崩す事が出来る。それで少しは探知をかく乱出来るかもしれない。兎に角今の僕に出来る事。それは必至に九頭龍から逃げる事だけだ。

夜の伊雑街を只管に歩く。夕暮れはとつくに過ぎ去り、町は闇に包まれていく。外灯も少ないものだから、通る道は選ばねばならない。出来れば人が多く……。そして逃げ場所に困らない所だ。

『…………ぬし、もしかしてこのまま一晩中逃げ続けるつもりか？』

「それで死なないならそうするよ」

『体力が持たんだらう？ それにさつきから言っておるように、あの女は直ぐには襲って来ないじゃろう』

「何度も言わせないで……。そんなのは“絶対”じゃないんだ。“絶対”じゃない以上、僕はそれこそ“絶対に信じない”。君の言う事も、九頭龍の言う事も。僕がずっと気を張っていられるかも判らない。僕はご存知の通りの性格だからね……。だから僕は僕も信用しない。だからこうして逃げ続けてる」

そう、部屋で敵が来ないかどうかずっと待ち続ける……そんな事が出来るとは思えない。何かの拍子で僕の役立たずな意識が睡魔に襲われるかもしれない。不確定要素を誘発する、僕の意味に伴わない行動は絶対に防がねばならない。

兎に角何も信じてはいけない。それがパートナーのダンテだろうが同じ事だ。僕は僕だって信じていない。だから出来るだけ、そしてより確実な方を選ばなければ成らない。

「死にたくないんだよ、僕は……」

夜の町を徘徊するなんて昨日まで考えもしなかった。それでも僕はここにいる。意図せずこうして 【デイヴィナ・マズルカ】のステージの上に……。

二日目：最低（2）

阜羽 王の人生は確かに捻れてはいたが、決定的に歪んでしまっている訳ではなかった。

人間ならば誰しも日々の生活の中に何らかの願望を抱いている。それは大方歪んだ物であり、それを実現する事が無いのは所謂善意の心や世間的な箍のお陰である。

“ やって良い事と悪い事 ” の分別が出来ない人間は最早人間として充分すぎる程に欠落している。例え他人に対してどのような醜悪な感情を抱いたとしても、“ 逸脱 ” してしまう人間はそれだけで欠陥品 。 自らを低俗な存在であると吐露するも同義だと王は考えていた。

彼は優秀な人間である。かといって特に逸脱して優れているわけでもない。ただ“ 少しでも頭が良く ” 生まれ、序に言えば他人よりも“ 少しでも真面目 ” だったというだけの事 。

潔癖症とも言え換える事の出来る彼の日常は汚染された物に溢れていた。世界は人間で構築されている。地球という星、この世界、その全てにおいて人間はあらゆる物を凌駕してきた そう考えている。

人間こそこの地球の支配者 しかしそれは同時に絶望的な事実を王に突きつける。人間は日々低俗に墮落し続けている。退化の連続 偉大な先人達の遺した物さえ唾を吐き掛け蹴り飛ばす。

優れた人間は限りなく減ってしまったように思えた。いや、実際にはそんな事はないのだろう、とも思う。だというのに自分の周りに優れていると思える人間があまりにも少ないのは、正に“ 不運 ” であると思えなかった。

不幸 。 自分は世界に疎まれている……そんな気さえしていた。だからこそ、“ 力 ” を手に入れた時の感動は王の背筋を震わせた。

【デイヴィナ・マズルカ】……それは、自分が優れた人間であることを証明するチャンス。

自分が死神に選ばれた存在だという事。死の神であろうが神は神、それ以上も以下もない。この世界を支配している人間よりも更に上を行く存在に力を与えられたのだ。その代価が己の魂であろうとも、それは全く憂慮すべき事態ではない。むしろ喜び勇んで笑うべき時なのだ。

剣を手にした瞬間王は目に付いた人間を連続で殺傷した。手口は突発的な犯行、通り魔と呼ばれても仕方が無いような低俗な物だった。頭は使わなかった。兎に角手に入れた力を試してみたくて仕方が無かったのだ。

神貴アクアポリスに住んでいるはずの王が伊雑町で【ブリスゲーデ】を手に入れたという事実、それが既に関する天啓なのだと考えた。彼はたまたま伊雑町を訪れ、そこでたまたま“不良に絡まれて金品を巻き上げられた後”であった。その時王はるくに抵抗する事も出来ず、あっさりとは敗北を喫してしまった。

王は決して身体能力に優れた少年ではない。むしろインドアなタイプであると言えるだろう。伊雑町などという時代遅れの片田舎のどうしようもない低俗な不良程度の存在に金を奪われ、帰りの列車にも乗る事が出来ない。そんな惨めな自分自身に酷く腹が立っていた。

何でも良いから当り散らしたかった。しかし“やって良い事と悪い事”の区別が彼の行動を阻害する。少なくともその瞬間、王の中に自らを襲った少年達を追い掛けて殺してやろうなどという気持ちはカケラほども無かった。それが不可能であるという事実は誰よりも彼自身が最も理解する所。

しかし手に入れてしまった。【ブリスゲーデ】を。人の身を越えた力を。特別な存在になった。簡単に、人の首など“縊り”落せる。出来ない事が出来るようになった時、“やって良い事と悪い事”等という考えは色褪せ霞んで見えた。

剣を振るう事に躊躇いは無かった。あっさりと金を取り返した。コンビニエンスストアの駐車場に内臓をぶちまけてやった。爽快な気分だった。自分が選ばれし物であるという事実が彼の善悪観念を崩壊させていた。

生まれてからこれまで生きてきた18年間の中で最も清々しい瞬間であった。自分は恐るべき力を手に入れた。誰にも口出し出来ない。出来るはずがない。そう考えていた。

故にその存在は想定外だった。【デイヴィナ・マズルカ】が開始してからたった数時間。その間に自分を追い掛け、殺そうと手を出してきた女。

まだ力について何も理解していなかった王を“遠距離から斬りつける”という矛盾で捻じ伏せた。防御したはずなのに。防いだはずなのに。その一撃は王の身体を斬り裂いた。そうして漸く理解する。剣は “この世の法則さえ擦じ曲げてしまう”のだと。

王は逃亡した。逃げ切るのはそう難しくはなかった。襲撃者は非常に素早く、逃げるだけでは逃げ切れない。しかし手傷を負ったというのに王の足取りは軽く、そして王もまた“剣の力”を行使したというだけの事。

逃げ切った夜の街の中、王は傷を負ったまま浜辺に座り込んでいた。暗い夜の海の中、己を狙う存在を知る。自分だけが特別ではないのだと知る。しかしそこに落胆はなかった。

成らばその中で更に己が最も優れているのだと示せばいいだけの事。王は行動を開始する。一先ずは この傷を癒し、襲撃者を倒せるだけの力を得なければならなかった。

「……結局一日歩き回って成果は無し、か……。徒労に終わったのだと考えた途端、現金にも疲れという奴が出てきたようだ」

九頭龍 斬子がそう呟くと、斬子の背後に薄っすらと人影が浮かび上がった。それは斬子が腰から提げた【時計】より姿を現した彼女のゲーデの姿。

斬子同様、全身を黒いタイトなスーツで纏めている。一見すればただの男……。しかしその顔は若草色の面で覆われている。陰陽を模った紋章の面……。男の姿はその一点において非常に異様であると言えた。

伊雑町と神貴アクアポリスとを結ぶユピアブリッジの前、伊雑町の中でも比較的賑わっている地区に斬子の姿はあった。時刻は午後八時を回ろうとしている。駅前の広場を眺めながら腕を組み、支柱に背を預けて待つ。

勿論、こんなに人気の多い時間帯、場所に例の契約者 阜羽王が現れるとは考えていない。とりあえず休憩……丸一日中歩き回り、他の契約者の動向をつかめないものかと奔走したのだ、流石に疲労している。それにゲーデの力を扱うという事は単純な肉体的疲労だけでは収まらない。文字通り、休み休みに扱う事が重要となる。その事実が斬子としては歯がゆかった。体力ならば他の契約者よりも凶抜けていると自負しているが、ゲーデの扱いに関しては他の契約者同様素人なのだ。無理をして倒れるなんて事になればとんでもない。

「……………スサノオ。“眼”を使うとどの程度魂を消耗する？」

『……………使う気になったのか？』

「当然、出来る限り本気は出さんし、能力も出し惜しむつもりだ。だがそれで敵を倒せないのでは意味がないだろう。やれやれ、私たちにも探知系の能力があればよかったのだがな」

勿論それはスサノオの能力を批判しているわけではない。スサノ

才は圧倒的な直接戦闘タイプの【ブリスゲード】。その真骨頂は至近距離による白兵戦闘にあるのだ。確かに探知系能力は持ち合わせていないが、直接戦闘ならばトップクラスの能力を保持している。

スサノ才は斬子の隣で腰に手を当てて黙り込む。能力を出来る限り使わない事。それは斬子が初日に決定した二人の間の暗黙の了解であった。

ゲーデの力を使うという事はつまり寿命を削るという事。使えば使う程、生き残る事は困難になる。削れた寿命は何かで“補わねば”ならない。そうしなければ、最終日まで生き残る事は敵わないのだから。

斬子は初日からして既に削れた寿命を補う事はしないのだと誓っていた。それは【デイヴィナ・マズルカ】で勝利出来ない事を指す削れた寿命を補わないのであれば、力も出せず、他の契約者に殺されるのを待つか。或いは寿命が尽きて死ぬしかない。

そうさせない為にスサノ才に出来る事があるとすれば、それは一刻も早く他の契約者を見つけ出し、打ち滅ぼす事……。しかしスサノ才はそれを斬子に強いるつもりは無かった。斬子の考えは別のところにあるにせよ、結果的にスサノ才の憂慮する事態を突破するよるに斬子は動いているのだから。

「眼があれば 他の契約者を目視で判断出来る……そうだったな？」

スサノ才は答えない。腰に手を当てたまま沈黙で回答する。それが彼の性格である事を斬子は理解していた。

「……最悪、事件を阻止出来ないようであれば眼を使つぞ」

『……承知した』

パートナーに対して逆らうつもりなど、スサノオにはなかった。彼にとって斬子は相棒と言うよりは主に近い存在である。彼の気質そのものがその関係性を望んでいた。

斬子は周囲を見渡し、歩き出す。スサノオは中空に浮かんだまま亡霊のように斬子の後に続く。【イデアアライズ実体化】されていないゲーデの姿は、契約者でさえ目視する事は出来ない。

「たった二日で人が死にすぎた……。急がなければな……」

それは独り言。しかしスサノオは斬子の内情を察していた。焦りそして不安もあるのだろう。このような状況に突然放り込まれれば動揺しない方が難しいという物。その分、女の身で斬子は良くやっている。

スサノオは斬子の隣で腕を組んだまま視線を向ける。スサノオが何かを言おうとしていることは判った。しかし、斬子は首を横に振る。

「二度は言わない。魂は奪わない……。絶対に、だ。お前には……迷惑をかけるな」

スサノオは答えない。それは、沈黙と言う名の答えだった。

「魂を、奪う？」

『うむ。それが唯一、消耗してしまった契約者の寿命を補う手段なのじゃ』

斬子とスサノオが通り過ぎ去った、駅前のインターネットカフェの個室の中、黒斗は空中に浮かんだダンテと向かい合っていた。狭い個室に二人は窮屈だったが、実体化していないダンテには質量が存在しない。パソコンの前に腰掛けるようにふわりと浮かんだダンテを見やり、黒斗は深く椅子に腰掛けて溜息を漏らす。

消耗してしまった寿命を補う手段。結局斬子はそれを黒斗には伝えなかった。知りたければ自らのゲーデに問う事……素直にそれを実践するのは不愉快だったが、知らなければいけない事なのでから仕方が無い。

『ゲーデの力を使えば寿命は減って行く。何もしなくとも、寿命は減って行く。つまりじゃ。どんどん減って行く！ そのうち直ぐに尽きて死んでしまう』

「……それは判ってるよ。だから寿命の回復が必要なんだろう？」

『ゲーデの力の源は“魂”じゃ。契約者のな。契約者の魂は、【デイヴィナ・マズルカ】が開始した時点で既にある意味特殊な状態に変質してある。ぬしら契約者にも、まあ一応今後の人生と言うものがあつたはずじゃからな』

「確かにそうだ……。それを無理矢理九日間にしちゃったんだから、そりゃ変なんだろうけどさ……」

『“圧縮”したのだと考えると早いかもしれんのう。残りの一生涯の魂を全て九日間に圧縮した……。その濃厚な人生たましいを消費して直、ゲーデという奇跡を行使出来るのは九日程度が限界なのじゃ。ゲームとしてのルールというより、それが人間の起こせる奇跡の絶対限界値 という事じゃな』

「……良くわかんないけど、それはおいておくよ。多分これからもずっと理解出来ないだろうし」

魂の重さ、とても言うのだろうか。そんな物は実感に値しない。だが事実として残りの人生全てが消滅し、九日間だけ神の力　ゲードを扱う事が出来る。それが今黒斗にとって重要な情報だった。正直、魂がどうかはどうでも良いのだ。信じる信じないで言えば信じてはいない。だが現実目の前にこうした奇怪な状況があり、それが避けられない以上　攻略のヒントは欲しい。ただそれだけの事。

「それで、具体的に魂を奪うってというのは？」

『自分以外の人間を殺す事じゃ』

「ふうん……自分以外の人間をころ　！？　い、今なんて言った！？　いや、いっつ！！　言い直さなくていっつ！！」

口を開くダンテを慌てて制する。いくら個室の中とは言え流石にこんなに大きな声を出してはまずい　それは判っている。パソコンの前で一人、何故か叫び出す危険人物に他ならない。客観的に自分を考える事はあえてしなかった。

『何を驚いておる……？　昨日の昼間にも言ったではないか。いや、確かお主、我の話を思い切り中断させておったから言いそびれたかもしれんのう』

「言いそびれたとかそういう問題じゃないでしょ……！？　大変な事じゃないか、それはっ！！」

『まあ、そう言うと思っておった。確かに残りの寿命を補給するという行為は良心が痛む』

「僕より圧倒的に強くなってる契約者がいるって事でしょ……!？」

少女は目を丸くした。てっきりこの契約者の事だから、“そんな犯罪行為出来るわけないよ”と駄々をこねる物だとばかり思っていたのだが、反応は予想斜め上であった。黒斗は何やら憂鬱そうな表情で溜息を漏らし、上目遣いにダンテを見やる。

「昨日のコンビニの殺人事件は絶対に契約者の仕業だ……。それだけじゃない。ネットで調べたけど、昨日はいくつも殺人事件が起きてる。死者数は合計十一人 尋常な数じゃないよ。初日から人を殺して渡り歩いている馬鹿がいるのは別にいいけど、この人数を一人の契約者が殺したんだとすると、単純に考えて十一人分の魂を補給した……そういう事になるよね？」

『う、うむ』

「ダンテは僕ら契約者の九日間が残りの人生全てを圧縮したようなものだって言った。つまりそれは僕らの“一日”は一般人の“一日”と等価ではないって事だよな？ 仮に一人の人間から一日分の魂を奪ったとしても、それでそのまま僕ら契約者の寿命が一日延びるわけじゃない。つまり十一人殺した所で別に物凄く強くなったわけじゃないんだろうけど……こっちは消費する一方なのに相手はこのペースで力をつけ続けるかもしれない。そうしたら遭遇したら100%負けちゃうじゃないか！ そうでしょ!？」

『……う、む。な、なんじゃ？ お主……意外と【デイヴィナ・マズルカ】に乗り気なのか？ 何だかんだ言う割には後先考えておる

のう……』

「こんな状況で後先考えないのはただの馬鹿でしょ！？ ああもう、やだよお……！ 死にたくないのに、なんで強くなってるんだよ、ちくしょう、ちくしょうちくしょうっ……！」

頭を抱えて俯きながら何度も呟く黒斗。その様子は完全に落ち込んでいるが、その一見どうしようもないような発言の中にはダンテには予想の出来ない一面があった。“逃げる”ために“戦場”にやってきた事。“恐怖”を確かに感じつつ、しかし“動く”……。冷静な判断や鋭い考察を見せたかと思いきや、この情けない様相である。黒斗の性格が理解出来てきた……ダンテはそう考えていた。しかしダンテの予想のつかないような世界で黒斗は生きているのかもしれない。今はそんな風を感じられる。

「兎に角警察に通報して……いや、駄目だ。犯人が判ってないし、悪戯だと思われるに決まってる……。警察だって注意くらいしてるだろ流石に……。ちくしょう、どうしてこういう場合警察っていつも役立たずなのがセオリーなんだよ……！ テンプレ通りの働きしかないのかよ、くそっ！」

『てんぷれ……？ 揚げ物か？』

口元に指を当ててダンテが目をきらきらさせながら笑う。その様子を見やり、黒斗は心底うんざりした様子で視線を反らした。

「……どうしよう。遭遇したら絶対に勝てないよ。けど、人殺しになるのは嫌だし……こんな勝ち抜けっこないじゃないか……クソゲーだよ……！」

『別にそう悲觀的にならずとも、ちょちよつと殺すだけで良いではないか。人間の歴史など殺戮の歴史じゃぞ?』

「簡単に言わないでくれっ!! 昨日の犯人は馬鹿だよ!! 頭が悪すぎるッ!! 仮に殺すにしたってあんなにも目立つちゃったら駄目じゃないか! 他の契約者の迷惑も考えてほしいよ!!」

『……んー。まあ確かにあれだけ派手に殺人が起きればこの街の治安機関も警戒せざるを得ないじゃろうな』

「困るんだよっ!! それじゃあ他の契約者が動けなくなるだろう!?! ああ、そういう作戦なのか……陰謀だ……僕を殺そうという謎の契約者の陰謀なんだ……っ」

再び頭を抱えてぶつぶつと独り言を漏らし始める黒斗。その様子にダンテは乾いた笑みを浮かべながら黒斗の傍へと降り立つ。

『段々お主という人間がわからなくなってきたぞ……』

「……今話しかけないですよ。どうしたら死なないで済むのか考えながら鬱ってるんだから……」

『お主 “人殺し” に抵抗はないのか?』

ダンテの問い掛けに黒斗が顔を上げる。その瞳には特に何の色も見られなかった。黒斗にしてみればその質問の意図が理解出来ない。そんな呆けた視線だった。

他人の死に自分を重ねる事なんてない。人間は生まれた瞬間いつかは死んでしまうものだ。それが早いか遅いか、それだけ。なのに死にたくないと思えるのは自分が可愛いから。自分がこの世界の何

よりも可愛かったなら 他の人間の命と天秤にかけるまでもない。黒斗はダンテを見詰める。黒斗にしてみればダンテのその質問は酷く的外れであるかのように思えた。元来、“そういうものなのではないのか”。【ブリスゲーデ】とは。

「 抵抗はあるよ。勿論、人殺しなんて嫌さ。でも 」

口を噤む。それからゆっくりと、まるで説明するのが面倒と言うような口ぶりで続ける。

「 でも、それは人を殺すのが悪い事だからじゃない。人を殺すと周りの人に怒られるじゃないか。警察に捕まっちゃうじゃないか。そうだったら僕の安定した生活が変わっちゃうじゃないか。いや、刑務所に入ったらそれはそれで安定してるのかもしれないけど……。兎に角そんな一大イベント出来れば無い方がいいに決まってる。でも、死ぬのよりはました 」

『 ……なん、というか。お主……相当変わっておるな…… 』

つくづくと言った雰囲気で呟くダンテ。黒斗はふてくされた様子でそっぽを向く。既に思考は別の方向へと向けられていた。暫くの間無言で考え込み、突然席を立つ。

『 どうした？ 今夜はここで過ごすんじゃないのか？ 』

「 休むのはここにするよ。他に場所もないからね。でもこの店に入ってからもう二時間も経つ 。場所を変えなきゃならない。序に街を歩き回って警察の警備状況を把握する。もしどうしても仕方なく最後の手段として人を殺さなきゃならなくなったら……その時は僕だけはおかまらないようにしなきゃいけないから 」

それだけ小声で呟いて黒斗は個室を出て行く。その扉をすり抜け、ダンテも後に続く。店を出た黒斗はコートを翻し、夜の月を見上げて何度目か判らない溜息を漏らした。

どうしてこんなことをしなければならぬのか……そんな気持ちには確かにある。やるせない。やりきれない。しかしやらねばならない。信じられないのだから。何も、信じられないのだから。信じられないのならば 自分でやるしかない。

都合よくこんな時ヒーローが現れてくれるなんてことは在り得ない。知っている。世界は所詮一人だけの物。右へ行くも左へ行くも己次第。生きるも死ぬも その責任は自分以外の誰かにあるわけではない。

だから歩く。恐怖で足が震えていた。疑心暗鬼で拳動不審だった。それでも黒斗は闇の中を進んで行く。ダンテはそんな少年の様子を真剣な表情で見下ろしていた。

二日目：最低（3）

『ねえねえ、王……。私たち、最期まで勝ち残れるよね？』

自らに対する、ゲーデからの問いかけ。それに答える必要性を王は感じなかった。正直に言えば、それどころではないというのが本音だ。

昨晚、王は自らが暮らす神貴アクアポリスへと一時的に退却した。殺人を犯すのであれば、アクアポリスよりも伊雑町でと決めていた。どうしようもない、非常に低レベルで頭の悪いナンセンスな田舎者を殺すのならば、特に良心が痛む事はない。

理由といえはそれだけではない。自らが住むアクアポリスとは離れた伊雑で殺人を犯す事で警察の捜査をかく乱する狙いもあった。が、あれだけ派手に殺し歩いてしまったのだ。夜中の警備は中々の物がある。

とは言え、伊雑は広い。警察官があちこちをパトロールしているものの、全ての地区を常時把握出来るわけではない。それに警官の一人や二人。仮に強力な銃器で武装した人間が相手であろうと、ゲーデの力がある限り遅れをとる事はない。

今後の動きやすさを考慮すれば出来れば目立たず。しかし勿論臆する事はない。王は夕暮れ時には既に伊雑に潜み、駅前のファミリアレストランで時間を潰した。夜が更けてくる頃に歩き出し、何食わぬ顔で徘徊を開始する。

『ねえねえ、王……。王ったらあ……。』

「……うるさいぞ。他人には聞こえないからいいが……。独り言を喋っていたら目立つ。少し黙れ」

『でもでも……昨日のあの怖い契約者にまた会っちゃうかもしれないよ……？ 勝てるかなあ？ 昨日は逃げ切れたから良かったけど……』

王の腕時計から現れた白い少女の影が不安げな表情で王の隣を進む。白銀の髪を靡かせるその様相はまだ少女のあどけなさを残し、純白の布帯を纏ったその姿は神秘的な妖精を彷彿とさせる。

阜羽 王と契約を行った【ブリスゲーデ】、“アルビノ”
その能力により王は既に傷を完治させていた。昨晚斬子に斬りつけられたダメージは決して軽くはなかった。しかし一般人から略奪した魂を治癒に当て、アルビノの“能力”を発動する事で傷はまるで無かったかのように綺麗に塞がったのである。

ゲーデの持つ特殊な能力こそ、このゲームを制する為に必要となる要素である。王は昼間の間にアルビノと共に己の戦術を組み上げた。アルビノは喜んで己の能力の全てを王に説明した。二人で勝利する為に必要な、“アルビノ”というゲーデの戦い方を把握したのだ。

昨日は斬子の方が上手であった。斬子の方がゲーデという存在が持つ力を理解していた。特殊能力について何も知らないまま、ただの剣として戦っていた王が敗北したのは当然の事でもある。

「問題ない。こちらの方が魂の蓄積量は上なんだ、まともに戦えば負ける道理はない」

眼鏡を中指で押し上げながら王は小声で答える。アルビノは少しだけ安心した様子で頷き。それから王の顔を覗き込む。

『怪我は一応、能力でふさいだはずだけど……痛まない？ 大丈夫？』

「問題ない。それより周囲に気を使ってくれ。実体化していなくても物は見えるんだろう……？ パートナーとして、仕事はやってくれないと困る」

『うん、判ってるよ。ちゃんと見てるから……。それより王……？』

“眼” 使い始めてもう三十分くらい経つよ？』

その言葉に足を止め、王は振り返る。振り返った王の瞳が一瞬緑色に輝いたように見えた。しかしそれは一般人には認識する事が出来ない、ゲーデの能力の一旦である。

周囲を見渡す王の視界には様々な人間が行き交っている。王にはその人間を見るだけで、対象者の残りの寿命を認識する事が出来た。全てのゲーデの共通した能力である“眼”。それは参加者に共通して与えられた力。ゲーデに依存しない、特殊な能力の一つである。

九日間という短い期間の間に十二人の契約者たちがお互いを殺しあうゲーム。しかし中には敵と遭遇する事を避けたり、戦う事を拒む者が現れるかもしれない。黽ごっこをしていたのでは時間を無為に使うだけである。“眼”はそうした配慮からか、必ず契約者ならば発動する事が出来た。

眼とは、“対象者の寿命を確認する”能力である。開催期間が経過すれば、自然と参加者の寿命は減って行く。最大でも九日間なのだ、見ればそれと判断が出来るだろう。勿論元々九日以内の寿命しか持たなかった人間も居るのだろうが、ある程度のアタリをつける事が出来る。

更に、一般人から魂を奪う事に関してもこの眼が効力を発揮する。同じ一般人から魂を吸収するのであっても、残り寿命が長い人間と短い人間では寿命が長い人間の方が吸収できる魂の量は多くなる。

勿論、眼の発動には己の寿命を消費する事に成る。その消費量は

ゲーデの得意不得意によって決定される。探知系のゲーデであれば眼の発動による寿命消費は少なくて済むだろう。しかしアルビノはそうではなかった。

アルビノはお世辞にも能力の高いゲーデとはいえない代物であった。探知能力も持たず、直接戦闘に置いても性能は光るものがない。当然のように眼の扱いも不得手であり、寿命の消耗は激しかった。

そんな自分の至らなさを理解しているからこそアルビノは落ち着かなかった。アルビノの性能は壬も理解しているはずなのに、平然と眼を使い続けている。寿命を刻むデジタルウォッチの数字が見る内に減少して行く。

『壬……ねえ、壬ったら……』

「寿命が減ったなら補給すればいいだろう。それに、他の参加者を倒せば一般人とは比べ物にならない程の魂が手に入る。そうだろう?」

『……うん。魂の密度は契約者の方が圧倒的に高いから……。でも、戦うのに魂の量が少ないと不利だよ?』

「昨日みたいに突然襲撃されるほうが困る。出来れば先手必勝だ。それに、お前は別に魂が少なくなるとも戦うのに問題はないゲーデだろう?」

壬の言葉にアルビノは浮かぬ表情で視線を反らす。「それはそう」。 “確かにその通り”だ。しかし、不安は拭い去れない。

「そんな顔をせずともちゃんと優勝してやるさ。そのためにはまず他の契約者を潰し、そして力をつける事が必要だ。安心しろ、お前の目的に沿った行動はしているつもりだ」

『……そうだね。信じるよ……壬の事』

弱弱しくそう微笑むアルビノの言葉。それは自らに言い聞かせているようでもあった。ようやく静かになったアルビノを背後に壬は夜の街を進んで行く。

周囲を見渡しながら歩き続ける。すると視界を一人の少年が過ぎつた。少年の頭上に表示されている寿命に眼を凝らす。壬は眼の能力の発動を解除した。

『壬?』

「面白い物を見つけた。追い掛けるぞ、アルビノ」

『え? ちょ、ちょっと待ってよう!』

物陰に隠れながら小走りで移動を開始する壬。その視線の先、拳動不審な動きをしながらおっかなびっくり月下を進む人影があった。

『お主は歪んでおるな』

突然のダンテの言葉に黒斗は足を止めた。視線を背後に向ける。ダンテは黒斗の左後方、膝を抱えながらふわふわと空に浮かんでいた。

勿論実体化はしていない。その姿は誰かに見える事も無い。赤いマントを揺らしながら真紅の瞳で微笑む少女。美しい月の背景もあり、それはまるで幻想の姫君のよう。

しかしそんな妄想は直ぐに振り払う。黒斗は足を再び前へ。ダンテはその後を続いて行く。少年は黒いコートポケットに両手を突っ込んだまま視線を伏せて口を開く。

「急に何？」

『急でも無いのではないか？ まさか、自分が正常だと思っておるわけでもあるまい？』

「逆に訊くけど、“まとも”で居ていい事なんてあるの……？ 僕はまっぴらゴメンだよ。そんな風には生きられない。怖くて、危なっかしくて……傷つくのは嫌だからね。だから僕は“まとも”になんか生きたくない」

過去の記憶が脳裏を掠める。何となく重苦しい気分になり黒斗は眉を潜めた。“まとも”で居る事に意義さなんて見いだせない。臆病に、滑稽なくらい格好悪く、みっともなく、情けなく、逃げるような人生がいい。それが一番いい。それが一番傷つかないで済むから。

何かと向き合う事なんてしたくない。恐ろしくてしかたがないから。信じた所で裏切られるのがこの世の常。何かに依存する事は己の舵を誰かに預けるとい事。大切な宝箱の鍵を放り投げるとい事。そんな怖い事はしたくない。ずっとそう考えてきた。

逆に黒斗には自分以外の存在の在り方こそ理解に苦しむものだった。どうしてくだらない事で一喜一憂し、この素晴らしき退屈な世界の中で変化を求め続けるのか。

他人と関わり、自分と関わり、日々変わって行く事を求める

それは理解に苦しむ事。今を続ける事でさえ精一杯で、明日の事もわからない……そんな黒斗にしてみれば他人と接する事は恐怖以外の何者でもなかった。

『友に頼ろうなどとは考えぬのか?』

「考えた事もないよ。それで裏切られたらどうするんだ? 頼つたら期待しちゃうじゃないか。僕は絶対期待だけはしたくないんだよ。最も愚かな行為だ。絶対裏切られる。フラグだよ、絶望の」

『警察に駆け込もうとも考えぬのか?』

「当然だよ。警察なんて相手になんないよ。日本の警察は拳銃撃つのにだってモタモタしてるんだよ? 自分でゲーデの力を体感したから判るんだ。もう普通の人間にどうにか出来るレベルはとっくに超えてるって」

『お主にとって【デイヴィナ・マズルカ】とは何だ?』

真剣な声色でダンテが問い掛ける。身体を空中でふわりと回転させ、足を組んで宙に座る。腕を組んで小首を傾げる真紅の姫の言葉に黒斗は足を止め、苛立った様子で振り返った。

「……さつきから何? 僕は急いでるんだ。話しかけないでよ」

『そう邪険にするな。パートナーなんじゃからな。相棒の気持ちくらい知っておくのは当然じゃろう?』

眉を潜め、身体ごと振り返る。そうしてダンテに詰め寄り、その眼前に人差し指を突き出して黒斗は口を開く。

「“迷惑なクソゲー”だよ、ダンテ。それ以上も以下も無い。そういうヒロイックな事に僕を巻き込まれても困るんだよ……! 選ば

れた十二人の契約者？ 死神のゲーム？ 喋る剣？ 冗談じゃない！ 冗談じゃないんだよ ツ！！」

腕を振るい、大地を蹴る。額に手をあて、黒斗は背中を丸める。その様子は怒っているわけではなく。不安にかられているわけでもない。ただ “予定が変わってしまった” 事に苛立っているような。そんな、子供染みた感情だった。

「僕は絶対に死にたくない……生き残る為だったら何でもやるさ。君も僕のパートナーだっていうならくだらない事を言っていないで生き残る手段を考えてよっ！！ 御託なんか並べたって仕様がなじゃないか！？ もっと机上に空論を並べよ！！ 君は！！」

怒気を孕んだ声で告げる黒斗を正面にダンテは全く別の事を考えていた。自分から話を振っておいて、既に黒斗の発言など思慮の外である。

朝霞 黒斗 ダンテの契約者となった少年。他人を拒絶した性格、不安定な言動、子供染みた感情論……優れた契約者であるとは言えない。それは確かにお世辞にも言えない。だが 何となくダンテはこの少年の事が気に入り始めていた。

それは決して褒められたものではない。しかし少年は強烈に“個性”を所持している。自分自身という存在を理解している。それはやりようによつては強さに変わるかもしれない。この最悪の状況に僅かな光明が差し込んだ。

『成る程。朝霞 黒斗 面白いのう、お主は』

「はあ？」

素っ頓狂な声をあげ、眉を潜める黒斗。ダンテは無邪気な笑顔を

少年に向ける。そうしてゆっくりと振り返り。

『じゃが確かに今は下らぬ問答を続けている場合ではなかったようじゃな』

闇夜を射抜く真紅の眼差し。夜の闇の中、ゆっくりと歩いてくる人影が一つ。腕を組んだダンテが黒斗の隣に降り立ち、その肩に触れる。

『つけられたようじゃな』

「~~~~~……ッ!! 最悪……ッ」

夜空を覆っていた雲が風に吹かれて飛んで行く。月明かりを浴び、暗闇から姿を現したのは一人の少年だった。眼鏡をかけた茶髪の少年 阜羽 壬。黒斗が最も恐れていた“殺人鬼”の契約者、その張本人が黒斗の目の前に立っていた。

思わず気圧されるように黒斗は一步後退する。その表情は恐怖に脅えていた。一方壬は白いコートの裾を揺らしながらゆっくりと前身を続ける。

「冷え込む夜だ。空は澄んでいるが、月明かりはどこか寂しい……。お前もそうは思わないか？」

鋭い視線が身体を射抜くような錯覚を覚える。壬の瞳が月明かりに照らされて一瞬緑色に輝いた。ダンテは眉を潜め、黒斗の前に立つ。

『“眼”を使ったらしいな』

「眼！？ なにそれ！？」

『説明は後じゃ。ついてきたということは 来るぞ』

王の腕時計が光を放つ。閃光と共に空中に現れた純白の少女がふわりと大地に降り立つ。自らの【ブリスゲード】 アルビノへと手を伸ばし、その形状を剣へと変えて王は構えた。

白い刀身に赤い紋様を持つ、不気味な片手剣。それを軽く数回振り回し、王は一息に駆け出した。対する黒斗は慌てた様子で後退しつつ、

「 ダンテツ！！ 」

叫び声と同時に王が正面から襲い掛かる。繰り出された斬撃しかしそれは黒斗の身体の周囲に渦巻く火柱に阻まれていた。

高熱の障壁に剣を翳して防御しながら王が身を引く。火柱が燃え上がったのは一瞬。直後、黒斗は実体化した“ダンテ”を両手に握り締めていた。

白銀の刀身を持つ、聖なる剣。黄金の装飾の施された盾を備えた、特異な形状の大剣。それは攻める事よりも護る事に優れているかのように見える。

黒斗はダンテを構えた。その構えには“腰が入っていない”。今直ぐにでも逃げ出したい そんな弱気な感情が込められている。

「 やっぱりな 」

剣を降ろし、王が肩を震わせて低く笑う。それだけで背筋をびくりと震わせて黒斗は後退する。

「 お前 戦うのは初めてか？ それとも、ゲード同士の力量差が

理解出来るのか……ふん、どちらにせよ都合がいい。お前を倒して
その魂で僕はアルビノを強くする。お前は“昨日の”よりは弱
そうだ」

「な　っ!？」

「はははっ!!　実験台にさせてもらおうか!!　丁度いい力試し
だ!!　アルビノッ!!」

「う　わあああああっ!？」

甲高い金属音が鳴り響く。黒斗はあろうことか両目を瞑り、剣を
前に突き出すだけの防御で壬の斬撃を防いでいた。壬はそのまま連
続して黒斗へと斬りかかる。殆どまともに防ぐ事も出来ない黒斗は
隙だらけであり　その防御の合間を縫ってアルビノを奔らせる。
黒斗は無意識に身体の中心部を、更に剣の大きさも相まってほぼ
正面全域を防御する事が出来ていた。しかし側面のガードがから空
きである。脇をすり抜けるようにして身体を捻じ込み、擦れ違う刹
那、一撃を叩き込む。

アルビノの刀身が確かに黒斗の脇腹を斬り裂いた　その手ごた
えはあった。正面に向かつて跳躍するような形ですり抜けた壬は空
中で反転し、黒斗を見据える姿勢で着地する。大地を滑り、勝利を
確信して顔を上げたその時、ようやく異変に気付く。

『あ、あれ？　壬……?』

「……………」

無言でアルビノを見やる壬。刀身には　血の一滴も零れては居
なかった。

確かに手ごたえはあったはず。正面を見やる。黒斗はようやく王が背後に回った事に気づいたのか、ぎこちない動作で振り返った。しかし確かに斬りつけたはずの側面に傷跡は見えない。

「い、今僕……き、斬られなかった!？」

『うむ』

「うむ。じゃないでしょ!？ け、怪我は!？ なんで痛くないの!？」

『別にシンプルな答えじゃ。“我”は』

黒斗を中心とし、周囲に光が走る。空中に、大地に、浮かび上がる赤い紋様。真紅の結界の中、黒斗は目を丸くしてダンテを見詰める。

『予め言っておくぞ、黒斗。“我は強い”。この程度、なんて事はないわ』

「 防御能力を持ったゲーデか……! アルビノ、仕掛けるツ!」

『う、うん! じゃなくて、はいっ!』

王は自らの刀身を眼前に構える。そうしてあるう事か、その鋭い刃を自らの手で強く握り締めたのである。

当然のように掌の肉は裂け、血液が溢れ出す。どくどくと白い刀身を赤黒く血液は染め上げて行く。その時だった。それは黒斗にもはつきりと感じ取れた。つい先程よりも今の方が。今よりも恐らく

は次の刹那の方が。 “アルビノの力が増している” という事実
に。

血液を浴び、刀身は喜ぶように輝いていた。刻まれた紋章が鼓動
を刻む。血飛沫を滴らせながら王は血に染まった刃を奮う。空中に
霧散した血液は一瞬でアルビノの刀身に凝固し 剣は真紅の装甲
で覆われていた。

「ブラッド・ドレイン
血喰らい、発動」

王が再び走り出す。黒斗は先ほどと同様、結界を展開して防御を
行う。剣を前に。王は今度は側面から斬りつけるような事はし
なかった。アルビノの何倍もの巨大さを持つ大剣ダンテに対し、正
面から打ち込んで行く。

力の強弱は明白。ダンテは一撃で王の攻撃を防ぎ、更に軽く前身
するだけで王の身体を弾き飛ばす事が可能だ。ダンテのパワーは優
秀、実際に斬子の攻撃をあっさり跳ね返して見せたという過去の
実績がある。

黒斗はダンテの力を信じた。しかし王は優劣の明らかな正面衝突
に微笑を浮かべて望む。薙ぎ払うように揮われた刃。それはダ
ンテの刀身に直撃し、激しい衝撃と同時にその刀身を側面へと反ら
した。

“弾かれた” その事実が上手く認識出来ずに黒斗は目を丸く
する。王は既に次の攻撃の準備を整えていた。続く連続攻撃 先
ほどと同じ動き。先刻は全て防ぐ事が出来た。なのに今は 耐え
切れる気がしない。

『黒斗ッ！！』

ダンテの怒号に意識を引き戻される。剣を正面に構えたまま後方
目掛けて思い切り跳躍する。加減が出来ずに滑るようにして後退す

る。その黒斗の眼前、真紅の剣筋がいくつも折り重なるようにして空ぶった。

汗の球だけその場に残し、黒斗の身体は後方へ。しかし着地を考えずに思い切り跳んだ為、10メートル以上跳躍した拳句、殆ど後部に倒れるような姿勢になってしまう。咄嗟に大地にダンテを突き刺し、ブレーキと姿勢制御を行う。

「くそっ！！ ちょっと後ろに下がればいいだけなのにつ！！」

力の制御が上手く出来ていない。それはハッキリと理解出来た。元々ぼろぼろのアスファルトに更に巨大な亀裂を作りながら停止する。無意識の間に呼吸を停止していた黒斗は一気に息を着き、途端に遅れて震えがやってくる。

何が起きたのかわからなかった。アルビノの威力は高が知れていたはず。しかし王が刀身に血を浴びせた瞬間、その威力も、リーチも、何もかもが強化されたように見えた。

「特殊能力だ。個々のゲーテは外見だけではなくその性能も能力も異なる。単純な見た目や基本能力だけで相手の力量を判断するな！」

「じゃあ、あいつは 血を刃に浴びせる事で、剣の威力を強化するって事……？」

「殆ど正解だが ひとつだけ間違いがある」

答えたのはダンテではなく、敵であるはずの王であった。王と黒斗の間合いは凡そ5メートル。ゆっくりと語りかけてきてもおかしい事はない。お互いの間合いは充分すぎる程開いている。

黒斗は剣を正面に構え、息を呑む。王はアルビノを片手に余裕の

笑みを浮かべ、赤い刀身を軽く揮う。

「お前はアルビノを“剣”だと言ったな」

そうして何度も繰り返し繰り返し、その刃を揮う。赤い軌跡が夜の闇の中に蠢く。そうして “ようやく気付く”。

アルビノの閃光が。刃を揮う度、そのリーチが。刃が描く軌跡が “延びて” いる事に。一見理解に苦しむ事。しかし黒斗は咄嗟にそれに反応して見せた。

突然、離れた場所で王が鋭く腕を振るう。片手に握り締めているのは勿論アルビノである。しかしその刀身は 。まるで蛇のようにのた打ち回り、鋭く伸び、あろう事か離れた黒斗目掛けて襲い掛かったのである。

剣で攻撃を弾くも、激しく火花が散る。見た目の動きは撓り、揺れ、まるで頑丈な様子には見えなかった。しかし実際に防御して判る。その手ごたえは剣と同じ。しかしその形状は 。

「アルビノの本来の姿はこっちだな。こいつは剣じゃなく “鞭” なんだよ」

笑い、王は素早くアルビノを揮う。真紅の軌跡が無数の閃光の刃となつて黒斗に襲い掛かる。それは最早目で追うことさえ敵わない猛スピードの連続攻撃。

黒斗の今の身体能力ならばそれを防ぐ事は不可能ではない。しかし黒斗は自分の力が制御出来ない。的確に防衛行動をとる事が出来ない今の黒斗では、その攻撃を耐え凌ぐ術はない。

後退を急ぐ。しかしそれよりものたうつ刃が黒斗の首を飛ばす方が早い。思わず息を呑む。瞳を見開き、死を実感したその刹那 。

「 だから出歩くなと警告しただろう。朝霞 黒斗君」

背後から、無数の閃光が飛来する。それは黒斗のすぐ脇を通り抜け、迫っていた鞭の弾道を連続で打ち弾く。

相殺された衝撃で王は刃を引く。鞭の形状から剣へと姿を戻したアルビノを片手に王は忌々しげに舌打ちした。

「もう追ってきたのか……！ 太刀の契約者　！」

ゆっくりと振り返る黒斗。その背後、太刀を片手に歩く斬子の姿があった。黒斗の隣に立ち、少年に外傷がないことを確認すると斬子は視線を前へ。

正面に立つ王は昨晚出会った時とは様子が異なっている。手にしているゲーデは赤黒く輝き、刀身はまるで揺れているかのようにも見える。

「九頭龍……斬子……？」

「無事だったか？ 怪我は無さそうで何よりだ」

斬子はそう優しく微笑み、黒斗の一步前が出る。そうしてスサノオを構え、鋭い眼差しで王を見据えた。

「力をつけたな、殺人鬼」

「ああ。昨日のようにには行かないさ。傷も既に癒えた。今の僕なら、お前に遅れをとる事はない」

「　自惚れに気付かぬ事は哀れな事だな。その付け焼刃の技術、私に通用するというのならば試してみるがいい」

長大な太刀を片手で構える変則的な体勢。しかしそれにはあらゆる攻撃に対応出来るという、斬子の確固たる自信に裏付けされた独特の気配がある。

間合いに入り込むものならば全て斬り伏せて見せる。そんな、本能に訴えかけてくる危険な“におい”。月明かりを宿したような静かな瞳。美しい輝きを刃に乗せ、斬子は口元に笑みを浮かべる。

「寄らば斬り捨てよう。九頭龍斬子　夜月の瞬きがお相手する」

風を受け、斬子の黒髪が揺れる。王はアルビノを左右に振るい、身体を捻るようにして一撃を放つ。しかし直後、その攻撃が斬子に触れるよりも数秒早く。攻撃はいつの間にか繰り出されたスサノオの一撃で切り払われている。

繰り返し何度も攻撃を放つ。数秒早く　既に切り払われる結末が決定している。それは非常に異様な光景だった。アルビノの刃先が揺れ動き、対象を絡め獲るのに一秒も必要ない。それを数秒前には防いでいるかのような動作　無駄の一切存在しない、絶対的な防御。

防いでいるのではない。まるで次の攻撃を既に予測し、全てを薙ぎ払っているかのような錯覚さえ覚える。斬子は汗一つかかず、呼吸一つ乱さず、ただ無言でアルビノを弾き続ける。

まるで何事もないかのように。しかしそれは確かに怒涛の攻防であった。断続的に空中で刃と刃がぶつかり合う激しい轟音が鳴り響くのだ。それはまるで嵐のように、火花と共に夜空に舞散る。

「何故防がれる……！？　何でアルビノの攻撃が！　次の攻撃がわかるんだ！？　能力か！？　何かの能力で　！？」

斬子は答えない。そのまま一步、前へと前進する。来る　そう考えた時であった。王はアルビノを背後に構える。剣を背後に

それは突きの姿勢だった。

「出し惜しみは無しだ……！ その能力がなんだかは判らないが、これなら ツー！！ アルビノオツ！！」

『うん、判つてる……！！』

鞭のようにしなる刀身が螺旋を描く。背後に構えた渦巻く刃を正面へ、一步踏み込むと同時に放つ。

「『 ストームブリンガー
巻き込む血潮

ツ！！！！！！』

それは、アルビノが持つ最強の能力。血潮は渦となり、竜巻のように鋭い突きが放たれる。それは一直線に斬子目掛けて猛進する。

威力は折り紙突き 血液を媒介とした強化状態のアルビノの攻撃、更にその数倍の威力を誇る。ダンテとてまともに受ければ防ぎ切る事は出来ず、黒斗は致命傷を負う事だろう。だがその鋭い突きの一撃に対し 斬子は前へと踏み込む。

両足を前後に大きく開き、身体を斜めの姿勢に。大地擦れ擦れを低く構えるようにし 両手で構えた刃を頭上から一気に半月状に振り抜く！

一瞬、夜が昼へと変わるような閃光が瞬いた。真つ白な明かりの先、暴風に巻き上げられて斬子の黒髪が激しく靡いていた。一撃で斬子を貫くはずだった巻き込む血潮ストームブリンガーの一撃 それは、たった一振り太刀が触れただけで軌道を大きく押し曲げられていた。

『そん、な………』

「だが ツー！！」

ストームランガー
巻き込む血潮は弾かれたとしても、Uターンして対象を追い続ける。大地を削り飛ばしながら猛進し、空をUターンして飛来する真紅の竜巻。それは、背後から斬子へ襲いかかる。のではなく。一人呆けてそれを眺めていた黒斗目掛けて降り注ぐ。

「くっ」

初めて斬子が焦りの表情を見せた。咄嗟に反応し、大地を蹴る。しかし黒斗の元までは間に合わない。竜巻は黒斗の側面から襲い掛かる。気付くのがコンマ数秒、遅れてしまった。

命中が確定する。黒斗は慌ててダンテを構える。しかし結果は一瞬で駆逐され、刃はダンテの刀身を削りながら黒斗の首筋、肩辺りをすり抜けて行く。僅かに遅れて肩と首から血飛沫が舞い上がり、黒斗の身体がよろけた。

二度目のUターン。今度は黒斗の胴体を貫くよう、狙いを定めて繰り出される。最早それは鞭でさえもなく、空中を自在にうねる大蛇のようである。黒斗の手からダンテは離れ、空を舞う。全てがスローモーションのような世界の中、自らの首筋から噴出した血に黒斗の表情が青ざめる。

正面には真紅の大蛇。横では手を差し伸べながら走ってくる斬子。首筋からは血が噴出している。黒斗は最早何も考えられなかった。冷静さと呼べるものは完全にどこかに落としてきてしまった。

「朝霞 ツー!!」

黒斗目掛けて斬子が手を差し伸べる。黒斗もまたその手に向かつて自らの腕を伸ばす。二つの手は重なり、そして。

次の瞬間、何が起きたのかは黒斗にも理解出来ていなかった。勿論それは巻き込む血潮を放った壬とアルビノにとっても予想外の状況であった。

黒斗は無事だった。その黒斗が手を握り締める先、血飛沫が上がる。黒斗はそこで漸く気付いた。自分が手を繋ぎ “引っ張り込んで盾にした” 九頭龍斬子。その胴体につけられた大きな傷の意味。斬子の血塗れの手からスサノオが零れ落ちる。美しい刃がアスファルトに転がり、そして 九頭龍斬子は気を失って血溜りの中に倒れこんだ。

「……………え？」

斬子の血を浴び、黒斗の顔の半面は赤く染まっていた。震える手で斬子の手を離す。自分がした事の意味を、理解する事も出来ないまま。

人を支配するのに最も手っ取り早いものは恐怖だという。

例えば、独裁政治。

力のない市民相手に武器を振りかざした政治官僚達が押し付ける国の在り方は、まさにそれそのもの。逆らえば焼く。逆らえば斬る。逆らえば 殺す。人間というのは通常例ならば傷つくことを恐れるものだ。

所詮死というものは、生きている人間ならば誰もが体験したことのない幻想だというのに、誰もが勝手に妄想し想像し、構想して恐れという着地点に降り立つ。これは、滑稽であるとしか言えないんだろう。

例えば、拷問。

戦争の激戦化に於いては秘密裏に捕獲した敵兵に、情報を吐かせるために目も憚るような行為を施した。その際、拷問官が頭に留意しておくのは一点だけ。 “ 死んだ方がマシだ ” と知らせること。この一点に限る。

殴打、切断、焼却 。 方法は何だって良い。男女の性別の相違によつて、方法はまた異なってくるだろう。何も身体的な物ではなく精神的なものでも良い。とにかく、こんな状況なら死んだ方がマシだと思わせる。

そして被拷問者が “ 死にたい ” そう頭に過つた時に一言囁けばいい。「吐けば殺してやる」と。

【痛み】とは脳への【危険信号】に他ならない。故にそんなものを常に浴びせられていたのなら、気が狂うというものだ。だから人というものを支配するには、恐怖というものを活用することが最も早い手立てであると言える。

それを、ザリチュはよく理解している。ただそれだけなのだ。

『……これで七人目だな、竜次』

「……うん」

人工の光　蛍光灯の光に反射した血染めの剣。それを竜次は床に向かつて払う。遠心力により振り払われたそれは、ファストフード店の白い床に点々と、一直線に飛び散っていった。

十数分前に四人殺した後、間髪入れずに竜次とザリチュは次の魂を喰らいにやって来ていた。現在では幸いなことに、日が変わるような深夜でも自然を装って入れる施設が多い。竜次とザリチュは、それを当り前のように残虐の為に利用していた。

男も女も容赦なく両断する。レジの前に平然とやって来た竜次は、そのまま受付の店員を縦一文字に斬りつけ、騒ぎ慌てふためく深夜の客達に駆け寄り、またも両断していく。実に所要時間は一分も掛かっていない。斬り付ける、獲物を追い掛けるなどは殆ど刹那の間で、時間が掛ったのはむしろレジの前で店内の客の位置を把握することだけだった。

『またかよ……』

「うん、ごめん。念には念を入れておきたいんだ……」

鼻から息を吹く、軽蔑を強く含んだ笑いを契約者である竜次に向けるも、竜次本人はもはや気にせず、色のない瞳で監視カメラと記録媒体を探すだけであった。

血の溜まりを広げる床を気にせず、竜次はびちゃびちゃと歩く。直ぐ足元に内臓が落ちていようと、目玉が落ちていようと、脳漿が飛び散っていようと、もはや竜次には気になる対象ではなかった。もう意味を為さない、自らの罪の塊である屍よりも、これから自分の身に危険が迫るであろう物の方が、竜次には遥かに重要なのだ。

「行こうか、ザリチュ。今日はもう満足でしょ？」

自動ドアを潜って、もはや一般人と大差のない姿で店内から竜次は出てくる。違いと言えば、独り言にしか見えない虚空に投げる言葉と、それに返す何者かの声があること。そして右手には巨大な黒い剣が握られていることだけか。

『……ああ。そうだな。まだ初日だから、このぐらいで許してやるよ。でも次は、この二倍だ』

その言葉と同時に、黒い剣は雲散する。闇に紛れる塵芥の粒子と成って、それは存在をこの世から消滅させた。

「うん、分かったよ」

店の前に停車させた自身のスクーターに竜次は歩み寄る。白い車体に被せられた白いヘルメットを手に取りながら、ザリチュの言葉に応えていた。

『俺の言う通りにすれば生き残れるからな、竜次。……俺の言う通りにすれば、お前は死なない』

「……うん」

虚ろな瞳で、竜次は腕時計に向かって頷く。

極限を超えた恐怖という感情は、竜次を破綻させるのに時間は掛からなかった。今では何も考えず、【デイヴィナ・マズルカ】に生

き残る為に動く魂を喰い。【デイヴィナ・マズルカ】本質の立ち回りをする竜次は【ブリスゲード】の契約者としては優秀な修羅の人物だが、人間としては既に救いが無いと言っても過言ではない。

当然そんなことを竜次は自覚している筈もなく、自身の【ブリスゲード】ザリチュの“渴き”を癒す為と、自身が生き残る為に無関係の人間に手を掛けていくことにもはや何の疑問を抱いてはいなかった。

ヘルメットを被り、スクーターのエンジンにスイッチを入れる。煩い音と共に、竜次の体に振動が伝わった。道路へと出る為に、足を使いスクーターを後ろに向かせるが

「今夜は随分と血生臭いのね。お兄さん」

そこには一人の女性がいた。二十代過ぎたか過ぎてないかという風貌。夜の寒空に吹く風に、セミロングに切られた青い髪が横へと流れている。足の長さを強調するように短いスカートを履き、その長い脚は黒いタイツに覆われている。

一歩、笑みを被って少女は竜次へと近づいた。その瞬間だった。

「イデアライズ【実体化】」

女性　澄華の両手には、表面に穢れのない水を凍らせたような、とても刀身の短い半透明な青い双剣が逆手に握られていた。

「……ザ、ザリチュ！」

竜次はその姿に恐怖し、ハンドルを握る指に力を入れる。

蘇る恐怖、命の危機、死の予感。あの時の少年との斬り合いが、脳裏に色濃く浮かび上がった。

「……貴方、【デイヴィナ・マズルカ】の参加者ね？」

腕を伸ばし、背後に刃を突き立てながら澄華は妖しく語り続ける。青い髪に青い剣。それは暗闇の夜空に反射し、妖艶な雰囲気を作り上げていた。

「お相手、お願いできるかしら？」

直後、澄華は体を回転し、その短い刀剣で竜次へと斬りかかった。リーチが短いとは言え、その双剣は【ブリスゲード】であることに変わりはない。

抵抗などなく、竜次のスクーターへと刃が沈み込む。それと同時に竜次はスクーターを捨て、後ろへと黒い大剣　ザリチュを展開させながら大きく跳ねて後退した。

エンジン部を両断されたスクーターは火花を散らした。それを見、澄華はハンドル部分へと足を駆け、双剣を広げ高く跳躍する。

見上げる竜次の視界には澄華が映り、その彼女の姿は竜次に月を背に舞い降りる青い硝子のような印象を与えた。浴びれば身を刻まれる鋭利な硝子。身に刻まれた恐怖で、竜次は本能的に剣を体の前へやり楯とする。

振り下ろされた澄華の双剣はクロスを描き、両の刃でツヴァイハンターの刀身へと斬撃が入る。

その衝撃に竜次は肩を震わせながらも、弾き後退させるためにツヴァイハンターを前方へと強く押す。すると、酷くあっさり澄華の双剣はツヴァイハンターから離れ、澄華の体すら奥へと後退させる事に成功した。

それに驚くのは実行した当の二人。

「あ、れ　？」

昨夜の麗夜の刃に引き続き、力を加えれば相手の刃は皆容易く退くことに竜次は気づく。

それはどうして？ 相手が手を抜いたから？ 自分に特別な技術があったから？ いや、それらはきつと違う。

「 竜次！ 俺達は強い！ そしてアイツは脆弱だ！ 俺たちなら余裕で勝てる！ 行けえ！ 竜次っ！」

二人は確かに、自分達の単純な強さを理解した。故に竜次は、目の前の獲物へと駆け寄る。

月に反射するその剣先を冷静に見つめながら澄華は、

「……あんなこと言ってるけど、そうなの？ テイル」

「……はい。あの【ブリスゲイテ】凄く恐ろしいです。速いし、堅いし、それにとっても重いです。でも何より」

そう、と弧を描いて自身を切り裂きに来る刃を見て、双剣 テイルを構える。

振り下ろされた刃を澄華は左の刃で斜めに受け流す。そのまま更に落ちてくる重いツヴァイハンターを右の刃で受け流し、結果として大きく斜めに剣の軌跡をずらす。ずれた軌跡は、流れる澄華の青い髪を通過した。

『 何だが……“底”を感じません』

「 “底”？」

澄華は地面へと斜めに突き刺さる刃に片足で踏み込むと、またも高く跳躍した。そのまま竜次のヘルメットを踏みつけ、体を反転さ

せ、足を空に向けるようにして、両の剣で斬り付ける。が、竜次は頭部を踏まれた瞬間に、力任せに地面から剣を振りぬき、独楽のように一回転していた。

それに対し即座に澄華は反応し、両の刃を交差させて驚異的な重圧。魂が“上乘せ”された斬撃を押し付けてくる大剣を、何とか防ぐ。

が、衝撃までは押し殺せず、小さな澄華の身体は遠くへと吹き飛んでいった。一度回転しながら、足は地面へと向けて、降下していく。

「何だかあの^{ブリスゲーデ}人、怖いです。 スミカ！」

着地した直後、僅か澄華の身体が滑っている間、悲鳴の様な訴えをティルがしてくる。

不思議と、^{イデアライズ}【実体化】している間はティルヴィングの気持ちというのが如実に伝わっていた。原理はよく分からない。けれど、これは体が軽いことや、握ったこともない剣の扱いに長けていることに何か関係があることなのかもしれない、と澄華の頭の片隅では思考が行われていた。

しかし今、重要なことはそれではない。子供のように脅え切っているティルの様子が気になる。何だか静かだった海面が、さざ波のように細かく震えている、そんな脅え方。

「……分かったわ。今夜は引きましょう」

澄華には、【ブリスゲーデ】の心情を無視して戦うのは得策ではない、と何となく直感していた。わざわざ二人組で組まれた生き残りを駆けたレースなのだ。一人で突っ走っていくことで勝利に結びつくとは考えにくい。

だから後退。澄華は目前にいる敵に対し、無様にも背を向け走り

去っていく。

『おい！ 竜次、追うぞ！』

「い、良いよ。ザリチュ。今日はこの辺にしておこうよ」

『ああ！？ どうして！？』

「も、もうすぐ人も集まってくるだろうしさ。そ、それに今日はもう良いよ。……つ、次の時にまた魂を食べれば確実に倒せるようになるだろ？ だから、さ。ね？ ザリチュ」

『……………次は倍だからな？』

そう言って、黒い大剣は消え失せ、青い髪の少女の姿も夜に紛れていった。

「クソ。何処にもいねえじゃねえか」

俺は深夜の神貴アクアポリスを彷徨っていた。探す範囲の中心は、昨夜のあの電光掲示板群の周辺。あのスーツの男と再び刃を交えたくて俺はこんな夜遅くに出歩いていた。

しかし、誰もいない。あの男どころか、夜中の街を歩いている奴人っ子ひとりいない。辺りに人気がない、ということはその場全域が戦闘領域に成り変わる可能性が十分にあると考えられ、自然と俺の鼓動は高まるが、全く持って期待通りにはならない。

だが、きつと今の俺にはそれが良い。今までが苦勞なく思い通りに行き過ぎた。人に威張れるような努力をした訳でもなく、神貴ア

クアポリスに新設された進学校 明蔡学園へほぼ首席で入学。その時点で、もはや証明に事は足りていると言える。

だから二時間近く歩き回っても目標を探し出すことが出来ないこの状況こそが、俺にとつての求めていた“非日常”である。思い通りにいかない未来。ならば俺は、その中で必死にあがいてやるのではないか。

「おい、何か策はないのか」

『ありませんねえ……あ、私を【イテイアライズ実体化】させながら歩くのはどうですか？ そうすれば参加者から一目で分かって貰えます』

「お前は、本当に莫迦か？ 寿命縮まっちゃうって言ってんだろっ
が」

『む……そのぐらい分かってますよ。わざと言ったんです、わざと……それに私は散策、はんたい猛反対したじゃないですか……』

と、不貞腐れたように言うクレイ。腰の辺りから聴こえるそれは、顔は見えないもののなんだか口を尖らせている幻が見える気がする。そう、こいつは散策に出向く前、【ブリスゲード】に有るまじき発言をしやがったのだ。“闘いなんて大嫌いです”。そんなことを大声で言いやがる。流星にどうということだこの野郎、と怒鳴ったのは言うまでもない。

……ああ、隣人への心配は全く要らない。俺の住む高級マンションには完璧な防音が施されている。玄関など特殊な場所以外では、恐らく歌を大声で歌ったって聞こえない。だから、連れ込むには最適だったりする。

……とにかく、クレイは昨夜、戦いなんてしたくない。そう断言したのだ。だったら何でゲーデになった、そう問い詰めても何も言

わない。お前は俺の剣になるんじゃないやなかったのか、そう言っても口を閉ざすだけ。殺意が沸いて銀時計を潰してやるうかと思っただが、流石にそれは自分の命を潰すのと同様な為押さえつけたが。

だからとりあえず、銀時計の姿のまま夜の街へと強引に連れ出したのだ。

「はあ……畜生」

繁華街に設置されているベンチに体を放り投げる。足を開き、腕を左右に背もたれへ広げて寄り掛かるといふ、凡そ普段の俺なら一部を除いた他人に決して見せない傍若無人な態度。

流石に、苛立ちというものを隠せなかった。クレイがただ臆病なだけなら良かった。けれどそうじゃない。クレイは確固たる意志を持って戦いというモノを拒絶している。

確かに、初めに会ったあの時も、光に包まれた女神のような印象を抱いた。だから、慈愛を分け隔てなく振り撒く、そういう印象を抱いたことも事実だ。だが、いざそれを本当にやられると腹が立つ。

持ち主がやる気で剣がやる気がないってどういふ事なんだよ。俺が主だろうか……。

動きやすいように、と思つて黒のカーディガンに黒のニット帽で来たのが不味かった。意外と寒い。頭は帽子のお陰で暖まっているものの、体全体は中々寒い。袖の辺りを擦つて寒気を誤魔化そうとするが、十二月半ばの冷えには無意味だった。

『寒いのですか？』

「あ？ ああ、まあ、ちよつとな」

『……私が温めましょうか？』

「…………ギャグだよな？」

『えっ？』

「……………」

『……………えっ？』

「……………もういい」

はあ、と溜息を吐く。すると目の前は白い息によって、まるで霧のように塞がれた。その水蒸気はゆらゆらと空へと立ち昇り、やがて。

「 貴方、死にます」

開けた視界には、白いドレスの様な服装に身を包んだ一人の少女が立っていた。短いスカートに膝丈の上まである白いオーバーニーソックスを履き、白い僅かにフリルの装飾が施された日傘を持っている。その姿は、何処か可憐な印象を抱かせる。

「……………ああ？」

突然現れた少女。いきなり言ってきた言葉が“死ぬ”とはどんなに不躰だ。だからポケットに手を突っ込み、尻をベンチ深く掛けながら俺は言っつ。

もう“仮面”を被るといふ事など、頭の中からは吹き飛んでいた。完全に素の状態。不良その物の横柄な態度で持って、目の前の少女に不機嫌の塊をぶつける。

だが、所謂白いゴスロリチックな服装に身を包んだ幼い少女は、怯む様子なくアメジストのような澄んだ大きな瞳を俺に向けてくる。その透き通るような綺麗な瞳は、こちらの全てを見透かしているかのよう。

「貴方は……このままでは真っ先に死にます」

「お前……【契約者】か？」

「乖離した星々は交わることはありません。……それらはただ、彷徨っただけ」

だが、目の前の少女は俺の問いかけに答えない。紫色の瞳を向けたまま、小さい唇で言葉を紡ぎ続けるだけ。

どういうことだ。俺が……真っ先に死ぬ？

「お前……何を言っている？」

「……どうか、それに気づいて下さい」

そう言って、カツカツと靴音を鳴らして少女は去っていく。

無防備な背中を見せるその姿は、戦闘を行う気など皆無だろう。

ならば、今ここで殺してしまうべきだ。戦闘の意思のない【契約者】など、恰好の餌食でしかない。……その筈なのに、俺の脚は、腕は動かなかった。

何処か少女の言葉は、俺の心に深く染み渡る。何故かはわからない。分からないけれど、それが分かってしまう。身体が凍りついてしまうほどに。

純白の少女は不可解な謎を残したまま、街の雑多な建造物へと姿を消していった。

DAY 2 : Long Distance Runaround (2)

夢を、見ていた。

草原を駆け抜け、ただひたすらに走る夢。長い地面の草に何度も転ぶ。その度に体の傷は増えて、身体の節々はまた動かしにくくなる。

けれど、それでも諦めない。心は焦燥に駆られていて、前のめりになりながらも、顎を前に出してでも必死に走る。ただ走る。足を前に。足を前に。急がなければ。急がなければ。そんなことを延々と繰り返す。

果てはあるのか。道はあるのか。自分が辿り着くべき場所はあるのか。そんな不安に駆られながらも、ただひたすらに走り続ける。

既に喉は乾き切っている。酸素は既に足りなくなっている。それでも倒れてはいけない。それでも前に進まなくてはならない。

いつになったら終わるのか分からない走りをひたすらに、ただひたすらに。

辿り着けるのかという不安。この思いが届いてくれるのかという恐怖。その感情に心臓が収縮した途端。

「ッ。何だ、今の」

広がる草原から、見慣れた俺の部屋へと視界は変わった。目を開け、周りを見渡しても見えるのは当然俺の部屋。草原などないし、自分の怪我も昨日の顎の部分だけだ。

心臓に手を当てると、まるで全力疾走したかのように速い鼓動を刻んでいる。

額に手を当てると、驚くほど汗を流している。まるで夏場に走り込みをしたような脂汗。冬に書く寝汗にしては随分と異質で気持ち悪い。

……仕方ない。まだ時間は五時だけれど、もう起きてシャワーを浴びることにしよう。散策から帰って約三時間しか寝ていないが……まあ、何とかなるだろう。

濡れた頭をタオルで拭くものの、寝不足であることには変わりない。夜中に遅くまで起きていたということも、おかしい夢を視たということもあり、まあ……何はともあれ寝不足だ。

頭からタオルを垂らしつつ、皿に牛乳と一緒にぶちまけたシリアルをスプーンで掬う。そのまま無意識的に顎を動かす。もはや味も理解出来ないし、更に言えば何を食べているのかすら分からなくなつてしまいそうなほど、俺の思考というものは何処かここではないところへぶつ飛んでいた。眠い、というのはまあ確かにあるが……それよりももっと、そんな眠気も、朝食なんていうものでさえも吹き飛ばすような、俺の興味を引いている事柄がある。

“乖離した星々は交わることはありません。……それらはただ、彷徨うだけ”

その言葉がいつまでも俺の頭で連呼されている。

一体その言葉の持つ意味は何だというのか。乖離した星々……それに、交わらない。俺が何かを見逃している。そういうことだろうか。例えば、俺があの大剣を持ったスーツの男と対峙した際に、何かを見落とした。故に、あの開催宣言が行われた繁華街を中心に探しても無意味だと。そういうことか。そうすれば彷徨うだけというのも納得がいく。

けれど何か、何かがしっくり来ない。というより、重要なピースが欠けている。何故俺が死ななくてはならない。

「……分かん」

『何がですか?』

テーブルに置いた銀時計から声がする。クレインクライン 通称クレイ。戦いを拒否する戯け者の【ブリスゲーデ】だというのに、のうのうと俺の前に居やがる。何故俺の【ブリスゲーデ】がこんな奴なんだ。意味が分からない。……敢えてもう一度言おう。意味が分からない。

「何でお前なんだ？」

『何がですか？』

「……」

『え！？ ちよつと！』

敢えて思考から追いやる。とりあえずあの少女の言葉は置いておく。考えても埒が明かない。まず第一、この【デイヴィナ・マズルカ】自体の謎が多すぎる。

あんな宣言だけで殺し合いをおっ始めようというのだ。傍から見れば、まさに正気の沙汰だろう。けれど、当事者である俺達に於いては一切そんなことは感じない。誰もが現実として、嘘の様な出来事が起こっているのだから。

……【デイヴィナ・マズルカ】、【ブリスゲーデ】、その他にも不可解なことはとても多い。例えばこの時計。

『ひゃっ……』

蓋を開けば、既に針は一昨日見た時より動いている。あの時は日付の部分が十であったものが今では八 いや、既にそれが半分ほど上に行っているから、それ以下か。どうもこれは、時間が立つほ

どに日付欄を模した数字で俺の寿命をカウントダウンしていくらしい。そして、針は現在の時刻より八時間早く刻まれている。これは即ち、期限の九日よりも俺は早く八時間寿命が尽きることを意味している。……ああ、これも何処かの阿呆が余計なことをしてくれさせた。何を考えているんだ。寿命を削って看病など……。

「頭が空っぽなのか？」

『……だから、何がですか？』

一度溜息を吐く。まあ、考えたって無駄なものは無駄なのだろう。一先ずは学園へと通う事にする。俺はまだ、優等生の仮面を脱ぐわけにはいかないのだから。

……退屈な教師の話は片手間で聞き取る。きっと 否必ず、俺は普通に講義を受けているように見える筈だ。板書はしっかりと手元のルーブリーフに、それも丁寧に写しているし、教師の話は耳に届き記憶している。教師の目だって見えている。……けれど、俺の思考は又、講義に関わる思考とは別に、【デイヴィナ・マズルカ】に関しての思考を並列して行っている。……とはいっても、両方ともあまり考える事項がないため、そんな大それたことではないのだが。

まずは真っ先に考えたのは、今後の方針。それは無論、積極的に動き続けることは変わらない。これは譲れない。だからクレイは引きずってでも連れていくことにする。

次に索敵方法。……これが難題だ。昨夜二時間近く探し回って、何も見つからなかったんだ。……いや、確かに一人見つけたが、あいつは例外だ。戦う意思が見られない。そんな奴はとっと他の奴

に殺されてしまえばいい。だから当面、俺が狙うのはあの大剣の男。そしてそれを追うには、何か明確な目印がなくてはならない。

「……」

悔しいが、考えても埒が明かなかった。俺は【デイヴィナ・マズルカ】全般に於いて無知にも程がある。……まあ、当然、金で雇って大量の人員に探させるという手はあるにはある。だが当然、そんな方法は論外であることは言うまでもない。だからやはり、地道に俺一人で探さなければならぬ。……俺、一人？

そこで初めて気づく。自分の中で勝手に戦力外通達を下していた一人の馬鹿野郎の存在を。クレイだ。【ブリスゲーデ】である奴自身なら、俺の数倍は理解できている筈だ。

シャーペンでノートの端に“敵を探す方法はないのか。真面目に考える”と書き記す。その後、銀時計を腰から外してそこら付近へ持っていく。すると何やら暇してたクレイは即座に気づいてくれた。

「ある人はありますけど……私にはそう言う能力はないですね……」

能力？ 待て、お前らはただの剣じゃないのか。神出鬼没の、ただ現れるか消えるかするだけの。能力 それはゲームや漫画で見ると、オタク達が見るような、あれか。……そうか。確かに既にこのゲーム自体が漫画の世界だものな。そのくらいに突き抜けていてもおかしくない。そんな設定が有り得るなどという事は、完全に思考から消え失せていた。

……ならば、こいつ自身にも、こいつ特有の能力があるはずだろ
う。

それをまた、ノートの端へ書きなぐろうとした直後、

「　　そう言えば夕べの夜、強盗があったらしいなあ。コンビニと……マク、だかモツスだから」

と、教師の雑談の声が聞こえた。

講義の内容とは全く関係のない話。思わずそれに対し敏感に反応してしまふ。

「しかも凶器は刃物の……刃渡りが大体、150センチ？　なんてまるで刀みたいな大きさだって言う検死が出たらしいじゃないか」

皆気をつけるよ、なんて教師は言っている。そして更に、刀と言え……などと余計な会話へと広げている。その会話を聞かなくてはならないのは苦痛この上ないが、仮面の為に成長することにする。しかし、思考は並列に。

刃渡り150……そんな馬鹿デカイもの、俺は一つしか知らない。これは偶然か、否か。　そんなもの、決まっている。それにあの時のあの男の様子はおかしかった。あの脅え方は異常じゃないのか？　声を聞いた限りでは、あの男のゲーデは強気な性格をしていた。強気な性格と臆病な性格では、主従関係が逆転する可能性すら大いにあり得る。

「……ふむ」

『レイヤ、今のお話は……』

どうやら、クレイも同じ結論に至ったらしい。そうと決まればやる事は一つだ。

とりあえずは、屋上へと向かう事にする。幸い先程の講義は四時限目であった為、昼食の時間が直ぐに訪れてくれた。流石に人目がある所で、クレイと二人で傍から見れば独り言のように会話をする

気は当然ない。変人になど見られてたまるものか。

だから、急ぐ足は屋上へ。明蔡学園は数ある高校校舎のうち珍しく屋上が解放されているところだった。いくつかのベンチが置かれ、昼食を食べに来る者も少なくない。……ただそれは当然、春や秋等の気温の丁度良い過ごしやすい季節だけである。ただでさえ風が強いだけでそこに出向きたい気分など壊滅的に失せるのだ。ましてやこのクリスマスを目前に控えた寒空にやってくる人間は相当物好きだろう。

と、思っていたが物好きがいた。

奈雲なぐも遼太。幼い風貌の背の低い少年は、手摺りに両の肘を掛けて、高所から見える景色を前に何やら心ここにあらずと言った雰囲気だった。

「……どうした、遼太」

とりあえず、声を掛ける。ただそれは当然、遼太のことが心配であつたからではなく、どうにかしてこの屋上から出て行かせたいという気持ちの表れ。

「……先輩」

風が僅かに戦そよぐ中、遼太は俺へ茶色の瞳を向けてくる。……何だか、普段の元気というものが見られない。いつもなら俺の顔見た途端に先輩先輩と尻尾振って纏わりつく癖に、今日は酷く憂いを帯びている。

「ちょっと……考え事を」

そう言って直ぐに視線を戻してしまふ。まるでその姿が俺に「邪魔だ」と言っているような気がしてならず、少し苛立つ。

「先輩は」

「あん？」

「先輩は、もし病気の子が元気になったら喜びますか？」

背を向けながら、遼太は俺に意味の分からない問いかけを投げた。いや、言っていることの意味は分かる。だが、質問の意図が全く理解できない。何を当り前のことを聞いているのか。そう思うだけだった。

「そりゃ……喜ぶもんだろ」

「そう、ですよね……」

「まあ、嫌いな奴の具合が良くなったっていうんじゃ、喜ばねえけどよ……」

「そんなことありませんっ！」

背中のまま、遼太は声を荒げた。思わずその初めて見る出来事に、吃驚する。

今までで涼太がこんな声を上げた事などあっただろうか。不良に囲まれた時でさえ、恐怖で声を出せなかったというのに。幼い頃にその容姿のせいで女だ女だと苛められていた時だって、決して怒鳴り声など上げなかった。

……そう、客観的に見て、遼太はとても心優しい少年なんだろう。幼い容姿に宿った心は純粹で、何処までも真っ直ぐな。だから遼太は周りから好かれる対象であり、周りから構われる対象なのだ。

嘗ては、遼太は孤児院にいたと、聞かされたことがあったことを思い出した。俺と遼太が知り合ったのは小学校の頃だから、良くは知らない。けれど何か事情があつて、そんな施設に入れられたんだろ。懐の裕福な俺には、到底理解出来ない状況だ。路頭に迷うなんてことは姫桜家に居れば頭に過ることすらなく、俺が捨てられるなどという事も有り得ない。父より優秀な俺を、周りが手放す筈がない。

……孤児院という環境を得て、遼太は心優しい少年になったのかもしれない。きっと色々な人間がいたのだろう。それは良くも悪くも、色々。

人の心が成長するにはあらゆることに対する経験が必要だ。中でも、人との触れ合いは効果的。人と人との触れ合いは、心というものを肉付けしていく。

だからだろう。遼太の背中が、俺の目にさえも真っ直ぐに映るのは。

「ごめんなさい。その……」

「まあ、良いから。さつさと」

肩を強引に掴み方向転換させ、鉄の扉の外へと放りこもうとぐいぐい押していく。たたらを踏みながらも、遼太は苦笑いを浮かべながら歩いて行く。

唐突に、電話が鳴った。

電子音により奏でられている一曲。それは、童謡だろうか。となれば当然俺の電話ではない。俺はメロディを設定しない主義だからということとは

「あ、僕ですね」

そう言って慌てて遼太はポケットを漁り始めた。携帯を掴んだはいいが、拳を握っているせいで中々出せないらしく、もたもたしていた。相変わらず鈍臭い奴だ。これでは周りから同年代の男として扱われず、弟の感覚で扱われるのも納得がいく。

十数秒経ってようやく取り出せたようだ。しかし何故か、オレンジの携帯のサブディスプレイを見て一瞬遼太の身体が凍りついた。その画面を見る表情は、遼太に似つかわしくなかった。

「……………深邑ちゃん」

呟いた遼太の顔は、あまり似つかわしくないものだった。遼太が電話に出ることに戸惑うような相手など誰なのか……………と、深邑という名前を頭の中で探すか、思い当たる節は無かった。遼太の友達なのだろうか。……………いや、それにしても遼太の表情に違和感を感じる。何故そう、思いつめた様な顔で見つめている。

その理由を考えるが、結局答えは浮かばなかった。

遼太は一息置いてから、折りたたみ式の携帯を開いて、通話ボタンを押した。

「もしもし」

少し沈んだ声で、遼太は電話に出た。正直興味のないことなのでこの場から離れようかとも思ったが、それは元も子もないと思い中断する。とにかく、遼太がこの屋上から出て行かなくて話にならない。

「……………うん……………うん……………え？　そうなの？　あ、うん」

何やら頻りに頷いている。という事は、相手は中々に活発な子だということだ。少し男らしさに欠ける遼太には、ある意味相性がいい。

いのかも知れない。

「……うん、うん。……勿論行くよ　あ、そうだ」

遼太は突然耳から携帯を外してこちらに振り向き、

「麗夜先輩もどうですか？」

「あ？　何が」

「深田ちゃんの様子身に今日家に行くんですけど……どうですか？
きつと喜ぶと思うんですけど……」

「いや……俺は忙しいからパス」

というのは当然建前だ。そんな名前も知らないような奴の所で

昼飯でも食って来いよ」

そう言っただけで俺は遼太の腰を掴んで持ち上げる。ちよつと、なんて
言いながら抵抗する遼太にお構いなしでぐんぐん扉へと運んでいく。

「あ、じゃあ麗夜先輩。一緒に食べましょうよ」

「莫迦。たまにはクラスの連中とでも食ってるよ。どうせ周りの女
子に可愛がられてんだろ？　弟感覚で」

な、と驚く遼太を強引に開けた扉の奥へと押し込み、重い鉄の扉
を締めつけた。

そのまま数秒、遼太が来ないように見張る。……よし、来ないだ

ろっ。

そう判断すると俺は奥のベンチへと足を運ぶ。

『……意外と、優しいんですね』

「あ？ ちげえよ。あいつがいると邪魔だろ。お前と話すのに」

そう言いながら、腰につけた銀時計を外して手に持つ。

『またまたあ……』

……何だか、こいつの性格を大分掴んできた気がする。……明言しよう。多分、俺の嫌いな性格だ。

「良い。もう、めんどくせえ。……俺が話そうと思ったのは二つある。まずは、あの大剣を持った男のことだ」

『はい……』

「多分、先生が言っていた強盗があいつに間違いないと思う。刃渡り150センチなんてそうそう無いからな」

『そう、ですね……』

こちらは幾らでも調べられるだろう。家に帰りインターネットにでも繋げれば、情報は簡単に手に入る筈。だからあいつのことは一先ずは置いておく。今ここでは何も出来ないから、考えていても仕方がない。

それより、クレイの歯切れの悪さが俺は気になった。

「それで、もう一つ。……お前、【ブリスゲード】には、能力があるって言ってたよな？」

『……………』

「答える。クレイ、お前の能力は何だ？」

『……………嫌です』

「ッ。……………そうかよ」

深い溜息を吐きながら、俺は懐中時計クレイを再び腰につける。クレイが頑なに戦いを拒否しているのはこれで再確認された。自分の能力を離さないのも、戦いたくないからだろう。

きっとクレイはあの初めて会った時から、既に俺の趣向をおおよそ分かっていているのだろう。俺の性格を理解しているのなら、その能力を知ったら使うに決まっている。だから教えない。戦いたくないから。【ブリスゲード】の癖に。

けれど、俺はそれでも構わないと思った。例えクレイが嫌がっていても、強制的に【実体化】イデアアライズしてしまえば良いからだ。

「ザリチュは【実体化】イデアアライズ出来ないの？」

畳の床の上に置いたカップラーメンを箸で啜りながら、竜次は唐突に問いかけた。当のザリチュ 革のベルトの腕時計は腰掛けた竜次の隣に丁寧に置かれている。

別に何か話に脈絡があったわけではない。というより、二人は竜次が問いかけるまで特に言葉を交わしてはいなかった。ただ何とな

く、ラーメンのスープから立ち昇る煙を見ていたら、竜次はそういう質問をしたくなっていたのだ。

『……………？　してるじゃねえか、イテイアライズ【実体化】』

「あー、えつと、剣の方じゃなくてさ……………人間の方の」

『あ、それか。……………あー、それはな。俺は出来ないんだよ』

ザリチュは歯切れ悪く言う。その言葉の声色には嫌気だったり諦めだったり、あまり前向きではない感情が籠められていたが、

「？　どうして？」

竜次は気にせず、更に質問を重ねていた。

……………既に、竜次の中でザリチュという存在は大きいものとなっていた。たった二日。そんな極值的に短い期間だが、【デイヴィナ・マズルカ】という殺し合いのゲームを共に過ごすという異常な状況そして竜次に降りかかっていた様々な不幸、それらが大きく竜次の心に影響を与えていて、一種の信頼にも似た感情を抱いていた。初めは、ザリチュからは脅しにも似た要求を迫られていた関係とは言え、ザリチュがいなければ竜次はこの狭い部屋の中一人なのだ。給料日前だから金がない。遠くにいる親族とも絶縁状態。頼る相手が多くに話す相手がない中、例え異質な“友人”でも竜次にとっては大きな心の支えとなっていた。

『んー……………そういうもんなんだよ』

「ふーん……………残念だね」

『どつして?』

「だって、ザリチュも食べれば良かったのに。こんなにあるんだから」

そう言つて竜次は箸で後ろに広がる食料を鞆に詰め込み持ち帰つた食糧の山。その構成内容はコンビニエンスストアに立ち並ぶ即席麺類やレトルト、ファーストフードの食品ばかりだが、いつも腹を空かせていた竜次にとっては御馳走の山であり、興奮するような状況なのだ。

『そつだな……』

ザリチュは内心竜次のことを【安い男】と捉えていたが、せつかく築かれたこの有益な関係を崩そうなどとは思わず、それを口にすることはなかった。

「次はもつと高い所に襲いたいなあ……寿司屋とか行けば高級な刺身が沢山手に入るのかなあ」

立ち昇る湯気を見ながら、竜次は下に広がる海産物の味を想像する。

……たった一日で、竜次はここまで変わっていた。死を恐れるという本質は変わらないものの、確実に殺すことが出来る一般人相手には、何処までも強気だった。空腹が続いた生活から、好きだけ腹に物を入れられる状況になったからだろう。施設に襲撃することを初めは拒んでいた竜次だが、無傷でかつ確実に事を済ませることが出来ると分かつてからは、酒に酔う人間のように、楽をして物を手に入れる快感に酔っていた。

それはザリチュにとって良い傾向であると言える。要は参加者と

かち合いさえしなければ、安全に確実に【魂】を喰う事が出来る。これはその実、最も確実に勝利の可能性を高める方法であった。【デイヴィナ・マズルカ】は【寿命】に強く依存する。【ブリスゲーデ】を实体化させるにも【寿命】が必要だ。他の参加者を責めるにも、自分の身を守るにも、寿命が必要不可欠となっている。だからザリチュは言う。

「……そうだな、竜次。次はもっと 派手に行こうぜ？」

「……………」

『……………』

部屋で過ごす、俺とクレイは無言だった。脇目も振らずに学園から帰宅して、約二時間だろうか。その間、俺とクレイが口を利く事なく、利こうと思わなかった。

戦いに興じる俺と、戦いを拒むクレイ。交わる筈はなかったのだ。……所謂険呑とした空気というものが、俺達の間には漂っていた。

俺とこいつ、どちらが正しいのかと俺は考えてみる。だが達する結論はやはり“俺が正しい”。だってそうだろう。自分の命が掛かっているんだ。あと七日。それまで、【選ばれた十二人】の内、生存している者が俺一人でなくてはならない。ならば、こいつも戦うべきだろう。……主の命が掛かっているのだから。

“ 私が、貴方の剣となり楯となる 【ブリスゲード】です ”

……確かに、こいつはそう言った筈だ。俺の手に、誓いの口づけをした筈だろう。 だっていうのに、この状況は何なんだ。

糞。と心の中で悪態を吐いて、乱暴に立ち上がった。衣ずれの音と、俺の手が床を叩いた音が耳触りに届いてくる。そのまま、足取り早く、玄関へと向かっていく。 無論、銀の懐中時計は捨て置いて。

『 何処へ行くのですか？ レイヤ 』

「コンブニ」

簡潔にそう告げて、俺は乱暴に靴を履く。つま先を地面に叩きつけてしまったため、皮でコーティングされた靴に傷がついてしまったが、そんなことで俺の気分が曇る訳はなかった。もっと大きな苛立ちが、俺の心を蝕んでいるから。

『そう、ですか……』

その言葉を、ドアノブに指を掛けた状態で聞き届けると、俺は大きな音を立て扉を閉め、鍵を掛けてエレベーターへと向かった。

腰に時計を付けていないだけで、何だか酷く身軽な気がした。歩く度にじゃらじゃら鳴っていた音も、いちいち聴こえて来た声も、今はない。街の雑多な騒音のみが俺の耳に届く。……いつも通りの状況。これが、本来の俺の在り方だった。

「あれ？ 麗夜ちゃんじゃん」

コンビニに辿り着くと、そこには数人の男がいた。年の程は二十の前半。僅かに光沢がある黒のスーツに身を包んだ男たちは……俺も人のことは言えないのかもしれないが、とにかく、男達はホストのような印象を周囲に与える。髪型や装飾品もその例に洩れず、長い茶髪に銀色の指輪やピアスをその身に持っていた。

「どうも、こんばんは。拓哉くん」

その集団の先頭を切る、俺よりも少しばかりデカイ長身の男に向かって、俺は頭を垂れた。端的に言えば、俺がよくお世話になっている人達。そう言っておく。所詮未成年である高校生の俺には、なかなか制約がつく事が多いのだ。

「あ、この子がいつも言ってた麗夜くん？」

胸元を開いた男が、滑舌悪く言う。滑舌が悪いのはもちろんわざとであり、こう言ったジャンルの人物達にとってはこれが美学であり“イケている”のだ。

くちやくちやくと口から音を立てながら、残りの数人も俺を囲うようにして覗きこんでくる。いつもの光景、いつもの状況。

一人が顎に指を当てながら、

「ほお〜……この子が……へえ〜……こりゃあ、うちの店に欲しいなあ。どう、来ない？ 麗夜くん？」

「いえ、今はまだ学生ですので」

どうやら本物のホストも混じっていたらしい。仮面を張りつけて俺は答える。真面目だねえ、なんて声が複数聞こえた。

「でも何か目つき悪くね？」

「え？ ……あ、ほんとだ。どうした麗夜ちゃん。何かあったの？」

「え、いえ、別に……」

その言葉に、俺は内心うろたえる。嘘だ。顔が、“出来ていない”らしい。けれど鏡で確かめることなど、この状況では到底出来ない。

こう言った輩は年下から盾突かれることをひどく嫌う。それは自身のプライドであったり、周りへの面子メンツであったりと理由に差はあるが、嫌がることは変わらない。そういった分子は、爪弾きにされるのが常だ。

だから、この状況をどうにか転換させなければならない。

「あ！もしかして女に振られたとか!？」

「まさか」

と、俺がそう答えた瞬間に周りからは歓声の聲が上がる。その中に何処か、煽りの色が混ざっていたのは、気のせいではないだろう。

「だよー、麗夜ちゃんだもんね。じゃあ、ムカツク奴かな？ だったらお兄さん達に言っつてよ？ 応援に行っっちゃうよ？」

拓哉の言葉に、またも歓声を上げた。周りの目などお構いなしだ。冬場で日が沈むのが早いとはいえ、まだ時刻は夕方の域を出ない。俺は正直、そうそうにこいつらから離れたくて仕方がなかった。しかし俺の目的は一応コンビニであり、この男達たむろが入口の前で屯しているのであれば、俺に避ける手立てはない。

「まあ、そんな奴は今のところいませんが、出来たらお願いしますね」

当たり障りのないよう、今度は仮面に意識を巡らせてこいつらの相手をする。……普段の生活でなら苛立つものの、代行している面を考えると多少なりとも感謝の念はあったものの、今のこの状況ではもはやそれは浮かばない。こいつらの存在の苛立たしさに殺意が沸くほど。……俺の仮面は、壊れそうだ。

俺の心境を神が感じ取ったのかこいつら感じ取ったのか知らないが、後ろの方からは、そろそろ行くべ、という声が上がった。それを聞くと拓哉を含め全員が停めてあるバイクへと向き直った。

後ろ向きで、背中を見せられながら別れを告げられると、俺もそ

の別れに応じた。

煙を吐きながら、煩い爆音を鳴らしながら去るバイクを見送る。ふつつつとした感情の中、“女に振られた” その言葉が酷くループされていた。

その思考を振り切り、俺は一人コンビニの自動ドアを潜る。いらっしやいませー、という店員のやる気のない挨拶が静かな店内に響き渡る。

実は、俺はコンビニというものが好きではない。その理由は少し周りには考えにくいことだと、自分では思っている。コンビニは……何処か自分を下げるといふような気がしてならない。コンビニエンスという単語の意味は“便利な”“手頃な”そういう意味がある。そんな意味が込められた場所で自身を固める物を買うという事が、俺には自分を下げているように感じるのだ。

無意味な思考を走らせながら、俺はレジへと商品を差し出した。少し乱暴に置かれた物は、ルーズリーフの紙であったり、シャーペンの芯など文房具に紛れてカップラーメン。

……やはりその便利さに肖ることは今の俺みたいにしばしばある。いつもなら食材を家の者に届けさせるとか、高級文房具店に買いに行くなどしているが、何となく、そういう気分ではなくなることがある。それが、今日であるだけ。

いやにゆっくりとした足取りで自分の部屋に着いた俺は、帰宅の意を告げずにそのまま自分の部屋へと行く。ベッドには銀の懐中時計が投げ捨てられているが、構わずその近くにコンビニの袋を投げつける。気のせいかな、クレイの声が聞こえた気はするが、相手にする気は起きなかった。

そのまま無言で、湯を沸かしに行く。既に時刻は八時を回っていて、昼から何も胃に入れていない俺は良い具合に空腹を得ていた。

三分後。俺は買ってきた醤油味のカップラーメンを無言で啜っている。どうせ何も喋らないのであれば、洋楽やクラシックをかければいいのだが、そういう気分にはなれなかった。……俺は、音楽と

いつものを自分の中でスイッチを切り替える為に利用する傾向にある。例えば、勉強をしようと机に向かう時はゆったりとした曲調のクラシックを流したり。まだ覚醒しきらない寝ぼけきった思考を叩きおこすのに、ロックの洋楽を聴いたり。

特に、クラシックというものを俺は気に入っていた。本来なら異質である箏の音とが織りなし合い、一つの曲として為すクラシック。あの重奏には、まさに演奏者達の感情というものが如実に伝わる。クラシックとは、数十人以上いる演奏者達が一心となって音を奏でなければ、それはただの不快な不協和音にしか成りえない。指揮棒を振り皆を導く指揮者を中心に。指揮者は感情を籠め、曲の在り方をその身で体現して、リズムを刻んでいく。大して演奏者はその指揮者の気持ちを汲み取り、周りと呼吸を合わせ音を奏でていく。一心同体。それに近いものがクラシックというものには強く存在しているのだ。

五分も経たずにカップラーメンというものを完食した俺は、即座に残ったゴミを捨て、ベッドへと体を放り出そうとするが、転がる銀の懐中時計じゃ邪魔だったため、強引にベッドの外へ投げ捨てた。そのまま床に放ろうとしたが、流石にそれは躊躇われ、放物線を描いた懐中時計は白いクッションへと軟着陸した。

俺は自身の恰好が制服であることも構わず、掛け布団を手繰り寄せ、壁に顔を向けて目を瞑った。

『……………レイヤ？』

「……………寝る」

背中から聴こえて来た宝石の様な声に、俺はぶっくらぼつに答えた。

自分でも、どうしてこんなに苛立っているのか正確に理解できない。元々、自分の思い通りにならない、予想が出来ない現実という

もの期待したのではないか。それを非日常と歓喜し、あの夜に受け入れたのではないのか。これも自分の思い通りにならない現実。それであることに変わりない筈なのに……。

糞。糞。糞糞糞糞 !

心の中だけで、声も出さずに何度も悪態を吐く。しかしそれで気が収まることなど微塵にもなく、むしろ苛立ちが増幅されているかのようにすら感じる。

しかしそんな俺の心とは影響なしに、俺の身体は休息を求めている。ここ二日の疲労は中々のものだった。寝不足というものもあるが、何よりあの夜、【ブリスゲード】を展開したことに影響あるようだ。クレイ曰く、【ブリスゲード】は【寿命】を消費して現実へと顕現させる。そうなのであれば、あの時俺が気絶してしまったことも、不本意ながら納得いく。

だから本来はこんな睡眠なんていう休息を取っても意味がないだろう。けれど容赦なく俺の身体は睡眠を訴えかけてくる。

俺の意識が睡魔に耐えられなくなるのは、数分も経たずして訪れた。

またか。そう俺は声にならない声で呟いた。

走る草原。傾く日差し。僅か、橙色に焼けた草原を、視界は駆け抜けていく。

喉は焼けるように熱い。胸は張り裂けるように痛い。身体は何処かとても重く、非常に走り辛い。

心に不安という不安を塗りたくって、それを原動力に足を何度も前へと動かしていく。

まだ辿り着かないのだろうか。まだ見えないのだろうか。まだ届かないのだろうか。幾度となくそう思い、けれど視界は変わら
ない。

永遠に続くのだろうか。そう感じるほどにもどかしい。足は全力で動かしているのに、思いが先走るだけ。

足に巻きつく草が恨めしい。遅い駆け足が煩わしい。思っても既に全力であるこの速度が増すことはない。

何度も転びそうになる。けれどその度に顎を上げて走り続ける。届けなくてはならないから。伝えなくてはならないから。あの沈みかけている太陽が、姿を消してしまふ前に。

早く 速く 疾く^{はや}。

この想いが、手遅れにならないように。

不意に、また景色が変わった。

俺の目に映るのは果てしなく広がる橙の草原ではなく、見慣れた俺の部屋。足に纏わりつく草など一切なく、俺はただベッドに横たわっているだけ。沈みかけている日差しは、既に沈み切っている。

……沈み切っている？ 今何時だ！ と、慌てて見る掛け時計には既に十一時を回っていると記されていた。ならば、丁度良い頃合いだろう。戦いに出向くのであれば。

と、何気なしに転がっている携帯を見れば着信が一件入っていた。開けて見てみれば、相手は奈雲遼太。時間を見る限り既に二時間は経過しているが……まあ、良いだろ。そう思い俺はリダイヤルボタンを押した。

ツーツーツー、という接続音の後に、呼び出し音が鳴る筈だ。待つのが面倒だな……と思いつつ手を後ろに投げ出した状態で仕方なく待つ。

やがて接続音が止んだ。が、しかし。プ、と一回鳴っただけで、

『もしもし！？ 麗夜先輩ですか！？』

「お、おう、そうだけど……早いな」

思いのほか遼太は一瞬で電話に出た。まだ一度目の呼び出し音しか鳴り終わらなかつたと言うのに……。どっぴりこいつはタイミン

グ良かったんだ。もしかして待ってたのか？

『御免なさい……ずっと待ってて……』

マジかよ。

「そ、そうなのか………で、何だよ。何で電話したんだ？」

『あー、えつと……その、電話じゃ説明し辛いんで、直接会ってくれませんか？』

「あ！？ 今からか！？」

今は十一時過ぎてんだぞ……それに俺は散策に行きたいんだ……。あの大剣の男を斬り伏せないと気が済まねえ。

『お願いします！ その……どうしても先輩に相談したくて……』

だって言うのに、こいつは必死に俺へ懇願してくる。

……ここで断ってしまうのも簡単だ。別に俺にとっては遼太などどうでも良いし、優先すべきは【デイヴィナ・マズルカ】だ。

しかし、遼太は俺が電話を返すのを二時間もの間待っていたと言ふ事になる。健気にも、滑稽だが。それを無下に断れば、こういう緊急時には俺が頼りにならない存在だ、と遼太に植え付けて仕舞うことになる。そうなれば、遼太にとっての相談できる相手が俺ではなくなる可能性がある。そうなると、僅かだが俺には懐かなくなるということも有り得るわけだ。

正直、それは頂けない。校内でも遼太は純真で優しいという評判が立っているのだ。その後輩に心底慕われている俺というのは、当然イメージアップに相当繋がっている。その要因を僅かでも失うの

は痛い……それに【デイヴィナ・マズルカ】の猶予自体はあと七日ある。

遼太と【デイヴィナ・マズルカ】を天秤に掛けた結果、俺は、

「……分かった。どうすればいい？」

一先ず遼太を取ることにした。最悪、遼太との話を斬り上げて散策に向かえば良い訳だ。

『あ、ありがとうございます！ えーと、それじゃあ……四十五分に中央広場の、メイン噴水の前、でどうですか？』

「分かった。それじゃあな」

と、遼太の返事を聞かずに切る。時間まであと三十分しかない。しかし今俺の身体は寝汗が酷く、そのまま出掛けたくはなかった。更に制服姿のままだし、その制服も思いつきり寝ていたせいで皺くちゃになっている。それは本当に頂けない。だから、俺は急いで服を脱ぎ、風呂場へと向かった。

簡単にシャワーを浴びた後、頭をタオルで拭き、ドライヤーで丁寧に乾かし、髪の手入れをしたところで、今まで嫌いほどに存在感を放っていた奴が今も静かだと言う事に気がついた。周りをキョロキョロ見回し、懐中時計が何処にあるか、と探してみる。と、無造作にクッションの上に変わらず鎮座していた。鎖は雑に放り投げられ、裏返しにクッションへと減り込んでいる。

一先ず白い黒地のジーパンに白いダウンジャケットを羽織ると言う俺としては非常に適当なファッションで苛立つが、まあこの際我慢しよう。どうせ男に会いに行くだけだしな。

「おい」

と、灰色の蹠くろくしで銀時計を踏みつける。

『……ん、ん？ ……あ、麗夜。お早うございます』

「挨拶はどうでも良い。行くぞ」

そう言っつて俺は乱暴に懐中時計を手に取る。

『また散策……ですか？』

「今日はちげえよ。……ああ、もう一度言っつけど、お前絶対に喋るなよ」

そう、クレイに俺は強く念を押した。

夜道を歩いて約二十分。繁華街から少し離れた場所に、中央広場はあった。中々に広い公園で、学園の校庭の数倍はあるんじゃないかと思う。特にアスレチックがある訳ではなく、よく掃除された土の地面に、道に沿って木が植えられていて、所々に噴水やベンチが置いてあると言う典型的な公園。……まあ、言わずもがなデートスポットなわけである。露出プレイが好きな奴らはよくここで宜しくやっている。正直俺には勘弁願いたい。

……など目を細めて歩いていけば、やがて噴水が見えてきた。その噴水はとても大きく、この広場内でよく見かける噴水に比べればかなり大きい。だからたまーにここでは愛の告白が為されることもある。俺も何度かされた。即座にお断りさせていただいたが。

だが、噴水の傍に立っているのは女などではなく、小柄な一人の少年、奈雲涼太だ。……まあ確かに、暗がりの中では女に見えなくもないが。

遼太は俺の足音と、鎖の擦れる音に気がつくと、噴水から目を離

してこちらを向いた。

「……来てくれて有難う御座います、先輩」

月の明かりに反射し、煌びやかな光を乱反射する噴水を背後に、遼太はこちらを見やる。表情は陰になつて見る事が出来ない。どんな目をしているのか、どんな口をしているのか。顔全体がはつきりとしなない為、表情が殆ど読み取れない。だが、遼太の声に少なからず明るい色は決して含まれていない。何処か暗い色、そんなものを連想させる。

「どうしたんだ、こんな遅くに。何でわざわざ俺を呼びつけたんだ？」

『呼びつけただなんて……。その、先輩に相談したかったんです』

そう言つて、遼太は腰の辺りに手を持って行く。指を月明かりの中、動かすたびにチャラチャラという音が響く。何か、軽い金属が触れ合う音。

伏せた遼太の顔を見る為、俺は砂を踏みしめて近寄る。俯いた遼太の顔は、月明かりのせいで先程よりもさらに見えにくくなっていた。

「近寄らないで下さい！」

その声に、俺は思わず足を止める。

二度目。遼太と付き合つてから、二度目の叫び声。

「……お前、どうしたんだ？」

「先輩……僕」

遼太は両の拳を強気握り、更に俯いてしまった。その下を向いた小さな唇から、俺は確かに一言、呟いたのを聞いた。

イテイヤライズ
【実体化】

遼太の腰から月明かりを跳ね返すような薄紫の光が発生する。

「な」

俺はその眩しさに思わず右手で目を塞ぐ。

光が収まる頃、俺がその腕を退かした視界の先には

「僕、こんなになっちゃったんです」

泣きそうな声で告げた遼太の腕には、透き通った美しい薄紫の、無骨な螺旋の水晶の様な、永い永い槍が握られていた。

粕垂「というわけで……罪断のセクレイジユ対談第三弾の開始で
ございます……」

御岬「どうも、御岬です。……テンション低いね。霹靂？」

粕垂「レーヴァテイン恐るべしだよマジで」

御岬「ねー……だから雷に気をつけると言ったのに！」

粕垂「粕垂のパソコンがですね、落雷で数日お亡くなりになってい
たわけですよ。まあ、今はもう復活しましたが……」

御岬「おかげで二日ぐらい文句たらたらだったよね」

粕垂「まあ、文句たらたらなのは今後も永遠に変わらないから安心
してね！」

御岬「こんな人ですがどうにかこれからも付き合って行こうと思っ
てます。……多分」

粕垂「それで、セクレイジユ二日目……だっけ？ 正直霹靂の所為
で何やってたか全然覚えてないんだけど。今もなんか妙になるうが
重くて開かないし」

御岬「だーかーらーブラウザをIEから変えろと。……まあいいや。
二日目だね。えーと……なんかあったっけ……ああ、黒斗くん最低
ってやつだよね」

粕垂「え、まだそこだったの!? 書き溜めてるからどこまで進んでるのかぜんっぜんわかんないなあ〜もう」

御岬「書きためてる分さつき投稿しちゃったじゃないか。……ちなみにこの会話は麗夜二日目(3)を投稿した次の日に行われております」

粕垂「……う、うーん。まあ……二日目かあ。二日目って言うと、内容も色々あったんじゃないかなあ。特に麗夜編は……」

御岬「あー、まあね……なっか悪いよね〜、あの二人」

粕垂「いやいや、そこじゃなくてさ。深邑ちゃんとか、深邑ちゃんとか」

御岬「……てへっ。何のことやら……ていうか今も素だったよ」

粕垂「二日目は紆余曲折あったよねえ。内容とか展開とか色々考えてさ〜」

御岬「ねー……まさかの僕の忘れてた発言だからね……」

粕垂「そもそも大筋の展開は考えているものの、お互いにプロットはないしね」

御岬「脆弱な記憶力に依存している脳内プロットしかないよね」

粕垂「そうですねよ。夕飯を食べるのも、その日の昼飯をも忘れてる僕のお脳が火を噴くぜ。文字通りの意味で」

粕垂「いままで山場も盛り上がる所も無かったセクレイジユが三日目でようやく最高にカッコイイ、もうすんばらしい！ ちょーイケてる仕上がりを迎えるわけですよ！！ そうですね！？」

御岬「多分！！」

粕垂「と、ハードルを上げに上げまくった所で絶望しつつお別れで
ございます」

御岬「じゃあ上げるなよと思ったのは内緒。……さようなら、また次も読んで下さいね」

粕垂「ま、そもそも読んでる人があんまりいないけどね」

御岬「……………絶望したっ！ そんなry」

粕垂「シーユーネクストタイム！！」

三日目：反撃（1）

「……貴方は、この戦いの中で最も優勝に近い場所に居る契約者の一人です」

九頭龍 斬子がその少女に出会ったのは【デイヴィナ・マズルカ】開催の一日目の事。静かで平穏な昼下がり。少女と斬子は肩を並べていた。

九頭龍家が所有する山、流山の中に存在する九頭龍家の屋敷の前に突然少女は姿を現した。婁守るかみ 真名まなと名乗った少女は武家屋敷には似合わない白いゴシック調のドレスに身を包んでいる。

真名は斬子を尋ねてやってきた。しかし流山の周辺は常に九頭龍家の人間によって片田舎の屋敷とは思えないほどの警備網が敷かれている。それを真名は物ともせず屋敷まで歩いてきた……。それは、とても不思議な事だった。

事実今彼女の存在に気付いている者は斬子だけであった。屋敷には数十名の使用人が行き来している。しかしそのどの視線にも真名が捕らえられる事は無い。

勿論、斬子はこの客人に対して普段のように使用人にお茶菓子でも出してやってくれ、とは気軽には言えなかった。仕方が無く自らの手で急須にお湯を注ぎ縁側まで持ってくる事にした。

真名は不思議な少女だった。その奇抜な外見もさることながら、存在そのものもどうにも不安定であった。同じ契約者だというのは彼女から敵意は感じられない。むしろその事実を斬子にとってはありがたい事であった。

彼女のように幼げな少女を両断するなど、本来ならば絶対に在ってはならない事。例えそれが特殊な状況下であろうとも、そん

な夢見の悪い事は出来ればしたくないというのが道理。斬子は片膝を立てて縁側に腰掛けると昆布茶の注がれた湯飲みを口元へと運ぶ。

「成る程、私が最も優勝に近い契約者の一人、か」

藍色の着物を着用した斬子は昆布茶を味わいながらそう呟く。隣、白いゴスロリドレスの真名が湯飲みに触れようとして熱くて手を引っ込める。奇妙な光景は続いていた。

「だが、不思議な言葉だ。君には未来が見えるらしい。それに“最も”、優勝に近い場所に居る契約者の“一人”とはな」

「戦いの運命はまだ決定してはいません。ただ、幾つかの可能性に分岐しているだけ……。貴方はこの戦いで……勝利出来るだけの因子を持ち合わせています。ただ 貴方はきつと死んでしまう」

「それは君の能力……と、判断しても良いのかな？」

真名はゆつくりと頷いた。恐る恐る湯飲みを持ち、何度も息を吹きかけて冷まそうと努力している。斬子はお茶は熱すぎる位で丁度良いのだが、確かに子供相手では問題だったかもしれない。

そうして一生懸命にお茶を“ふーふー”する真名はどうにも契約者であるとは思えなかった。凶暴性など全く感じ取れないし、そもそも契約者として適切な存在なのかも甚だ疑問である。年齢や外見といった部分以前に、彼女からは闘争に対する興味のようなものを感じ取る事が出来なかった。

「貴方は……生身での身体能力、戦闘能力において全ての契約者の中で図抜けた性能の持ち主です。“力”を恐れる事さえなければ……きつと」

言わんとする事は理解出来た。ゆっくりと冬の青空を見上げる。白い雲が空を流れ、太陽の光が暖かく差し込んでいた。

「真剣を初めて手にしたのは、四つの時だった。それから今日までの間、毎日剣に触れてきた……。相応の肉体的、精神的訓練も受けている。成る程、確かに私の異質な成り立ちを考えればそれを最強の一角と断ずる君の言葉も頷ける。が　そうだな。実に耳が痛いよ。私はこの力がとても恐ろしい」

目を瞑る斬子の背後、真名には見えていなかったがそこにはスサノオの姿があった。腕を組んだスーツの男は仮面越しに斬子を見下ろす。

「まだ、幼かった頃の話だ。真剣を振り回していれば当然だが、自分の刀でうっかり怪我をしてしまった事があった。力は時に何の前触れも無く予想外の方向へと向けられてしまう。それは自分であり、友であり、家族であり……。愛し、護るべき者を傷付けてしまう。力とは恐ろしい。恐ろしさを知るといふ事は強さに繋がる……。お爺様にそう教わったものだ」

「……貴方は力を使わず……。それ故に命を落としかねない。その運命はこのままでは確定してしまう」

「それならそれで構わんさ。君も私も数奇な運命に巻き込まれてしまった……。皮肉な物だな。この戦いが終わった時、朝日を拝めるのは君か私が、或いは全く他の誰かか……。少なくともせつかくこうして知り合えた君とも確実に別れねばならないんだ、どうにも世知辛い」

「別れは避けられない物……。でも、決められた運命を変える事は出来る」

真名は手提げのついた鞆に手を突っ込み、そこから一枚の紙切れを取り出した。丁寧に四つ折りにされたそれを斬子に手渡し、立ち上がる。

「……運命は、一つの事柄では変えられない。運命を変える為には、いくつもの要素を複雑に絡めあわせ、打破する為の因子を練り上げなければなりません。九頭龍斬子……。貴方はその因子を練り上げるだけの力と適正を持っています」

「随分と規模の大きな話だ。運命とはな」

「それは身近な物です。貴方にとっても、わたしにとっても……」

そうして真名は昼間の太陽から身を守るように日傘を差す。一人、そのまま中庭を歩いて姿を消して行く。その姿を見送ってから斬子は四つ折にされていた紙を開き、中身を確認した。

少女からのお願いは簡単な事であった。目的は一人の参加者を護衛する事……。あっさりと殺されてしまいかねない運命を背負った少年。紙切れにはその住所が記されていた。そうして少年を護衛するようにと指示する一文の下、付け加えられるかのように一言。

「……“因果を変える事により、貴方の身に幸福が訪れるのか、或いはその逆なのかは判らない。己の選択と決断に責任を持ち、運命に抗って下さい”、か」

スサノオが黙って斬子を見詰める。その視線に斬子は笑顔で応えた。勿論、そんな事は言われずとも判っている。最初から決意など

決まっている。それが自分で選んだ未来なら　それは誰かの所為
なんかじゃない。

立ち上がり、斬子は溜息を漏らした。長い髪を髪留めで結わう。
こうなったらじつとはしていられない。どうせ残り僅かな命なのだ
博打に出るのもそう悪くはない。

「可愛らしい少女のお願いだ。まるで御伽噺の入り口と言った所か
。騎士の代役までは務まるまいが、登場人物の真似事くらいは
引き受けようか」

自らの運命が変わる事など恐れはしない。その結末がどのような
情景に彩られていようと、それは自らが選んできた軌跡の先に在
る物なのだから。

そう、そして運命は変革される　。彼女自身がその手で選
び取った因果によって　。

「まさか、あの人を盾にするなんて……」

夜の街を阜羽　王は駆け抜けていた。漸く人通りの多い場所まで
戻ってくる頃には既に剣の実体化は解けている。

彼の寿命は大幅に削られていた。必殺の一撃を放ち、更にここま
で全力で逃亡してきたのだから。息は切れ、両足は痺れている。肉
体を酷使した代償が今になって如実に現れた。

額の汗を拭う事も無く夜の街の明かりの中を歩く。傍らに浮かん
だアルビノは眉を潜め、不安げな表情で王を見詰めていた。考える
事など一つだけ。

そう、それはつい先程の出来事　。どちらか片方の契約者だけ
でもいいと、兎に角倒さねばと放った必殺の一撃　。それを斬子

はたかが細長い太刀を振り抜くだけの動作で弾き飛ばして見せた。その時王は斬子が何らかの能力を発動したのだとばかり考えていたが、それは間違いである事に今更気付く。

斬子は剣を使って衝撃の螺旋を弾き飛ばした　というより、“受け流した”のである。低い姿勢、螺旋の方向にあわせるかのように揮った剣戟……。刹那の出来事。それは、今の王では到底真似する事の出来ない行動。

剣を扱う事に長け。剣と共に在り。剣の全てを知り。剣に己を預ける。斬子は“剣士”であり、“戦士”であった。強い力を手に入れただけの素人などではない。

例え拳銃と言う凶器を手にしたとしても、それは持ち主によって性質をがらりと変化させる。斬子が持つている剣と王が持つている剣とでは、剣そのものの本質は同じであろうとも導き出す結果は天と地程の差がある。それは決して埋める事は出来ない。

長い年月、己と剣の全てに裏打ちされた自信。死の暴風を前に踏み込む勇氣。見極め、切り払う冷静さ……。全てにおいて九頭龍斬子は優れていた。王と斬子、それがもし一対一であったのならば技を弾かれた瞬間勝敗は既に決定していたと言えるだろう。

黒斗を攻撃対象としたのは本当に単なる偶然だった。倒せないから、倒せそうな方を倒そう　その程度の事。しかし斬子にとってそれは王手でもあった。

斬子の速さと射程を考慮すれば、ストームリンガー巻き込む血潮を回避した直後、速攻を仕掛け王の首を刎ねる程度なんの苦も無い事のはずであった。しかし斬子はそうしなかった。その距離から、“王を殺さずに停止させる手段”を彼女は持ち合わせていなかったのだ。

つまり、斬子の敗因は黒斗も王も両方殺さないように戦おうとした事にあつた。いくつもの偶然が重なり、斬子は黒斗へと手を伸ばした。そして黒斗は　自分の身可愛さに斬子を盾とした。

黒斗は負傷していた。斬子は脇腹を抉られて気を失った。死んだかもしれない。圧倒的有利な状況下、だと言うのに何故、“自分は

逃げている”のか？

斬子に負けた。それは事実だ。今の自分では斬子には勝てない。だがそれに深手を負わせ、戦闘不能にまで追い込んだのだ。目的は充分果たしたとも言える。それでも今、止めを刺さずに逃げている理由は何だ？

「……違う」

止めを“刺さなかった”のではない。止めを “刺せなかった”のだ。

「あいつ……一体なんなんだ……」

空に舞い上がった影が落ちてくる。

数分前。王は斬子と黒斗に止めを刺そうとしていた。血に染まったアルビノを片手に悠々と勝利を確信して歩み寄っていた。しかしその時、王は確かに見たのだ。つい先程まで逃げ回り、“助けに来てくれた恩人を盾にした”最低な少年が、自分をしっかりと睨みつけている目を。

燃え滾る炎のような眼差し。自分にそれが向けられているとは思えなかった。その瞳に宿す感情は喜怒哀楽のどれにも該当しない。熱も音も無く、静かに燃え上がる炎……。確かにその気配を感じた直後、大剣を片手に少年は跳躍していた。

月を背にシルエツトが落ちてくる。その速さに思わず眼を凝らす。つい先程まで一歩動くので精一杯だったはずの少年が。自分に殺されるのを待つだけのはずだった哀れな子羊が。今日の前で、牙を剥いている。

空中を縦に回転し、大剣を落下と同時に叩き付ける。その衝撃はアルビノで防御しても防ぎきれない事は一目見て理解出来た。慌てて防御から回避へと切り替え、身を擦る。大剣が大地に減り込んだ

瞬間　アスファルトは崩壊した。

前後左右、十字に大地が砕ける。断裂は全方向に凡そ20メートル続き、大地は“捻れ”て陥没する。足場がふらつき体勢を崩す壬の目の前、黒斗は剣を引き抜いてそれを逆手に構える。

ダンテの刀身は熱気を帯びていた。それは最初は気付かぬ程度に段々と、ゆつくりと大気を浸食し　そして、激しく赤熱する。白い刀身の刃が一気に赤く燃え上がる。甲高い音を立て、刀身は真紅の白熱した光を放つ。

“拙い”　ただそれだけは理解出来た。巨大な大剣を片手に黒斗が駆け出す。動きは決して早くはない。斬子に比べればその足運びはお遊び程度にしか見えない。しかしそれでも　壬は恐ろしかった。

下段から大地を抉りながらダンテが奔る。振り上げるようにして放たれた一撃をアルビノで防御した瞬間、壬の手元は炎を放ち、爆発した。理解に苦しむ現象　。炎に巻かれ、よろける。

『あつ……っ！？　じ、壬！　あの剣　すごく熱い　ッ！？』

空が焦げるような“におい”。しかし触れなければ決して判らなかつた物。ダンテとアルビノが刃を交えた瞬間、小さな火花が散つた。遅れて大きな火花が。そして最後はそれらを火種とするように小さな爆発が発生したのだ。

それは爆発ではなく、厳密にはその限定されたエリアが燃え上がったという事。ただその勢いと熱が強すぎて爆発したかのように見えただけの事。壬は後退する。最早攻守の立場は完全に逆転していた。

『壬、反撃しなきゃ……！　大剣の圧力に負けたら押し切られるっ
！……』

「言われずとも 判っているッ!!」

後方に跳躍しつつ、身体を回転させる。鞭の形状に変化したアルビノが側面から黒斗に迫る。その一撃に対し、黒斗は片腕を翳した。強固になった結界はつい先ほどは一度破られたというのに今は健在であった。結界越しに威力の弱まったその鞭を片手に掴む。鞭は確かにしなやかに動き、液体のような性質を持つ。しかし触れる物は切りつけ削る、剣としての性質も持ち合わせている。当然黒斗の手は傷付けられ血に染め上げられた。

だが少年は傷も痛みも気にはしなかった。刀身を掴み上げるその力はたかが少年一人の物とは到底思えなかった。思い切り引っ手繰られたアルビノは壬ごと黒斗目掛けて急接近する。

「な にいいいいいいいつ!？」

黒斗が迫る。飛来してきた壬目掛け、少年は身体を捻って蹴りを放つ。思い切り減り込んだ靴先は鳩尾にじんわりと苦痛を広げて行く。呼吸もままならず空中でよろけた壬の顔面を驚づかみにし、黒斗は小さく唇を動かす。

「 捕まえた」

言葉を聞き終えるよりも早く大地へと叩き付けられる。ねじれたアスファルトの上、衝撃が走った。後頭部を大地に叩きつけられ、壬の意識が一瞬途切れる。血飛沫が舞い上がり そして。

『だめえつつ!! 壬、避けてええええつつ!!!』

悲鳴にも似た絶叫で意識を取り戻す。眼を凝らす壬の頭上、自己目掛けてダンテを振り下ろそうとする黒斗の姿があった。

アルビノを咄嗟に引く。黒斗はまだ手にアルビノを絡めたままだった。身体が傾き、刃の落下地点は壬から逸れる。しかし次の瞬間ダントの突き刺さった大地から火柱が上がり、壬も黒斗も同時に吹き飛ばされた。

互いに大地を転がる。黒斗は倒れたまま起き上がる気配がなかった。壬はアルビノを回収し　あろう事かそのまま撤退を選択した。空気に吞まれて冷静な戦いが出来なかった。今でもまだ浴びせられた熱を覚えている。漸く思う。自分は心底ほっとしているのだとあの場から逃れる事が出来た事を、まだ自分が生きている事を喜んでいるのだと。

まるで敗北したかのような気分を味わった。相手は満身創痍、今思えば大した動きなどしていないように思う。斬子と比べれば、非常に幼稚な戦いだっただが　それでも、得体の知れない恐ろしさがあった。斬子よりも、あの少年の方が余程　“薄気味悪かった”。

「…………アルビノ、朝までに魂を集めるぞ。明日こそ　止めを刺しに行く」

『うん…………』

恐怖など自分の勘違いに違いない　そう言い聞かせた。どちらにせよ、九頭龍　斬子という最大の障害は動けなくなったのだ。あとはあの弱気な少年を打ち滅ぼすだけ。難しい事など何も無いはず…………。

夜の街、拳を握り締める。月明かりを恨めしく見上げ、壬は小走りに移動を開始する。まるで何かに急かされているかのように。

「……何てことだろう」

頭が痛くなるような状況というのは今日みたいな事を言うんだらう。僕はふと、そんな事を考えていた。

なんだか良く判らないけど、滅茶苦茶に戦っていたら殺人鬼は退いてくれた。理由は兎に角、ラッキーだったと言っしかかない。

僕は直ぐにその場を離れる事にした。力の制御が出来なくて、道路とか滅茶苦茶にしまったからだ。あれじゃあ騒ぎになってもおかしくない。人気の無い田舎道だったとは言え、あんな物音立ててるんじゃないあ……。

「……ありえない」

もうどれくらいこうして一人で頭を抱えている事だろう。時計を確認すると、時刻は既に深夜零時を回っていた。日付が変わり、これで【デイヴィナ・マズルカ】の三日目が開始された事を意味している。

本当に憂鬱な気分だった。なんで僕の居場所がわかったんだろう。変じゃないか。僕には連中がゲーデの契約者だって判断する手段がないのに……なんであいつらは僕がゲーデの契約者だってわかるんだよ。

もう本当に嫌だ。どこに逃げても駄目な気がしてくる。酷く追い詰められた気分だ。やりきれない気持ちで重苦しい溜息を漏らす。日付が変わってからだけでも既に二桁はついているだろう。

「……勘弁してよ」

そう漏らしながらふと視線を自分のベッドの上に向ける。そこには 何故かあの場から連れ帰ってしまった九頭龍の姿があった。

右脇腹を思い切りあの竜巻みたいな技で抉られて、更に右腕も負

傷してるようだった。無我夢中でここまで背負って連れ帰った理由は、恐らくあの場に残しておく色々問題があるだろうという事だ。勿論……盾にしちゃったのが後ろめたいという事もあるんだろうけど……。

自分でもとんでもない事をしたと思う。仮にも九頭龍は僕を助けに来てくれたんだし……。正直、この人が現れて心底ほっとしたんだ。これで死ななくて済むかもしれない……。そう考えた。

実際この人は僕を助けようとしてくれた。手を伸ばして名前を呼んでくれた。なのに僕のした事はそれを裏切る行為だ。僕はあの時……何を考えていたのか思い出す事が出来なかった。

膝を抱えて部屋の隅、こうしてじっとしていると少しだけ気持ちが悪く、首と肩、竜巻を受けた傷口が傷む。でも……契約者になったからか、傷は思ったより酷くなかった。血が物凄い勢いで噴出した時はパニックだったけど、今は落ち着いてる。

ダンテ曰く、契約者は傷を負ってもそれを回復する事が出来るらしい。勿論傷の度合いにもよるらしいけど……。ゲーデの能力的な相性や、治療に費やす寿命で効果も変わるらしいから、一概になんでも怪我を治せるわけじゃなさそうだけど……。

とりあえず、首に巻いた包帯は今の所一回交換するだけで済んでいる。部屋のゴミ箱に血に染まった包帯が入ってるという事実がもう嫌だった。なんだよう。漫画かよう。

九頭龍の治療をするのも大変だった。血が凄くて、服を脱がせるのも一苦労だった。相手は女性だから気を使ったけど……でもまあ、この際そんな事言ってる場合じゃないよね。正直必死にやったから何も覚えてないし。いやでも、結構素肌は綺麗だったな……。

「ねえ、ダンテ」

『呼んだか？』

火時計の中からダンテが姿を現した。ふわりと浮かび、透けた体のままパソコンデスクの椅子の上に腰掛ける。この状態のダンテは僕にしか見えないんだよな……。

「ゲーデにはゲーデが見えるとか、そういうのはないの？」

『無いな。実体化していないゲーデは契約者以外にとっては“存在しない”と同義じゃ。在りもしないものを認識する事は出来まい』

「……じゃあ一体、どうやって僕の後をつけられたんだろう……」

『……あ。その話をしておらんかったな。なはは、すまんすまん！実は寿命を使えば相手が契約者かどうか、目視で判断する方法があるんじゃないか。うっかりしておったのう！ たははっ！』

何なんだろうこいつ……。もういい加減にしてほしい。死ねばいいのに……。

「……その方法は後で詳しく訊くとして……じゃあ、九頭龍……さん、のゲーデも今は見えないだけで部屋に居るのかな？」

『じゃろうな。特に今は九頭龍 斬子の治療に全力を当てているんじゃないし、姿を表すような余裕はないはずだしのう』

それもそうか……。じゃあ、仮に僕がぶっ倒れてもダンテが僕の寿命を勝手に使って回復してくれるのかな……。いや、過信は出来ない。こいつの馬鹿さ加減はもういい加減理解したほうがいいぞ、僕。

問題はそれより、この人が助かるかどうかだ。傷は当たり前のように深かった。目の前で人が重傷を負って気絶するとか、そんなの

そうそう得られない経験だよ。そんな特別なイベント必要ないのに。九頭龍の治療をした所為で両手が血まみれだった。ベッドのシートも赤黒く染みになってる事だろう。部屋の灯りをつけていないから判らないけど。まあ、あんまり現状を認識したくなくてあえてつけてないんだけどね……。

もし九頭龍が死んだら僕の所為……になるんだろうか。正直、あの時はああするのが正しかったと思っっている。一人しか生き残れないゲームなのに、他人を助けるなんて馬鹿のする事だ。それはそう思ってる。けど……。

信じたわけじゃない。でも九頭龍は本当に僕を殺すつもりはなかったんだ。本当に気遣って、部屋は余り出ない方がいいと言ってくれたんだ。それが判った時、なんとなく……悪い事をしたような気がした。

今でも信じているわけじゃない。眼が覚めたらよくもやったなって僕を殺そうとするかもしれない。そうしたら僕は……どうするだろう。それは良く判らなかつた。

『止めを刺さなくて良いのか？』

ダンテはあつけらかなとそんな事を言う。恨めしげにダンテを睨み、僕は眼を瞑った。

本当に、ろくな事にならない。今日も明日もそれが続く……。確定しているそんな運命が、どうしようもなく憎らしかった。

三日目・反撃(2)

「どうして……僕を責めないの……？」

それは至極当然の疑問だった。

人生最悪の夜が明けた頃、僕は血塗れの九頭龍斬子と言葉を交わしていた。彼女は死ななかつた。きちんと目を覚まし、そうしてある事か僕にお礼を言ったのである。

“助けてくれてありがとう”。気でも狂っているんじゃないかと思つた。だってそうじゃないか。僕は彼女を殺そうとしたんだ。僕の所為で彼女は死に掛けた……それがただ一つの正解のはず。なのに彼女はおかしなことを言う。まるで僕が彼女の命を救つたかのような言い方をする。

それはどう考えても、何度考え直しても、誰がどうやったってやっぱりおかしな事であつて、それ以上も以下も無い。常人ならば絶対に出てくるはずのない言葉を受け、僕は完全に動転していた。頭のおかしい人を目の前にして平然としていられるほど僕の気は確かじゃない。

だからこそ、その言葉を止める事は出来なかつた。彼女には何を言われても仕方が無い。それだけの事をした。なのに どうして？ どうして九頭龍斬子は微笑んでいるのか……その疑問に僕は答えを与えて欲しかった。

しかし彼女は何も言わずに目を瞑っていた。当然、傷は治りきつたわけではない。ベッドの上、壁に背を預けて今もぐったりとしている。全身に汗をかき、その呼吸も荒々しい。

それ以上問い掛ける事さえ彼女を傷付ける事になるのではないか。そんな考えが脳裏を過ぎる。結局僕が選んだのは沈黙だった。

只管に座つたまま黙り込む。

夜が明けて日差しが差し込んできたって言うのに、結局最悪の日は変わらないんだ。だって毎日最悪を更新しまくっているんだから。彼女が生きていたのは良かったさ。でも、この状況は全然良くないじゃないか。

「……大分、酷くやられたな。右腕もきみじつでやられている……これではろくに剣も握れない、か」

その言葉が僕を責める言葉であるような気がして気まずくなり俯いた。しかし彼女の声色に怒りとか悲しみみたいな物は一切感じ取る事が出来なかった。淡々と、ただ事実を告げるだけ……。ふと顔をあげると彼女はこちらに微笑みかけていた。理由は 不明だ。

とりあえずこの状況に耐えられなくなった僕は朝食の準備をする事にした。ダンテは数時間前から大人しくなっているのも、もしかしたら暢気に寝ているのかもしれない。でも、行き成り襲い掛かってこなくて良かった……。そうしたら彼女ともまた戦わなきゃならない所だった。

しかし、料理なんかしていられる心境じゃない。僕はそもそも部屋に人を上げるっていうのがまずありえないんだ。僕の聖域の中に異分子が しかも敵がいるっていうのがもうどうにも落ち着かない。こんなにもそわそわした気分は久しぶりだ。部屋に朋希と遼太と深邑、三人が同時に上がりこんできた時くらいのパニックだ。

そもそも料理食べる所なんかないじゃないか。僕はいつもパソコンデスクの前で食べてるし……。床、で食うのか……。散らかりそうで嫌だ。そんな事を考えていると、背後から九頭龍が僕を呼ぶ声が聞こえた。

「申し訳ないんだが、昼過ぎまで休ませて欲しい。話はそれからでも遅くないだろう」

「それはいいけど……えと、どこで？」

正直もう僕のベッドの上に誰かがいるのは耐えられそうになかった。頭が痛くなってきたし、吐き気もする……。ベッド血塗れだし……九頭龍は女の人だし。

「君のベッドを占領してしまうのは申し訳ない気分だが……。君も少し休んだ方がいい。夜通し私を見守っていてくれたのだろう？」

「え……？ どうして、それを……？」

「君には見えないだろうが、私にもゲーデはいるのさ……。それよ……まだ、身体が上手く動かなくて……。少し……寝るよ」

「あ、うん……。でも、着替えた方がいいんじゃない？ って、もう寝てる……」

寝ているというよりは意識を保てなくなったという感じだ。手当てはしたけれど、それだって素人の処置だし……。傷が治るって言うたって、脇腹と腕を挟り取られてるんだ。そう簡単に治るわけがない。

壁に背を預けたまま眠ってしまった九頭龍の肩に腕を伸ばそうとそつと近づく。しかし次の瞬間、僕の目の前には見知らぬ男が立っていた。突然現れたので驚いたけれど、彼も恐らくはゲーデなんだろう。

男は黒いスーツに身を包み、不思議な仮面をつけていた。ゲームとかでも良く見るような、陰陽の図をモチーフにしたような仮面を嵌めている。和風っぽいデザインのゲーデだ……。彼女に似合ってるなあ……と、胴でもいい事を考えた。

ゲーデは僕の腕を掴み、それから首を横に振った。それだけで何

となく彼の言わんとしていることは判ってしまった。彼は振り返り、自らの主をベッドに横たわらせる。そうして自らもベッドに腰掛け、足を組んで僕を睨みつけた。

そりゃあ、そうだろう。彼にしてみれば僕は彼の主を傷付けた人間だ。しかも最後まで生き残れるのはたった一人だけ……そういうルールの【デイヴィナ・マズルカ】の参加者でもあるんだ。自分の主に触れさせるわけにはいかないだろう。つまり、僕を信用していない証拠だ。

当然の事だ。けど、僕の部屋の中で僕より偉そうな顔をするまあ顔は見えないし睨まれてるのかもぶつちやけわかんないけどのは気に入らなかった。舌打ちして振り返ると、勝手に実体化したダンテが僕の朝食を美味しそうに平らげていた　って、オイツ！？

「あんまり美味くないのう」

「じゃなくてっ！！　ゲーデって飯食えんの！？　ていうかお前、なんで勝手に実体化してんだよ！？」

「む？　実体化は当然お互いの合意の上でが基本じゃが、別に特に能力を気にしないのであれば、勝手に実体化する事も可能じゃ。その剣士のようにな」

まあ、そりゃあそうなんだろう……。でなきや寝ている九頭龍のゲーデが実体化するって事はないんだろうけど。でも、普通契約者の飯を食うか……？　こいつ……前から思ってたけど、なんか他の【ブリスゲーデ】とは違うっていうか……。そもそもゲーデって寝たり食ったりするモンなのか……？

振り返って九頭龍のゲーデに視線を向ける。僕が視線を向けた時には既に消え去っていたが、未だに主の枕元に座って僕を見張って

いるんだろう。なんというか、侍って感じのゲーデだ。それに比べてこいつは……。

「んぐんぐ……ん？ なんじゃ？」

なんだこいつ……？ そもそもなんていうかこう、他のゲーデと比べて緊張感みたいなものが圧倒的に欠如してるんだよ。大事な事も言いそびれたりするし……。なんか、僕が怪我して倒れたら本当に助けてくれんのかなあ……。

「まずいのう、まずいのう……！ でも久しぶりの食い物じゃ、まずいわけがないのう〜！」

「……なんかさ、僕……お前に対して何か言っても無駄な気がしてきましたよ」

「う？ なんじゃそれは？」

口の周りにケチャップをつけながらオムライスを頬張るダンテ。なんというか……うーん。お子様定食とか似合いそうだな……。つーかこいつ食った食料どこに行くんだ？ 常に実体化してるわけじゃないんだし、実体化を解除したら未消化の食い物とかがその場に残されたりするんじゃないのか……？ やだなあ……胃の中身だけ突然放置とか絶対怖いよ。あんまり食べて欲しくないけど、まあダンテの事だからなんか不思議な力で消化したりするんだと信じたい……。

「ていうかだからさ、僕の寿命削ってまで飯食う必要はないだろ？」

「下らんことでケチケチして煩い奴じゃの〜！ 寿命の一分二分く

らい、増えても減っても大差なかるうに」

「大差あるよ！！ お前まさか今後も事ある毎に勝手に実体化して飯食ったり風呂入ったりするつもりじゃないだろうな！？ ああもう、消える消えるおおおっ！！」

思い切りそう叫ぶとダンテは望み通り消えてくれた。そういえばこっちの意思でも消せるんだっけか。めんどくさいけどまあ、それだったら少しくらいは許してやるか……。不貞腐れられても困るし。

『それは兎も角、どうするつもりじゃ？ このまま九頭龍の回復を待つつもりか？』

半透明に戻ったダンテが背後に浮かぶ。確かに全く問題は解決していない。僕も一晩中起きていた所為で今は物凄く眠いし、今晚にでもまた例の殺人鬼と当たる事になるだろう。それはもう避けられそうもない。

今の僕らに出来る事は夜の戦いに備える事くらい……。でも、九頭龍は利き腕を負傷、そもそも動ける状態じゃない。もう暫く時間をかけて回復を待ち、それから行動したほうがいいような気がする。だけでもし仮にあつちにこちらの居場所を探知するような能力があったなら……。怪我をしている九頭龍を連れているのは拙い。

いや、そもそもどちらにせよ九頭龍と一緒に居るのは拙いんだ。こいつはもう戦えないんだし、僕の足を引っ張ることしか出来ないはず。だったらコイツを囮にでも使って逃げた方がまだ利口だろう。そう考えつつ、僕の体は頭とは正反対の行動を取ろうとしていた。その場に座り込み、胡坐をかく。それは逃げるとか移動するとかそういう考えとは正反対の行動……。

『……ぬし、もしかして責任感じておるのか?』

「う、うるさいなあ……。どうせ夜までの間は暇なんだし、部屋にいたっていいだろ」

『確かに。どれ、少しでも眠っておれ。その間は我と あっちのゲーテが見張りを担当しよう。お主から多少離れたくらいならば行動範囲の中じゃからな』

まあ、ダンテが仮に見張りに飽きて寝ちゃったとしてもあっちのゲーテが反応するだろう。そういう意味では休むには丁度いいチャンスとも言える。僕は床の上に寝転がると、うさぎのクッションを枕代わりにして大の字に寝そべった。

床で寝るなんてそうそうある経験じゃないけど……兎に角硬いな。まあ、いつも椅子の上で寝てるんだし別に劣悪ってわけでもない。疲れているお陰もあり目を瞑れば直ぐにでも眠る事が出来そうだった。

「時間になつたら起こしてよ」

『我は目覚まし時計か!?!』

そんな文句を言うダンテを無視して顔に手を当てる。かなり眠い……。僕はそうして暫くの間眠りにつく事にした。当然、今夜の事を思えばとても気が重かったけれど。

綺堂 朋希が朝霞 黒斗と出会ったのは、まだ広い世界を知らない子供の頃であった。

“孤児”という同じ境遇を抱いていた彼らが友達と呼べる関係になるまでにはそれ程時間は必要無かった。尤も、友達だと公言するのは常に朋希の方であり、黒斗はそれに難色を示していたが。

山の麓にあつた孤児院、“木漏れ日の家”は元々教会であつた施設を改築して作られた孤児院であつた。森に囲まれたその施設は過去から続く歴史もあり、非常に厳かな雰囲気を持つていた。他の孤児院と比べれば規律は厳しく、子供たちに与えられた自由にも数々の制限が課せられていた。

しかしそれらを物ともせず、朋希はいつも自由に振舞つていた。黒斗はそんな朋希と共に居ると自然と規律を破ることになると、いつもその事ばかりを気にしていた。

誰から見ても“悪ガキ”の称号が似合う朋希ではあつたが、その実彼の心の中に自由と言う言葉は殆ど存在しなかつたとも言える。彼には歳の近い妹が居た。病気がちな彼女の事を、彼は常に気にしていたのである。

それは仮にどんなに楽しい時でも脳裏を過ぎつた。何もかもより優先すべき事として彼の頭の中に刷り込まれていたし、彼はそれを己で認識していた。自分の存在は妹の為にあり、それ以上も以下もないのだと。

父も母も居なくなつた。自分も傍から消えてしまえば妹は一人ぼっちになつてしまう。だがそれは朋希も同じことである。彼らはお互いの存在が在るからこそ明日を信じる事が出来たのだから。

孤児院では、友達も出来た。二人にとってそれは幸せな時間だつた。ベッドから降りることの出来ない妹の為、黒斗と朋希は良く花を摘んで持ち帰つた。両手いっぱい抱え込んだ花は土がついていて、二人はいつも泥だらけだつた。部屋の中が汚れるからと何度怒られても彼らはそれを止めようとはしなかつた。朋希は満面の笑顔で。黒斗は仕方が無いからといった雰囲気でも、妹はそれがとても嬉しかった。

綺堂 深邑。それが、朋希の妹の名前だつた。最初は黒斗だ

けが訪れていた部屋に、少しずつ友達が増えて行った。兄は誰とでも直ぐに仲良くなる才能があった。兄は友達を増やして行った。そうして深邑の為になんでもしようとした。

しかしそんな幸せな日々はあっさりと終わりを告げてしまう。二人は別々の家庭へと引き取られる事が決まったのである。勿論二人ともそれを良しとはしなかった。けれど“大人の事情”と“世界の現実”が二人の絆を簡単に引き裂いてしまった。

ろくに友人に別れを告げる事も出来ないまま、彼らはそれぞれ金持ちの家へと引き取られた。生活は何一つ不自由な事は無くなった。しかし二人はお互いの半身を引き剥がされたような、絶えることの無い痛みを晒され続ける事となった。

「兄さん！ こつちこつち！」

その、ベッドの上から降りることの出来なかった妹がこうして手を振って自分を呼べるほどに回復したのは、単にその大人の事情のお陰だった。

最新科学技術の集結する人工島、神貴アクアポリス。そこでの治療は確かに妹の体を回復させた。今では夢にまで見た学校にまで、休み休みながら通う事が出来るようになった。これ以上幸せなことは無いと深邑は笑った。

けれど、朋希はそれだけでは満足できなかった。出来るだけ傍で彼女を守りたかった。本来ならば両親が担うべき役目を背負う事が出来るのは自分だけだと、そう言い聞かせていた。

新たな両親に無理を言い、殆ど家出同然に伊雑町にやってきたのもその為である。ただ、妹の傍で暮らしたかった。例えそれが……
沢山の大人に反対される事でも。

アクアポリスへと向かうユピアブリッジの中央を運行する列車に乗り、朋希は夕暮れの景色の中アクアポリスへと足を踏み入っていた。駅から出た所では既に深邑が朋希を待っていた。その傍らには

孤児院からの友人でもある奈雲 遼太の姿もある。二人の元に駆け寄り、朋希は二人の頭を撫でた。

「待たせたなっ！！ こんな寒い所で待って無くても良かったのになあ」

「兄さんが中々来ないから出てきたんですよ？ さっきまではちゃんと風の当たらない所に居たから大丈夫」

「そ、それより朋希……なんでいつつも会つとまず僕らの頭撫でるの？ 子ども扱いしないでよー……」

「ん？ 実際子供じゃねえか」

「子供じゃないってば……。寒い中深邑を待たせると拙いと思ってさっきまでそのファミレスに入ってたんだよ？ ちゃんと守ってたんだからね」

「そりゃ偉いな。深邑、寒くないか？」

二人の頭から手を離す朋希。深邑は素直に頷き、遼太は乱れた髪形を直しながら唇を尖がらせていた。

こうして三人出会う事はあまり珍しい事ではない。出来れば馴染みである黒斗もつれてきたい所であったが、誘おうとする前にさっさと下校してしまったのだから仕方が無い。そもそも黒斗はこの手の集まりに参加するケースの方が珍しい。

「あれ？ 黒斗は来てないんだ」

「あゝ、なんか知らんがあいつ今日は機嫌悪そうだったぞ？ ぶつ

ぶつ独り言喋りながら帰っちゃったし」

「……兄さんが何か黒斗さんの機嫌を損なうような事をしたんじゃないんですか？」

じつとりとした視線を兄に向ける深邑。朋希は腕を組んで考えてみるが、思い当たる節はなかった。

彼ら、“木漏れ日の家”の出身者がこうして出会う事になったのは奇跡的な偶然の賜物である。勿論、彼らを引き取った新しい両親という存在が全員とも金銭的に余裕のある立場の人間であり、この神貴アクアポリスに集まった事は全くの偶然と言う訳でもないのだが。

「でも、珍しいね。兄さんの方から突然様子を見に来たいなんて」

「あ？ ああ……そうだな。まあ、そういう日もあるさ」

曖昧に言葉を濁し笑顔を浮かべる朋希。深邑を挟んでその反対側を歩く遼太はどこか浮かない様子で小さく溜息を漏らしていた。

「遼太、元気ないな。どうした？」

「え？ いや、元気が無いわけじゃないんだけど……。むしろ、元気が無いのは僕じゃないっていうか……」

「え？」

「な、なんでもないよ。それよりごめん深邑、先輩は誘えなかったよ」

話題をそらすように努めて明るくそう切り出す遼太。その効果は抜群で、深邑は見る見る顔を真っ赤に染めて首を横に振った。

「い、いいいよっ！ え、さ、誘っちゃったの……！？」

「断られちゃったけどね……。まあ、先輩放課後は結構いそがしあ」

“先輩”が忙しい理由を脳内で考え、拙いことを言ったと気付く。恐る恐る深邑の顔色を覗き込むと、やはりどこか困ったような笑顔を浮かべていた。

そう、彼らが慕う“先輩” 姫桜 麗夜の評判を考えれば当然の事である。男女共に人気の高い煌びやかな人物ではあるが、それだけに引く手数多である。共に時間を過ごす事もろくに望む事が出来ない深邑にとっては、憧れるにも高嶺の花であった。

「……お二人さん？ なんの話してるのか、お兄ちゃんちょっと興味あるなあ……？」

「と、朋希……顔が凄い事になってるよ……」

「兄さんには関係ないの！」

「か、関係ないいいいいっ！？ この俺に関係ないって……遼太コラアッ！！ てめえ、あとでコッソリ教えるコラアアアアッ！！」

「もー！ 恥ずかしいから静かにしてよっ！！ 皆こっち見てるよ……けほっ！」

深邑が少し大きな声を出した途端咳き込んでしまい、遼太と朋希

は同時に視線を向けた。胸に手を当てて苦しげな様子で立ち止まる深邑。二人は頷き合い、直ぐに道端に深邑を誘導した。もう慣れたものである。

「大丈夫？ ごめん、ちょっとはしゃぎすぎたね……」

「ううん、大丈夫……。それよりごめんね、せっかく楽しくお話ししてたのに……」

「気にすんな。話ならこれからいくらでも出来るしな。遼太、この辺で入れそうな店あるか？ 俺はアクアポリスはよくわからん」

「あ、そうだね。じゃあ、案内するよ。えっと……」

遼太は深邑の手を取ろうとして何故かそれを引っ込めてしまう。その不自然な動作に兄妹がそろって小首を傾げると、遼太は取り繕ったような笑顔で背を向けた。

「こつち。先に行くから、ついてきて」

「……おう。深邑、歩けるか？」

「うん」

それが、“現実”が定めた関係性。

深邑は結局誰かの手を取らねば前に進む事は出来ず。朋希の手は彼女の手を取るためだけにあり。他の全てを取りこぼしてきてしまった。

それはこれから永遠に続いて行く。定められてしまった運命のように。繰り返し繰り返し、何度も何度も……。

だが、繰り返す関係で居られるだけでもありがたいことなのだ。朋希は理解する。それは、彼の運命さえも大きく捻じ曲げたある出来事が切欠であった。

「 戦おうと思う。一人で……僕が」

目を覚まして開口一番、黒斗がそう口にしたのには勿論相応の心境の変化があった。しかしその真相を知るものはその場に居らず……驚きを隠す事は出来ない。

時計は午後を指し示す。昼過ぎまでの休息の後、しかし斬子の傷はまだ回復し切ってはいなかった。どんなに早くとも、自由に動けるようになるまでもう一晩はかかってしまう……それは最早避けようのない現実である。

戦えるのは黒斗しかない。だが他にも方法はあるはずだった。一晩ここで過ごしてもいい。黒斗だけここから逃れてもいい……。“最低”という条件付であれば選択肢などいくらでもあったはず。その中から何故彼が戦うという意思を選び取ったのか、それはパートナーであるダンテにも理解の及ばぬ事だった。

『本気で言っておるのか？』

「……うん。それしかない……ううん、そうしたいんだ。僕が……自分で決めたいから」

そう語る黒斗の視線は脅えているように見えた。しかし同時に嘘のようなものは形を潜めている。斬子はそんな戸惑いを抱いたままの黒斗にそっと微笑みかけた。

「……ならば、私が今の君にして上げられる事は二つだけだ」

そうして額の汗をそのままにそつと左手の人差し指と中指を立て、視界に翳す。

「一つは“君に出来る事と出来ない事を教える事”……。君のゲーデは君が思っている以上に強力なゲーデのはずだ。力の使い方を知れば……。或いは勝ち目も見えるかもしれない」

「……二つ目は？」

恐る恐るそう問い掛ける。すると斬子は子供のような無邪気な笑顔を浮かべ、それから眉を潜めて俯きながら。

「 “君の幸運を祈る事”、さ」

冗談交じりにそう告げた。

“彼女”はいつも独りぼっちだった。

誰も信じられず。誰も傍に置かず。誰の声にも耳を傾けず。誰にも触れようとはしなかった。彼女は孤独だった。彼女に信頼出来る人間など居なかったのだ。

彼女は一人きり、歳不相応な莊嚴なる玉座の上に座っていた。広々としたその部屋の中、彼女以外の人間は居ないも同然だった。

王であつた父親も、母も彼女は失つた。まだまだ甘えたい盛りの彼女の手の届かない場所へと愛する人は消え、小さな身に遺されたのは恐ろしい権力と力、そして秩序を守らねばならないという重圧だけだった。

彼女に沢山の人々が笑顔を振りまいた。しかしそのどれが真実でどれが偽りなのか、彼女には見抜く術がなかった。国を陥れようとする輩は数知れず。権力を取って代わろうという野望を持つ者も少くない。

結果、彼女は誰も信じない事にした。自分の心さえ彼女は信じない事にしたのだ。即位したとは言え、彼女はまだまだ幼い少女だったのだ。その心には隙間が多く存在し、そこにつけこまれた時、自分でもどうにも出来ない感情の波に乗せられてしまうかもしれない。だが、“仕方が無い”では済まないのだ。彼女が抱える国という巨大な集合体、その全てを台無しにしてしまうかも知れない。王に戸惑いなど許されない。気の迷いなど持つての他だ。だから彼女は、何も信じなかった。何かを信じようとする自分さえ、信じようとはしなかったのだ。

そんな彼女が信じていたただ一人の存在。たった一人だけ、燃え落ちて行く世界の中で彼女が微笑みを向けた人。物心付いた時には既に傍に居て。常に彼女を守り。彼女に世界を教え。最初で最

後の友であった人。

白銀の騎士。聖なる人。少女は彼女にだけ心を許し、彼女に多くの重要な使命を与えた。国が動く時、王が重き決断を下す時常にその傍らにその人の姿はあった。

二人はまるで姉妹のようだった。同時に母と娘のようでさえもある。歳の離れた二人はしかし固い絆で結ばれていた。少なくとも王は そう考えていた。

物語の結末はあっさり訪れる。王は自らに剣を向ける騎士の記憶を最期に焼き付けた。何故そうやってしまうのか 僕には良く判らなかつた。

でも、そういう事があるんだと思う。信じて信じて、でも結局最期は裏切られる……。だから誰も信じられない。誰も信じないんだ。自分自身でさえ、信じるには程遠い。何故なら僕らの感情はいつだって不確かで、誤った判断だって平然と下すから。

そんな、夢を見た。騎士の剣に貫かれ、切なげに顔を顰めたまま少女は口から血を吐いて玉座に倒れこんだ。それが恐らくは彼女の “王”^{ダンテ}の魂に刻まれた、最期の記憶だった。

契約しているゲーデと僕たち契約者は魂を共有している存在だ。だからそういう事があっても……相手の夢を見るなんて事があってもいいと思う。別に不自然じゃないさ。もう、割り切る事にした。

でも僕は一人で頑張っていたダンテの姿を見てしまった。見ようと思つたわけじゃないけど でも、見てしまったんだ。だから、僕は……彼女を少しだけ、信じられる。

信じられるというのは多少語弊があるかもしれない。僕は彼女に共感……そう、共感したただけなのだから。でも、誰も信じていない。きつと僕も信じていない彼女だからこそ、僕らはお互いを信じていないからこそ、だからこそやるべき事をやらねばならないんだ。九頭龍も信じない。敵も信じない。ダンテだって信じない。僕が信じるのは確定している要素だけ。それを運用し “運”とか“他力”とかではなく、自ら活路を見出す事……それが僕の生き方だ。

つたはずだ。

夜になり、僕は一人で伊籬の街をうろつき始めていた。勿論探しているのは例の殺人鬼。あいつは僕らを狙っている。このまま行けば負傷している九頭龍に止めを刺そうとするだろうし、僕だってその例外じゃない。

あいつは倒さなきゃいけないんだ。九頭龍なんていう不確定要素を傍に置いてやるんじゃない。僕が自分で、自分の戦い方であいつを殺さなきゃ駄目だ。もう不安定な日々には怯えるのなんて真っ平だから。

「驚いたな。まさか、自分から出てくるとは……！ だが、一足遅かったな。傷は癒えたし、魂は十分に補給させてもらった」

正面、道端に立つ殺人鬼がそう笑う。場所は海沿いの坂道……。居場所を特定するのはこんな田舎だからそんなに難しくは無い。“連続殺人事件”を警察は調査している。夜中の警戒態勢も強くなっているから、自由に動き回れる範囲は狭まっている。

更に、一度殺人を犯したエリアにはどんなバカだって立ち入る事はしないだろう。そして警官の警備状況なら、昨日の段階で一応は把握している。後は警備の薄いエリアを風潰しに歩いていけば、何らかの痕跡を発見するのは難しくなかった。

ここに辿り着くまでに既に一つ、死体が転がっているのを確認している。抵抗の様子も見られなかった事から被害者は一般人。昨日の戦闘でわかったけど、ゲーデの契約者同士がまともに争えば“何の痕跡も残らない”なんて奇跡は起こらない。

探索開始から凡そ一時間。予想よりも早く発見する事が出来た。見れば殺人鬼は既にコンディションは万全といった様子で、僕一人である事を確認したからか余裕染みた微笑さえ浮かべている。

「昨日の剣士は居ない、か……。ふん、あの傷ならば無理も無いだ

ろう。今頃その辺でくたばっていてもおかしくはないからな」

そう、事実九頭龍は瀕死の重傷を負っている。今は僕の部屋で横になって寝ているから、順当に行けば回復はするだろうけど……でも、まだ駄目だ。まだこいつに勝てるほど回復はしていないんだ。だから。

「……しかし、あの様子じゃあお前たち仲間って訳でもなさそうだったしな。一人で出てきたんだ、勝算くらいはあるんだろう？」

「まあ、ね……。無かったら出歩かないさ」

「ああ、そうだな。手負いのあの剣士を庇う為に　なんて、理由でなければな」

殺人鬼が笑う。僕は　正直戸惑っていた。僕は九頭龍の為に戦うわけじゃない。ダンテの為でもないし、かといってこいつに殺される為でもない。

僕は死にたくない。生き残りたい。怖いし、痛いのは嫌だ。それは全部本音だ。九頭龍の事なんてどうでもいい　それも本音なんだ。だけど心のどこかで彼女に死んでもらっちゃ困ると思っている自分がいて。だからわざわざ、こいつとケリをつける為にここまでやってきた自分がいる。

でも、考えるのはもうめんどくさいから止めた。考えても判らないんだ。僕の心は不安定で、たった一つの信念を貫くみたいな真似は出来ない。ふらふらしていて、ふわふわしていて、だから何ともならない。

本当に判らないから、もう考えるのは止めた。こいつの所為とかダンテの所為とか九頭龍の所為とかそんなのはどうでもいい。“僕は”。“僕の意味で”。“自分から出向いた”んだ。それがたった

一つの確定された事実 ！

「行くよ、ダンテ」

空に手を翳す。掌の中に浮かんだ赤い炎が燃えあがり、巨大な剣を成す。殺人鬼は既に人を殺し、剣を構えている。いつ戦闘が始まってもおかしくない。

「本気でやるつもりか？ 一人で？ お前が？ 手が震えているのか？」

「……君は、強いよ。実際に刃を交えてみて良く判った……。君は魂を沢山集めているしね。でも僕も魂を集めているかもしれないとか、そういう風には考えないの？」

勿論ハツタリだ。でも僕は嘘を付くのは得意だった。周りの人間に合わせて、世界の流れに合わせて、波風立てずに居る為には嘘だつて必要になる。

「この街で殺人を犯しているのが君だけとは限らない。別に、アクアポリスで殺したっていい。それに 昨日の彼女、僕が連れ帰った理由……考えなかったの？」

あえて派手にダンテを大地に叩き付けて燃え上がらせる。炎の“密度”は昨日の数倍うすつぺらい。でも 表面だけ取り繕って派手に燃やした。まるでパワーアップしたみたいに。

「他の契約者を殺せば強くなるんでしょ？ 僕が例え一人でも、手が震えていても、本気で君と戦ってみる価値くらいはあるんじゃないかな」

僕の言葉に殺人鬼は眉を潜めた。それは恐怖や疑念と言うよりも怒りに近い感情だ。判ってる 判ってるさ。僕より彼は余程力の扱いに慣れている。殺した数が違いすぎる。

実際彼は強い。能力もそうだけど、彼の剣には迷いが無い。凄いやと思うよ。人を殺す事になんの恐怖もないなんてね。僕なら絶対御免だ。でも彼はそれが出来る。剣を理解している。力をつけたなら判るだろう。“僕の実力が大した事ない”事なんて。

だから僕の言葉はきつと侮辱にしか聞こえなかっただろう。プライドの高そうな顔をしている 見れば判った。でもそれでいい。彼の心の中に僅かに隙を埋めればそれで充分だ。

さあ、仕掛けはお終いだ。気合を入れて踏ん張るべき所に来てしまった。痛い事を覚悟しよう。泣き出す事を覚悟しよう。僕は僕を信じない。

「下らん事を……！ だがお前の言葉も一理ある。“契約者を殺せば大量の魂が手に入る”……強くなるという事だ。お前を倒せば手っ取り早い。その力、僕が有効活用してや ……！？」

彼が驚いているのが良く判った。最後まで長セリフを聞いてやる義理なんて無い。僕は真つ先に彼に“背を向けて走り出した”。要するに、“全力で逃げている”。

背後、彼が走り出す。僕は何度か後ろを確認しながらダンテを肩に乗せて構えながら走る。ゲーデを剣化している間は身体能力が向上する。移動速度は普段の僕の比じゃない。

坂道を飛び降りる。海沿いの急斜面、ほぼ直下する状況の中、剣で壁を削ってブレーキングしつつ落ちて行く。高所、海を見渡すその道の下は海ではなく 倉庫街が広がっていた。

元々は漁港として賑わっていた場所だけれど、アクアポリスが出来てからは漁師もめつきり減ってしまい、今では埋め立てられたア

スファルトの大地の上に倉庫が乱立している。深夜に人気はあ
るはずも無い。

「ぐ　っ！」

落下の衝撃を大地にダンテを突き刺してクッションにすることで
軽減する。それでも手足が思い切り痺れた。でも、何十メートルも
上の道から落ちたのにこれなんだから大分マシな方か。

背後、当然奴も追い掛けてきていた。あつちは僕より移動速度が
速い。でも、落下の速度は変えようもない。だからこそ飛び降
りたんだ。そしてこの建造物の多い一帯　身を隠して逃げ回るに
は丁度いい。

倉庫と倉庫の間、薄暗い道の中に飛び込んで僕は走り続ける。
脳裏に浮かんでいたのは、九頭龍が僕に伝えてくれた事だった。

「単刀直入に言って、君のゲーテは“遅い”のが弱点だ」

ベッドの上、人差し指を立てながら九頭龍はそう切り出す。

「ゲーテの外見は契約者の能力にも大きく関係する。君の大剣は余
りにも巨大すぎるし、どう考えても小回りの効くような武器じゃな
い。むしろ武器としては余りにも不便な形状をしている。まずはそ
れを理解しなければならぬ」

そう、ダンテは物凄く巨大だ。人間が運用できる“剣”と呼べる
武装、凡そその概念からは外れた存在。余りに巨大で、無骨で、そ
れはきつと契約者にしか扱う事が出来ない。

ダンテは重い。大きさに比例してか、僕の身体能力において“速
さ”と呼べる面はそれ程向上しているわけではない。それでも生身
の僕と比べれば尋常ではないのだけだ。

しかし実際昨日の戦いでは敵の攻撃に対応出来ず、放たれた技も見切る事が出来なかった。九頭龍はそれよりも数倍早く、反則染みた速さで剣を振りまくる。それについていく事は僕には難しい。

「君の持つ剣と私の持つ剣は全く別の存在だと考えた方がいい。君の剣は“振り回す”ものではない。それは剣の形状が教えてくれる

—

倉庫の合間を縫って移動し、開けた場所へと抜ける。一步踏み出せば海に落ちるその場所で振り返ると頭上から襲い掛かってくる敵の姿が見えた。

ダンテを正面に構え、攻撃に備える。正面に浮かび上がった真紅の結界が刀身に触れるまでも無く敵を弾き飛ばした。

「またその防御障壁か……！」

と、彼がぼやいている間に一気に前身する。“ダンテは自分から攻撃するタイプの武器”じゃない。下段に構え、大地を剣が撫で火花を散らす。赤熱した刀身を思い切り斬り上げる。

殺人鬼はそれを剣で防御する。しかしそんな柔な剣じゃダンテは防げない。赤熱した刀身は相手の刀身とぶつかり合った時火花を散らす。それを火種に。ダンテは炎を起こす事が出来る。

それがダンテの持つ基本的な“能力”。 “燃やし”、“爆ぜる”のがこの刃の意味。刀身に爆弾を取り付けた剣。 そんなイメージで僕は相手の剣に触れた衝撃と同時に火花を誘爆させる。

勿論それも防御される。でもそれでいい。ダンテの攻撃を受ければ暫く姿勢が固まってしまふ。“重すぎて身体が硬直する”。

だから僕は、この重い剣を思い切り振り回す事が出来る！

怯んだ敵目掛けて連続で襲い掛かる。まともに剣を振り回せば避けられてしまふ。相手の方が早いんだ、当然だろう。でも、攻

撃を防いで、弾いて、怯ませて　　今なら絶対に避ける事なんて出来ない。

「く　　ッ!？」

一瞬、相手の目を見てしまった。その表情からは焦りと僅かな恐怖が見て取れた。なんだか悪い事をしている気になる。でも　手を休める事は無い。

連続で巨大な刃を叩き付ける。その度に小さな爆発が起こり、それは確実に彼の体力を奪って行く。振り回す刃は空を斬り、轟音と共に飛来する。叩き付けられる衝撃と爆発から、その威力はまるで小型のミサイルみたい。

防ぎきれず、殺人鬼は後退する。後ろに跳んで間合いを開く。でも、それも予想していた事だ。ダンテを思い切り振り上げ、大地に叩き付ける。

衝撃が走り、火柱が立ち上った。それは大地に真っ直ぐに生まれ、た断裂に沿って正面に向かって連続で吹き上げる。大地から真っ直ぐに吹き上げてくる炎を前に殺人鬼は剣を構えて防御の姿勢を取る。でも無駄なんだ。“炎”は“剣”じゃ防げない。

轟音と共に空が焦げ付くような匂いがした。熱風が潮風に混じって吹き荒れ、火柱は収まって行く。開けた視界の先、殺人鬼は服装をぼろぼろに焦がしてしかし尚しっかりとした様子で大地に立っていた。

僕のダンテに障壁が存在するように、他のゲーデにだって障壁は存在するんだろう。ただ僕のはその障壁が更に強固だってだけで。燃えてしまったネクタイを片手に彼は僕を睨み付けた。

「強くなってるでしょ、僕」

彼は答えない。それは疑念が大きくなっている証拠でもある。僕

の言った言葉を思い出しているだろう。僕が強くなっているという可能性。それによろやく敗北の可能性も勘定に入り出す。

「名前を覚えてくれないかな」

「……名前、だと？」

「知っておいた方がいいと思うんだ。だってそうでしょ？ 僕は君を“殺してしまう”んだから。」

彼は目を丸くし、それから肩を揺らして低く笑う。挑発としては十分な効果があった。彼は当然 自分の能力を発動させる。

自らの掌を切り裂き、その血を刀身へと塗りこんで行く。血飛沫が渦を巻き、白銀の美しい刀身を多い尽くして行く。血の刃。僕のダンテが炎を操るように。あっちのゲーデは血を操れる。

刀身に血液のコーティングを纏ったならばその攻撃力と防御力は格段に上昇する。それは昨日身を持って知った事だ。でも、決して防ぎきれないわけじゃない。

「生意気な口を利いてんじゃねえぞ、コラアアアッ！！」

真面目そうな顔をしていた敵がそんな言葉と共に突っ込んでくるのが見える。僕は覚悟を決めて深呼吸を一つ、それから同時にダンテを構えて駆け出した。

空ぶつたらダンテは隙が大きすぎて必ず反撃を受ける事になる。だから剣を体に密着させた状態で敵に向かって突っ込んで行く。境界に守られているし、剣に備え付けられた巨大な盾が身体を守ってくれる。アームガード

距離を離せば鞭が来る。それは反撃にも繋がらず、一方的にこちらが攻撃され続けるだけだ。だから至近距離の白兵戦に持ち込まな

ければならない。力すべてをガードに回し、正面から突っ込む。

「ダンテえええええッ！！！！！」

『障壁最大展開！！』

ダンテの声と同時に全身に張り巡らされた結界が光を帯びて輝き出す。敵はそのまま切りかかってきたが、結界ごと突っ込んで体当たりし、その身体を空中に弾き飛ばす。

間合いを開く事はしない。跳躍し、吹き飛ばされた敵を追う。空中で身体を捻り、鞭のように血の剣を振り回し攻撃してくるがそんなものは気にしない。正面から突っ込んで　捻じ伏せる！！

「何いいいつ！？」

斬撃を受けながら、空中で剣を振り下ろす。直撃すれば両断間違いないの威力を前に彼は鞭を倉庫の壁に突き刺し、自らの身体を引っ張って回避する。空振った一撃は空しく空を斬り、不安定な体勢のまま大地に落下してしまう。

片手を大地に突き、地面から弾かれるように軽く宙に浮かぶ。低空で吹っ飛びながら身体を反転させ着地。ここに来るまでに　自分がどれくらい動けるのかは一応掴んできた。

何も無意味に無様に逃げていたわけじゃない。全力で走ったり飛び降りたり、狭い路地をジグザグに進んだりして自分の性能を把握していたんだ。頭上を見上げると壁に張り付いた殺人鬼が飛び降りながら鞭で連打を仕掛けて来る。

鞭の攻撃は本当に一方的だ。こっちは防御する事しか出来ない。

でも　やられるわけでもない。今なら剣を動かして防御できる。

目は夜の闇に慣らしてきているし、剣の動かし方も判ってきた。昨日とはもう違う。

襲い掛かる血の軌跡が夜の闇を切り裂く。防御する度に刀身に鈍い衝撃と音が響き、腕が痺れる。結界で防御しているのにそれを貫通して余りある威力で何度も繰り出される攻撃。正直言つてそれは僕には目で追うのも精一杯だった。

ダンテは兎に角遅い。速さに関しては下の下なんだ。だから目で追って防御するだけでもいっぱいいっぱいで、全てを防げるわけじゃない。

「つつつ！？」

結界を貫通し、足に鞭が命中する。皮膚を引き裂き肉に食い込むその鋭い痛み思わず悲鳴を上げそうになる。でも、そんな事をしていたらズタズタに引き裂かれてしまう。

懸命に防御を続けた。距離は開かれていて、反撃は出来そうにも無い。炎を出すそうにもこの間合いじゃ普通に避けられてしまう。相手側に隙がない状況で攻撃を繰り出せば、ダンテを防御に使えず反撃で大打撃を受ける事になる。

だから今は耐えるしかない。ズタズタにされたってしょうがない。これがダンテの戦い方なんだ。僕の戦い方……。 “耐えて反撃を待つ” 事では、今は勝利を手にする事なんて出来ない。

「……面倒くさいな。一気に仕留めるぞ、アルビノ！」

『うん！ この距離なら、絶対に反撃を受ける事もないし……！』

殺人鬼は鞭を手元に戻し、剣の形を成す。それを低い姿勢で構え僕はそれに対応するように両手でダンテを大地に突き刺した。

そう、これ待っていたんだ。この攻撃を……。自動追尾能力を持ち、猛スピードで突っ込んでくるほぼ防御不可能な必殺攻撃

“ストームブリンガー巻き込む血潮”。昨日は全く対応出来なかった、彼の切り札。

実際この技は物凄く強い。回避しても方向転換をして追い掛けてくるのは鞭というより、その剣が意思を持って襲い掛かってくる事を意味する。避けても続けて攻撃され、防御は貫通してくる。それだけの威力を持っていてのは魂を上乗せしている攻撃だからであり、彼の切り札だからでもある。

ゲーデにはそうした特殊な攻撃が存在する。必殺技、とでも呼べばいいのだろうか。それこそ彼のスチームプリンガー巻き込む血潮は必殺クラスの一撃を持っていった。あれを普通に受け流す九頭龍が人間離れしすぎているだけで、あんなのどうしようもない。

『 予め言っておくぞ、黒斗 』

それは、今日の昼の事。ダンテに炎の能力の事などを尋ねている時、彼女は腕を組んで僕に真面目な表情で言った。

『 奴の必殺技 あれは我では絶対に防御出来ん。刀身で受ければ弾けるじゃろうが、連続して来られては成す術が無い。相性が悪すぎるんじや 』

拗ねるような口調でダンテはそう呟いた。でもそれじゃあ問題だ。スチームプリンガー巻き込む血潮が出てきたら、じゃあもうアウトって事になる。

それじゃあ勝てない。殆どの確率で負けてしまうじゃないか。それは問題だ、間違いなく……。何か方法はないのかと問いかける僕に対し、彼女は。

『 そもそも、ゲーデの必殺技に対して普通にどうにかしようという発想が間違っておる。ああ……。九頭龍斬子は別物だと考えるんじやな。そんな事は言われずとも判っておるだろうが……。兎に角、“必殺技”には“必殺技”で応じるのが定石。ならば 』

目を瞑り、大地に突き刺した剣を感じる。その剣に流れているのは炎の濁流。ダンテの魂は、溶け出すくらいの熱を帯びて僕の心の中を駆け巡る。

正面では巻き込む血潮ストームリンガーの構え。それに対し、僕は心の中でダンテに言われた事を反芻していた。生身では防げない。なら、“防げる状況”を作ればいい。

「……行くよ、ダンテ」

『うむ。剣に集中しろ、黒斗。“我を感じる”……それが今の我とお主に出来る事じゃ』

言われなくても判っている。心の中、ダンテの姿を思い浮かべる。ダンテが座っていた玉座……独りぼっちの孤独。それに自分の孤独を重ねて 炎の記憶を呼び覚ます。

大地に突き刺さった剣から溢れ出すのは蒼い炎……。それはまるで海のように波打ちながら大地を埋め尽くして行く。炎は膝下を全て飲み込み、それは僕だけではなく彼も同じである。

「これは……!？」

『え……あつ、くない……よ？ 壬、これ、全然熱くないけど……』

「なんだか判らんが……!! 何かされる前に仕留める!! アルビノツ!!」

刀身に渦巻く血飛沫は巨大化し、小規模な竜巻のような姿になって放たれる。それは真っ直ぐ、炎の海の上を突き進んでくる。

でも、今なら判る。“全て予想していた事”だから。剣を引き抜き、僕はただ軽く剣を構えた。

「何……!?!」

『巻き込む血潮を……防御するつもり!?!』

「そう。防御出来ないなら、出来る状況を作ればいい。嘆きの川
ツ……!」

剣を振り上げ、巻き込む血潮目掛けて振り下ろす。だがその血飛沫の竜巻は自在に動き、姿形を変え、軌道を変える事が出来る。だからこそ厄介なのであり、だからこそその必殺なのだ。だが。

『あ、あれ……? 王、あれ、私……えっ?』

彼の剣、アルビノが何が起きているのか判らないといった様子でそう呟く。でも僕は容赦なく竜巻に剣を叩き付けた。烈風は自ら斬り伏せられる事を願うかのように真っ直ぐにダントの刀身に吸い込まれ、そして “弾き返される”。

その方向は真っ直ぐ主であるはずの二人へ。殺人鬼 王は技を解除しようとするが、それも叶わない。攻撃は完全に操作不能の状態に陥っている。

「巻き込む血潮が……っ!?!」

勿論そうなれば回避に乗り出すのは当然の流れ。彼は自らが放った必殺の一撃を横に跳躍して回避する。しかし。

「それじゃ駄目だよ。巻き込む血潮は……相手が逃げた方向に追尾するんだから」

直角に弾道が曲がり、真横に跳んだはずの主目掛けて竜巻は突っ込んで行く。

「な……にいいいいいいいつ!?!」

奇妙な音が鳴り響き、竜巻が壬の胸を穿つ。完全にそれは致命傷であり、口から血を吐きながらそのまま龍のように蠢く血の嵐に壬は引きずり回され、大地や壁に何度も激突してからようやく開放されて大地へと音を立てて落下した。

その肉体は滅茶苦茶に引き裂かれ、何度も打ち付けられたせいで手足はおかしな方向にねじれ曲がっていた。白いアスファルトの大地に彼の身体から溢れた水溜りが見る見るうちに広がって行く。

「第一の円、自断^{カイナ}。君の……負けだよ、殺人鬼」

ダンテを軽く振るい、炎と共にその姿を消滅させる。大地は血に染まっていた。世界を覆いつくしていた炎の海も消え去り、今はもう何も残ってはいなかった。

「壬……壬っ!! うそ……そんな……! なんで……っ」

剣から少女の姿になったアルビノが自らのパートナーに駆け寄るが、既に彼は生きてはいないだろう。ピクリとも動かず、ただ音も無く血溜りだけが広がって行く。

物言わぬ存在になってしまった自分の相棒の身体を揺らし、少女は何度も名前を呼んでいた。まるで自分が悪い事をしたように感じて思わず俯いてしまう。

そんな僕の背後、ダンテは何も言わずに僕の肩に手を乗せていた。顔を上げ、アルビノを見詰める。泣きじゃくりながら振り返った彼女は憎しみを込めた目で僕を見詰めていた。

「……謝らないよ。悪いけど、僕が勝って君の相棒が負けたんだ。ただ、それだけの事だから」

彼女は悔しげに唇を噛み締めながら肩を震わせていた。僕が何も言えずにその場に立ち尽くしていると 背後に立ったダンテが言う。

『では、止めだな』

「え？ 止め？」

『パートナーを失った時点でゲーデに生き残る術はない。契約者が死ねばゲーデも消滅するし、逆も然りだ。一蓮托生、片方死ねば残りも死ぬのが道理であろう。ゲーデを斬り、その魂を喰らうのじゃ。それで漸く、“勝利”と呼べるのだから』

「で、でも……」

殺すっただって……女の子だ。戦う術も無くなって泣いているだけの無力な女の子だ。それを……でかい剣で両断しろっていうのか。

なんて寝覚めの悪い戦いなんだ。思わず息を呑む。ほっつておけば勝手に消えるんじゃないだろうか……。でも、それじゃあ魂が手に入らない。

こいつらは人を沢山殺してきたんだ。利己的な理由で、どうしようもない理由で。その気持ちはもう、くたばった壬から聞く事は出来ないけど……でも、どんな理由があっても人を殺したら殺人鬼なんだ。

それは僕だって何も変わらない。自分の利益の為に誰かを殺した……それは事実なんだ。ダンテの言葉に目を瞑り僅かに思案する。

そうして僕は自らの意思で剣を再び手に取っていた。

「い、いや……。やめて……」

剣を構える僕に対して彼女は完全に脅えている様子だった。殺される直前の人間の目をしている。その目は 多分、そう簡単には忘れられないだろう。

そんな目を向けられる日が来る事を誰が想像しただろう。少なくとも僕は考えて居なかった。こんな歳も大して変わらないような女の子を、バカでかい剣でぶった斬るなんて。

でも、そうしなきゃいけないんだ。そうしなきゃ生き残れない。安っぽいモラルの為に危険を冒すわけには行かない。“やることはやらなきゃ” 駄目だ。戦いの報酬は ちゃんと貰い受ける。

剣を振り抜く。少女の上半身と下半身は永遠にお別れを告げる事になった。目の前で倒れ、血を流しながら消えて行くゲーテを見下ろし僕はその最後を目に焼き付ける。

「やだ……死にたく、ないよお……！ もう……【ブリスゲーテ】
なんて……いや……なの、に……」

言葉の意味が良く判らなかつた。でも、彼女は救いを求めるように僕に手を伸ばしていた。涙を流しながら、命乞いをしていた。

そんな女の子に止めを刺す為に僕は剣を突き刺した。剣が大きすぎて彼女の首はもげてしまった。光の粒に成って弾けた力がダンテの刀身に吸い込まれて行くのを感じる。

『よくやったな、黒斗』

ダンテがそう僕を労う。でも、僕は何も言わずに空を見上げていた。誰にも知られる事も無く、きつとこれから誰にも話す事はない。

でも、僕は絶対に忘れる事はないだろう。

自分の意思で誰かを殺して生きて行く……僕は彼と何も変わらな
い殺人鬼になった。転がったままの壬の死体に背を向け、小さな声
で囁いた。

「……………さようなら」

謝る事はしない。僕が勝って、彼が負けただけ。ただそれだけの
事だから。夜の闇の中、心も吐息も潜めて僕は初めての勝利の余韻
を懸命に押し殺していた。

DAY 3・Outburst Of Hate(1)

麗夜は、反応に窮していた。

「ごめんなさい。驚きますよね……でも、これが一番分かってもらえるかな、って思ったんで……」

その言葉の直後に、遼太の右手に握られていた長い槍は花びらのようなものになって散っていった。麗夜はその様子を見て、どう行動するのが一番自身のステイタスとなるのかを考える。

……まず一つは素直に明かすこと。これが一番無難な手だと考えられるが、正直なところメリットもデメリットも存在しないように思える。明かすことで遼太がこの事について相談してくる可能性が高い。しかしそうなれば、遼太は少なからず自分を警戒することになるだろう。

「……ごめんなさい」

遼太は槍を消し去ると、また噴水へと向き直ってしまう。まるで目を逸らすように。

……二つ目はこちらのことは隠したまま遼太の相談に乗ること。これは博打の要素が高いだろう。バレていなければ一番襲撃の機会を得られるが、バレてしまった後の警戒心は尋常ではないだろう。

ああ、何を言っているんだ、俺は。今、遼太は無防備にも背中を向けているではないか。だったら。 。
そう麗夜が右腕を横に上げた途端。

「竜次！ 居たぞ！ 俺達の獲物が居たぞ！」

その声と共に、砂の地面を削る様な音が聞こえ、麗夜と遼太は慌てて顔を向けた。二人の視線の先には、両手を後ろに巨大な剣を引きずっているワイシャツ姿の男。竜次の姿があった。その駆けるスピードは速く、また引きずる刃からは火花が散っているようにさえ見えた。

「え、あ、あの人は!？」

腕を横に上げたまま、麗夜は遼太を横目で見て内心舌打ちをした。こうなつてはもう、遼太の前で曝け出すしかないだろう。恐らく遼太に戦闘は不可能だ。あの男。竜次は強かった。とても遼太では。加えてこんな状態では不可能だろう。それに竜次は自分のことを知っているのだから。【デイヴィナ・マズルカ】の参加者だということ。

「イデアライズ【実体化】!」

麗夜は横に上げた腕の先、指を広げ叫ぶ。が、剣が現れない。この期に及んで、まだ言っているのか……クレイは!

「クレイツ!!!」

「……はい」

怒りそのものの様な麗夜の呼び声に、クレイは沈む声で答えると、白銀の光が腕の先に集中する。その光が収まれば、麗夜の右腕には一振りの剣が握られていた。

『行けえ! 竜次! 叩つ斬れえ!!』

既に距離を十分に詰めていた竜次は、麗夜目掛けて重厚な剣を振り抜かんと一度右側に腰共に掠じる。それを見て、麗夜は剣でザリチュを受けようと左側に添えようとすが、それを即座に中断する。一度しか交えていないが、あの剣は酷く重かった。見た目で既に華奢なクレイではきつと防ぎきれない。ましてや相手は魂を喰らっているのだろう。尚更だ。

麗夜は刃が銀の軌跡を描いた瞬間に、その場で垂直跳びをした。実の跳躍は縦に3メートル。跳んだ麗夜自身でも、驚く身体能力だった。

巨大な剣　ザリチュが横に半月の軌道を描いた後、竜次は上を見上げ息を呑んだ。あの昨晚の少女の様に、麗夜が月を背に華奢な剣を身体の反りの反動と共に振り下ろそうとしている。その渾身の斬撃をそのまま受けるのはまずいと竜次は判断し、一步後退する。竜次の身体が後ろに流れた直後に、麗夜はジャケットを靡かせながら地面へと深々と刃を突き立てた。

「せ、先輩も……だったんですね」

その二人の殺し合いを、遼太は震える脚で必死に身体を支えながら見つめていた。

「遼太！　しっかりしなさい！」

漏らした遼太の言葉に反応するように、声と共に遼太の背後から紫色の着物の少女が現れた。少女は薄紫の髪を漂わせながら、宙に浮いている。その着物短い丈から伸びる脚は、地面には着いていなかった。

まるで母親のように優しい目で、けれども確かな強さを持った瞳を遼太へ正面から向ける。

「憧れの人なんでしょ？」

「うん」

「大好きな人なんでしょ？」

「うん」

「護りたいんでしょ？」

「うん」

「だったら、そうしよう！」

「うんっ！」

遼太が力強く頷いた瞬間、光の花びらが舞った。おぼろげな薄紫の花弁は遼太の右手を覆いつくし、止むと、そこには再び長い槍アヤメが握られていた。

間、麗夜は再度回るザリチュを後方にステップすることで避けた。竜巻のような音を鳴り上げて振り回される刃は、見た目のそれに反して非常に速い。それが元々のザリチュの性能なのか、それとも魂を喰らっているからか。兎に角、麗夜は焦燥感のようなものを覚えた。せめてクレイが能力を話してくれば、そう思って止まない。半月を描いて竜次の背後に回ったザリチュを、竜次は上に振り上げる。踏ん張りの息と共に振り下ろされたそれを、麗夜は鼻先を掠めるかの如くどうにか回避する。外れた刃は弧を描いて地面へと衝突し

「な」

信じられない事に土が巻き上がった。傍にある噴水を縮小したかのように巻き上がるそれは、ザリチュの斬撃の威力を十分に表していた。

どうすればいい。そう麗夜が思案を始めた瞬間、

「離れて下さい！ 先輩！」

「ッ、遼太!？」

その声に麗夜は顔を振り向かせる。

「うあああああああ!！」

そこには遼太の身長ほどもある長い槍を前方に突き立て猛進する遼太の姿があった。両手で刃を前方に落としたままの竜次は、その姿を見て脅えた目を見開かせ、即座に広い刀身のザリチュを身体の前にも構える。

掛矢のような強烈な威圧感を持って、遼太の槍　アヤメはザリチュへと刃を交えて行く。竜次はそれを受け止め、受け流す　つもりだった。

「な、何だこれ……刃が回転してるのか!？」

そう、竜次がアヤメの刃を近くで見やれば、火花を散らして回っていた。螺旋階段のような構造で出来ている水晶の槍は、それを高速で回転させている。鏝迫り合いなど出来る訳がない。ぎゃりぎゃりと言音を立て、ザリチュはアヤメから勢いよく弾かれる。

「うわっ!！」

弾かれたザリチュを勢いよく後ろへと弾き飛ばされた。やばい、無防備だ。と竜次は焦るが、遼太も突進の勢いで軽くオーバーストしていた。

竜次は打ち上げられたザリチュを両手で持ち直し、またも刃は半月の軌道を描く。しかしそれと同時に、遼太も向き直っていた。同じようにアヤメの長い刀身を、竜次へと渾身の力で叩きつける。

ギーン　　というとても甲高い音と共に、回転するアヤメの刃により強い閃光が一瞬巻き起こった。両者はお互いに体重を刃に押し付け、鏢迫り合いをする。順当に考えれば竜次の圧勝の筈だ。何せ剣が大きい。幾ら遼太の槍が長いとはいえ、所詮槍は槍。しかし、それは回転する刃の前では意味を為さない事だった。

苦悩を刻む竜次の顔の前では、激しい火花を散らした刃が、離れてはまた鏢迫り合い、また離れては鏢迫り合うというのを幾度も繰り返していた。もはや根気勝負。一瞬でも気を抜けば、回転する刃に弾かれてしまう。

しかし、そのとてつもなく速い刃を目の前に、竜次の心には陰りが生まれていた。

怖い、怖い、怖い。あれが当たれば一瞬で身体はひき肉のようになってしまうのだろう。そうなれば血が抉れて骨も削れて血もたくさん流れていく。

その恐怖に、指から力が抜けそうになった瞬間。

『竜次！　俺達は　強いんだ！！』

その言葉に竜次は腹に力を入れた。恐れず、渾身の力で刃を少年に向かって押し出す。ギャギャギャギャ　　という耳を抉るような音と共にアヤメは徐々にザリチュに圧され、

「うわぁ！？」

強く弾かれてしまった。

今度は遼太が無防備にも両手を槍と共に上げてしまう。そのチャンスを竜次は決して見逃さない。両手で柄を持ち直し、ザリチュを頭上遥か高く振り上げ、たたらを踏む少年を縦に斬り付ける。

『ダメだ！ 竜次！ 後ろに下げれ！』

そのザリチュの声に、竜次はハッと目だけで前を見やる。遼太ではない。その背中影になっている奥の奥。白いダウンジャケットを羽織った少年は、マントのように靡かせながら駆けて来ていた。左手を身体の前になり、右手を華奢な銀の剣と共に振りかぶっている。既に遼太の直ぐ背後まで麗夜は迫っていた。けれど振り下ろしたザリチュは止まらない。体勢を崩した遼太は何も出来ない。

『駄目です！ レイヤツ ……!!』

その瞬間、クレイの叫び声が上がると共に、麗夜の右手に握られていた剣は光の粒子として消え去ってしまう。

直後に、麗夜の何も握られていない右腕の先が一直線に “遼太” と竜次の身体の腰の部位を通った。思わずそれに、竜次は刃を下ろす両腕を強張らせてしまった。だがそれでも、ザリチュが止まることはなかった。

「あ、あああああ ……!!」

途中まで振り下ろされた刃は、遼太の右肩に数センチ減り込んでいた。一瞬でそこから血が噴き出、また遼太はアヤメを落としてしまう。落ちたそれは直ぐに薄紫の花弁となって消え失せる。

「ザ、ザ、ザ、ザリチュ！ 今日は何引こう。に、二対一は不利だよ！」

「ッ！？ おい、竜次！」

そう言つて竜次は転びそうになりながらも、二人の少年に背を向けて走る。

怖かった。死ぬと思つた。ジャンパーの少年の腕が槍の少年の腰と 竜次の腰を通過した時は。何故か剣は消えてしまつたけど、もしあつたら。そう思うと今に腰が抜けそうだ。だから一刻も早く逃げ出したい。

その一心で、竜次は噴水から走り離れていく。

「……………」

その背中を苛立ちで歯噛みしながら、じつと麗夜は見ていた。右手は何も握られていない。そう 強制的に【イデアライズ実体化】が解けてしまつたから。

「クレイ……………お前……………」

何故あそこで解いた。何故拒絶した。あそこであのまま斬り伏せていれば“二人”を殺せたんだぞ、と。

しかしクレイは何も答えない。霊体として麗夜の前に姿は表しているが、何も言わない。麗夜の背後ではアヤメが頻りに遼太に呼び掛けていたが、そんなことは完全に麗夜の耳に入つてはいなかつた。構わず、麗夜はクレイをにらみ付ける。その眼光にはもはや殺気すら含まれていた。そして返すクレイの瞳も、非常に酷似したものだった。

一言、クレイは何かを呟いて銀時計の中へと消えてしまった。その唇を麗夜は、読む事は出来なかった。けれど直感でだが “最低です”。そう言われた気がした。

爪が肉に食い込むほど、麗夜は拳を握り、暴れ出したい気分をどうにかやり過ごして遼太の方へと向き直る。

中々に、酷い惨状のように見える。遼太は顔を苦痛に歪ませて肩に手を当てているが、指の間から血が津々と出て来ている。斬られたのはついさっきの事だというのに、もう水溜りが出来始めていた。一度溜息を吐いて麗夜は遼太へと歩み寄る。そしてそのまま、冷えた黒い瞳で見下ろす。

思う事は一つ。ここで殺してしまえば一番効率が良いだろう、と。

『 レイヤ 』

そのクレイとは思えない低い声に、麗夜は舌打ちする。

とりあえずは、血塗れの遼太^{こいっ}をどうにかしなくてはならないだろう。

めんどくせえ。寝込む遼太を視界に捉えながら思った。

……一先ず、あの後遼太を肩に担いだ俺は何処に行こうかという事を思案した。まあ病院など有り得ないから、運ぶとしたら俺の家か遼太の家。と、そこまで考えてから遼太の家を俺は知らない事に気づく。だから結局、今遼太は俺のベッドで苦しそうに寝息を立てている訳だ。

傷のせい^がか熱が出てしまっていたので、とりあえず額に濡れタオル

ルを乗せておいた。最近活躍する機会が多い気がするのは気のせいだろう。包帯が大量にあったのは本当に運が良かった。確か、昔に汐織が大量に買ってきた時の奴の筈。俺が喧嘩で腕を切った時だったか。まあ、瘻だが汐織に感謝する気分には少しだけなった。

公園で見た時の遼太の怪我は正直助からないんじゃないかと感じたが、今は相当落ち着いている。流石にまめに包帯を取り換えなければならぬくらいには出血しているのだが。容態的には病院に行かせるべきだと強く思ったが、まあゲーデの連中曰く、この程度なら一日回復に専念すれば殆ど回復するらしい。なんともまあ、契約者というのは化物染みたまものだ、と思う。そう言えば俺の顎の傷ももう治ってたしな。

一度俺は溜息を吐く。

……どさくさで二人を殺せなかったことには酷く苛立つが、こうなってしまうては仕様がな。精々先輩の仮面をかぶり続けることにさせてもらった。

『えーと……』

と、その眠っている遼太の隣、正座で女にしては少し大きい身長を縮込ませている少女がいた。年は二十歳を若干越えていない程度に感じる。若干赤気味の薄紫の長い髪を後ろで結わっている姿が、紫色の着物と相まって和風の雰囲気を実際立たせていた。

何度か俺と視線を合わせるが、直ぐに外すという行動を何度も繰り返していた。……うざってえ。何か言うなら言えよ。

『わ、私、アヤメ。えと、君は麗夜君で良いんだよね？』

「ああ、そうだ」

君。という馴れ馴れしさに苛立つが、どうにか抑え応える。

「何で知ってるんだ？」

『いや、何かちよくちよくうちの遼太が名前を漏らしてたから……』

“うち”のつてどんな関係だよ。保護者かよ。お前らの関係は。そうだれた頭の中で突っ込みを入れるも、それを口に出すことはしなかった。決してそんな気分じゃないからだ。

『何かもう……凄く不安だったみたいでね、遼太は。先輩に相談しようかどうか……』

「へえ……」

それは御苦労なこつた。将来は明智光秀になるかもな。勿論裏切らない明智光秀。そしたら犬のように扱き使つてやる。殺し損ねた分。

……しかしまあ、それを聞く限り余程俺のことを遼太は信頼しているらしいな。俺が思うに、この【デイヴィナ・マズルカ】では各々の【ブリスゲード】に様々なシステムやルールを教えてもらうのが定石に感じる。……俺達に限っては例外だが。

……まあ、とにかく、遼太のゲード アヤメがこういう雰囲気ならば、何かに不自由していたとは思えない。それでも俺に相談したかったという事はかなりの信頼を得ているという事だろう。うむ……これは案外殺さずにおいて正解なのかもしれん。それこそさっき思ったように、犬のように使えるかも知れない。そういう駒が一つ増えるというのはこういうロワイヤル形式では大きく意味を為すだろう……そう思う。

『だから私がすれば良いじゃんってこつ、背中を押したんだけど……』

…」

「ふうん……」

そこはどうでも良いな、実際。

『……』

「……」

『え、えーとじゃあ、ゲーデの方は……？』

その言葉に俺は顎で遠くのクッションに放られている銀時計を差す。あんな不届き者の名前を言うのすら吐き気がする。

アヤメが視線を送ると、そこから相変わらずワンピース一枚のクレイが現れた。

『クレインクラインです……』

何とも、ゲーデ二人が正座して向き合っている様はシユールだった。というかもうちよつと神秘的な雰囲気出せよ。なんかお前らそこら辺にいる女子みたいだぞ。格好以外は。

『え、えーと、年上さんかな？ アヤメです。宜しくお願ひします』

『よろしく……』

笑顔すら浮かべずクレイは答えた。その社交性ゼロとも言える反応に狼狽した拳句、こっちへと顔を向けてきやがったが、全力で顔を背けて受け流す。結局この部屋の中で話をする者は誰もいなく、

遼太の寝息だけが音としてあった。

まあ何と言うか、雰囲気として合コンで絶対にあってはならない空気だ。馬鹿な奴が馬鹿な爆弾発言をぶち落とした時の数倍以上の空気の嫌な感じが強い。まあ、それは100%俺とクレイから排出される空気なのであるが。

『……き、気まずいよぉ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!』

そんなアヤメの叫びが俺の部屋に響き渡った。

DAY 3・Outburst Of Hate(2)

今は落ち着いた遼太の寝顔を見て思う。俺は一体遼太といつ出会ったのだろうか、と。

少なからず、記憶は小学校の頃にまで遡っていた。正直そこが初めかは分からない。けれど、そこまでは遡れる。

何となく学校の幼稚な生活というものに飽きていた俺は、内心酷く苛々しながら過ごしていたと思う。周りの会話は程度は低かった。周りも勉強や運動などに努力なんてものもろくにしないから、全てにおいて何もせずとも出し抜けていた。……いや、少年野球に所属している奴らより、俺は野球に長けていたか。

まあそんなことはどうでも良い。とりあえず俺は現状の生活というものに苛立っていた。無論それを、表に出すことはしなかったが。良い顔をしていれば、何も考えず女子というものは群がって来た。2月14日など、名前も知らない、顔も覚えていない女子から日に何度も呼び止められていたが。それが酷くウザったかった。けれどそれを跳ね退けては、俺の仮面というものは崩れてしまう。

そうふつつつとした感情を抱きながら、教師に頼まれた仕事を内心嫌々終えた日の帰り、何を思ったか俺は裏手の墓地前の細い道を通って帰宅しようとしていた。驚くほど人が少ない道だ。虫は沸いてるし、何より墓が広がっている。寄りつかず、暗く危ない道というものが皆に与えられている印象だった。だから人はいない。筈だった。

何故かその日は、墓の裏から声がした。何か呻き声の様な、そんな声。思わず俺は立ち止まり、その墓を凝視した。驚きはなかった。ただ、“霊”でもないのか、と思っていただけ。

俺は迷わず墓地へと足を踏み入れた。二つ奥の列の大きな墓石の裏。そこに誰かいるのは確かだった。もしかしたら霊かも知れない。非日常かも知れない。そんな淡い期待を胸に抱えながら除いた墓石

の奥にいたのは、数名の男子と傷だらけの少年、それに一人の少女だった。俺のいた学校は私服の為、何処の学校かは分からなかった。けれどまあ、場所的には同じ学校だったのだと思う。

俺の足がコンクリートをする音に敏感にも気づいたのか、一人の少年を踏みつけていた男子たちは一斉にこちらを向いた。すると一人がずかずかと大股で俺に近づき、首根っこを掴み、“忘れる”やら“大人しく帰れ”やら言っていたと思う。きっと上級生だったのだろう。まだ四年だった俺よりも少しばかり身長は高かった。

凄みを利かせているらしい顔を無視し、俺は奥を見てみた。すると、残りの男子たちはまた倒れ込んでいる傷だらけの少年に危害を加えようとしていた。しかしそれを、耐えかねた様に少女が少年の前に両手を上げて座り込んでいた。“止めて”とか“酷い”とか言っていたと思う。正直良く覚えていない。

そう冷静に観察していた俺がムカついたらしく、首を掴んでいた男子は俺の耳元で怒鳴り込んで来やがった。だから、どうせなら関わるまいと思っていた俺の気は180度変わったわけだ。

怒鳴ってくれやがった男子の左頬を右の拳で思い切りぶん殴り、よろけた所を右足の回し蹴りで遠くの墓石へと勢いよく倒れこませた。俺より大きい筈の身体はとても軽かった。墓石が倒れる盛大な音が響き渡り、少年少女含め、全員がこちらへと向き直った。“お前何なんだよ”とガキ特有の甲高い声を響かせながら、立ちあがった。攻撃の対象が俺に切り替わったらしい。じりじりと寄ってくる数人の男子を見て、喧嘩はご無沙汰で合った事に気づく。丁度良い肩慣らしだ、と俺は手に持った鞆を床に落として拳を鳴らす。きつと、俺の口は少し歪んでいたと思う。

後の展開は非常に呆れる者だった。人数で勝つてると気が大きくなっていたのだろう、威勢良く振りかぶって来た隙だらけの拳を苦もなく避け、カウンターの左ストレートを浴びせると、残りの男子たちの雰囲気は一変した。耐えかねた様に奇声を上げながら突進してくる男子の脇腹に膝蹴りを一発入れた後、彼らを包んでいた雰囲気

気というのは更に険悪なものとなっていた。もはや近くに落ちていた木の棒やら鉄パイプやらを持って襲いかかって来た。多分、その時のそいつらの表情は恐怖で歪んでいたように思う。まあ、それも仕方ないと思う。何せ、俺が殴った奴の口からは血が出ていて、腹を蹴られた奴は泡を吹いていたのだから。……しかしまあ、その後は武器を手にした奴らと同じ末路を辿ったのだが。そして、今度は俺が初めに浴びせられたのと似た様な言葉を耳に吹き込む立場となつた訳だ。

多分、それからだと思う。遼太が俺にひつつくようになったのは、ああ、あの時傍にいたのが深邑か。やっと思いだした。でも、分かるのはあの時の姿だけなのだから……まあ、知らないのと同義だろう。

「……んん」

遼太が苦しそうに身動きした。そのせいで額に乗せていたタオルがポタリと俺のベッドの上に落ちる。それを溜息を吐きながら拾うが、少し温くなっていた。もう一度溜息を吐きながら、俺は水が張られている洗面器へと手を伸ばした。

『んん……優しいねえ、麗夜君』

「あ？」

じゃばじゃばとタオルを冷やして居れば、左の方　遼太の足の付近に正座していたアヤメはそんなことを言いやがった。裾の短い浴衣の為、中身が見えてしまいそうだったが、それは敢えて黙っておくことにする。

『だって、もう日も完全に昇ってるよ？』

マジで、と窓を見れば確かにカーテンの隙間からオレンジ色の光が差し込んでいた。遼太を運んでからずっとだから……何、もう七時間かそこらはずっと看病していたのか。……信じられん。

『遼太はねえ……本当に麗夜君の事が好きみたいだよ』

まあそれは、学校でのあのひつつきようから分かるが。っていうかあれで俺に好意がないんだったら物凄く質たちが悪いぞ。十年近くはあんな関係なのだから。もし俺へ好意がないんだったら詐欺師への就職を俺は薦めたいと思う。きつと上手くいく。容姿も相まって。テキトーにタオルの水を絞って、遼太の額へと置く。

『麗夜君、私が変わろうか？ 眠いでしょ？』

「いやまあ……確かに眠いが……それはどういう意味だ？」

『えっ？ そのままの意味なんだけど』

「……………【イデアライズ実体化】してか？」

『え？ うん』

「……………」

『……………え？』

こいつも同じ人種 もとい【ブリスゲーデ】種だったか……。うん……。ゲーデってのはどっか頭が緩んだやつしかいないのか？ もっとこう、精霊っぽい聡明な奴はいないのか、聡明な。

「寿命減るだろ？ それじゃあ」

『え……ああ！』

もう溜息が止まらない……。どうしてこう……。なあ？ まあ、あの意味ではお人好しなのかも知れないが。クレイに然り、アヤメに然り。誰かが傷ついていたら放っておけないというか……。

と、クレイの姿が頭に浮かんで深夜での苛立ちが蘇る。勝ち残るのが目的じゃなかったのか。だったら俺のした行動の何がいけない。他の参加者は殺す。力を蓄える為に一般人を殺す。正答だろう、それは。確かに俺は非日常を望んだ。この命を掛ける状況も素晴らしい。歓喜に背筋が震えるほどだ。だからこそ、そんなものがたったの後六日で終わるのは惜しまれる。もっと永く、永く あわよくば永遠に。

しかしその為には勝たなくてはならない。生き残れるのは一人なのだろう。生き残るためには、勝つためには、殺すしかない。

『ねえ』

そんな険呑とした俺の思考は、アヤメの声で掻き消された。

何だか、妙にきらきらした瞳を俺に向けて来ている気がする。

『ご飯作ってあげようか？』

「あ？」

『だってお腹空いてるでしょ？』

「あゝ、まあ……確かにそうだけど」

『よし、決定！ 私が作るよ！』

そう言つてアヤメは正座の体勢からバツと立ち上がる。立ち上がった直後には、少し透けていた身体も完全に不透明になつていて、足元の絨毯はアヤメの体重で凹んでいた。つまり、アヤメは実体化したという事。

「お、おい！ それじゃ 遼太の寿命が……」

『大丈夫だよつ、ちょっとぐらい。それにすぐ終わるし』

何て良いながらどたばたとキッチンへと駆けていく。呼び止めようとしたが、どうせ減つていく寿命は俺のじゃないしどうでもいいやと思い、止めた。実際、今気づいたが中々に腹も減つていた。本来ならばもう起きて朝食を食べている時間だから当然だ。だから、俺はアヤメの好意に肖ろうと決めるが……。

『あつれー？ 釜戸って何処？』

何て声がキッチンから聴こえて来た ん？

「……………釜戸？」

『うん。だつてご飯炊けないじゃん。包丁とかはあるけどさあ〜』

えーと、何ていうか、もしかして知識は見た目の時代の通りになつているのか？ そうなると、アヤメは着物を着ているのだから、まあ、近代とは言い難いな。

「なあ、電子レンジって知ってるか？」

『電子……れんじ？』

発音がなっていない。こりゃ知らないんだな。余計にめんどくさいじゃねえかよ。

溜息を吐きながら、俺はアヤメの居るキッチンへと向かう。

「……いいよ、自分で作るから」

『え、ダメだよ。私^が作る』

「お前に一々料理道具教えてく方が面倒なんだよ。大人しく【^{イデア}実体化】解いて遼太の様子でも見てる」

俺の言葉に一瞬眉毛を寄せ、頬を膨らまれるが、俺が睨み返すと渋々“はあい”という声を上げてリビングへと帰って行った。身体もちゃんと透けていた。

「やて……」

とはいえ、やはり面倒だ。まあ、朝ご飯だしテキトーに惣菜を作っ^てそれで済ませよう。……一応、遼太のお粥も作っ^てやるか。

『おい、竜次。お前いつまでその調子なんだ？』

カーテンの隙間から差し込む日光のみが灯りの暗い部屋の中、ザリチュの低い声が響いた。

その声が向けられた先には、体を酷く震わせている竜次がいた。膝を抱え顔を埋めて、肩を震わせている。そのせいか、歯と歯が小刻みにぶつかる音がしていた。

竜次の脳裏には、あの時の場面が幾度となく繰り返されていた。麗夜の腕の先が竜次の腰を過ぎるその瞬間、確かに竜次は死というものに克明に予測してしまった。腰が千切れ、腸が飛び出し、血が噴水のように吹き出るその末路。それは竜次が、既に“十五”回見てきた光景だ。映画なんていう画面越しじゃなく、自身の目で、最も近い所から。

ザリチュで引き裂かれた人間はとても生き物とは思えないものへと成り下がってしまう。てらてらと光る内臓を隙間から覗かせたり、床を血で汚すだけの存在になってしまう。それらに、竜次はあと一歩でなってしまう所だった。

ああ、怖い。怖い。怖い。そう何度も膝を強く握るけど、一向に脅えが引く事はない。

その様子にまたか、とザリチュは溜息を吐く。竜次は自分の命の危機になると酷く臆病になってしまう。もう人をその手に掛けることに何ら抵抗を覚えていないというのに。何とも、半端な殺人鬼だった。これでは扱い辛いな、とザリチュは思考に難色が浮かび上がる。

『なあ、お前は強いんだ。安心しろ。それにまた新しく八人喰ったじゃねえか。もう力はかなりついてる。大丈夫だ。俺達は勝てる、
竜次』

「……………うん」

そのザリチュの言葉に竜次は頷く。

「……………うん、そうだよね」

『そうだ、竜次。自信を持って。……日が沈んだら、もう一度魂を喰いに行こうぜ』

それで確実だ　　そうザリチュは竜次に言い聞かせた。

「　　は、またコンビニ強盗だつてよ。盛況なことだな」

味噌汁を啜りながら、ニユースを見ていれば、あまり飯時に流すべきではないようなニユースが流れた。

流石に死体などは映っていないが、鑑識がごちゃごちゃという現場の映像はライブで流されていた。死亡者は八人。皆、巨大な刃物で引き裂かれたような死体らしい。考えるまでもない。明らかにあのスーツ男の仕業だろう。一丁前にも、あの後も魂食いに精を出していたらしい。

白米を咀嚼しながら思う。　　やはり、それが正しい在り方だろうと。

「……ん、んん？」

と、後ろから遼太の声が聞こえた。寝言……ではなさそうだ。振り向けば、遼太は確かに瞼を開けていた。

「気がついたか」

「先輩……？ あれ……僕」

『遼太……！』

「う、うわっ！ アヤメ！」

ばふっ、とわざわざご丁寧に実体化してまで遼太にアヤメはダイブしていた。

けどそんな風に飛びついたら。

「い、いっつっつ……」

『あ！ ご、ごめん、遼太！』

慌ててアヤメは半透明な身体に戻っていった。やっぱり何処か頭が緩んでると思う。

俺が溜息を吐いてると、痛みのせいか目の端に涙を浮かべた遼太がこちらを見ていた。

「先輩が……助けてくれたんですか？」

「……ああ、まあ、な」

言いながら、俺はクッションに放り投げられている銀時計を気づかれないように一瞥する。幸い、クレイが何かを話す様子はなかった。というか、アヤメと挨拶を交わした後から一回も出てきていない。……まあ、その方が今の状況としては有難いので良いのだが。ありがとうございます、と純真な瞳を向けて言ってくる。

「とりあえず、お粥作つといたが……食べるか？」

「あ、はい……大丈夫だと思います」

そういうと、怪我をしていない左の腕で身体をゆっくりと起こしていく。その動作の遅さに苛立ち、俺は遼太の背中を押した。ありがとうございます、なんて言ってくるが正直こっちの気分の問題なので礼を言われる筋合いはないように思う。

遼太の上半身だけを起こした後は、テーブルをベッドまで引き寄せる。ベッドとテーブルの高さは大体同じくらいなので、脚を床に落とせば食べれるだろう。遼太にスプーンを渡し、飲み物を持ってくるために俺は立った。そこで、遼太の肩をついでに見たが、まあ、結構回復はしているように見える。出血もあまり酷くないようで包帯がその部位だけ染みているだけだった。まあ、それでも、朝食を食い終えたら一度変えるべきだろうな。

そう思いながら、俺は台所へ行き、牛乳片手に戻ってくる。

「あ……これって……」

遼太は点けているテレビを見てそう呟いていた。遼太も表示されているテロップを見て気づいたのだろう。

「……先輩は、またあの男と闘うんですか？」

「……ああ、そうなるな」

「なら、僕も……一緒に……」

そう遼太は肩が痛そうに顔を歪めながら言う。

一緒に、戦うっていいのか？ それは無理というものだろう。今はまだまともにアヤメを握れない筈だ。確かに遼太が戦える状態ならば、共闘するのも良い手だろう。何せ、遼太はあの大剣の剣圧に對抗できるゲーデを持っているのだから。そんな奴についてこれなくても邪魔なだけだ。

だから。

「いい。お前はここで休んでろ。……あいつは

顔を遼太から……いや。ここにいる全員に表情が悟られない位置に向ける。仮面がきつと外れてしまうから。」

「……俺一人で」

殺す。

きつと俺の口は、この上なく歪んでいるのだろう。

DAY 3・Outburst Of Hate (3)

草原を走っていた。

胸を駆ける不安だけが、脚を動かしていた。地平線のような草原も、やがて終りが来たらしい。草が戦いでいるだけのラインに、何か不自然なものがあつたからだ。

都市だ。巨大な石造りの都市。空を突き刺すように高い高い塔を抱えている城があつた。それを中心に、都市は広がっている。しかしそれを走っている視界から見ることは、囲んでいる高い外壁によって叶わない事だつた。

突然だつた。満身創痕の敵兵から口にされた言葉は。

走ってぶれる視界で、必死に都市を凝視する。大切な人がいる都市を、城を。崩れてはいないだろうか。火はつけられていないだろうか。煙は上がっていないだろうか。幸いそれらは何も無かつた。夕暮れの中、毅然と城は建っていた。

けれど安心は決して出来なかつた。その外壁によつて中を見れないからだ。予定を早めているかも知れない、息を殺して襲っているのかも知れない。不安が不安を呼ぶ。それは矛盾した螺旋階段のよう止まることなく募っていく。

あの人が死んでしまう。そう思うだけで頭を掻き毟りたくなる。あの人は大切な人なんだ。あの人は愛している人なんだ。あの子が 大好きなんだ。

あの子の心は理解しているつもりだつた。孤独な心。不信な心。立場が立場である故に誰も信じず、自分でさえも信じようとしない悲しい子。だからせめて、自分が心許せる存在になろうと。そう思った。

ずっと見てきた。頑張ってる姿も、悲しんでいる姿も、寂しむ姿も。彼女はまだ幼い。だつていうのに、彼女は周りに結果を強いられる。聡明でなくてはいけない。崇高でなくていけない。そんな重

みを常に感じながら、彼女は生きていた。

そんな心を、少しでも和らげたかった。せめて自分に抱かれてる時だけは、年相応の笑顔を見せていいよと笑い掛けたかった。

その為だったら何でもする。大切な人の為だから。愛している人の為だから。大好きな人の為だから。

やっとのことで辿り着いた玉座には、彼女が変わらぬ姿でいた。

私を見て、毅然とした面持ちから少しだけ笑顔が現れた。その笑顔を見て 俺の心も、涙を流していた。

胸に染みる涙は、きつと安堵の涙。きつと、あの幼き姿を見て流したんだろう。自分に向けられた笑顔に流したんだろう。大切な人が、生きていたから。

それが分からなかった。結局は他人だ。他人ならば自分ではないだろう。どうしてそうまで感情を入れ込む必要がある。大切なのは自分だ。他人じゃない。自分だ。唯一絶対信じられるもの。金でも、権力でもない。自分だ。確固たる存在。我思う故に我在り。そういうものだろう、人間は。

だったらこの夢は何なんだ。この胸に広がる感覚は一体何だ。分からない。分からない。

怪夢かいむから目が覚める。

目を開けて、自分が泣いていることに気づいた。視界が酷くぼやけていた。見慣れた白い天井が、何やらモザイクをかけられたようになっている。頬を伝っている涙を拭いながら上半身を起こして、背中に走る鈍痛にも気づいた。まあ、ソファで寝たのだから仕様がな。首が痛くならなかっただけでもマシなのだろう。

時刻は既に昼 更に言えば三時を過ぎていた。学校はサボることになっていた。初めてだった、こんなことは。けれどまあ、一回の欠席で俺の人格が疑われるような脆い仮面を付けていた覚えはない。何も問題はないだろう。

減っている腹もそうだが、まずは遼太の容態を確認することが先決だと思った。朝は俺の作ったお粥を食べた後、また眠ってしまっ

た。額に手を当てれば熱もあつた。当然と言えば当然だ。

寝不足でふらふらする頭を抱えながら、客間を出て俺の部屋へと向かった。相変わらず、俺のベッドの上では遼太が眠っていた。寝息は穏やかだった。大分、落ち着いたのかも知れない。やはり契約者の回復力は目を見張るものがある。これなら明日は平気で動き回れるのかも知れない、そう思った。

額に乗せていたタオルは流石に温くなっていたので、キッチンへ行って濡らして絞ることにする。向かう前に、遼太の顔を観察してみた。

線の細い顔立ちに、長い睫毛が目の輪郭を強調している。少し茶髪がかった長い髪は、俺を真似したのか、左右非対称で左側の髪が長くなっていた。それに俺は思わず苦笑してしまう。

目に掛かる髪を弄りながら、俺はキッチンへと向かった。タオルを絞り、額に乗せた所で再び客間へと退却する。目を覚まされては面倒だからだ。

シリアル片手に客間に戻って、再びニュースを掛けるが、特に目に掛かる殺人事件というものはない。流石に昼間に行動するほど馬鹿ではないらしい。

確か一回目の殺人は三人の殺害だ。二回目は四人。そして今日未明に起きた事件では 八人。合計で十五人。素晴らしいペースでの魂喰いだつた。

多分、今日起こす事件ではもつと人数が嵩むのだと思う。それは頂けない。これ以上力の差が出ては堪らない。

透明なガラスのテーブルを挟んだ向こう側、ソファに鎮座している昨日から何も喋らない銀時計を見る。

「クレ
」

そう呼び掛けて、夢の光景が、感情が俺の中を駆け抜けた。胸にしみわたる不思議な感覚。あれを体験したのは決して俺ではないの

に、まるで俺自身が　俺の魂が体験したような感覚。
気づく。あの夢は　お前の記憶なのか？

「ッ」

無意識に喉が動いていた。何を言おうとしたのかは分からない。
けれど、あんな夢は俺には関係ない。俺は俺。所詮あれは他人の
事。自分の事ではない。優先すべきは何より自分であるのだから。
他人など、俺に比べれば優先する“価値”もない。
一度気分を落ち着かせるために息を吸う。

「クレイ」

俺は殆ど一日ぶりに、懐中時計へと話し掛けた。

幸か不幸か、目の前には血だらけの世界が広がっていた。

殺人鬼の犯行現場の位置を想定して遠出したのが幸いしたのか、
手間を考えて遠くから中心にある俺の部屋のマンションへと向かう
様に搜索すると決めた事が災いしたのか。孤独な電車に揺られて降
りたそこには、血を全身に浴びた殺人鬼が立っていた。本来真っ白
なワイシャツは今や血染めの着物と化し、見るに堪えない戦慄とし
た衣となっていた。握る大剣からは、恐らくまだ温かい鮮血がぼた
ぼたと垂れていた。銀の刃もまた、血の水飛沫を吸っていた。

悲鳴が俺の耳に突き刺さった。脳を突き破る様なこの声の高さは、
きつと女のものだろう。俺の他に乗客が運の悪い事に居たようだ。

赤いワイシャツ姿の殺人鬼は、その声を聞くと共に駆けて行き、
一息で倒れ込む女性の前へと立ち塞がっていた。そのまま冷たい目
線で見下ろして剣を振りかぶる。血を算出するスプリングクラーが、

男の前に一つ出来上がった。女の声聞き、先頭車両から駅員も出てきたが、直ぐに腰を抜かしていた。

また同じオブジェクトが一つ駅のホームに追加された。ホームには、俺と男しか生きてはいなかった。

男 竜次が弾けるように俺を見ると、直ぐに線路へと跳び下りてしまった。俺もそれを追い掛ける。竜次は大剣を肩に担いで、金網のフェンスをただのジャンプで乗り越えて行く。俺はクレイを顕現させることなく、つま先だけを金網に引っ掛けて二度ほど蹴り、片手を使ってフェンスを乗り越えていく。クレイの【イデアライズ実体化】は魂を消費するし、万が一にも目立つ要素は除いておきたかった。

男はそのまま人気のないマンションの間を縫って行く。その速度に振りきれぬよう追い掛けるが、生身では幾分辛い。走っていく内に、生活の明かりが灯った周囲から、更にそれすらも少ない場所へと竜次は走っていく。

凡そ数分。走り続けた後、竜次は不意に脚を止めた。俺も息を僅か肩でしながら、十分な距離を取って脚を止める。

耳を澄ませば、小波さざなみの音が耳に届いていた。周囲には沢山の倉庫。どうやら港付近の倉庫街らしい。……ああ、確かにここなら人がいない。

赤い刃を携えながら、竜次はゆっくりと振り返る。

「……俺は君が怖い」

そう、穏やかな口調で語りかけてきた。

「今でも夢に見るんだ。君が襲いかかって来たあの夜の事を。もう力はつけたのに、君は何度も俺の首元に刃を振り下ろしてくるんだ。笑いながら、何度も、何度も」

「……」

「眠らせてよ。解放してよ。俺を、君から。だから 死んで欲しい」

「はっ」

それはこっちのセリフだ。散々こけにされてきたんだ。いい加減俺もお前を殺したい。

正直お前が殺人鬼だろうがどうでも良い。要はこいつが クレイがやる気を出してくれればいいんだ。“殺人鬼”を倒すという明白な目的が、今の俺達にはある。目的があるから、戦える。カチャリ、と竜次が大剣の音を一度鳴らす。

『 行けえ！ 竜次っ！！ 』

瞬間、弾けた様に竜次は俺目掛けて駆け出した。両手には大剣を、刃の先は地面に擦りつけているというのに 速い。俺は両眼を瞑る。反芻する記憶は昼過ぎのこと。

“ 私の本領は ”

確かに、クレイはそう言った。

目を開ける。変わらず、竜次が火花を散らして駆けていた。

俺は右腕を竜次へと伸ばすように、差し出す。

“ 私の能力は魂を消費してー ”

「 イデアライズ 【実体化】 」

顕現の呪文を、俺は闇に溶けるように呟いた。前方へと伸ばされ

た腕の先が、眩い銀の光に包まれていく。球に帯が瞬く様な神々しい光。

“ 弾丸を射出することです ”

光が収束すれば、俺の手に握られていたものは、奇妙な剣。柄の部分が握る指に当てはまるように形状が変化し、筒の様な物が刃の上に添えられている。その為の意味は、剣というより 銃。 思いを込めて、引き金を引く。瞬間、銃口が強いマズルフラッシュと共に爆ぜた。

「 ツ！？ 」

直後に、咄嗟に構えたザリチュの刀身から、金属と金属が噛み合うような音と共に、火花が一点散った。竜次は停止を余儀なくされたようだ。 それも当然だろう。きつとアイツは何が起こったのか理解出来ていない。

確かにクレイは言った。

“ 私の本領は 遠距離にあります ”

もう一度。そう思えばクレイは眩い閃光で応えた。次いで再びザリチュが爆ぜる。

更に一発、二発、三発 。連続で銃口は衝撃と共に煌めく。その度に竜次の持つ大剣は震え、表面には紫電が走っている。

「 な、なんだこれ ！？ 」

……口が吊りあがるのを止められない。

竜次が苦戦していることなど、この狼狽した声と、フラッシュに

よって照らされている苦悩の表情を見れば一目瞭然だ。

更に間髪入れず数発撃ちこむ。確かに、アイツは力を相当喰らってきたのだらう。確かにアイツの剣は重い上に速い。けれどそれは刃を直接交えれば、ということだ。近づかなければ、アイツはただ無力でしかないだらう。

銃口を僅かずらして連射していく。先端を下に向けた広い刀身を駆け抜けるように細かい火が散っていた。しかし防ぎ切れているのは本当に自分の真正面のみだ。先程から剣の脇を通り過ぎている弾丸は、竜次は足や腕に傷を付けている。

無論、これで終わる筈はない。

「Breaker Down Like A Shotgun
”n”
”n”

『了解』

俺の呟きに、クレイが応えた。

【飛散弾薬魂 (Breaker Down Like A Shotgun)】。マズルフラッシュを突き抜けて射出された弾丸は“七つ”に分割されている。等身円状に広がる七つの弾丸の軌跡は、正に散弾銃^{ショットガン}。それらは竜次へと面を伴って飛来していた。しかしそれは当然、離れている二人の距離では着弾するのは精々一、二発。それではダメだ。意味がない。

故に、俺は発射の瞬間に念じていた。

曲がれ、と。

弾丸は、外へと膨らみを持った軌跡を描いて、竜次へと飛んでいく。ちょうどそこに焦点が合っているかのように、全ての弾が集約する。

「ぐ、うう
「！」

七つの弾丸はザリチュを迂回していくかのように刃を通り過ぎ、更に竜次の身体を深く抉っていく。頬、腕、脇腹、太股。全く俺に近づいていない筈の竜次は、まるで全身を刻まれたかのように傷を負っていた。

「く、そおおおおおおお!!!」

変わらず火花が刀身の表面で散る中、竜次は突如駆けだした。構えたザリチュはそのままに。まるで巨大な盾の様に使用し、銃弾の雨を強行的に猛進してくる。幾重も弾が着弾し、走る足も傷を尚負って行くというのに、竜次の足は止まることはなかった。

結果、竜次は俺の目の前に到達する。俺が右にステップを一度した直後、轟音と共にザリチュが振り上げられた。振り上げた高さを利用して、竜次は袈裟の斬撃にて追撃へと興じてくる。あの巨大な剣をクレイで防ぎきれぬわけがない。迷わず俺は回避を選択。後方へとステップする。放たれた斬撃は、コンクリートの地面が地割れのように捲れ上がった。

ザリチュの刃が石を弾きながら再度地面から浮き上がる。また斬り上げるつもりだ。竜次がやっているのは、見た目通りの力任せな戦闘スタイル。

「死んでくれよっ！ お前え!!!」

震える慟哭と共に、竜次はザリチュを振り回す。恐らく、受けた傷から自分の死が迫っていることを全身で感じているんだろう。何度も暴風を巻き起こしながら振ってくるも、動きは徐々に単調になっていた。幾ら速いといっても、ただ上下に振り下ろすだけでは到底俺には当たらない。そんなものは僅かに身を捻るだけで容易に避けられる。だっていうのに、目の前の男はそれを一心不乱に繰り返

している。実に滑稽だ。

しかしこちらもクレイを構えている余裕がないのも事実。容易に避けられるが、速いものは速かった。これがきつと、魂を喰った故の力なのだろう。

逆袈裟に流れる刃を、後方へステップしてやり過ぎす。着地の直後、クレイを竜次の顔面へと照準する。途端に、竜次の顔が強張った。

「はっ」

文字通りの魂の弾丸が射出された。が、それは竜次が構えたザリチュによって防がれた。俺はそのまま銃口を下へと持っていく。今までの刃を下に向けた防御ではなく、咄嗟の構えで脚は丸空きだった。そこへ俺は容赦なく撃ち込む。

「い、いつ」

竜次の足首は穴が穿たれた。凡そ1センチ程に空いた穴からは、血がドクドクと溢れ出ている。それを竜次は呻きながら見下ろし、不意に殺気を込めた瞳を俺に向けてきた。

「う、うあああああああああ！」

叫び声と共に、竜次は再び振り回した。流れる血や、痛みなど度外視で、狂喜したようにザリチュを振ってくる。障害物も何も無い平坦なフィールドで、ただ幼稚に振り回している竜次の姿は実に無様だ。これが敗北者。これが力のない者の姿だ。

一回転して振り抜かれる斬撃を、俺は前へと跳躍して回避する。もはや竜次の剣筋は見切る、などという次元に上がる代物ではなかった。ただの餓鬼の遊戯だ。実に下らない。

跳躍し、竜次を通り過ぎる寸前に、俺は竜次の顔を左手で強く掴み、着地と同時に地面へと叩きつけた。まるで空気を詰めたボールが破裂するような音が上がった。それにゆっくり振り返れば、目と鼻と口と、後頭部から血を流していた。目と鼻と口から流れる血は竜次の顔に赤い線を残し、後頭部からぶちまけられた血は赤いペンキを零したように溜まりを形成していた。

竜次の口から荒い息が聞こえた。もう死ぬ寸前なのかも知れない。既に眼が朦朧としている。黒目は上へと流れ掛けている。

その竜次の胸に向け、俺はクレイを構えた。銃口が向く先は心臓。俺は息も絶え絶えの殺人鬼に向かい、一発の弾丸を撃ち放った。貫いた穴からはまた血が激しく噴射した。

終わり、か。実にあっけなかつた。世を騒がせた、俺を二度退かせた敵はこの程度だったのか。ただ恐怖に溺れて駄々をこねるだけの。

俺が溜息を吐いた途端、目の前には何処か奇妙な光景が繰り広げられていた。

竜次は背中に血の水溜りを広げながら事切れている。その両手には剣は握られていることはなく、コンクリートの上に放置されている、筈だった。それは今や、粒子となつて雲散している。いや、そこまで良い。ただ “向かう先が竜次” なのはどういうことか。光の粒子は血を流し死に絶えた竜次に吸い込まれるように、或いは内包されるように胸から侵入していく。

ちよつと待て。こいつの ザリチュウの能力は一体何なんだ？

途端に、竜次の身体が痙攣し始めた。びくびくと波打っている。

ウォーキングデッド動く死体。そんな単語が俺の脳裏に浮かんだ瞬間、竜次の全身は黒い霧に包まれていった。口から、目から、爪の間から、全身から噴き出すように吐き出された黒い霧は、竜次の全身をすっぽり覆った。

直後、俺の予想は裏切られた。風でまき散らすように霧が晴れれば、そこにいたのは一匹の狼だった。だが、その容姿たるや不気味

以外の何物でもない。闇の粒子を靡かせた身体は爛れ剥けた皮に見え、赤くきらきら光る眼は血に飢えているようだった。

『ア　　ア、アア』

苦しむような、恍惚としているような奇妙な声を上げてそれは四つの足で立っている。牙の生えた口から出てきた舌で唇を一度舐めると。

『　ご苦労だったな、竜次』

聞こえて来た声は、今まで聞いて来た竜次の【ブリスゲード】の声だった。

『次はお前を食わせてもらおうか……』

この状況は、竜次の【ブリスゲード】が……宿主を喰らって這い出てきたとでも言うのか？

低くザリチュは笑うと、咆哮と共に喰いかかって来た。長い牙と巨大な顎を大きく開けて、飛来するそれをどうにか前転して避ける。ザリチュは軽快に着地すると、そのまま方向を転換して再度牙を剥いて来る。

開かれた口目掛けて、クレイを振り被った。剣本来の使用。

そして金属のぶつかる甲高い音の直後。ザリチュを口裂く筈のクレイは、噛まれた牙により停止していた。

『悪いな。この牙は【ブリスゲード（それ）】と同じ存在なんだよ』

獣の貌で、口を吊り上げてザリチュは嗤った。俺はクレイを思い切り振った。飛ばされたザリチュは空中で半回転して何事もなかつ

たかのように着地する。

即座に俺はクレイで射撃するが、ザリチュはそれを難なく避けていた。七つに分解された【飛散弾薬魂（Breaker Down Like A Shotgun）】を数度、“四発”連射しても、獣特有の足捌きで避けられてしまう。

明らかに竜次とは運動性能が違っていた。竜次は剣を盾として使用し、その場に居座ることしか出来なかったが、目の前の獣は決して違う。幾重にも飛び交う弾丸を多少はオーバーランしているものの、回避している。

円を描くように疾駆していたザリチュは俺の背後に回った瞬間にその体を空中に投げ出してきた。また、あの牙で俺に食い掛かる気だ。無様にも俺はまたも前転して避ける。自分が地面に身体を擦らなくてはならない状況になることが腹立たしい。だが、今は仕込むことが大切だろう。

地面を擦りながらザリチュは滑って行き、またも折り返してくる。しかし今度は牙ではなく、前足を振るって爪で刻んでくる。防ぐためクレイを振り抜くが、またも甲高い音を鳴らして着ることは叶わなかった。爪も、牙と同じらしい。

地面に着地したザリチュ目掛け間髪入れずに振り下ろす。それは当然当たる筈もなく、ザリチュは後退するだけで事なきを得る。ザリチュの身体能力では、俺の剣撃は優々と避けられるらしい。

再び【飛散弾薬魂（Breaker Down Like A Shotgun）】を“四発”連射していく。地面に発生する火花に追われるように、ザリチュはまたも駆けていく。俺はザリチュと距離を取るように、ステップしながら、曲線描く“四発”の弾丸を連続で撃つ。

一回転したあたりで、またもザリチュが急激に描く円を狭くしてきた。また俺の喰いかかってくる気だろう。実に単純だ。そんなもの、予測済みだ。

重く低い雄叫びを上げて、ザリチュは飛びかかって来た。俺とザ

リチュ、その間に在る空間には 無数の光の粒が浮いていた。
ザリチュは変わらず駆けてくる。丁度光の粒に囲まれたその瞬間。

「^{リリース}解放」

俺の眩きの直後、ザリチュの全身は爆ぜた。体中に無数の穴を開けて、苦しみの声を上げながら横倒れする。その倒れたザリチュの周囲、コンクリートの地面には無数の弾痕が付けられていた。ザリチュが受けた弾丸は計45発。予め空中に“停止”させておいた弾丸を、ザリチュは全身に浴びたのだ。もはや立てないだろう。爛れた様な四肢は既に千切れそうだ。

「残念だったな、犬」

『糞、糞、糞。何なんだよ！ お前のそれは！』

「はっ、応えてやる義理はねえよ」

逆手にクレイを持ち、俺は掲げる。光る刃の先は血だらけのザリチュの貌だ。舌を出し、息を荒くしている様子を見れば、もう死ぬ寸前なのだろう。だがそれで死なせるわけがないだろう。しっかりとこの刃を突き刺してやるさ。

『う、う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

叫ぶザリチュの貌の中心を剣先が刺さる。ぬるり、と刃が食い込む感触を十分に味わいながら、俺は地面へと突き刺した。そのまま手前へ引き裂き、クレイを消滅させた。刃が吸ったザリチュの血が、クレイが消えた直後にびちゃりと滴った。

覆う手で隠す口 手の平から伝わる感触で、何処までも嗤って

いることを俺は知った。
。

EXTRA DAY (1)

“ 風畑 瑞音 ” 。彼女の特徴と言えば髪型が三つ編みである事くらいで、残りの部分は本人に語らせたとしても“ 地味 ”の一言に尽きる。これと言って毎日目立つような特別な事はしてこなかったし、したいとも思わなかった。自分がつまらない人間であるという自覚はあったが、だからどうというわけでもない。そう、それが彼女にとっての日常だったから 。

日付も変わりかけた真夜中、彼女が走る通りは余りにも彼女に似つかわしくなかった。派手に着飾った若者が昼も夜も無関係に夢を見続けるようなそんな街の中、そもそも彼女は水と油……。決して交じり合う事も無く、ただ時は無慈悲に流れ続けていた。

どれくらいこうして夜の街を彷徨っているのだろう ? ふと少女は自分自身の状況を省みる。走り続ける必要は無く、ただ必要な分だけ動けばいいのだと悟ってから体力の無駄な消耗は抑えられ、今の瑞音は汗の一滴も浮かべてはいない。だが真夜中まで歩き、精神を削るこの“ 逃亡 ”という作業は確実に瑞音の体力を削り続けていた。

何度目か判らない、携帯電話のディスプレイを開く作業。しかしそれは一般的な彼女と同年代の少女とは異なる理由……。単純な時間確認である。楽しい時間はあっと言う間に過ぎ去るのが道理と言う物だが、ならばこうして時計の針が遅くなる呪いをかけられたように感じるこの瞬間もまた道理なのだろうか。目を瞑り、少女は空を見上げた。明るすぎる街に照らされて、星空はむしる翳っているかのようだ。

「 デイヴィナ……マズルカ…… 」

ふと、呟いた言葉は誰に教わったわけでもなく、しかし彼女が元から知っていた言葉でもない。酷く喉が渴き、小銭を握り締めて自動販売機へと向かった。まるで灯りに吸い寄せられる虫のようだな……と、そんな事をふと思う。嫌気が差しているのか、それともこの状況に感覚が麻痺しているのか……。恐怖はあれど、しかし冷静さを失う事はなかった。自動販売機に小銭を投入し、ミネラルウォーターを購入する。ペットボトルの蓋を開け、貪るようにそれを半分近く一気に空けると、まるでそれが習慣付いた事であるかの如く、当然に携帯電話を開いた。

じつと時の針が進まぬ事を確認し、それから溜息を漏らした。夜が酷く長かった。諦めるように溜息をもう一度　しかし少女は気づく。これは時計ではなく、携帯電話なのだ。当たり前すぎるがそれをまるでたった今思い出したかのように、少女は唐突に三桁の数字を入力しそれを耳に押し当てるのであった。

「俺は思ってますよ、安藤さん。男と女……それは嫌でも惹かれあう運命にあるって。男も女も、異性という存在に魅力を感じずにはいられない……当然の事ッスよ。なぜならば、それが生命の営みだから!」

「……………で?」

「俺はこうも思ってます、安藤さん。つまり、男と女が二人きりになるのはとても健全な事なんです。でも逆に言うと、こうして男二人で狭い車の中に押し込められて長時間過ごすのは非常に良くないんじゃないかと」

「ほお……………」

「まあつまり俺が何を言いたいのかと言うと……安藤さん、この車の中むさくるしいんすよ……。俺、早くも心が折れそうなんすけど……」

「馬鹿野郎、下らねえ事ほざいてねえで少しはそのカラツポの脳味噌動かして考えろ。そんな与太話聞かせられる為にてめえとつるんでるわけじゃねえんだよ」

「あ、酷いツスね安藤さん……。俺の事見た目で判断してそう言ってるでしょ？俺は安藤さんと違って叩き上げじゃなくてエリートコースなんすよ。いい高校出て、いい大学出て……その辺の若者より頭いいんすよ。ちよつと、聞いてます？ねえ？」

運転席であれこれと無駄話を放り投げてくる部下に睨みを利かせ、
“安藤 仁”はこの状況を改めて振り返った。部下 “飯島 純”の言う通り、確かにこうして夜中に車の中に男二人で籠っているのは妙な状況には違いない。だが安藤とて別に好き好んでチャラチャラした若造と一緒に居るわけではない。他に組める人間がいないから、仕方が無くこうして二人で行動しているのである。

安藤と飯島、二人は神貴アクアポリスの平和を護る警察組織の一員である。自慢するわけではないが安藤はその警察組織の中でも敏腕で通っている刑事で、飯島はそんな安藤にこき使われている部下である。二人が滞在しているのは飯島の自家用車の中、駐車場所はアクアポリス繁華街の一角である。二人はずっとここに留まっているわけではなく、定期的に場所を変えアクアポリス全体を練り歩くようにして夜を明かそうとしていた。自主的パトロール開始から既に五時間……。缶詰状態の飯島の精神は既に限界に近づいていた。

「安藤さん……せめて飯……飯くらいなんかちゃんと食いましょう

つて……。アンパンと牛乳だけで過ごすって、刑事ドラマの見過ぎ
つすよ……」

「うるせえな……。好きなんだよ、アンパン。牛乳だって身体にい
いだろうが」

「俺は紅茶党なんすよ……。で、何でしたっけ？ 何の話でしたっ
け？ 何しにここに居るんですしたっけ？」

若干苛立った様子でまくし立てる飯島を安藤は眉間に皺を寄せて
じっと睨みつけた。二人の年齢は十歳近く離れている……が、十歳
程度のはずである。しかし安藤の睨みの迫力はそんなもんで利か
ないと飯島は常々思っていた。まるで刑事ドラマに出てくる、やた
らと事件に巻き込まれまくるタイプの刑事……。いや、実際にこうし
て様々な事件に巻き込まれているわけだが。

「判りましたよ、一服……。せめて一服しましよ！ それからちゃん
と真面目に考えますって！」

「ああ……。まあ、そうだな」

とりあえず困ったら一服……。ヘビースモーカーの安藤を黙らせ
るにはこれが一番であると飯島は既に学習していた。安藤とは異な
り特に煙草が好きというわけではない飯島も、付き合いで彼と同じ
銘柄の煙草を嗜んでいる。啜えた煙草に火をつけ紫煙を吐き出しな
がら飯島は車のバックミラーを覗き込んで自らの前髪を指先で弄り
始めた。

「で……。？ この街で起きている“らしい”妙な事件について、で
すよねえ」

飯島はぼやくようにして事件の事を語り始めた。尤も彼の集中は主に前髪の行方に向けられていたのだが……。

安藤と飯島、二人が調べようとしている事件は起きている“らしい”というだけで、実際に彼らは仕事としてそれを調べているわけではない。というのも、刑事であるはずの彼らはその役目を何故か与えられず、情報も圧倒的に規制されているからである。

今までこの街の平和を護る人間と言えば当然この街　神貴アクアポリスに在住する安藤たちだったわけだが、今回の事件に関してはわけが違ふ。安藤たちに与えられている情報は、“不特定多数の被害者”が続出している“連続猟奇殺人事件”が“この街”で起きている“らしい”という事だけ。本来ならばそんなわけのわからない事態に陥る事など有り得ないし、在つてはならない。だが今回の件についてだけは事情が特別であった。

「……俺が知りてえのは、この街で今何が起きているのかって事……。そしてもしもこの街に不安を撒き散らすような馬鹿がいるのだとしたら、そいつをとっ捕まえなきゃならねえ……」

「でもそれは難しいんじゃないツスカ？　“本土側”の人間が捜査を取り仕切ってるみたいですし……。なんでだか知らないけど、気合入りすぎツスよね」

そう、安藤とて事件を放っておくつもりなど毛頭なかった。だがしかしそれは本土から送り込まれてきた捜査班によって禁止されていたのである。今回の事件について、捜査を実際に行うのは本土から送られてきた捜査隊……。神貴アクアポリスの警官たちは指示が無い限り動いてはならない　それが命令である。当然抗議したものの、むしろ仲間である警官たちにそれは咎められてしまった。この街の警察は無能だと宣言されているかのような本土側の無礼な態

度に、しかし憤りを覚えたのは安藤一人であった。彼に言わせれば“根性無し”の仲間達も別段悪いというわけではなく、彼らもただ命令に従っているだけ……それがわかつているだけに安藤はそれ以上食い下がる事が出来なかった。だからと言って引き下がるつもりもなく、仕事を取り上げられて暇な時間を使ってこうして“自主的”にパトロールを行っているのだ。

「既に何人もアクアポリスで殺人事件が起きてるんだぞ……？一刻も早く対処しなきゃならねえのに、こっちの行動を禁止する割には本土側の連中はダラダラしているだけで一向に事態が好転する気配もねえ。おかしいにも程があるってもんだ」

「そういえば、伊籬の方でも事件起きてるみたいですね。あつちなんか田舎なんだから直ぐに話が広まりそうなもんなんですけど」

「それがまるで広まる気配がない……。見る飯島、おかしいじゃあねえか。これが連続殺人事件が起きてる真つ最中の街に見えるか……？ どのつもこいつも平和ボケ顔してノコノコ歩いてやがる。それとも今はそういう時代なのかねえ」

車の窓から見渡す街では今日も若者が闊歩し、真夜中である事も関係無しに様々な声が飛び交っている。交わる人、人、人……。気を抜けば溺れてしまいそうな夜の闇の中、それでも彼らは普段と変わらずその闇を容易く手懐けている。“死”と言う現象が蔓延しつつあるというこの状況下、それは“無神経”などと言うレベルではない。

「この街の人間のどれくらいが殺人事件について知ってるんですかね……」。情報規制でもされてるんでしょうか」

「報道もイマイチはつきりしねえしな……。このご時世にそういう規制するってえのはどうなんだ、なあ」

「そんな事俺に言われても……。とにかく今は街をパトロールしてこれ以上事件が起こらないようにしなきゃって言ったのは安藤さんでしょ？ んで……。何でしたっけ？」

「家族から搜索願が出ている女子高生を探してるんだよ。名前は風畑瑞音、歳は十八歳、昨日学校に登校してからそれつきり戻らず……。顔写真だ、ほれ」

写真を手渡された飯島はそれを上から下、下から上へと舐めるように往復して眺めた。提供者は瑞音の母親で、写真は十七歳の時に家族旅行の際に撮った物だった。飯島は目を光らせ、ネクタイを緩めながらにやりと笑う。

「結構、かわいいんじゃないっすか……。？ どう見ても目立たないタイプなのが更に“マル”っすよ。君の可愛さは俺だけが知っている……。なんてね！」

「……………お前……………前から思ってたんだが、馬鹿だろ？」

「安藤さん酷い！？ 合コンで口説いた女子は数知れず……。この飯島純に馬鹿とは何ですか、馬鹿とは……。まあでもこの子、女子高生ですよね？ たった一日帰ってこないだけで搜索願って……。結構ご両親厳しいんすかねえ？ 俺が高校生くらいの時には女の子の無断外泊くらい当たり前のようにありましたけどねえ……。？」

「ガキは黙って親の言う事聞いて、大人しくしてりゃあいんだよ。学生は勉強するのが仕事だろうが」

「うわ、古いな。安藤さん古いよ！ そんなだから中々嫁さん貰えないんじゃないですか？」

ぎろりと、本日三度目の安藤の睨み。冷や汗を流し、飯島は身を竦めた。あまり調子に乗って突付けるような藪ではないことは重々承知なのだが、彼の性格上それを止めるのはまだ無理そうである。

「で、この瑞音ちゃんが事件と何の関わりがあるんですか？」

「そいつを確かめる為に探してんだろが」

「はあっ！？ じゃあ何の関連性もないんですか！？」

「今のところはな」

「そりゃないツスよ安藤さん……。ただの家出娘でしょ、今時全然フツーにいますってそんなの！ 今時彼氏の家でキツツイのぶち込まれてるだけかもしれないでしょ！」

「だがそうじゃないかもしれねえ……。勘だよ勘、刑事の勘だ」

「……………安藤さん、もしかして強烈にキャラ作り意識してます？
いて！ いててっ！！ 耳ひっぱないで下さいよ安藤さん…
…って、前！！ 安藤さん、前前ッ！！」

「そんな安っぽい誘導に引っかかるわけが……って、おい！」

二人が乗り込んだ車の目の前、制服姿の女子高生が一人横切つて

いくのが見えた。明らかにこの夜の世界には場違いな少女。二人は同時に顔を見合わせ、それから同時に写真へと目を向けた。それから同時にドアを開けて路上に飛び出し、同時に少女が走り去って言った路地へと向かうのであった。

風畑瑞音は、どちらかと言えば比較的幸福な人生を送ってきた。勿論全てが良い事であったとは言えない。友人に恵まれず、いじめに遭っていた事もある。それを苦に死にたいと思った事もある。だがそれでも心優しく真面目な両親の下で育てられ、決して多くはないが友人も居た。本を読むのが好きで、物語にのめりこんでは主人公になったつもりで様々な空想に想いを馳せるのが好きだった。

別段、変わったことのない人生……。辛い事もあった。けれども総じて言えば彼女の人生は起伏に乏しく安定した、緩やかで穏やかな人生であったと言えるだろう。だがそれは狂ってしまった。とても簡単なきっかけで、そしてそれは彼女の意思ではどうする事も出来ない。単純にその全てを総じて不幸だったと表現する事も出来ない。瑞音はただそんな一言で全てを諦めてしまいたくはなかった。

だから、せめて抗う為に逃げ出したのである。逃げる事で戦おうと思った……。その不幸と。走っている所為で動悸は激しく、肌は汗ばんでいた。どうしてこんな事に。 “耳を澄ませば聞こえてくる” 誰かの足音は着実に自分の身へと迫っている。それはぴったりと張り付いて離れず、常に感じる事の出来る間合いで瑞音を見ていた。

「やだ……！ こないで……！」

声が震えていて、自分が心底恐怖の中を彷徨っているのだと思いが知らされる。すると急に足が辣み、止まってしまいそうになった。

そんな自分の身体に鞭打って何とか走り続ける。脳裏を過ぎる様々な景色。　。勿論、そう思った事がないわけではない。“物語の中のように、特別な事が起こればいいのに”……そう願った事が一度もないと言えは嘘になる。だが、こんな悲劇を望んでいたわけじゃない。こんな恐怖を、苦痛を、絶望を、望んでいたわけじゃない。

気づけばどんどん瑞音は裏路地を進み、人気の無い方へと向かっていた。そういう風に誘導されたのだと気づいた時には既に遅く、彼女は袋小路に追いやられていた。慌てて振り返り、瑞音は周囲を見渡した。“音”は聞こえる。でもそれだけ。姿は見えない。耳を澄ましても聞こえるのは狭い路地の中を跳ね回るような足音の反響だけ……。迫っているのか遠のいているのか、或いは最早すぐ傍にあるのか……。何も判らなくなり、耳を塞いだ。もう耐えられないと思った。気づけば涙が溢れ、歯は噛みあわすがちがちと音を立てていた。もしも客観的に今の自分を俯瞰したのならば　ああ、きつとおかしくて笑ってしまうのだろうか……そんな風に考えた時だった。

「　　ははっ！」

闇の中、笑い声が聞こえた。まさか本当に　　？　　ゆっくりと顔を上げる。だがそこにいたのは自分自身などではなく、当然のように　　彼女を追い立てて居た狩人の姿があった。

「追いかけてこつても、結構嫌いじゃあないんだぜ。でもかくれんぼは駄目だ。何故かって？　そりゃあ決まってる。この俺様が　　目立たないからなッ」

白い、歪な笑みが印象的だった。少年は握り締めた黒く長いシルエットを振りかざし、唇で言葉を刻んだ。その意味を考えるよりも

早く、瑞音は自分の過去を思い起こしていた。まるで時間が止まったかのように様々な事を振り返る。それが“走馬灯”という物なのだと思いついたのは……恐らく振り下ろされた刃が彼女の首を刎ね飛ばした遙か後の事である。

「……飯島！ こいつを見てみる！！」

裏路地を走った先の袋小路、そこで安藤は屈んで地面を見つめていた。飯島はふと足を止め、それから口元を抑える。ただ、その時湧き上がってきた感情は“不気味”の一言であった。閉ざされた空間の中、夥しい量の血液が壁にぶちまけられていたのだ。

安藤は地面に零れたその血痕を指先で触り、それがまだ乾いていない事を確かめる。明らかに人間一人が死んでいて当然の量の血液が噴出した痕跡があるというのに、そこに死体は無い。青ざめた表情を浮かべ、安藤は煙草を胸ポケットから取り出し、一本口に咥えた。

「くそ……。死体がない殺人現場つてのも、気色悪いもんだな……」

「殺人現場……？ これがですか？」

「他になんだっていうんだ」

「死体がないんですよ」

「だが 間違いなく誰かが死んでるんだ。誰かが な」

苛立った様子で煙草に火をつけ、安藤は紫煙を吐き出しながら空

を仰ぎ見た。そうして男が見上げる空の下、少年はビルの屋上に立って同じように空を見上げていた。金色の髪か風に靡き、少年は笑みを浮かべる。

「【デイヴィナ・マズルカ】 か。楽勝だな。こいつはどうやら、俺様一人の独壇場 ってやつになりそうだけ」

血のついた手を空に伸ばし、月を掴むようにしてぎゅっとそれを握り締めた。魂を賭けたゲームは続く。たった一人の“最強”が決定する、その瞬間まで。

四日目：奔走（1）

「そうか……。あの契約者を倒したのか」

長い長い夜が明け、一晚の一部始終を告げた時、九頭龍斬子のアクションはただの一言それだけだった。僕は彼女が座ったベッドの下、床の上に直にあぐらをかいて俯いている。

色々とあつて本当に疲れた一夜だったけれど、明けてしまえば当たり前のように朝日が昇り明日がやってくる……。世界という巨大な流れの中としてみれば、僕らの命のやりとりなんて大した事でもない……。そう太陽に言われている気がしていつも憎たらしいアレがいつも以上に憎たらしかった。

実際、この世界では日本が平和だっただけで至る所で殺し合っているものが起きているんだろう。だろうっていうのはまあ、そんなの見た事もないただ聞きかじりの知識だからなんだけど……。自分で見た物以外信じない主義だと思っていたわけだけど、案外に自分から外に出歩かない僕の知識はやはり空虚な外部情報に依存しているらしい……。

まあ、そんな事はどうでもいいのだ。問題は結局丸一日九頭龍斬子をこの家に宿泊させてしまったという事……。そして僕は本格的に【デイヴィナ・マズルカ】なる馬鹿げた物語の登場人物となってしまうたという事……。まあ、ゲームとかマンガとかでこういう“巻き込まれ型主人公”の心境ってやつは知ってたつもりだけど、実際になってみると筆舌に尽くし難い。

じつと見つめる掌には血なんてついていない。でも、僕は昨日確かに自らの意思で“穢れ”てしまったのだ。自分の意思で他者の命を奪った。ダンテ……“ゲーデ”の力は強力だ。何の体力もないひ弱な僕にだってまるで映画のヒーローみたいな戦いを繰り広げ

る事が出来た。でもその力はやはり、僕には似つかわしくないんだと思う。

そりゃあ、小さい頃は憧れたさ。マンガやアニメの中に登場するヒーローに憧れなかった男の子なんていないだろう。でも実際になりたいなんて、今になっても思ってたわけじゃない。僕はただ、安全で……。卑怯だとかヘタレだとか言われても兎に角平穩無事な毎日を過ごしたかっただけなんだ。もうそれが叶わなくなって、今実際にそう改めて思った。

そしてまた思考が横にずれているのは、僕自身がこの局面を直視したがっていないという事なのか……。溜息を漏らし、周囲に目を向ける。既に時計の針は進み続け、僕は本来ならば学校に行かねばならない時間はとくに過ぎてしまっている。所謂遅刻確定というやつなのだが……。まあ別に普段から真面目にやっているとはお世辞にも言えないので構わない。ダンテのヤツは実体化を解除したまま今は僕の首から下がっているよく判らない謎のアイテムの中に潜んでいる。で、僕の目の前には九頭龍斬子……。傷を手当てする為にワイシャツの前を開けっ放しで、素肌には白い包帯を巻いている。で、それが僕が好まずとも俯いている理由になっているわけだけど……。

「結果的に、君には助けられた事になるな……。すまないな。君を護ろうとしたんだが……。無様なものだな」

「あ、いや……。僕も、あんたには悪い事したと思ってるし……。か、貸し借りはこれでナシって事で……」

『敵の必殺技の盾にしておいて偉そうじゃのう……。お主なんでそっういちいち上から目線なんじゃ?』

「っつさいな……。!? ま、まあ……。その、あんたが居なかったら

僕もやばかったんだし……。兎に角そういう事だから、気にしないでよ」

九頭龍はそんな僕らを見て口元に手を当てて微かに笑みを浮かべていた。なんとというか 変わったヤツ……。それが僕の中にある九頭龍への印象だった。最初は刀持って登場したり、お前が殺人鬼か……。みたいな事言われたからビビっちゃったけど、話してみると案外そんなに怖いやつでもないっていうか……。いやまあ、油断は大敵なんだけどね。信用したわけじゃないし。

「さて……。長居をしてすまなかった。傷は大分回復した。これならば出歩く事も、ある程度の戦闘も可能だろう。尤も……。全力にはまだ程遠いがな」

立ち上がった九頭龍は上着に袖を通すとワイシャツのボタンを留め、素肌を隠した。これでようやくマトモに顔を上げる事が出来る……。九頭龍はと言うと、自分の腰から下げたゲーデが入ってる時計……。みたいなものを見つめて険しい顔をしていた。九頭龍斬子……。さんは、こうして見ているととても凜々しい。彼女は……。そこそまんガやアニメに出てくるヒーローみたいだ。僕なんかよりよほど主人公然としているというか……。強いし、ハキハキしてるし、しっかりしてるし……。なんだか僕とは正反対に思える。そんな僕の視線に気づいたのか、九頭龍さんは僕へと視線を向け、優しく微笑んだ。

「世話になったな、朝霞黒斗……。そろそろ私は失礼するでしょう」

ほったらかしだった長い黒髪を結わい、九頭龍は勝手に出て行くうとする。それを見た僕は よせばいいのにその手を掴んで引き止めてしまっていた。振り返る九頭龍……。サン。僕の顔は……。見な

くても判る。汗びつしよりで、なんとも表現しづらい顔をしていた事だろう。ダンテが鼻で笑うような声が聞こえ、イラッと来る。だが今はそれどころではない。

「どづかしたのか？」

「あ、い、いや……っ!？」

な、なんで引き止めちゃったんだ……？ 我ながら、まるで意味が判らない……。いやまあ、僕は彼女を必殺技の盾にしたわけで、その負い目はある。だからこそ戦ったんだしね……。実際九頭龍はまだ怪我をしているし、万全ではないと彼女自身が口走っていた。もう少し休むべきだと思う……。そして同時に打算的な考えもある。九頭龍は僕を護るといつてくれたし実際彼女のお陰で一度は命拾いをしてるんだ。このまま彼女と一緒に居れば、この戦いを生き残る心強い味方になる……。かもしれない。

九頭龍は誰がどう見てもお人良しだ。一人しか生き残れないって言うてんのに、【デイヴィナ・マズルカ】の参加者を助ける……。それは最早並大抵のお人良しではない。信用出来る……。とまでは行かないけれど、少なくとも現状僕を襲う気配は無いし……。いやまあ、こんな理由を考えている時点で自分を誤魔化している気がしないでもないけど……。

「九頭龍さんは、これからどうするの？」

「どうもこうも、これまでと何も変わらんさ。【デイヴィナ・マズルカ】の秩序を護る……。それが私の目的だ」

「秩序……?」

「そうだ。この戦いは契約者同士の戦いが避けられないものらしい。たった一人しか生き残れない……そういう運命もあるのだろう。所詮人の人生とはままならぬ事ばかり……。不可思議の中に身を置いた時点で何があるうともまま受け止める覚悟は出来ている」

腕を組み、そんな事を語る九頭龍……。なんだろうこいつ……。やっぱりなんか……。大分変わってるな……。それって別に死んでもいいって言ってるのと同じだよな。僕は絶対嫌だけど……。死にたくないでしょ、普通……。

「だが、中にはこの戦いに無関係な一般人を巻き込む……。そういう考えの輩も居る。我らだけで命を奪い合えば済む……。であれば、私はそれ以外の被害者を認めるわけには行かない。この土地を代々護り続けてきた九頭龍家の末裔として……。そして何より私自身の矜持に賭けてな」

「はあ……。要するに、この殺し合い自体は否定しないけど、それ以外の人間を巻き込むのは駄目ってこと？」

「そうだ。可能な限り被害者を減らし、この戦いを穏便に済ませ、この街に平穏を取り戻す……。私たちの戦いが終わった時、この街が“何事も無かったかのように”在ればこの上無いと考えている」

目を瞑り、ウンウンと頷く九頭龍……。イヤ……。なんだろうな、この人……。僕も相当変わってる自覚はあるけど、この人も変わってるな。在る意味において現状をきちんと理解した上で練られた現実的な最善策であるようにも見える。けれどその中に一番大事であるはずの自分の命は勘定に入らない……。つまり彼女がこのまま僕に背を向けて帰ろうとしたという事は、僕は無関係な人間を襲わないと、そう彼女が信頼してくれているからなのだろう。そうしない

つもりではあるけど、絶対に今後そういう事が無いとも言いきれないのに……。僕は既に一人人間を殺した。なら、二人でも三人でも別に変わらないのだから。

「戦いが終わった後、何事も無かったかのように……か。それって、まるで自分たちの存在があってもなくても変わらないって言ってるみたいだね」

「そうだな。その括りの中に君も含まれている事を鑑みれば、私は君に失礼な物言いをしたかもしれないな。気に障ったか？」

「そうじゃないけど……」

「人間の一生など、虫や植物と何も変わらない。命はただ在り、天命に従いその一生を終える……。納得出来る死であるかどうか、無慈悲な理不尽であるかどうかは無関係だ。草木が消えても顧みぬのが人ならば、同じく我らが消えたところで世界は何も変わらぬだろう」

まあ確かにその通りだと思う。実際僕はついさっきまで同じような事を考えていたわけで……。人間が一人二人死んだって、世界は何も変わらない……。僕たちは当事者だから、それを大げさに感じているだけで……。今実際に客観的に見れば、この街は 時の流れは何も変わらないのかもしれない。

なら、僕たちが殺しあう意味はどこにあるというのだろうか？ 理由があるからって納得できるわけじゃない。僕は九頭龍みたいに物事割り切れるほど達観はしていないし、命は惜しいし納得の行かない事に頷く事は出来ない……。端的に言えば、僕は子供なのだと思う。それとも九頭龍がふけてるのか……。

「それじゃあ、あんたはそのどうでもいい自分の命を使ってこのまま最後まで正義の味方を気取り続けるんだな……」

「正義の味方　か。ふふ、いいな……それは。中々気に入ったぞ。ならば今後は、そう名乗らせて貰おうか」

皮肉のつもりだったが、九頭龍は楽しそうに笑っていた。何となく……僕らの間には大きなズレみたいなのがあった。それが僕らの間に正常な会話のやりとりをなくしているような気がした。考え方が違いすぎれば、見解の相違なんて言葉で一つ事柄を片付ける事も可能だろう。でも今は理由は兎も角、そんな噛みあわない彼女の言葉が心地よかった。

真正面から正論を振りかざし、ただ世間的に見て正しい事を誇示するだけの正義とは違う……。彼女は誰かに褒められたくて戦っているわけではないし、そのエゴを抱えて理解もしている。そういう人間は嫌いじゃない……むしろ好きなくらいだ。こういう出会い方じゃなかったら……もしかしたらちゃんとフラグが立って、ラブラブな展開に……ならねえか。ああ、これがギャルゲーなら……もし“死亡”^{バツエン}でもやり直せるのにな……。

「僕は……あんたみたいにこの戦いを割り切れそうにないよ。少し……羨ましいかな。そうやって物事を見通すみたいに生きられたら、きつとこの世界は生き易いんだろうね」

「……………朝霞黒斗、君はこれからどうする？　【デイヴィナ・マズルカ】が始まってしまった以上、君はその運命から逃れられない。もし君が望むのならば、ここで私との決着をつけても構わないぞ」

「い、いや……流石にそれは遠慮しとくよ……。昨日の戦いで疲れてるし……それに、怪我してる相手を襲っても……」

「なんじゃ。お主、この間と言っている事が違わぬか……？」

「煩いな……ほんと煩いなこのゲーデ……。僕だつてそんな事は言われなくても判つてるさ。まあ正直に言えば、怪我をしていて全力が出せないとしても九頭龍に勝てる気はしない……。僕も十分化け物染みてたけど、こいつはもう本当に別格だ。こいつより強い契約者なんて居ないんじゃないのって思うくらいに。」

「僕らが相手をするのに苦戦した昨日の敵の必殺技をこいつは太刀の一振りですぐ払い除けた。話してみても判つたけど、それは彼女の自己への無頓着さが生み出す力なんだろう。勿論体力、技術的な面でも僕は勝つてそうにはないけど、己の命を惜しまず一瞬の勝機に全てを賭ける……。そんなカツコイイ真似は絶対に出来そうもない。」

「……そうか。いつかは倒さねばならぬ相手だとは判っているが、君には助けられたし君は無差別に殺戮を繰り返すような人間には思えない。望まぬ争いならば、出来る限りは遠ざけたい……。甘いと思うか？」

「いや……。それより、そんな状態で大丈夫なの？ いくらゲーデの力で肉体を修復出来るからって、そんなに直ぐ回復しないでしょ」

「そうだな……。万全に戻るのには、恐らくまだ数日かかるだろう。だが、足を止めるわけにはいかない。残されている時間は少ない……。まだ殺戮に走る契約者が居ないとも限らないし、それに 確かめておかねばならない事もある」

「なんというか、つくづく九頭龍は僕とは違う人種の人間のようなのだ。僕なんかちょっと怪我したらもう絶対動きたくないもんね……。でも、確かめたい事か……。別に九頭龍の事はどうでもいいけど、」

もし戦いに関わりがあるのなら気になるな。

「ねえ、九頭龍さん……。もしよかったらなんだけど　僕と協力しない？」

『なぬつ！？　お主……。正気か！？』

うつせえなあ……。こいつ黙って聞いてらんないんだろうか……。イラつとくるけどそれは顔には出さない。一方九頭龍も驚いた様子で、目を丸くして僕をじつと見つめていた。

「怪我をする原因になったのは僕だし……。償いにはならないと思うけど、九頭龍さんを助けたいんだ。それに、一人より二人の方が色々と便利でしょ？　僕もこの街を荒らす殺人鬼は赦せないし……。どうかな？」

『……。なんでお主、そう心にもないことを平然と言えるんじゃ……。』

まあ、七割くらい嘘なのは認める……。しかし、こいつの声本当に九頭龍には聞こえてないんだよね……。？　頼むからあんまり余計な事言わないでくれないかなあ、このクソゲーデー……。

「申し出はありがたいが……。先にも述べたように、私はこの戦いは止むを得ないと考えている。勿論誰も死ななければそれに越した事は無いが……。行っている事はゲームのルールからすれば逸脱した行いだ。それは即ち私の我俣という事になる。それに君の命を巻き込むのは気が引けるな」

「いや、僕が勝手に言っている事なんだから……。じゃあ、こう考えたらどうかな？　九頭龍さんの我俣に、僕は自分の我俣で付き合

「いたい……。これならどう？」

「そういう考え方もあるのか……。ふむ、そういう事なら……。確かに君のゲーデの力は強力だし、この傷が治るまでの間は力を貸してくれれば助かる」

「なら、決まりだね。これからよろしく、九頭龍さん」

恐る恐る握手を求めてみると、九頭龍はそれに応えて手を握り締めてくれた。白くてしなやかな九頭龍の手はとても冷たくて、なんだかまるで血が通っていないみたいだった。

それにしても口八丁でなんとか同盟まで結べたが……。さてどうしたものか。ダンテの言うとおり七割八ツタリなのは現実なわけで……。まあ、実際九頭龍を殺すのはまだ早いと思う。この人は上手く行けば他の契約者をバシバシ倒すだろうし、僕はその分生き残れる可能性が上がる。更に九頭龍を殺すにしたらって仲間になって油断を誘っておけばまだ勝機があるかもしれない。つまりこれは非常に合理的な僕の作戦なのだ。そう、全ては作戦……。そのはずだ。

「こちらこそ、よろしく。それと私の事は九頭龍ではなく、斬子と呼んで欲しい。その苗字はややくしくて……。それに、私は自分の名前がそれなりに気に入っている」

「そ、そう……。じゃあ……。斬子さん」

「呼び捨てで構わないよ。君と私は手を組んだ以上、仲間という事になる。ならば上も下もないだろう？ それに歳もそれほど離れてはいないだろうし」

「え……。？ えーと……。何歳なの？」

「二十歳だ」

えー……二十歳？　なんか……えー……？　もっと絶対行ってるって……。こんな二十歳いるかなあ……。普通……。まあ、別にいいけどさ……。

「僕は十七だから……三つも離れてるよ？」

「三つ“しか”だ。兎に角、呼び捨てで構わない。お互い短い余命だが、仲良くやろう　黒斗」

何となく、彼女に呼び捨てにされるのはくすぐったかった。強く凛々しく逞しく……勇敢で、正義感が強くて、ついでに腕っ節も強い九頭龍斬子。でも何となく……握り締めた彼女の手の感触がそれは違うのだと僕の耳元で囁いていた。気のせいとしか思えないようなそんな違和感の正体に気づくのは、まだまだ当分先の事で。とりあえず僕は九頭龍さん……もとい斬子と連絡を取り合えるように、ケータイ番号とメールアドレスを交換する事になった……。のだが。

「斬子……二十歳なのに、ケータイの使い方まったくわかんないの……？」

「ああ。家の者が煩いので持っただけはいるが、使った事は一度もなかったな。どうやって電話をかけるんだ？」

と、クソふざけた事を抜かし始めた為、僕は午前中に登校する事を諦めて斬子に必死でケータイの操作を教えている。ベッドの上に座って　他に座るところがないから　僕らは肩を並べてケータイ

イをちまちま操作していた。斬子の持っていたケータイは高級そうな最新型のやつで、カメラもやたら高性能だし、ワンセグもついてる。僕なんか使えればなんでもいいと思って大分型が古いのを使ってるもんだから、ワンセグなんかついてない。カメラはあるよ、一応お飾り程度にだけ……。

というわけで、僕は自宅一件のみ登録されている寂しい九頭龍のケータイに自分の番号を登録してやった。そも、電話のかけ方を知らないという斬子に一生懸命教えること数十分……。ようやく電話がかけられるようになった斬子は“おお、繋がったぞ！　すごい！”とはしゃいでいた。こんな二十歳いねえよ……。

「しかし、電話線もないのにどうやって電話が繋がるのだろうか……。不思議だなあ」

「いやいやいや……。いやいやいや……。」

「ふふ、それに電話帳にやっと一つ連絡先が増えたぞ！」

「………………。ねえ、斬子って友達とかいないの…………？」

「そうだな……。友達……と言えるような関係の人物は居ないかもしれないな。家柄の所為で色々と対人関係は限定されていたし、学校でも私は浮いていたからな」

そりゃ浮くだろ……。何となく斬子が僕の学校の学生である事を仮定して妄想してみる。ああ……まあ、そういうキャラもね、ギャルゲーとかだと居るよね……。何故だかわかんないけど学校内なのに刀剣持つようなヤツ。実はツンデレだったりする……。しかもあ、普通に考えてリアルでそんな居たらもう絶対アウトだよね……。何が何でも係わり合いになりたくない類のイタい人だよ

ね。

「そういう黒斗は、友達がいるのか？」

「いや、全くいないって人は本当にごく僅かだと思うよ……。一人くらいいるでしょ、普通……」

「そ、そうなのか……？　そういうもの、なのか……」

「ていうか、ケータイの操作も出来ない二十歳って聞いた事ないよ……。あのね、健全な二十歳っていうのは誰に言われるでもなくケータイ取り出して道端だろうが電車の中だろうが授業中だろうが、カチカチカチカチ飽きもせずケータイいじりまくってて然りなんだよ」

「いや、それはただの馬鹿だろう」

今、あんたがあっけらかんと宣言した事はなんとなく同意したくもなるけどそれはそれでどうかと思うんだ、僕は。

「兎に角、黒斗のお陰で一つ賢くなったよ。いやあ、最近“えむぴーすりーぶれいやー”というヤツの操作を覚えたんだが、最近の機械は複雑過ぎて会得にまだまだ時間がかかりそうだ」

「へえ、音楽聞くんだった……ってそういうえばあんた、そのMP3プレイヤーだけださ……」

すっかり忘れていて今の今まで記憶の外にあったわけだが、彼女は初登場時からずっと首からヘッドホンを提げていた。コードは上着の内ポケットの中に繋がっていたので、そこにおそらくMP3プ

レイヤーがあつたのだらう。だが何となく……今どうなっているのかは言うまでも無い。

僕の指差す先、パソコンデスクの横には九頭龍がつけていたヘッドホンが転がっている。途中でコードは千切れていて、恐らくヘッドホンそのものも壊れてしまっているだらう。まあ、そんなもんつけて必殺技食らったらそうなるんだらうけど……。思い出したかのように九頭龍は自らの上着の中に手を突っ込み、なんだか嫌そうな顔をする。恐る恐る取り出した手の中には……めしやりとへこんだMP3プレイヤー様のお姿が……。

「……こ、壊れているッ!?!」

見れば判りますけど。

「あ、ああ……まいったなあ……。これは直るんだらうか……」

「いや……無理じゃない? いくらなんでも変形しすぎでしょ……動かないし」

「そうか……はあ、これはショックだな……。やっと使い方を覚えただけだったというのに……。物には寿命があり、壊れるのは当然……だがこれは余りにも早すぎる……」

落ち込んだ様子で掌のMP3プレイヤーをじっと見つめる斬子。なんだか……思っていたより変なやつだ。変なのはもうわかりきっていたんだけど。でも更に変だと思う。それから何度か斬子が自分で電話をかけられるようになるまで練習し、メールは完全に諦める事にした。絶対無理。

こうして僕らは手を組む事になり、九頭龍の強い勧めもあって僕はとりあえず昼間は学校に向かう事にした。学校が終わり次第、斬

子と合流して今後の行動を決める……そんな感じでとりあえず話は纏まったと思う。斬子が部屋から出て行き、制服に着替えて僕は漸く自分がまだ日常の中に留まっている事を実感する。客観的事実としてではなく、僕は学校へ向かう道の途中でそう感じたのだ。

『さて、これからどうなる事やら』

ダンテがなにやら楽しげにそう呟いた。僕は全然楽しくないけど、やはり毎日が続いていくのだ。九頭龍斬子という新しい登場人物を加え、主人公やヒーローには絶対になれない僕なりに日常は続いていく……。でもそれもおかしな話だ。僕は人を殺した。晴れやかな気持ちではないし、どんよりと落ち込んでいるわけでもない。それでも世界は回っている。まるで何事もなかったかのように。

自分達の命は草木や虫と同じなのだと言った。果たしてこの選択は正しかったのか……。それに、斬子のあの言い分はやっぱりないと思う。あんな枯れた考え方は寂しいだけだと思うから。

なにせよ、そうした悩みや考え事は全て後回りになるだろう。気持ちを切り替え、僕は学校へ行かねばならない。そうする事で結局日常は保たれ、世は事も無し。彼女の言うとおり、平然と続いていくのだから……。

四日目：奔走（2）

『……傷の具合はどうだ』

「万全とは行かないが、通常戦闘程度ならば問題ないまでには回復した。スサノオ、お前には礼を言わねばならないな」

『ゲーデとして、当然の事だ……。それよりも』

「黒斗の事か？ 心配せずとも、彼はそう凶悪な性格はしていないさ。今直ぐ排除せねばならないような人物像とは思えないな」

黒斗と別れた斬子が向かっていたのはアクアポリスへと続く橋、ユピアブリッジであった。橋の手前には駅があり、そこからはアクアポリス行きの路面電車が出ている。駅前の通りへと近づくにつれ平日昼間と言えども徐々に賑やかさを増し、田舎の伊雑には珍しく華やかな雰囲気へと変わってくる。

一先ず先日の戦闘でボロボロになってしまった衣類を新調し、我俣を言わせてもらえば汗も流したかった。その為一度実家に戻り、それなりに急いでここまで引き返す事になった。時刻はとっくに午後になり、貴重な時間は刻一刻と過ぎ去っていく。【デイヴィナ・マズルカ】というゲームに日数制限が設けられている以上、斬子が己に課す行動は基本的にタイトなスケジュールによって構成される事になった。

家の方できちんと包帯を巻きなおし、現在も治癒は続けている。魂の消耗が早まってしまったのは痛手だが、それでも動けなくなるよりは幾分かマシというものだろう。黒のスーツ姿で颯爽と歩き続ける斬子、その横顔は危機的状况に在るといふのにどこか余裕を感

じ取れる程である。スサノオとしては逆にその辺りが心配だったのだが……。

『協力者を募るのは悪い事ではない……。現時点において、我々は既に婁守真名と協力関係にある……。婁守も、黒斗の事は気にかけている様子だ』

「……………この戦いの運命を変えるかもしれない人物　か。そうは見えないが……いや、得てしてそういうものなのだろうな」

婁守真名　。　斬子の前に現れ、斬子に助言を托した少女　。
あのゴシッククロリータ衣装について理解を示す事は難しそうだったが、彼女自身悪人には見えなかつたし、やはり未来を見通す類のゲードと契約しているのだと仮定するのが妥当な所だろう。彼女は斬子を実質最強に近い契約者だと言ったが、斬子はいずれ死ぬとも予言した。そして同時に彼女が斬子に托したいいくつかの役目　。　斬子はそれを個人的思想と照らし合わせた上で、ある程度実行しなぞらねばならないと考えていた。

「兎に角、朝霞黒斗の死は回避された……。協力関係となれた事も筋書きに反する行いだろう。ならば、次に向かうべき場所、顔を合わせねばならない相手は決まっている」

『……………』

「そう複雑そうな顔をするな、スサノオ。大丈夫だ、私は。あくまでもこの街を護る人間として冷静に行動出来るさ。個人的な善悪など……対極的な場面では意味を成さないからな」

足を止め、空を見上げる斬子。複雑そうなスサノオの顔……とい

うのは仮面をつけているはずなので判るはずもないのだが、何となく斬子には彼の考えがわかる気がした。ゲーデと契約者の間には単純な力の関係だけではなく、人間的に似通った部分があるものだ。不器用に、しかし器用に立ち回ろうとする二人の間にはやはりそれなりに通じるものがあるのかもしれない。

再び歩き出し、前を見据える斬子。その眼差しは真っ直ぐに進行方向を見据えている。だがスサノオは気づいていた。ついこの間まで殺人鬼を追いかけ、ただ戦うだけの展開に気を重くしていた斬子……。彼女は知らず知らずの内に黒斗との出逢いでその重荷を軽くしてもらえたのかもしれない。足取りは軽く、表情は晴れやかだった。それがスサノオの不安要素と言えば、それはそれで過保護すぎるだけなのかもしれない。

「しかし、意外と言えば意外じゃったのう。まさかお主が他人と手を組むとは」

学校に向かった黒斗はそのまま結局授業には参加せず、屋上で空を見上げていた。ぼんやりとした横顔に声を投げかけるのは紅の髪を靡かせる少女、ダンテである。黒斗はもうダンテが勝手に実体化して売店のパンを食べている事に対して何も言おうとはしなかった。少年の中で既にダンテは取り扱い困難な動物、くらいにカテゴリされておき、まともに正面から文句を言っても疲れるだけだと悟ったのである。

そもそもダンテを消し去りたいのであれば、消えろと念じれば済む話なのだ。そのダンテがまだアンパンを頬張っているという事は、黒斗側にも彼女を消しさる意識がないという事になる。というよりはただ単純に彼がぼんやりしていただけなのかもしれない。空を見上げる黒斗の瞳に青空の色が移りこみ、雲の白さが過ぎつ

ていく……。ダンテは黒衣をはためかせそんな黒斗の隣に座っていた。風は強くなく、日差しは弱くない。暖かいとはお世辞にも言えないが、寒いとも言い切れない……。そんな半端な空。まるで自分の状況を示唆しているかのようだと感じ、少年は嘲笑を浮かべた。

ダンテに言われずとも、他人と手を組む事になるなどと彼自身考えてはいなかったし、実際こうなった今少し後悔し始めているくらいである。九頭龍斬子　彼女は協力者としてはこの上ない存在だろう。だがそれとあっけなく手を組んでしまった事が黒斗の中でどうしてもまだ引がかかっていた。

「……………のう、黒斗。お主いちいち我の事無視するのはそろそろ止めぬか……………？　なんだか我、独り言喋ってるみたいでちょっと寂しいぞ……………」

「そんなん知るか。あのなあ、僕は今色々と考え事をしていて忙しいの。アンパン買ってやったんだから、黙ってそれモグモグしてろよ」

「むう……………。何度も言っておる事じゃが、ゲーデと契約者の間にコミュニケーションは必須なのじゃ。お主がこれからどうするつもりなのか判らなければ、我とて何の助力も出来ぬぞ」

「まあ、そりゃそうだけどさあ……………。ねえ、ダンテ……………？　敵の契約者を倒したら、どれくらい強くなるのかな？」

「うぬ？　んー、まあ相手の強さにもよるが……………単純に相手の能力を吸収出来ると考えて相違ないじやろう。純然なる足し算とまではゆかぬがな」

「……………それで、今の僕は昨日の契約者を倒して強くなってるわけだ

る？ 今の僕なら、九頭龍斬子を倒せると思う？」

「無理じゃろな」

あっけらかんと答えるダンテ。黒斗はがっくりと肩を落とし、それからダンテへと目を向けた。今まで無視を決め込んでいたので気づかなかったが、そこには口の周りを餡子でベッタベタにしたダンテの顔があった。冷や汗を流し、黒斗は無言でそれをハンカチでふき取った。

「んぐんぐ……。まあ、単純に“剣”としての能力ならば我らの方が上じゃろうな。昨日の連中を取り込んでいるという事もあるが、そもそも我は強いのじゃから」

「ハイハイ……。じゃあ、僕の能力が足りてないって事ですか。そーですか」

「そうふてくされる事もあるまい？ お主が至らぬというよりは、九頭龍斬子が“出来すぎ”ているだけじゃ。あれだけ状況に適應してゲーテを使いこなせるような契約者、そうそう居らぬじゃろうなあ……」

当然の話だが、この戦いは非日常の領域である。黒斗も四日目に入り段々とこの異常事態に馴れては来たものの、最初は戸惑いが非常に大きかった。それは人間としては正常な反応であり、当然の通過儀式であると言える。

しかしその点において九頭龍斬子は異常なのだ。状況をあつさりを受け入れ、戦いに自ら望んで向かっている。なおかつそこに自分なりの正義を制定し、それを貫く為に剣を振るう事を厭わない。戦国乱世でもないこのご時世、あそこまで戦に適應出来る人間は滅

多に居ないし、それが契約者としてゲーデを手にする事も普通はないだろう。【ブリスゲーデ】という存在を手にする人間の“資質”を思えば、黒斗程度臆病な方が自然なのだが……。

「過程はどうあれ、お主は立派に戦って一人目の敵を撃退したのじや。それは誇って然るべき事……。九頭龍斬子と戦うにはまだ早すぎるじゃろうが、いずれは手も届くじゃろう」

「そうかあ……？　なんか最初からレベルが違いすぎて勝てる気は全くしないんだよなあ……。というか、昨日の戦いだってマグレ勝ちみたいなものじゃないの？　やっぱり斬子と手を組んだのは正解なのか……」

座り込んだまま頭をかきむしる黒斗。ダンテはそんな黒斗の横顔を眺めながらせっかく綺麗になった口を餡子で汚し、モグモグしていた。九頭龍斬子に勝てるかどうかと訊かれれば、ダンテはNOと答えるしかない。だがそれ以外の契約者が相手ならば、現段階でも既にある程度有利ではあるのだ。

無差別殺人を繰り返すよりも、ゲーデを取り込んだほうが剣の成長も魂の補給も効率的……。既にこのゲームも四日目に差し掛かり、あちこちで戦闘が発生しているだろう。中には既に命を落とし、魂を奪われている契約者も居るかもしれない。その状況の中、九頭龍斬子は確かに優秀ではあるが、未だに一切の魂を補給していない。これは彼女の矜持に由来するものだが、このまま彼女が魂を補給しない姿勢を貫くと仮定すれば、勝利の可能性は十分に在り得る。

本来ならば躊躇する殺人という行為を黒斗は躊躇しない異常性を持っていて。良くも悪くも自己中心的であり、その愛情は基本的に自分にだけに向けられている。契約したゲーデさえも信用しようとし、力に胡坐をかかような事もないだろう。突拍子もなく強いというわけではない

が、黒斗は非常に“安定”しているのだ。一見すると不安定にしか見えない彼だが、その不安定さに一定の“安定”さがある……。それがダンテには嬉しい誤算だった。

この四日目までの戦いを眺めてきて余計な口出しはしてこなかったが、それでも黒斗は百点満点とは行かずとも全ての状況に次第点の回答を叩き出して来た。体力、技術、精神的に彼はまだまだ未熟ではないが、黒斗とならばやっていける……。そんな確信のようなものがダンテの中にはあったのだ。

「……なにジロジロ人の顔見てんの？」

「いや、お主も中々頑張っておると思っつてな」

「自分の事なのに頑張れないヤツは屑でしょ……。は、しかし本当に参ったな……。斬子と手を組んだ以上、もう無関係ですって顔は出来ないし……。腹を括って考えるしかない」

「その意気じゃ！ 心配は要らぬ！ お主にはこの最強のゲーデであるダンテ様がついているのじゃからにや……。！？ はひいっ！？」

「何が最強のゲーデだよ、この役立たず……。！ お前食ってるか寝てるかヤジ飛ばしてるだけじゃねえか！！ 勝手に実体化するし勝手に喋るし……。いい迷惑なんだよッ！！」

腰に手を当て胸を張り、ダンテは自慢毛に笑っていた。しかしその柔らかいほつぺたを黒斗がつまみ、ぐりぐりと引っ張ると尻尻に涙を浮かべる。必死に逃れようとするのだが、体格差の問題でそれは叶わない。すっかり消耗した所で黒斗が手を離すと、ダンテはほつぺたを摩りながら数歩黒斗から遠ざかった。

「相棒に何をするのじゃ！？ 普通ゲーデにこんなことするか！？
いや、しないッ！！」

「うるさいうるさいうるさい…… 大事な事だから三回言いましたっ
と……。まあ、こうなると当面の目的は斬子と行動を共にしつつ、
他の契約者を撃退して力をつける事……。最終目的は斬子を倒せる
くらいになるって所かな」

「…………… まあ、妥当な所じゃろうな。確か斬子はこの街の大地主
の所の娘じゃったな。地域の問題については詳しいじゃろうし、恐
らく情報面でも役立つじゃろう。順風満帆ではないか、黒斗」

「そういう状況だからこそ念入りに先を見通さなきゃならないし、
それに何度も言うけど僕はまだ斬子を信じたわけじゃない。気は休
まらないよ……」

「お主本当に疑り深いヤツじゃのう……。前から気になってお
つたのじゃが、何がどうなればそこまで人間不信になれるのじゃ？」

ダンテは小首を傾げ、それから一息に跳躍してふわりと貯水タン
クの隣まで舞い上がった。見下ろす伊雑の街はお世辞にも都会とは
程遠い世界だ。だが、そこには沢山の命の営みが在り、それぞれの
生活がある。少なくとも見渡す限りで争い事など起きてはいないし、
不幸さえなければ人死にもないだろう。黒斗はダンテを見上げ、両
手をズボンのポケットに突っ込んだまま目を細めた。

「この世界は平和じゃ。ぬしとて、こんな戦いに巻き込まれさえし
なければ今日も明日も、その先もずっと平和に日常を過ごしていた
事じゃろう。その日食う物に困らず、教えを請う事に困らず、他者

と共に居る事に困らず……。良い時世ではないか」

「人間がこの世界を支配する生き物の頂点に君臨している限り、本当の意味での心の安らぎなんてないんだよダンテ。君の目にはこの世界が事もなく見えるのかもしれない。けれどねダンテ、僕はこの世界を信じる事は出来ないよ」

朝霞黒斗が生きてきた時間はたったの十七年程度である。しかし親を失い孤児として生きてきた他人より少しだけ不幸な彼は、この世界を真つ直ぐに見詰める事など出来そうもなかった。それなりに汚い物を見てきたし、それを被る事もあった。どんなに表層を取り繕っても、人間の世界は悪意と穢れに満ちている……。それに馴染みたくないと考えるのは青春特有の潔癖さからなのか、それとも朝霞黒斗という人間のプライドからなのか……。どちらにせよ、自分がそんな汚れた世界の一部であるという自負はあるのだ。だからこそ、何も信じたくはない。

「そうか？ 世界は決して穢れているわけではない。ただそれを見つめる人の眼が曇っているだけじゃろう。世界とは在るがままであるが故に無垢な物だ。脚色をするのは人間、ならば世界など見よう見まねでどうとでもなる」

貯水タンクの隣から飛び降り、黒斗の隣に立つダンテ。幼い少女の横顔、しかしその炎のような眼差しは確かにこの世界を捉えている。黒斗は風に吹かれながら思う。知ってしまったダンテの過去……。見ようと思っただけではない。だが、知ってしまった。見ってしまった。目を瞑り、同じ景色を見る為に目を開く。そこにはいつもと何も変わらない景色があった。

「ダンテってさ……。なんか、能天気なやつだよね」

「何じゃとぅー!？」

「能天気だよ……やっぱりさ」

莊嚴なる玉座に腰掛け、紅き衣を纏って幾千もの死を見つめてきた王。少女でありながら、王とならざるを得なかった。そして彼女は望まぬ行いにその手を染め、そして最後には最愛の友の手で駆逐されたのだ。

それでもダンテは何かを恨んでいるようには見えなかった。ダンテは少なくとも今、恨みや呪いと言った感情で動いているようには見えなかった。どろりと渦巻く血の絨毯の上を歩いたその足で軽やかに舞い降りて、数え切れぬ命の終焉を目撃したその視線で世界は美しいのだと語る……。それが黒斗にはとても羨ましく思えた。

「ダンテは、どうして【デイヴィナ・マズルカ】なんてやってるの？」

それは初めてかもしれない、黒斗からダンテへと歩み寄る言葉だった。風の中二人は見詰め合う。ダンテは少しの間思索し、それから自らの手をじっと見つめ、それをぎゅっと握り締めた。

「理由は 多々ある。“そうなってしまったから”、というのが正解に近いかも知れぬな。そういえば、お主にはまだ説明していなかったか。【デイヴィナ・マズルカ】に何故ゲーデが躍起になるのか」

屋上と外界を隔てるかのように張り巡らされたフェンスへと指を絡め、ダンテは普段とは違う重い眼差しで世界を見つめていた。その目に映る世界でも直、彼女は美しいと語れるのだろうか……。偽

善だと思った。それはきつと、朝霞黒斗だからこそ判る心境。彼女は己を悔いている。けれどそれを認めたくないのかもしれない。

「この戦いに勝利すれば、我々【ブリスゲーデ】は蘇る事が出来る……。というより、このゲーデという存在から開放される、と言った方が的確かもしれぬな」

「ダンテはゲーデの宿命から解放されたいの？」

「うむ……？ まあ、これはこれで楽しんではおるつもりじゃかなあ。それに やらねばならない事も、会わねばならない者も居る」

そう語るダンテはいつになく真剣な様子で、黒斗はそれを茶化す事はしなかった。きつとダンテの過去には自分には想像も出来ないような事があり、それは今の黒斗にとっては受け入れ難いレベルの物なのだろう。自分の事だけでも手一杯な今、ダンテの事情まで抱える事は出来ない……。それでも、黒斗は同じようにフェンスに手を伸ばした。

「ま……。その目的ってヤツが運良く果たせたらいいね」

「そう出来るように、お主には頑張ってもらわねばならぬな」

「あくまでも僕は自分の為に努力するだけだよ。その結果として君の目的が達成されるとすれば、それはやっぱり運良くだね」

「むう……全く、本当につれないやつじゃなあ。そこは男なら、君の夢は僕が叶える！ くらい言えぬのか？」

「生憎そういうキャラじゃないからね　って、そういうえばダンテ……？　この戦いに優勝した場合、僕ってどうなるの？」

黒斗の当たり前の一言にダンテは“あっ”と小さく声を上げた。二人の間に冷たい風が吹き、ダンテがだらだらと冷や汗を流しながら首をキリキリと回し、黒斗を上目遣いに見た。

「……………もしかして、それも説明してないのか？」

「……………してねえよ」

「……………えっと……………わかった、じゃあ今しよう……………いたいいたいっ！？　何で髪の毛引っ張るんじゃああああっ！！！！！」

ダンテのツインテールを鷲掴み、黒斗は無言でそれをギリギリと捻り上げた。ダンテの涙声が響く屋上。彼らの戦いは、ある意味まだ始まっても居なかったのかもれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0731h/>

罪断のセクレイジュ

2010年10月12日01時46分発行